一級河川山国川築堤関係
埋蔵文化財調査報告　4

かみ とう ばる りょう せい

上唐原了清遺跡 I

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査

1999

福岡県教育委員会

一級河川山国川築堤関係
埋蔵文化財調査報告　4

上唐原了清遺跡 I

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査

1　上唐原了清遺跡　北・中央調査区全景（北西上空から）

2　4号溝（北から）

序

本書は、福岡県教育委員会が建設省大分工事事務所の委託を受けて、平成４年度から実施している山国川築堤改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録であります。今回の報告は平成６・７年度に発掘調査した、築上郡大平村大字上唐原所在の上唐原了清遺跡についてのものです。この遺跡は、中世を中心とする集落で、階段や石垣を設けた溝や、鏡が出土した墓など、良好な資料が得られました。

山国川築堤工事に関する調査は今後も継続実施し、並行して出土文化財資料の整理を進め、報告書も順次刊行する予定です。発掘調査および整理作業、報告書作成に際しましては、地元の方々をはじめ関係各位の御協力をいただき、多大な成果をあげることができました。深く感謝します。

なお、本書が文化財愛護思想の普及、および学術研究に役立つことを望みます。

平成11年３月31日

福岡県教育委員会
教育長　光安　常喜

例　言

1　この報告書は、平成６・７年度に福岡県教育委員会が建設省大分工事事務所から委託を受けて実施した、一級河川山国川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第４集である。

2　本書に掲載した遺構図は、吉村・秦のほか高畑由美子・村上知文・犬塚カヲル・木下秀子・植山智保子・原田和代が作成した。

3　本書に掲載した遺構写真は吉村・秦が、遺物写真は北岡伸一が撮影した。なお、空中写真については空中写真企画に委託した。

4　出土遺物は九州歴史資料館において岩瀬正信の指導で整理・復元作業を行い、実測図は吉村・秦のほか岸本　圭・今井涼子・林　潤也・平田春美・棚町陽子・久富美智子・田中典子・坂田順子・堀江圭子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久美子・山本千鶴美・若松三枝子が作成した。

5　挿図の浄書は豊福弥生・原カヨ子が実施した。

6　本書に使用した方位はすべて磁北である。

7　出土遺物・写真・図面等については、すべて九州歴史資料館および福岡県文化財保護課太宰府事務所において保管している。

8　本書の執筆は第４章１は和佐野喜久生、第４章２は佐藤昌憲、第４章３は中橋孝博、第３章５は主に吉村が分担し、その他は秦が執筆し、編集も秦が担当した。

本 文 目 次

第１章　はじめに
　１．調査の経過 …… 1
　２．調査の組織 …… 2

第２章　位置と環境
　１．地理的環境 …… 4
　２．歴史的環境 …… 4

第３章　調査の内容
　１．縄文時代の遺構と遺物 …… 10
　２．弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物 …… 13
　３．中世の遺構と遺物 …… 33
　４．近世の遺構と遺物 …… 79
　５．ピット出土の遺物 …… 93
　６．包含層出土の遺物 …… 98

第４章　自然科学的分析
　１．上唐原了清遺跡の炭化米特性と稲作起源 …… 107
　２．繊維の材質分析 …… 113
　３．福岡県築上郡上唐原了清遺跡出土の中世人骨 …… 114

第５章　おわりに …… 115

図 版 目 次

巻頭図版　1　上唐原丁清遺跡北・中央区全景（西北上空から）
　　2　4号溝（北から）

図版1　1　上唐原丁清遺跡北・中央区全景（西北上空から）
　　2　同 北区全景（西北上空から）
図版2　1　上唐原丁清遺跡中央区全景（上空から）
　　2　同 南区全景（南東から）
　　3　1号掘立柱建物跡（北西から）
図版3　1　2号掘立柱建物跡（北西から）
　　2　3号掘立柱建物跡（南東から）
　　3　4号掘立柱建物跡（南西から）
図版4　1　19号掘立柱建物跡（東から）
　　2　2・3号土坑（北から）
　　3　4号土坑（南東から）
　　4　同 土層断面（北から）
図版5　1　5号土坑（南から）
　　2　6号土坑（北西から）
　　3　7号土坑（北から）
　　4　8号土坑（北西から）
図版6　1　9号土坑（北西から）
　　2　10号土坑（北東から）
　　3　13号土坑（西から）
図版7　1　16号土坑（東から）
　　2　17号土坑（東から）
　　3　18号土坑（南東から）
図版8　1　1号廃棄土坑（北西から）
　　2　同 遺物出土状態（東から）
　　3　2号廃棄土坑（南西から）
図版9　1　1・2・5・6号墓（西から）
　　2　1号墓（北西から）
　　3　同 墓坑（北から）
図版10　1　2号墓（西から）
　　2　3号墓（東から）
　　3　同 遺物出土状態（東から）
　　4　同 人骨出土状態（東から）
図版11　1　4号墓（南東から）
　　2　5・6号墓（北西から）
　　3　1号竪穴状遺構（西から）
　　4　同 土層断面（東から）
図版12　1　1・2号集石遺構（東から）

2　１号集石遺構（南東から）
3　同（北東から）
図版13　1　２号集石遺構（南東から）
2　６号集石遺構（南西から）
3　７号集石遺構（南東から）
図版14　1　１号石列北半部（東から）
2　同 全景（北から）
3　同 中央部（北東から）
4　同 全景（南東から）
5　同 暗渠部蓋石除去前（北西から）
6　同 蓋石除去後（北西から）
図版15　1　１号石列通路状遺構（北東から）
2　同 北端部石積み状況（北東から）
3　同 中央部石積み状況（北東から）
図版16　1　１号井戸（北東から）
2　同 土層断面（南から）
3　門状遺構集石上層部（北から）
4　同 集石下層部（南から）
図版17　1　２号桶状遺構（東から）
2　同 蓋石除去後（北から）
3　同 ４号桶状遺構（南から）
4　１号埋甕（東から）
5　２号埋甕（南から）
6　３号埋甕（東から）
図版18　1　１～３号柵跡（西から）
2　１～３号溝（上空から）
図版19　1　１号溝土層断面（南東から）
2　２号溝遺物出土状態（北から）
3　同（北から）
4　同 ２号集石遺構下の遺物出土状態（北から）
図版20　1　２号溝土層断面（北西から）
2　４号溝階段状集石（上空から）
図版21　1　４号溝（北から）
2　同 階段状集石（南東から）
3　同 階段状集石（西から）
図版22　1　４号溝階段状集石 整地面下の集石検出状況（北東から）
2　同 テラス部分と石積み状況（北東から）
3　同 瓦器椀・石製品出土状態（北から）
4　同 石臼出土状態（東から）
5　同 石敷部分（北東から）
6　同 テラス部分の石積み状況（南東から）
図版23　1　４号溝階段状集石 立ち割り横断面土層１（南東から）
2　同 ２（東から）
3　同 ３（南東から）
4　４号溝階段状集石 立ち割り縦断面土層１（北西から）

5　同 2（北から）
6　縄文時代包含層土層断面１（北から）
7　同 2 （北から）
8　集石裏込内石斧出土状態（西から）
図版24　1　４号溝東部集石（東から）
2　同 石製品出土状態１（東から）
3　同 2（東から）
4　４号溝土層断面１（北東から）
5　同 土層断面２（南から）
6　同 土層断面３（南東から）
7　南区作業風景（南東から）
8　遺跡東の山国川と対岸風景（南西から）
図版25　1　縄文包含層出土土器・石器　2　13号土坑出土土器　3　１～３号溝出土遺物
図版26　２号溝出土土器１
図版27　２号溝出土土器２
図版28　２号溝出土土器３
図版29　２号溝出土土器４
図版30　２号溝出土土器５
図版31　1　２号溝出土土器６　2　１・４号土坑出土遺物
図版32　1　６～12号土坑出土遺物　2　１・２号廃棄土坑出土土器・陶磁器
図版33　1　２号廃棄土坑出土土錘　2　１～４・６号墓出土遺物
図版34　1　３号墓出土鏡・陶磁器　2　鏡面繊維顕微鏡写真（×約26）
図版35　1　１・２号集石遺構出土遺物　2　１号井戸出土遺物
図版36　1　１号門状遺構出土遺物　2　４号溝埋土出土土器・陶磁器
図版37　1　４号溝埋土出土遺物　2　同 集石出土石製品
図版38　1　４号溝集石出土石製品　2　２・17号土坑出土土器・陶磁器
図版39　１号石列出土遺物
図版40　1　１～３号埋甕出土土器　2　８号溝出土土器・陶磁器
図版41　1　ピット出土遺物１　2　包含層出土土器１
図版42　1　ピット出土遺物２　2　包含層出土土器２
図版43　包含層出土土器３
図版44　包含層出土遺物

挿　図　目　次

第１図　大平村位置図 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図１（弥生時代から古墳時代前期）（1/50.000） …… 2
第３図　周辺遺跡分布図２（中・近世）（1/50.000） …… 6
第４図　周辺地形図（1/2.000） …… 9
第５図　遺構略配置図（1/400） …… 9
第６図　縄文時代の遺物出土状態（1/80） …… 11
第７図　縄文包含層出土遺物実測図（1/3） …… 12
第８図　13号土坑実測図（1/40） …… 13
第９図　13号土坑出土土器実測図（1/4） …… 13

第10図　1号溝出土遺物実測図（6～10は1/3、他は1/4）…… 13
第11図　1・2号溝土層断面図（1/40）…… 14
第12図　2号溝遺物出土状態（1/60）…… 15
第13図　2号溝出土土器実測図1（1/4）…… 16
第14図　2号溝出土土器実測図2（1/4）…… 17
第15図　2号溝出土土器実測図3（1/4）…… 19
第16図　2号溝出土土器実測図4（1/4）…… 20
第17図　2号溝出土土器実測図5（1/4）…… 21
第18図　2号溝出土土器実測図6（1/4）…… 23
第19図　2号溝出土土器実測図7（1/4）…… 24
第20図　2号溝出土土器実測図8（1/4）…… 25
第21図　2号溝出土土器実測図9（65～68は1/3、他は1/4）…… 27
第22図　2号溝出土土器実測図10（1/4）…… 28
第23図　2号溝出土土器実測図11（1/4）…… 29
第24図　2号溝出土遺物実測図（127～133・135・136は1/3、135は2/3、他は1/4）…… 31
第25図　2号溝出土縄文土器実測図（1/3）…… 32
第26図　3号溝出土遺物実測図（1/3）…… 33
第27図　1・2号掘立柱建物跡実測図（1/80）…… 34
第28図　3号掘立柱建物跡実測図（1/80）…… 35
第29図　4・19号掘立柱建物跡実測図（1/80）…… 36
第30図　1～3号掘立柱建物跡出土土器実測図（1は1/4、他は1/3）…… 36
第31図　1・3～5号土坑実測図（1/60）…… 37
第32図　6～9号土坑実測図（1/40）…… 39
第33図　10・11号土坑実測図（1/40）…… 41
第34図　12号土坑実測図（1/40）…… 41
第35図　1・4～12号土坑出土遺物実測図（7～12・16・17・21・25・35は1/4、20は2/3、他は1/3）… 42
第36図　1・2号廃棄土坑実測図（1/30・1/40）…… 44
第37図　1・2号廃棄土坑出土遺物実測図（12は1/4、他は1/3）…… 45
第38図　1号墓実測図（1/30・1/40）…… 47
第39図　2～4号墓実測図（1/30）…… 49
第40図　1・2号墓出土遺物実測図（1/3）…… 50
第41図　5・6号墓実測図（1/30）…… 52
第42図　3・4・6号墓出土遺物実測図（1/3）…… 53
第43図　1号竪穴状遺構（1/40）…… 54
第44図　1・2号集石遺構実測図（1/60）…… 55
第45図　1・2号集石遺構出土遺物実測図（5・9・18～22は1/4、他は1/3）…… 56
第46図　1号井戸実測図（1/40）…… 58
第47図　1号井戸出土遺物実測図（10～16・26～28は1/4、21は1/5、他は1/3）…… 59
第48図　1号門状遺構実測図（1/30）…… 61
第49図　1号門状遺構出土遺物実測図（8・9は1/5、他は1/3）…… 62
第50図　1～3号柵跡実測図（1/80）…… 63
第51図　1号柵跡出土土器実測図（1/3）…… 63
第52図　4号溝北辺階段状集石遺構実測図（1/60）…… 65
第53図　4号溝階段状集石遺構土層断面・見透し実測図（1/60）…… 66
第54図　4号溝土層断面図（1/60）…… 67

第55図　4号溝東辺石積み部実測図・土層断面図（1/60）…… 69
第56図　4号溝埋土出土遺物実測図1（9・30・31・41は1/4、他は1/3）…… 71
第57図　4号溝埋土出土遺物実測図2（68～75は1/4、103は2/3、他は1/3）…… 73
第58図　4号溝埋土・集石出土遺物実測図（115～119は1/5、他は1/3）…… 75
第59図　4号溝集石出土石製品実測図1（1/5）…… 76
第60図　4号溝集石出土石製品実測図2（1/5）…… 77
第61図　4号溝集石・裏込め出土遺物実測図（125・126は1/5、他は1/3）…… 78
第62図　2号土坑実測図（1/40）…… 79
第63図　2号土坑出土遺物実測図（4は1/4、他は1/3）…… 80
第64図　17号土坑出土土器実測図（1は1/3・2は1/8）…… 80
第65図　14～18号土坑実測図（1/30・1/40）…… 81
第66図　6・7号集石遺構実測図（1/30）…… 82
第67図　1号石列実測図（1/120）…… 83
第68図　1号石列土層断面図（1/40）…… 84
第69図　1号石列出土遺物実測図1（13～15は1/4、他は1/3）…… 85
第70図　1号石列出土遺物実測図2（26・34は1/4、24は1/6、他は1/3）…… 87
第71図　1～4号桶状遺構実測図（1/30）…… 89
第72図　1～3号埋甕遺構実測図（1/30）…… 89
第73図　1号埋甕出土遺物実測図（1/4）…… 90
第74図　1～3号埋甕実測図（1/8）…… 91
第75図　2号道路状遺構実測図（1/40）…… 92
第76図　8号溝出土遺物実測図（4・5は1/4、他は1/3）…… 93
第77図　9号溝出土遺物実測図（1/2）…… 93
第78図　ピット出土遺物実測図1（1・2・10・13・17～20・22～24・32・40は1/4、他は1/3）… 95
第79図　ピット出土遺物実測図2（58・61は1/4、73・78は2/3、他は1/3）…… 97
第80図　包含層出土遺物実測図1（1～9・33～40は1/3、他は1/4）…… 99
第81図　包含層出土遺物実測図2（1/3）…… 101
第82図　包含層出土遺物実測図3（98・100・106・107は1/4、他は1/3）…… 103
第83図　包含層出土遺物実測図4（112は1/4、他は1/3）…… 105
第84図　上唐原丁清及び比較対照遺跡（北部九州、韓国）の炭化米粒の長・幅平均値の分布図　109
第85図　上唐原丁清遺跡の炭化米 …… 112
第86図　出土繊維の赤外吸収スペクトル …… 113
第87図　中世居館の範囲推定図（1/1.000）…… 116
第88図　近世屋敷の範囲推定図（1/500）…… 118

表目次

表1　2号廃棄土坑出土の土錘計測表 …… 46
表2　4号溝出土の土錘計測表 …… 74
表3　包含層出土の土錘計測表 …… 106
表4　稲粒（米、籾）特性の指数、指数別階級値及び特性の表現方法 …… 107
表5　稲粒（米、籾）の粒長・粒幅指数による粒型分類 …… 108
表6　上唐原丁清及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値及び標準偏差 …… 109
表7　上唐原丁清及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差 …… 110
表8　上唐原丁清及び比較遺跡の炭化米粒長／幅比の頻度分布・平均値・標準偏差 …… 110
表9　上唐原丁清及び比較遺跡の炭化米の粒型分布表 …… 111

付図目次

上唐原丁清遺跡遺構配置図（1/200）

第1章　はじめに

1　調査の経過

山国川改修工事に係る文化財の取り扱いについては、平成３年度に建設省九州地方建設局大分工事事務所から協議があり、平成３年４月24日に現地踏査による分布調査が実施された。この結果、ほぼ全区間に埋蔵文化財包蔵地のあることが予測された。

この後、平成３年８月１日付けの建九大一調第998号で、大分工事事務所長名の、「山国川―唐原地区河川改修工事に伴う埋蔵文化財試掘調査について（依頼）」の文書が提出され、これを受けて、福岡県教育庁文化課が８月に試掘調査を実施したところ、埋蔵文化財の存在が確認された。

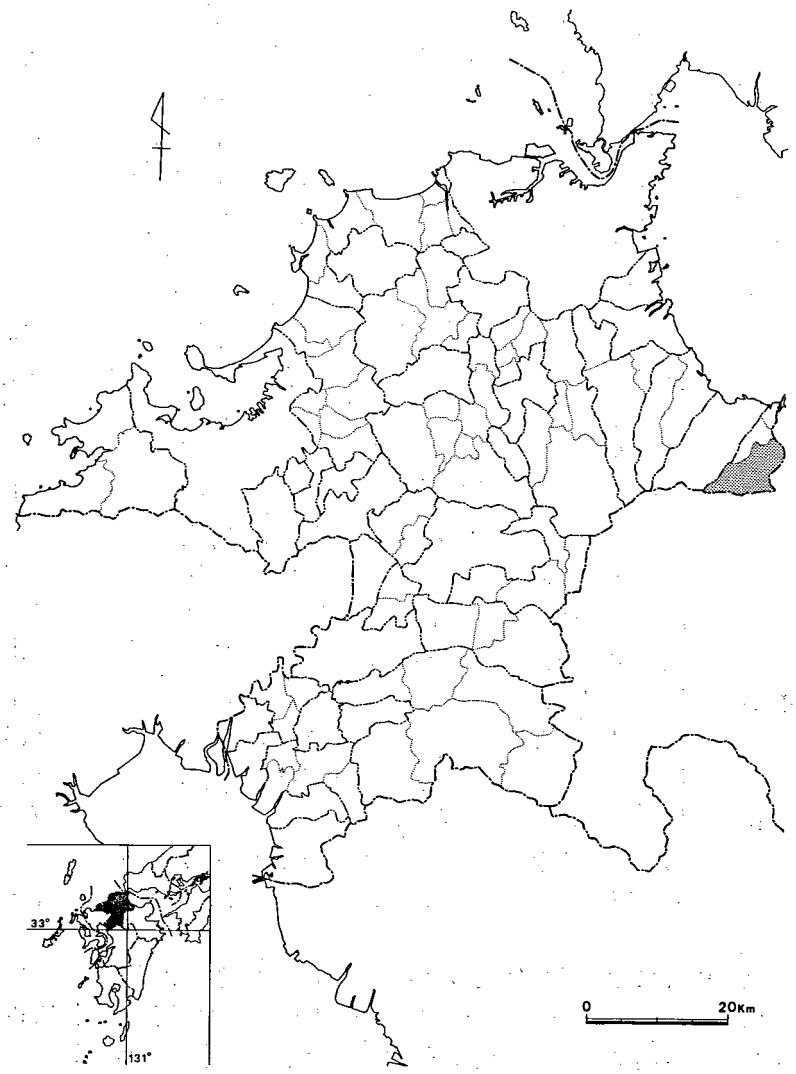
埋蔵文化財の取り扱いについて、文化課と工事事務所と協議の上、記録保存の措置をとる必要が生じたため、平成４年度から平成８年度まで毎年継続して発掘調査を実施した。本地区は、用地の関係から平成６～８年度にわたって調査を行う計画となった。遺跡名は大字名と小字名を併用して「上唐原丁清遺跡」とした。

平成６年度の調査は、７月18日より重機入れて表土剥ぎを開始した。まず、遺跡の範囲を確認するため試掘トレンチを入れたところ、中央調査区の東側は大きく撹乱を受けて段落ちしており、遺構が残っていないことがわかった。このため、同地区を調査区から外して土置き場とした。

26日から作業員を投入し、中央区より遺構検出を開始した。好天にめぐまれ、調査は順調に進んだが、日がたつにつれ好天が渇水となり、川の水を人力で汲み上げて散水することになった。９月13日から北区の調査に着手した。北区は大部分がピットと思われていたが、調査の終盤になって石積み・階段状遺構を伴う約1.7mの深さをもつ４号溝が検出され、この掘削に大変な労力を費やした。

１次調査は11月11日に終了した。

平成７年度の調査は、８月23日から表土剥ぎを開始し、９月５日発掘機材を搬入、翌日作業員を投入する。８日遺構検出を開始。19日に全体写真を撮影し、20日には下層の調査開始。10月



第１図　大平村位置図

31日に調査終了した。この後は来年度報告地区の調査に入っており、７年度の調査は12月21日に終了した。

調査後の整理・報告書作成は、平成６年度の調査と平成７年度の調査の一部を平成10年度に実施した。尚、報告書作成後、出土遺物・調査記録類は、文化財保護課太宰府事務所および九州歴史資料館において保管している。

２　調査の組織

平成６・７年度の調査関係者および平成10年度の整理関係者は次のとおりである。

建設省大分工事事務所

	平成６年度	平成７年度
所長	菅原　信二	菅原　信二
副所長（事務）	林田　信	林田　信
副所長（河川）	加治屋　義信	野上　昭治
調査第一課長	吉岡　寿治	内田　久男
同　計画係長	三浦　一浩	三浦　一浩
同　主任	加藤　光男	加藤　光男
中津出張所長	中原　鶴見	橋村　和敏
同　事務係長	丸谷　順次郎	丸谷　順次郎
同　技術係長	田中　満昭	田中　満昭
同　技術吏員	苅野　家次	苅野　家次

福岡県教育委員会

		平成６年度	平成７年度
総括	教育長	光安　常喜	光安　常喜
	教育次長	樋口　修資	松枝　功
	指導第二部長	丸林　茂夫	丸林　茂夫
	文化課長	松尾　正俊	松尾　正俊
	参事兼文化財保護室長	柳田　康雄	柳田　康雄
	同　課長補佐	清水　圭輔	元永　浩士
	同　参事補佐兼室長補佐	井上　裕弘	井上　裕弘
	同　参事補佐兼調査班総括	橋口　達也	橋口　達也
庶務	同　管理係長	杉光　誠	柴田　恭郎
	同　事務主査	安丸　重喜	久保　正志
	同　主任主事	久保　正志	東　健二
調査	同　参事補佐		木下　修
	同　技術主査	池辺　元明	
	同　主任技師	秦　憲二	吉村　靖徳

発掘調査には、発掘作業員として次の方々の参加があった。

犬塚カヲル　木下秀子　植山智保子　原田和代　百富千代子　笹原昭子　中野笑子　山本睦子　村上フサ子　西尾ミツ子　坪根春子　坪根百代　重吉恵子　村上知文　金山定子　高畑由美子　道免アサノ　道免文子　田井トキエ　渡辺　靖　東　和子　東ミサ子　田井中ヒデ子　竹田シゲ子

整理作業・報告書作成の関係者は次のとおりである。

建設省大分工事事務所		平成９年度	平成10年度
	所長	中村　稔	中村　稔
	副所長（事務）	小野　道春	重松　和美
	副所長（河川）	小野　道春	重松　和美
	調査第一課長	内田　久男	河野　忠彰
	同　計画係長	廣松　洋一	廣松　洋一
	同　主任	井上　宗雄	房前　和朋
		山口　健治	
	中津出張所長	中原　鶴見	石田　隆二
	同　事務係長	田代　節子	田代　節子
	同　技術係長	小野　富生	松木　仁
	同　技術吏員		中川　健二郎

福岡県教育委員会		平成９年度	平成10年度
総括	教育長	光安　常喜	光安　常喜
	教育次長	松枝　功	藤吉　純一郎
	指導第二部長	武若　幸二	
	総務部長		富永　勲
	文化課・文化財保護課長	石松　好雄	石松　好雄
	参事兼文化財保護室長	柳田　康雄	
	参事		柳田　康雄
	参事兼課長技術補佐		井上　裕弘
	課長補佐	城戸　秀明	
	課長補佐兼管理係長		角　伸幸
	参事補佐兼室長補佐	井上　裕弘	
	調査班総括	橋口　達也	
	調査第二係長		佐々木　隆彦
庶務	管理係長	黒田　一治	
	課長補佐兼管理係長		角　伸幸
	事務主査	久保　正志	鶴我　哲夫
	主任主事	田中　利幸	田中　利幸
報告書作成	主任技師	吉村　靖徳	吉村　靖徳
	主任技師	秦　憲二	秦　憲二
	同　整理指導員	岩瀬正信（遺物整理担当）	岩瀬正信（遺物整理担当）
			平田春美（遺物実測担当）
			豊福弥生（製図担当）
		北岡伸一（写真担当）	北岡伸一（写真担当）

第２章　位置と環境

１　地理的環境

上唐原了清遺跡は福岡県築上郡大平村大字上唐原字了清556他に所在する。当遺跡の所在する大平村は福岡県の東端にあって、東は一級河川山国川を境にして大分県中津市・三光村・本耶馬渓町に、南は太平山・瓦岳・雁股山を結ぶ英彦山山系を分水嶺として耶馬渓町に、西は同山系から掌状に伸びる一稜線をもって豊前市に隣接し、北に接する新吉富村、吉富町を隔てて周防灘を望む。

本村の大部分は山地からなっており、その大半が安山岩類に属する角礫岩・安山岩からなっており、一部花崗岩の一種である花崗閃緑岩がある。これらの山地からはいくつかの放射状の河谷が刻まれており、そこを流れる小河川は山国川に合流し、周防灘に達する。現在の集落の多くは、丘陵から派生する台地裾に位置しているが、山国川流域では細長く形成された沖積層の自然堤防に分布しており、当遺跡もこの自然堤防上に位置している。

山国川は頻繁に洪水を起こしており、記録に残っているだけでも享保五年（1720）以来29回の水害にみまわれている。そのため、近代になって橋が架けられるまでは「渡し」が唯一の交通手段であった。近世には有野・原井・下唐原地区に渡し場が設けられており、下唐原地区は中津との交通の拠点として発展した。(注１)

２　歴史的環境

弥生から古墳時代前期の遺跡（第２図）

近年、この地域では農村活性化事業や交通体系整備など大規模開発に伴う発掘調査が増加し、当地域の遺跡が次第に明らかになってきている。

弥生時代の遺跡では、明確な遺構は確認されていないが、土器は弥生早期のものから見られる。集落は現在のところ、前期後半の大平村下唐原宮園遺跡（注２）を端緒としており、前期末からは、中期後半に環濠を備える集落の新吉富村中桑野遺跡（注３）や、これと隣接する桑野遺跡（注４）・上桑野遺跡（注５）をはじめ、新吉富村垂水高木遺跡（注６）・尻高畑田遺跡（注７）・大平村土佐井ミソンデ遺跡（注８）など遺跡の増加・拡大が見られ、中桑野遺跡と同一遺跡と見られる牛頭天王遺跡では１×１・１×２間の大型掘立柱建物跡２棟が検出されている。(注９）さらに、大平村大塚本遺跡では中期前半から中頃の方形墳丘墓と列埋葬の集団墓地が形成されており（注10)、また、小破片ながら大平村金居塚遺跡（注11）・三光村佐知遺跡（注12）で細形銅剣片が発見されていることから、有力集団の存在が伺える。

後期になると、環濠集落の大平村下唐原郷ヶ原遺跡（注13）や、これと隣接する上唐原遺跡（注14)、対岸の三光村佐知遺跡など大規模な集落が形成される。新吉富村宇野・垂水地区では、圃場整備事業に伴う調査で、安雲ハタガタ遺跡・十二遺跡・松掛遺跡・曲り遺跡・町ノ上遺跡・稲葉遺跡・野内遺跡・宮ノ後遺跡（注15）などの遺跡が近接して確認され、100軒以上の住居が検出されていることから、台地上の拠点集落があったと思われる。

これらの後期集落に対応する集団墓も見つかっている。大平村金居塚遺跡・下唐原穴ヶ葉山遺跡(注16）は石蓋土壙墓からなる集団墓で、ベンガラを多用し、副葬品が豊富であることから優位の集団であったと思われる。この集団から前方後円墳をつくる人物が輩出されたのではないだろうか。対岸においても、三光村諌山遺跡B・C地区に石蓋土壙墓群があり、同様の状況が見られる。(注17)

近年、本地域では、４・５cの古墳があいついで発見され、急速に地域史の空白が埋まりつつある。下唐原地区で古墳時代前期初頭の前方後円墳である能満寺３号墳（注18）が発見され、大平村下唐原郷ヶ原遺跡など前期まで存続する集落が確認されている。対岸の中津市勘助野地遺跡では方

1．上唐原了清遺跡　2．上唐原稲本屋敷遺跡　3．上唐原遺跡　4．上唐原村ノ内遺跡 5．百宮居屋敷遺跡　6．下唐原宮園遺跡　7．下唐原伊柳遺跡
8．川の上遺跡　9．川下遺跡　10．郷ヶ原遺跡　11．金居塚遺跡　12．西方古墳　13．能満寺古墳群　14．上野地八幡宮遺跡　15．甚吾久保遺跡
16．穴ヶ葉山遺跡　17．穴ヶ葉山南遺跡　18．大塚本遺跡　19．士佐井ミソンデ遺跡　20．原井遺跡　21．上桑野遺跡　22．桑野遺跡　23．牛頭天王遺跡
24．下桑野遺跡　25．垂水高木遺跡　26．池ノ口遺跡　27．原田遺跡　28．ナカヲ遺跡　29．新宮本遺跡　30．コシノ木遺跡　31．下島ヲカ遺跡
32．下島地区遺跡　33．稲葉遺跡　34．十二遺跡　35．安雲ハタガタ遺跡　36．野内遺跡　37．町ノ上遺跡　38．曲り遺跡　39．松掛遺跡　40．太田遺跡
41．宇野田遺跡　42．唐ノ本遺跡　43．宮ノ後遺跡　44．尻高畑田遺跡　45．小石原泉遺跡　46．今吉遺跡　47．皇后石遺跡　48．高瀬遺跡　49．上万田遺跡
50．勘助野地遺跡　51．佐知久保畑遺跡　52．上ノ原平原遺跡　53．佐知遺跡　54．諫山遺跡B・C地点　55．諫山遺跡

第２図　周辺遺跡分布図１（弥生時代から古墳時代前期）(1/50.000)

形周溝墓群が見られる。(注19)

中世の遺跡・文化財（第３図）

本地域は、平安時代後期以降は田部氏・宇佐氏一族の支配地であったが、末期ごろには宇佐八幡宮・弥勒寺の荘園で占められていたようである。

鎌倉時代になると、関東から宇都宮氏が地頭として豊前国に下向してきて、勢力を振るうが、本地域には宇都宮氏一族の野仲氏が拠を構え、在地の国人勢力を支配下に置いている。

大平村今蔵遺跡では鎌倉から室町時代の堀が確認されており、林崎城の遺構と思われる。同じ台地上の土蔵地区遺跡・縄手遺跡では、鎌倉時代を中心とした中～近世の掘立柱建物跡群が、藤ヶ丸遺跡では鍛冶炉が見つかっており、大規模な集落を形成していたことがわかる。(注20) この台地下の土佐井地区では、大平村土佐井地区遺跡でパンコン１箱程の鉄滓を出した製鉄炉が確認され(注21)、土佐井ミソンデ遺跡では12～13cの集落と土壙墓・木棺墓群が検出されており、中には白磁椀を副葬したものがある。(注22)

この地域は野仲氏か、あるいはその家臣の友枝氏の拠点であったと思われ、後背に大平村追揚城（城主内尾氏）・叶松城（城主内尾氏）・内蔵寺山城跡（城主内尾氏）・光明寺城跡（城主友枝氏）などの山城を配している。さらに谷の奥には雁股山城跡（城主友枝氏）・松尾山城跡と続き、その谷の最深部に野仲氏の居城である長岩城跡がある。(注23)

一方、山国川西岸ではこれまで中世集落がほとんど確認されていないが、岡為造氏の採集品の中に下唐原地区の某寺址出土とされる湖州鏡がある。(注24) 対岸の三光村佐知遺跡では13c代の居館と思われるものがあり、その屋敷地内に太刀・腰刀・鉄鏃・湖州鏡・和鋏・青磁椀・土師器の小皿を副葬する木棺墓が発見されている。(注25) また、同村外園遺跡では甕棺から和鏡１枚・水晶製切子玉を含む玉類48点・銅製チャンカラ１対が出土している。(注26)

堤防上にも城跡があり、百富城跡（城主百富氏）・秋吉城跡（城主秋吉氏）が存在している。また、後背の丘陵には壇の城跡・代金城跡（城主代金氏）・原井城跡という山城が位置している。こうした小城は集落に居を構える国人が城主となっている。(注27)

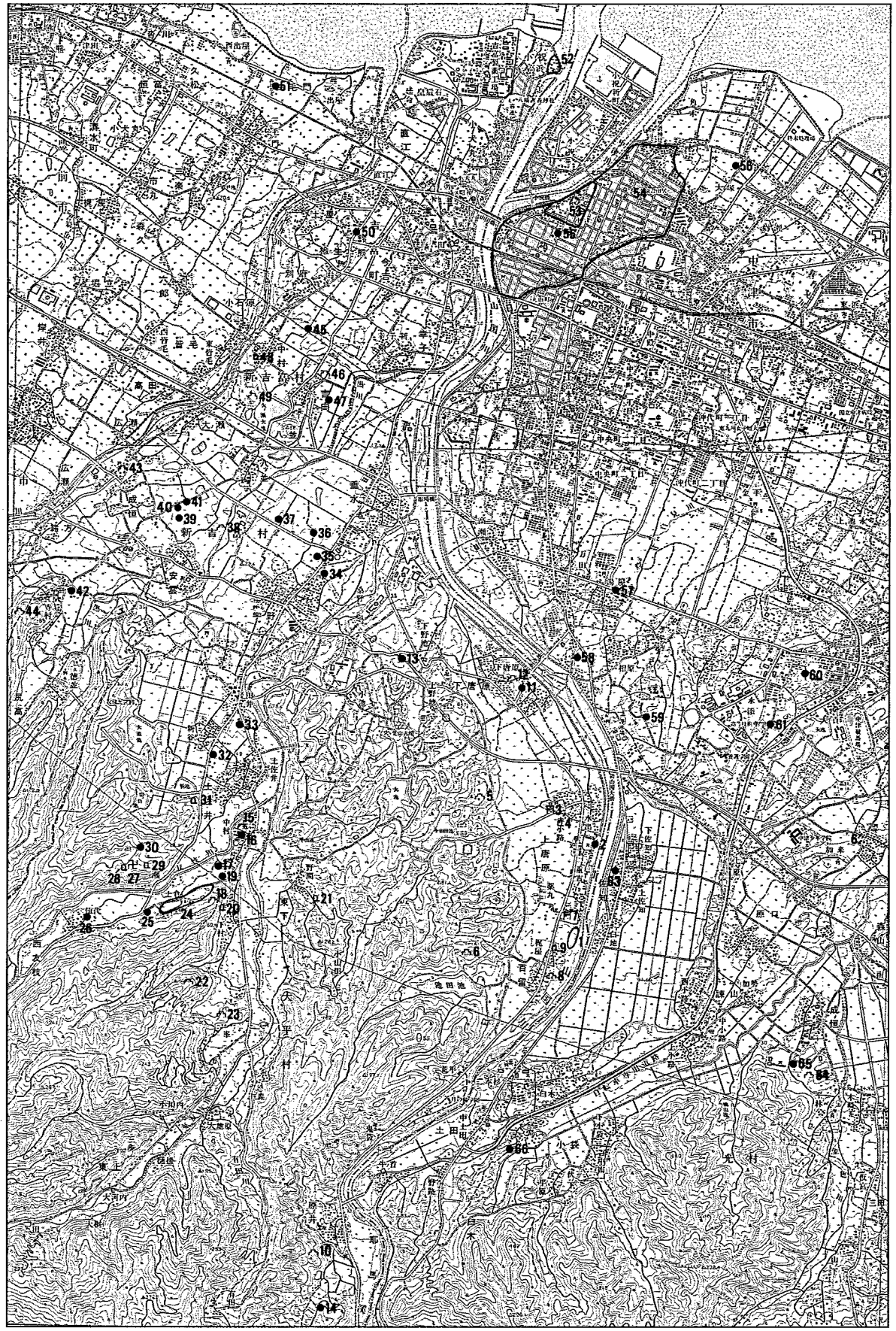
大平村ではこうした国人などの有力者が埋葬されたと思われる五輪塔が多数現存している。大平村では、中世の集落の集中する中村地区を取り囲むように、安養寺石塔群・願成寺石塔群・野間石塔・峯の上石塔などがある。(注28) 堤防上でも、下唐原居屋敷遺跡で五輪塔の部材が流れ込んだ状態で出土している。遺跡の南側に地蔵堂という小字名と、能満寺という寺院があったという伝承があり、現在も五輪塔が数基残っているのでここから流れ込んだと思われる。(注29) 大平村真正寺遺跡では、発掘調査で直接寺院跡に関係する遺構は発見されていないが、調査区東側で礎石や五輪塔、板碑が集められており、銅製懸仏が採集されている。(注30) また、板碑や国東塔などの石造品も多く見られる。

大平村誌によれば、石製品の石材として、唐原地区に花崗岩の産地があり、有野地区には凝灰岩を使用する石工集団が江戸時代に居住していたとあり、それ以前から石製品の生産が盛んであったことが伺える。

近世の遺跡（第３図）

近世では、本地域は中津藩と小倉藩の領地が入りあう地域である。中津城下町とは水運を利用すれば利便がよく、交流が活発であったと思われる。

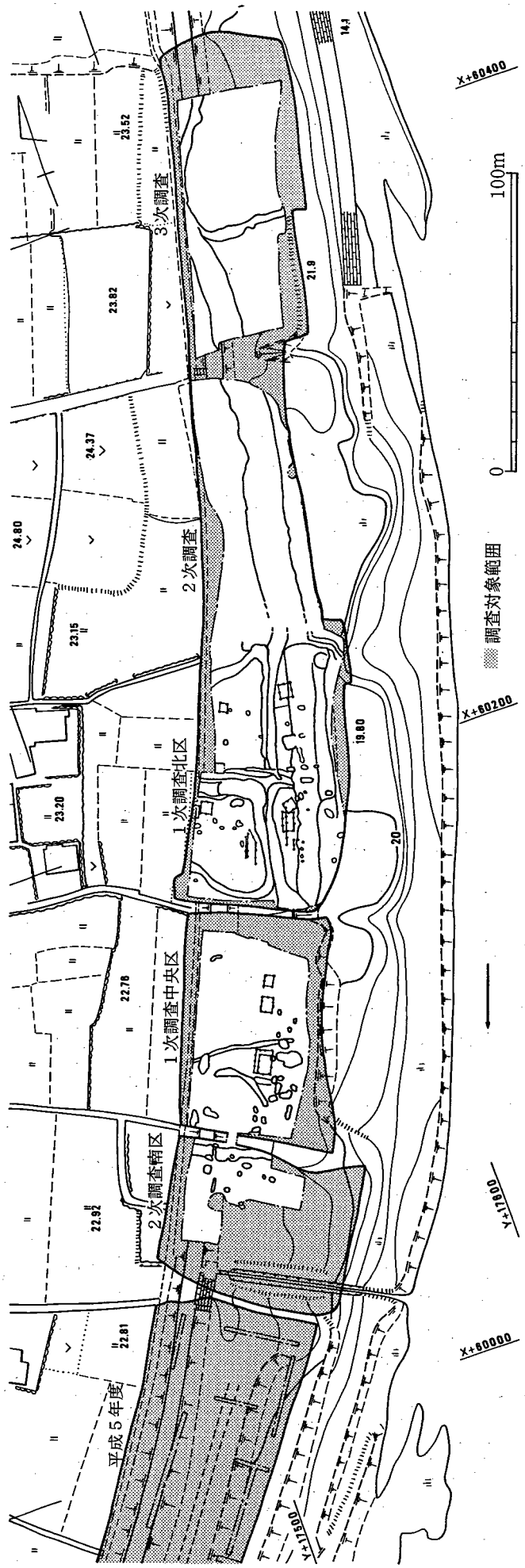
大平村上唐原稲本屋敷遺跡では18c～19cの石垣を伴う溝状遺構が見られ（注31)、下唐原居屋敷遺跡でも水路の護岸と見られる石組遺構が検出されている。また、大平村大塚本遺跡・金居塚遺跡では近世墓が多数発見されていることから、自然堤防上の居住域とその後背の低地を利用した生産域、さらに背後の丘陵裾の墓域という空間構成ができていたと思われる。



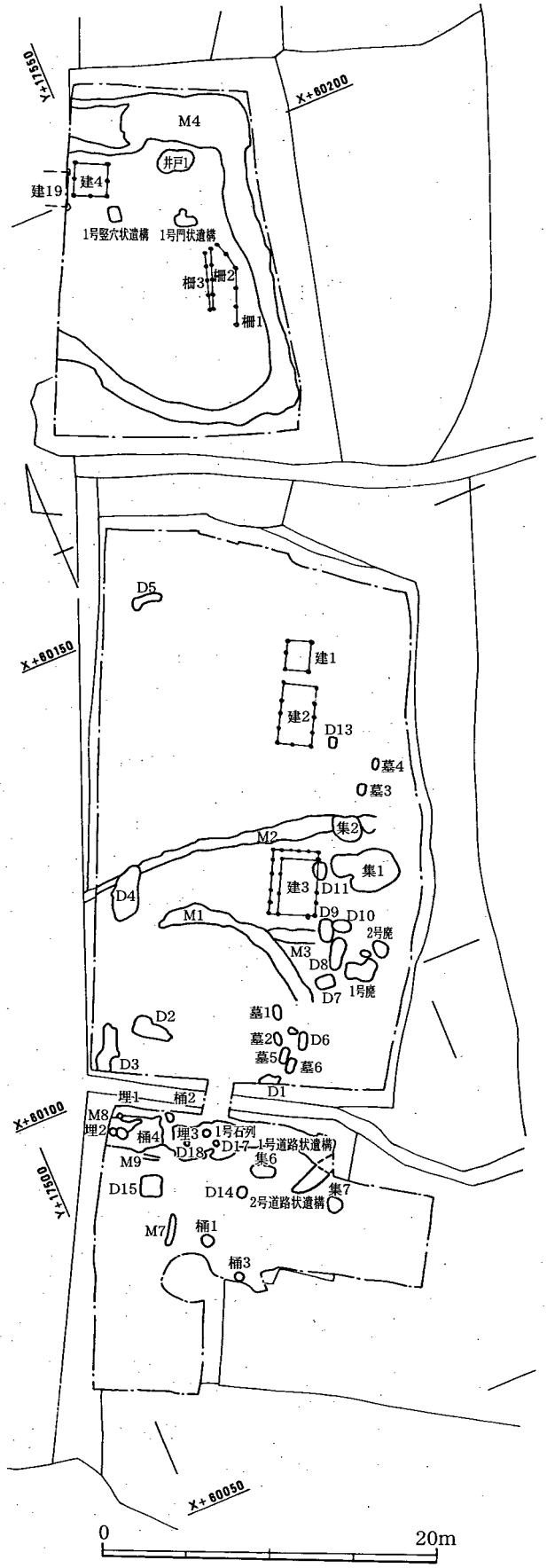
1．上唐原了清遺跡　2．上唐原稲本屋敷遺跡　3．唐原天満宮　4．唐原宝塔　5．壇ノ城跡　6．代金城跡　7．貴船神社　8．百富城跡　9．板屋宝塔
10．原井城跡　11．下唐原居屋敷遺跡　12．秋吉城跡　13．大塚本遺跡　14．真正寺宝塔　15．林崎城跡　16．今蔵遺跡　17．今蔵遺跡B　18．迫揚城跡
19．縄手遺跡　20．安養寺石塔群　21．野間宝塔　22．叶松城跡　23．内蔵寺山城跡　24．土倉地区遺跡　25．藤ヶ丸遺跡　26．仙台地区遺跡　27．願成寺廃寺
28．願成寺石塔群A　29．願成寺石塔群B　30．経塚山遺跡　31．峯の上石塔群　32．土佐井ミソンデ遺跡　33．土佐井地区遺跡　34．ウツケ畑遺跡　35．長田遺跡
36．正ノ坪遺跡　37．十二遺跡　38．安雲城跡　39．小宮本遺跡　40．原田遺跡　41．ナカヲ遺跡　42．尻高畑田遺跡　43．成恒城跡　44．緒方城跡　45．ウルネ遺跡
46．吉岡城跡　47．塚本古墓　48．景幽寺五輪塔　49．日熊城跡　50．鈴熊山遺跡　51．三毛門放生田遺跡　52．中津藩高浜番所　53．中津城　54．中津城下町遺跡
55．藩校進脩館跡　56．如水井　57．沖代条里跡居屋敷地区　58．三口遺跡　59．相原山首遺跡　60．東ノ浦遺跡　61．長者屋敷遺跡　62．黒水遺跡　63．佐知遺跡
64．成恒城跡　65．成恒近世墓　66．外園遺跡

第3図　周辺遺跡分布図2（中・近世）(1/50.000)

注１　地理的環境については、大平村誌編集委員会『大平村誌』1986によるところが多い。
２　吉田東明編　1998　『下唐原宮園遺跡』　一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告２
３　馬田弘稔編　1978　『中桑野遺跡』　新吉富村文化財調査報告書　第３集
４　小川泰樹編　1997　『桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡』　豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第６集下巻
５　池辺元明編　1998　『上桑野遺跡』　一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第８集
６　飛野博文編　1994　『垂水高木遺跡　牛頭天王遺跡』　新吉富村文化財調査報告書　第８集
７　緒方　泉編　1992　『尻高畑田遺跡』　新吉富村文化財調査報告書　第７集
８　緒方　泉編　1991　『土佐井ミソンデ遺跡・穴ヶ葉山４号墳・穴ヶ葉山墳墓群』　大平村文化財調査報告書　第７集
９　注６前掲書に同じ
10　小川泰樹編　1998　『大塚本遺跡』　一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第９集
11　飛野博文編　1996　『金居塚遺跡Ⅰ』　一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第４集
12　坂本嘉弘編　1989　『佐知遺跡』　大分県文化財調査報告書第81輯
13　飛野博文編　1998　『郷ヶ原遺跡』　一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集
14　小池史哲編　1995　『上唐原遺跡Ⅰ』　一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第２集
15　いずれも新吉富村教育委員会で発掘調査を実施し、現在整理中。
16　飛野博文編　1993　『穴ヶ葉山遺跡』　大平村文化財調査報告書　第８集
17　三光村教育委員会で発掘調査を実施している。
18　飛野博文編　1994　『能満寺古墳群』　大平村文化財調査報告書　第９集
19　渋谷忠章編　1988　『一般国道10号線中津バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』（１）
20　いずれも大平村教育委員会で発掘調査を実施し、現在整理中。
21　高橋章編　1990　『土佐井地区遺跡』　大平村文化財調査報告書　第５集
22　伊崎俊秋編　1991　『土佐井ミソンデ遺跡』　大平村文化財調査報告書　第７集
23　山城については、大平村誌編集委員会『大平村誌』1986によるところが多い。
24　小田富士雄他　1983　『岡為造氏収集　考古資料集成』
25　注12前掲書に同じ
26　三光村教育委員会で発掘調査を実施している。
27　山城については、大平村誌編集委員会『大平村誌』1986によるところが多い。
28　福岡県教育委員会編　1976　福岡県遺跡等分布地図（豊前市・築上郡編）
29　飛野博文編　1993　『下唐原居屋敷遺跡』　県道東下・中津線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ　福岡県文化財調査報告書　第110集
30　注21前掲書に同じ
31　小池史哲編　『上唐原稲本屋敷遺跡』　一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告１



第4図　周辺地形図（1/2.000）



第5図　遺構略配置図（1/400）

第３章　調査の内容

本書は、１次調査と２次調査の一部を報告したものであり、調査時には異なる地区名を使用しているが、ここでは便宜上、１次調査区を北区・中央区、２次調査区の一部を南区と呼称する。

以下、時期毎に報告する。

１．縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構ははっきりとしたものがなく、ほとんどの遺物は包含層中か、後の時期の遺構の埋土中に混入したものである。遺構は調査区平坦部に存在していたと思われるが、平坦部が大きく削平されているため、浅い遺構は残らなかったらしく、深いピットだけがわずかに残っている。

遺構については確実に縄文時代の遺構と確認できるものがなく、可能性のあるものもピットのみであるので、ここでは特に記述しない。

４号溝の掘形下には縄文時代の遺物包含層が見られる。（図版23-6・7、第６図）このことから、４号溝はそれ以前にあった谷地形を利用して掘られたものと考えられる。その際に掘削を受けなかった包含層から土器が多く出土している。階段状集石部分の集石のないところが最も良く残っていた。遺物は、土器・石器が少量出土している。

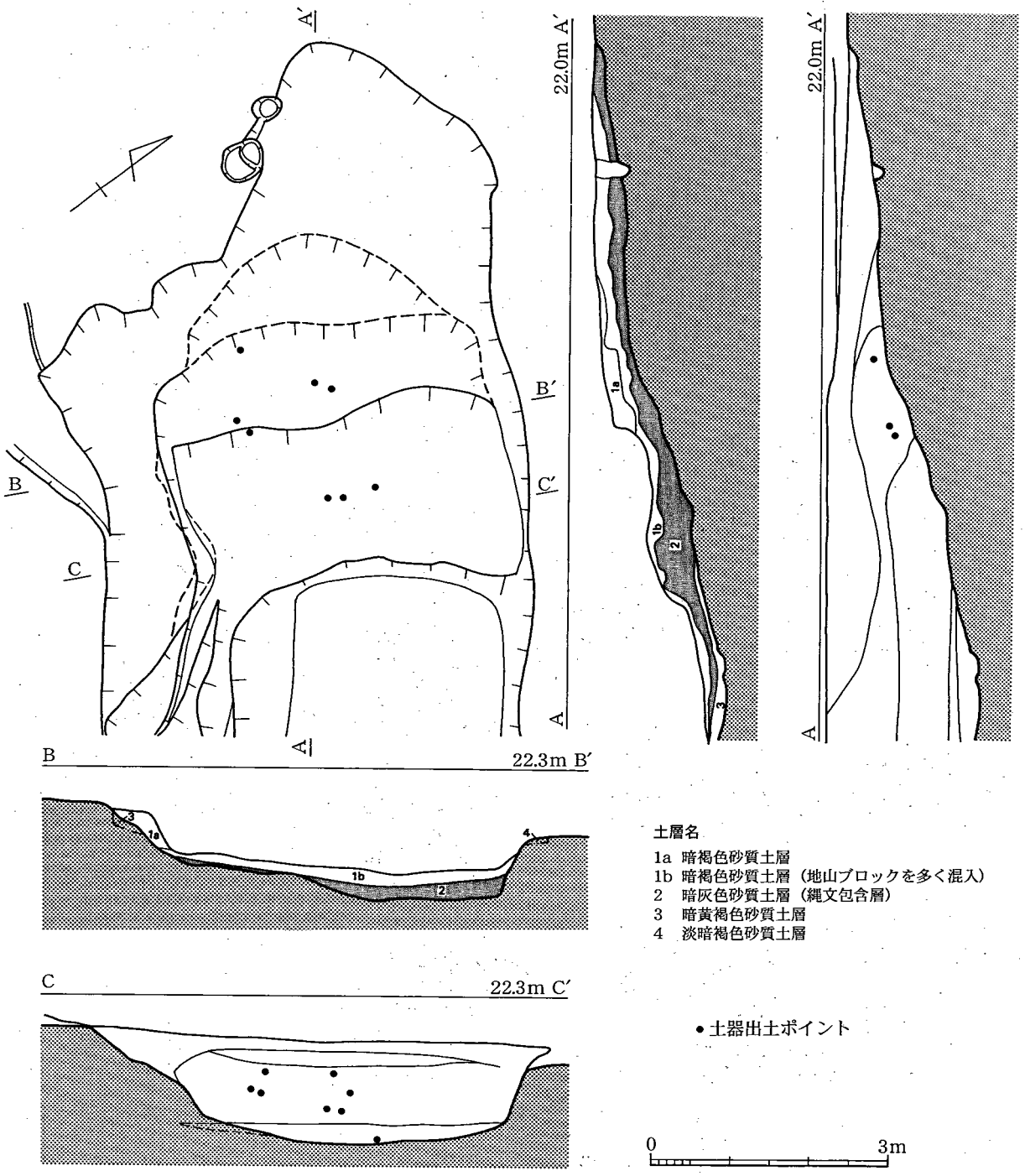
出土遺物（図版25-1、第7図）

縄文土器

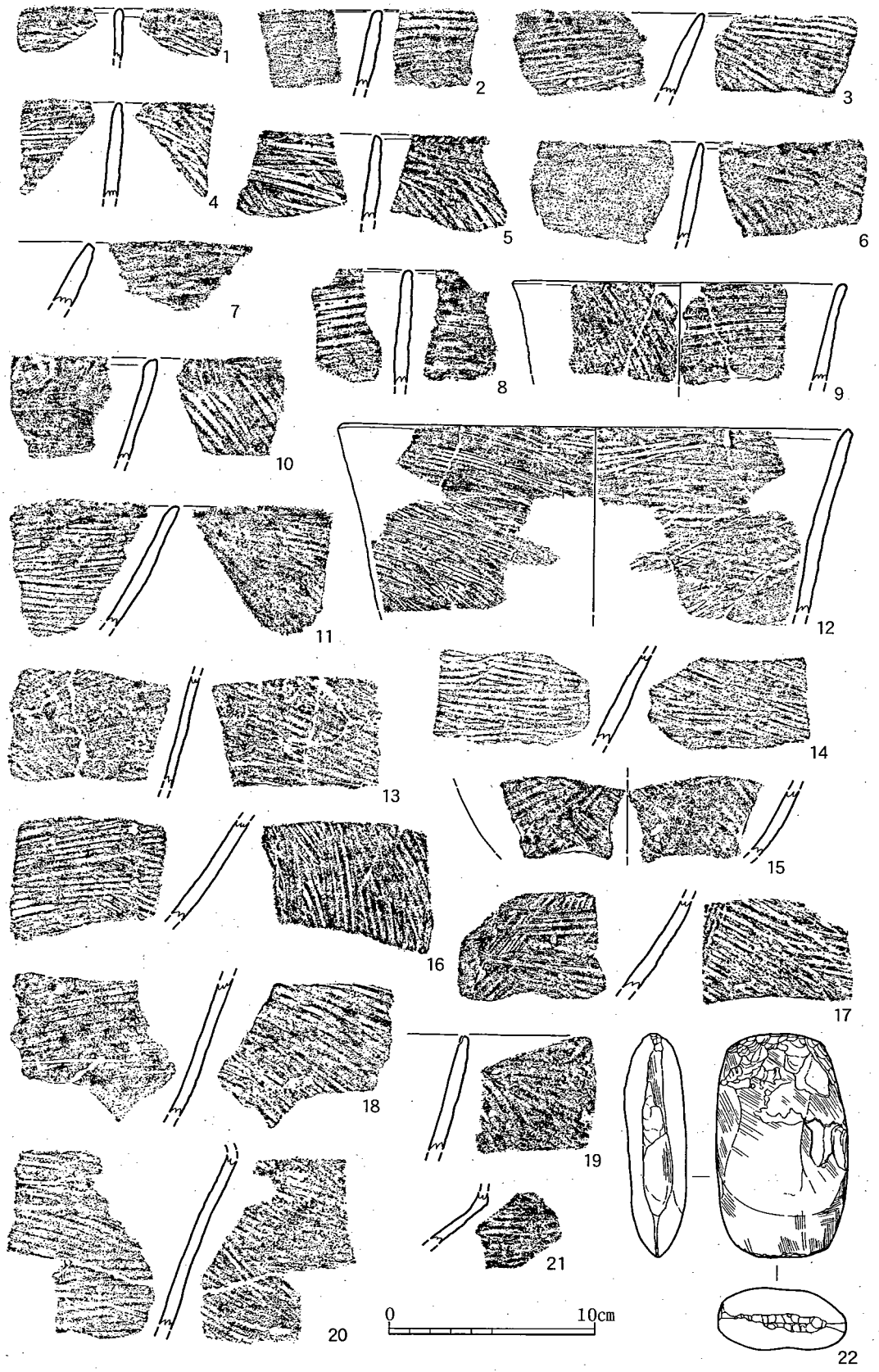
深鉢（1～21）　１は包含層出土で、外面は斜位の二枚貝条痕、内面は横位の二枚貝条痕の後ナデ。色調は外面暗黄褐色、内面は黄白色を呈する。２は4号溝の集石下出土で、外面は横位の二枚貝条痕、色調は内外にぶい黄灰色を呈する。３は包含層出土で、外面は横・斜位の二枚貝条痕、内面は横位の二枚貝条痕の後ナデ。色調は外面暗褐色、内面にぶい黄褐色を呈する。４は包含層出土で、外面は斜位の二枚貝条痕、内面は横位の二枚貝条痕。色調は外面暗黒褐色、内面にぶい黄褐色を呈する。５は包含層出土で外面は斜位の二枚貝条痕で口唇部に刻目あり、内面は横位の二枚貝条痕。色調は外面暗褐色、内面は黄～暗褐色を呈する。６は包含層出土で、外面は斜位の二枚貝条痕の後ナデ、内面は横位の条痕の後ナデ。色調は内外にぶい暗黒褐色を呈する。７は傾きから浅鉢の可能性もあるが、器壁が厚いことから口縁が屈曲して外反するものと思われる。外面は横位の条痕、内面はナデ。焼成不良のためか内外黒色を呈する。８は包含層出土で、外面は横位の二枚貝条痕の後ナデ、内面は横位の二枚貝条痕。色調は外面橙褐色、内面黄橙色を呈する。９は包含層出土で、外面は斜位の二枚貝条痕の後ナデ、内面は横位の二枚貝条痕。色調は外面にぶい暗褐色、内面黄橙色を呈する。10は包含層出土で、外面は口唇部が横ナデ、口縁下は斜位の二枚貝条痕で、内面は横位の条痕。色調は内外黄橙色を呈する。11は包含層出土で、外面は斜位の二枚貝条痕の後ナデで口唇部は横ナデ、内面横位の二枚貝条痕。色調は外面黄白色～橙色、内面暗黒灰色を呈する。12は4号溝の下からの出土で、外面は斜位の二枚貝、内面は横位の二枚貝。色調は外面にぶい灰黄褐色、内面淡橙褐色を呈する。13は４号溝の下からの出土で、外面は斜位の二枚貝条痕、内面は斜位の条痕の後ナデ。色調は外面にぶい暗褐色、内面黄橙色を呈する。14は包含層出土で、内外横位の二枚貝条痕。色調は外面暗黒褐色、内面黄褐色を呈する。15は４号溝下出土で摩滅しているが内外斜位の二枚貝条痕。色調は外面黄橙色を呈し、下位は使用のためか変色している。内面はにぶい黄灰色を呈する。16は包含層出土で、外面縦位の二枚貝条痕、内面横位の二枚貝条痕。色調は外面にぶい暗褐色だが、下位は２次焼成を受けて暗赤褐色に変色している。内面はにぶい黄褐色を呈する。17は4号溝下出土で、外面は斜位の二枚貝条痕、内面は横位の後斜位の二枚貝条痕。色調は外面にぶい暗黒褐色、内面黄橙色を呈する。18は包含層出土で、外面は斜位の二枚貝条痕の後ナデ、内面は横位の二枚貝条痕の後ナデ。外面は暗黒褐色、内面にぶい黄褐色で、下位は使用のためか暗赤橙色

に変色している。19は4号溝下出土で、外面は斜・横位の二枚貝条痕内面は擦過。色調は外面がにぶい黄灰色、内面がにぶい暗黄色を呈する。20は包含層出土で内外斜位の二枚貝条痕。色調は外面茶褐色、内面黄橙色を呈する。21は包含層出土で、内面ナデ、外面横位の二枚貝条痕。内面にぶい暗黄褐色、外面灰黒色を呈する。

蛤刃磨製石斧（22）　完形の緑泥片岩製で、4号溝の階段状集石の下から出土した。刃部は刃こぼれが著しい。研磨は入念だが、基部は成形時のままで剥離面を残している。側面には柄に装着する際に打ち欠いて調整したと思われる、やや窪んだ平坦面をもつ。長さ10.8cm、幅3.2cm、重量は382.5g。



第6図　縄文時代の遺物出土状態（1/80）



第７図　縄文包含層出土遺物実測図（1/3）

2．弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物

弥生時代から古墳時代前期の遺構は、土坑１基と溝が３本ある。いずれも浅く、大きく削平されたものと思われる。

1．土坑

13号土坑（図版6-3、第８図）

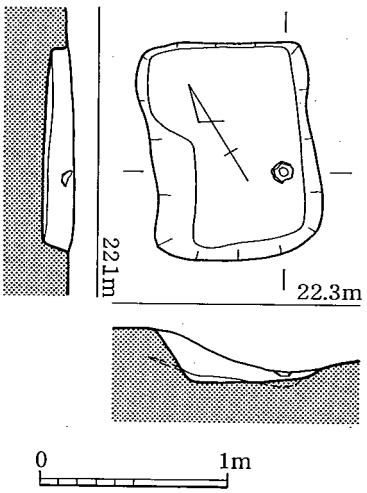
中央区平坦面の北東部に位置し、平面形は方形。長軸1.16m、短軸0.9m、深さ28cmで、床面はほぼ平坦で、壁は直立する。土壙墓の可能性がある。時期は土器から布留式古段階と思われる。

出土遺物（図版25-2、第９図）

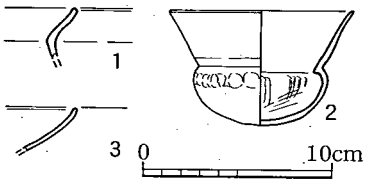
甕（１）　小型品の口縁部片でやや内湾している。内外ナデで、色調は黄白色を呈する。

小型丸底壺（２）　完形品で、外面ナデ、最大径に押さえがある。内面胴部にナデの工具痕が見られる。色調は黄白色を呈する。

杯（３）　内湾する口縁部で、胎土が精良で器壁が薄いことから、杯と思われる。色調はややにぶい黄白色を呈する。



第８図　13号土坑実測図（1/40）



第９図　13号土坑出土土器実測図（1/4）

2．溝状遺構

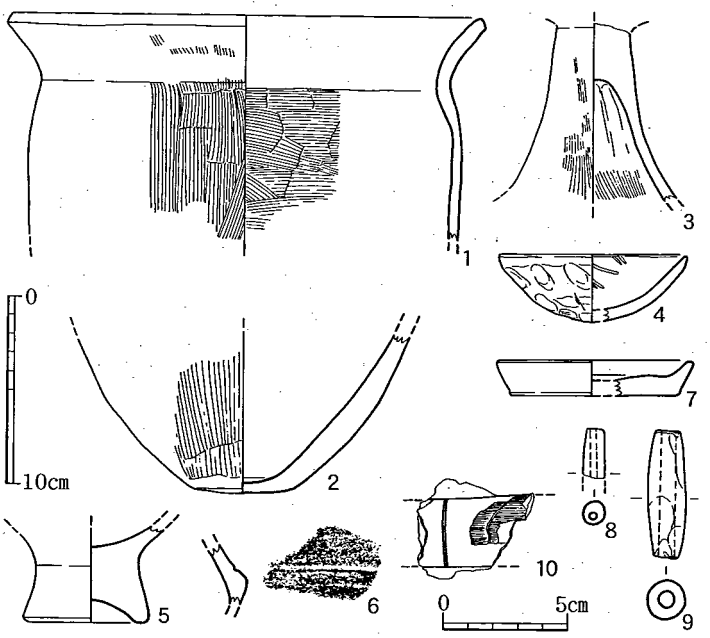
１号溝（図版18-2・19-1、第11図）

調査区南部の平坦面に位置し、斜面に向かって深くなっている。平坦面が削平されているため、溝の西部は底面の深い部分が土坑状に連続して残っている。西部は東西方向、東部は南北方向に弧を描いて走っている。幅は途切れるところから急激に細くなる。幅は最も広い所で2.4m、最深部で深さ28cmを計る。浅い幅広な溝で、立ち上がりも緩やかである。床面は凹凸が大きく、掘削が粗かったものと思われる。

底面の最も深いところに人頭大の円礫が散乱しているが、これは溝の流れに沿って流れ込んだものと見られる。時期は土器からみて弥生後期後葉である。ほとんど時期差がないため、２号溝と共存していた可能性もある。

出土遺物（図版25-3、第10図）

弥生後期甕（1・2）　１は口縁部で、外面は縦ハケ、内面は横ハケ。外面は黄白色だが、内面は口縁部以下がにぶい暗褐色に変色しており、煮沸使用したと思われる。２は底部で、やや膨らみをもつ平底である。外面は粗いハケ、内面はナデである。色調は、外面上位はにぶい灰褐色、下位は黄橙色から黄白色。内面は橙色が変色して暗褐色を呈する。内外下位の色調が異なっており、煮沸使用したと思われる。



第10図　１号溝出土遺物実測図（6～10は1/3、他は1/4）

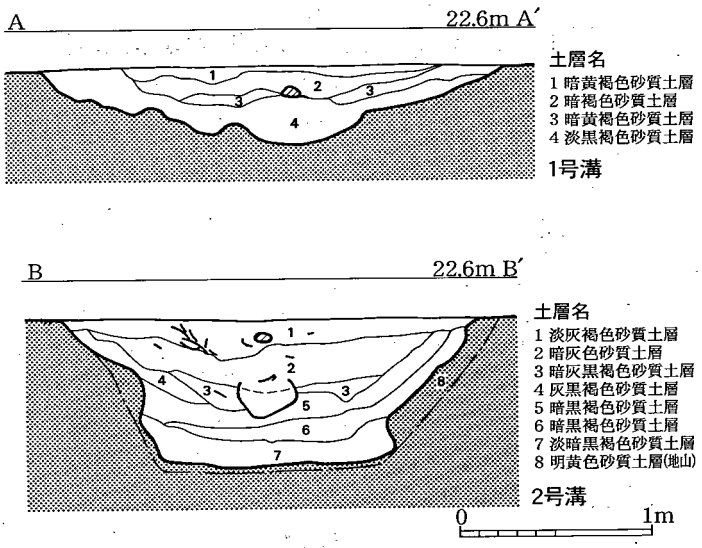
高杯（3）　高杯の脚部で、摩滅しているため調整・色調は不鮮明。

杯（4）　手捏ねで、復元口径10.0cm、器高3.6cm。外面は押さえ。色調は黄白色。

弥生中期初頭甕（5）　底部片で、器面は摩滅が著しいため、調整は観察できない。色調は内外黄白色。

縄文土器深鉢（6）　屈曲する肩部片であろう。器面が摩滅しているので調整は不明瞭だが、外面は擦過、内面はナデ。肩部に一条の沈線が入る。色調は外面がにぶい暗褐色、内面が暗黒灰色。

土師器小皿（7）　復元口径7.8cm、器高1.4cmで、底部は糸切り。



第11図　1・2号溝土層断面図（1/40）

土錘（8・9）　8は半欠品で、最大径は0.85cm、重量は1.8gを量る。9は完形の土錘で最大径1.5cm、重量は1.8gを測る。

不明鉄片（10）　木質が付着しているが厚みが1mmしかなく、刃も見られない。刀の柄部が薄く剥がれたものかもしれない。現存長4.7cm、幅2.7cm。

2号溝（図版18-2・19-2～4・20-1、第11・12図）

中央調査区中央部の平坦面に位置し、東西方向に直線的に走っており、斜面で途切れている、2号集石遺構に切られている。東側の斜面に向かって深く、幅も広くなっているが、これは平坦面が削平されているためであろう。幅は最も広い所で2.23m、深さは最深部で約90cmを計る。

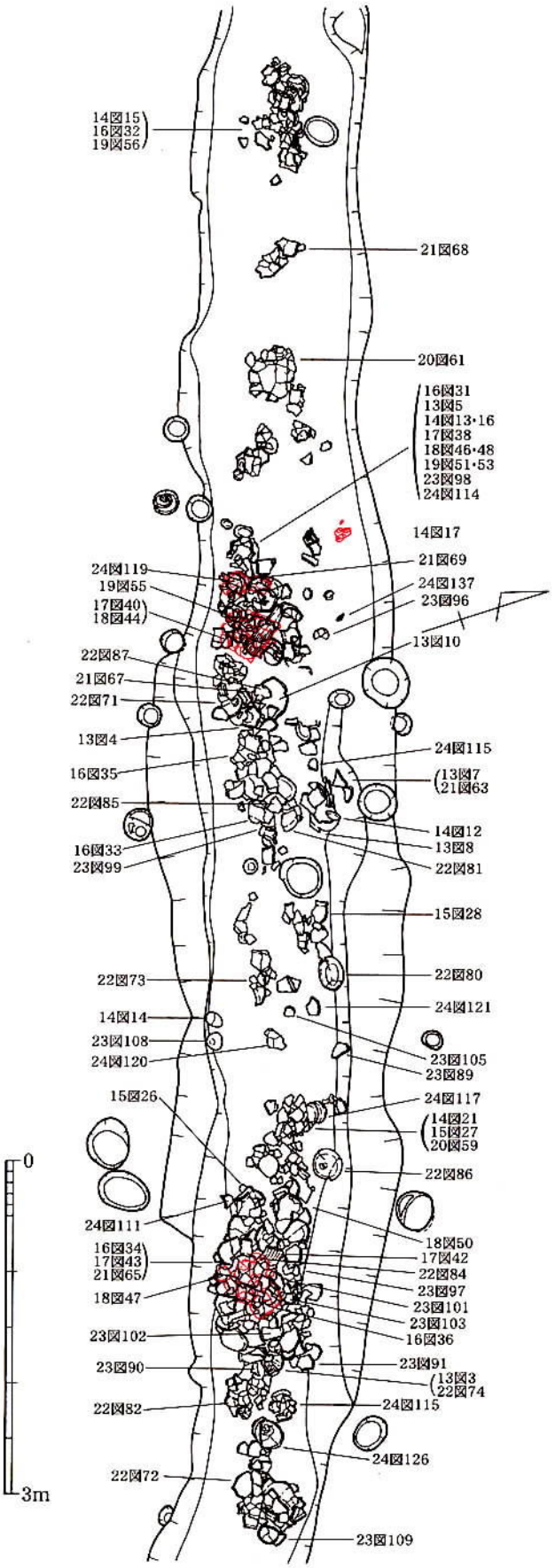
断面は逆台形を呈する。溝底の端部はえぐれており、水が流れたことを示している。溝の最深部付近で、一括廃棄されたものと思われる多量の土器群が出土しており、出土状態から上位と下位に分けられることから、廃棄は2回に渡って行われたものと思われる。土層も遺物を多量に含む2つの層の間に遺物の少ない層がある。

土器は完形に復元されるのものが多く、器種は甕が多いが、その割合は日常生活で使用する器種構成に近いのではないだろうか。祭祀的な遺物が見られないので、生活用品の廃棄であったと考えられる。時期は土器から弥生後期後葉である。

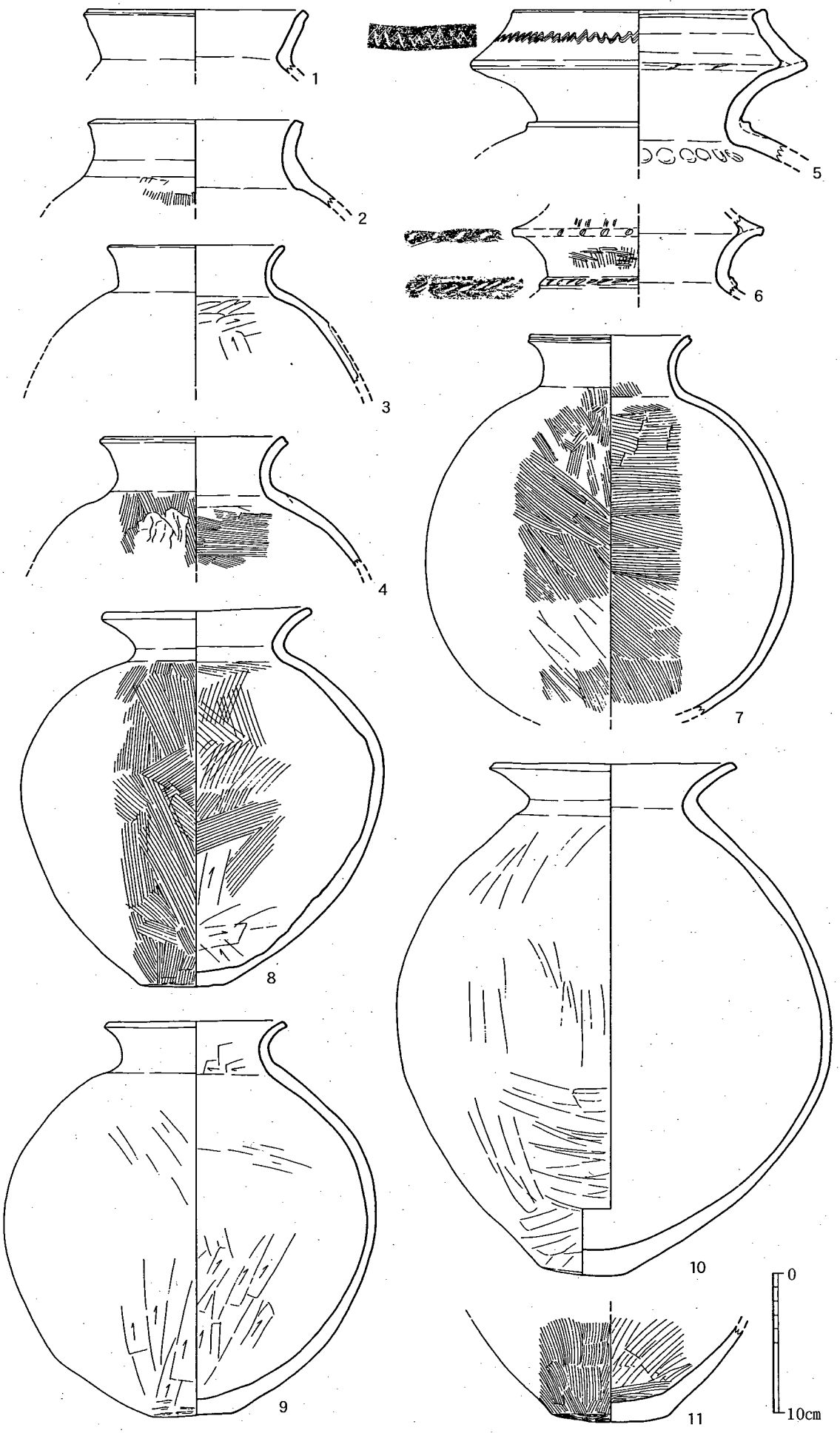
出土遺物（図版25-3・26～30・31-1、第13～25図）　**壺**（1～17）　1～4・7～10・12・13は直口壺で、5・6は複合口縁壺、14は胴部片、15～17は底部片である。1～4は口縁部で、外面は縦ハケ、内面はナデが多い。4は肩部にハケ調整後に貼り付けた「‖」形の浮文がある。同じものが北区ピット1（第78図1）に見ることができる。色調は、1～3は橙褐色から黄褐色であるが、4は茶褐色。5はいわゆる「安国寺型」の複合口縁壺で、複合部に土器に対して左から右への施文した櫛書き波状文が入る。色調は内外黄橙褐色を呈する。6は複合部には暗文が見られ、接合部には刻目が入る。頸部にも刻目が入るが接合部のものとは間隔が異なる。色調は黄白色をする。7は反転復元しているため均整に見えるが、ひずみが大きい。胴下半は削り状の擦過が帯状に入り、その下に再びハケが入る。内面は丁寧なハケで、上半と下半で原体が異なる。色調は灰黄褐色だが、一部赤化している。8は完形で、下半がひずんでいる。外面はハケのみ、内面は底部が板ナデである。外面は灰黄褐色から黒色。内面は灰黄褐色。9は下半を大きく欠損するが、完形に復元できる。調整は内外とも、上半が板ナデ、下半が削り状の擦過で、外底部付近にタタキの痕跡が見られるので、本来整形時にタタキを施したと思われるが、調整で消されている。外面は白色、内面は焼成不良によって全体的に暗褐色を呈する。10は口縁部を若干欠損するのみでほぼ完形である。外面は上半が

板ナデ、下半が削り状擦過、内面はナデ。内底に器面の剥落が目立つ。器壁が厚く、底部がひずむ。淡黄褐色を呈す。11は壺の底部で、凸レンズ状を呈し、内外は丁寧なハケで外底部まで入っている。色調は橙褐色を呈する。12は完形で均整なつくりである。内外とも板ナデで、白黄褐色を呈する。13はほぼ完形に復元できる。ややひずみがあり、つくりはよくない。外面は上半が荒いハケ、下半は削り状擦過で、内面は上半がナデ、下半はハケで、赤褐色を呈する。14は口縁部が欠損しているが、胴部の特徴から直口壺と思われる。外面板ナデ、内面削り状擦過。色調は外面灰黄褐色、内面黒色。15は壺の底部で内外ハケで、外面明茶褐色、内面灰茶褐色を呈する。16は凸レンズを呈する底部片。外面削り状擦過、内面板ナデ。17は小さな平底で、胴部への傾きが小さいことから球形か扁胴になると思われる。内外丁寧なハケで、橙褐色を呈する。

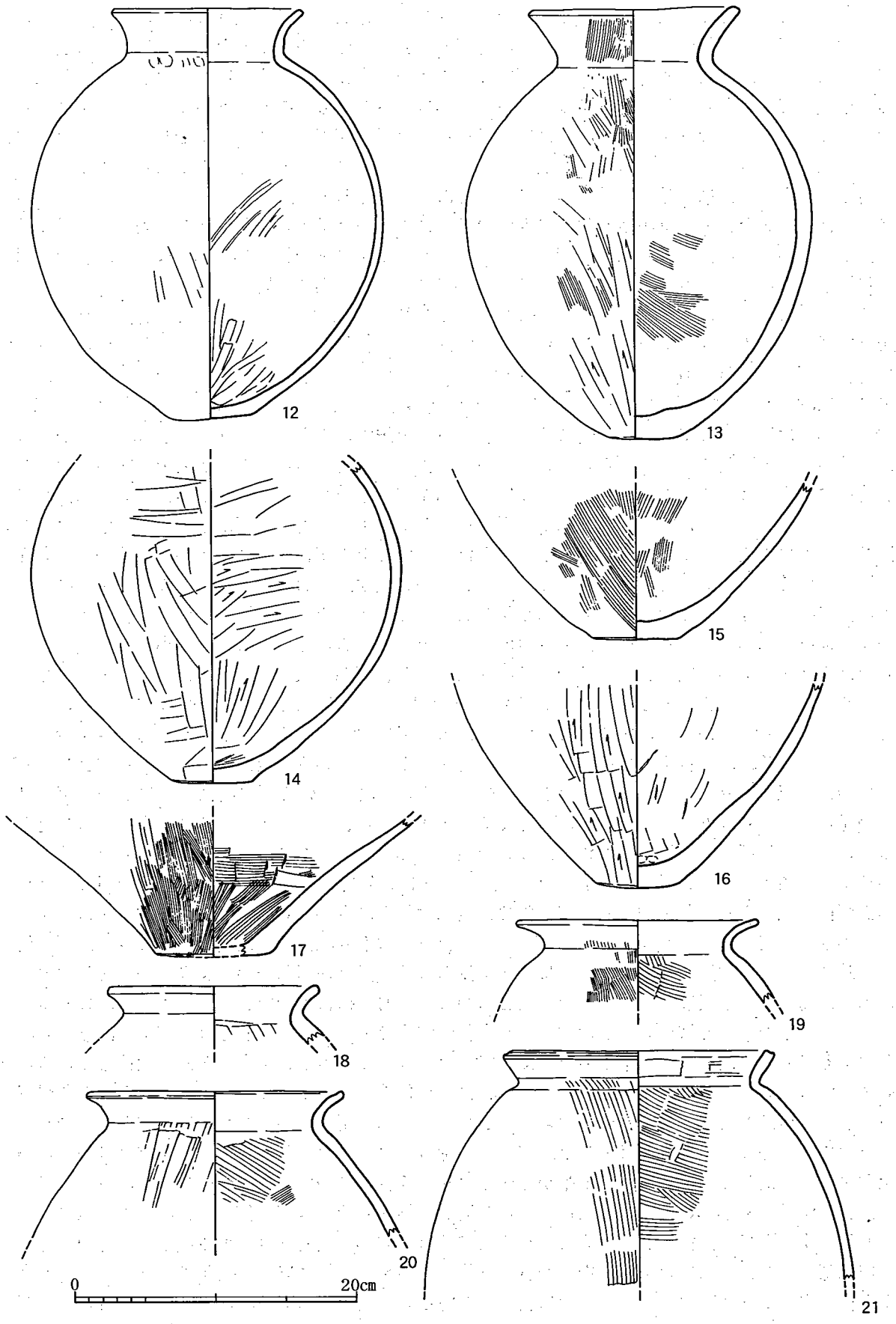
甕（18～79）　18～21は口のすぼまる甕の口縁部で、18は内外ナデ、淡橙褐色を呈する。19は内外ハケで、色調は、外面は橙褐色だが、肩部に煤が付着している。内面は黒灰色を呈する。20・21は内外ハケで、色調は焼成不良のためか内外暗灰色から黒色を呈する。22～36・40～56は口径20～22cm前後の中型の甕で、37～39・57は口径10cm未満の小型甕、58～61は口がすぼまる長胴の甕、62～70は壺棺に使用される大型壺であろう。22は内外ハケで、外面にはわずかにタタキが残っている。色調は淡黄褐色を呈する。23は内外目の細かいハケで、内面は口縁部にまで丁寧なハケが入る。色調は内外暗黄茶褐色で、外面は煤けたような変色がある。24は内外目の細かいハケで、内面は口縁部にまでハケが入る。外面は煤が付着しているため茶褐色から黒色で、内面は橙色を呈する。25は内外丁寧なハケで、肩部に煤が付着しており、外面は茶褐色から黒色、内面は黄茶褐色を呈する。26は底部がやや膨らみをもつ平底で、外面は口縁部から胴中位まで入念なハケが入り、下位は削り状擦過。内面は上半がハケで、下半はナデ。色調は、外面は胴下位が2次焼成



第12図　2号溝遺物出土状態（1/60）

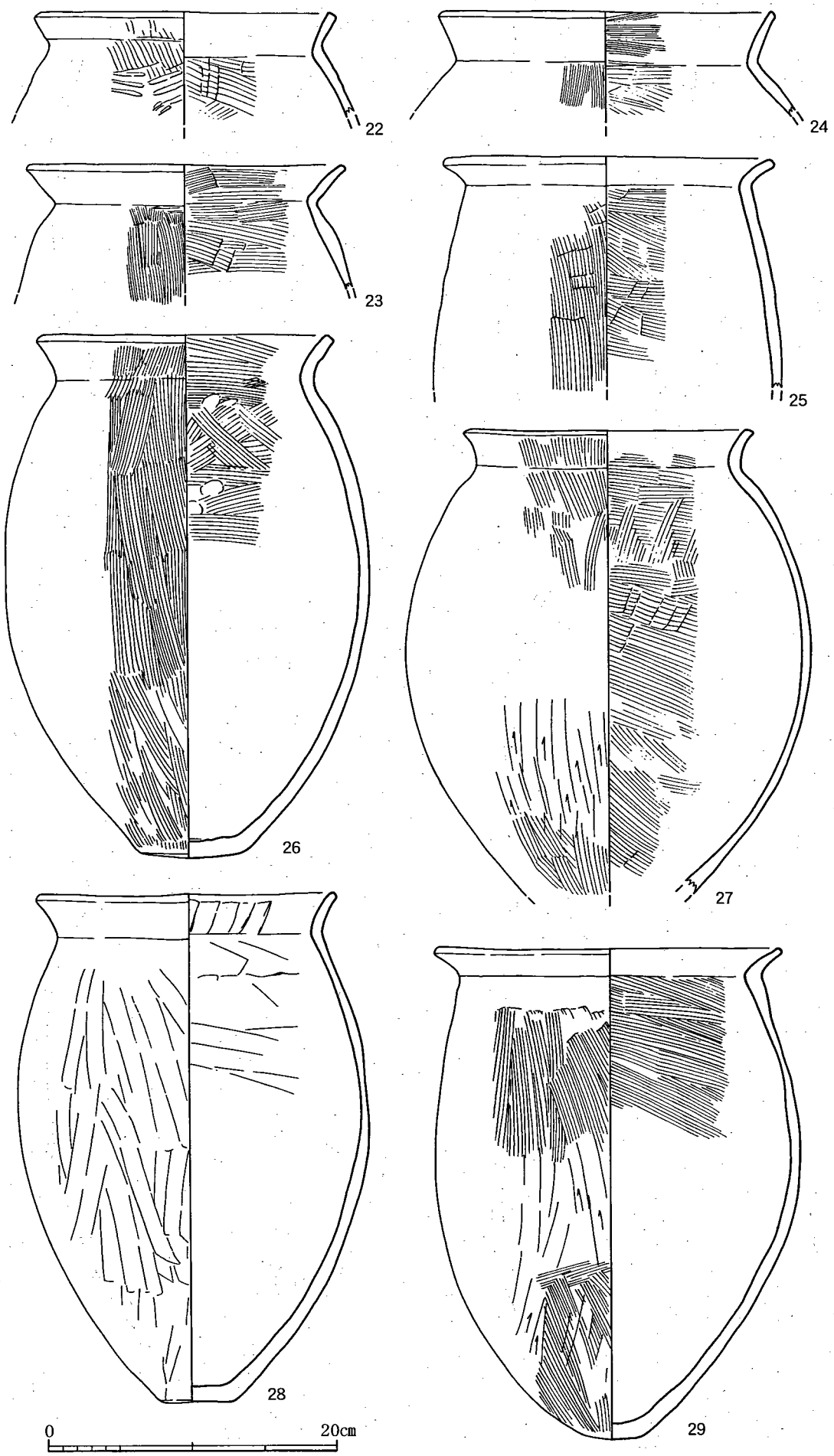


第13図　２号溝出土土器実測図１（1/4）

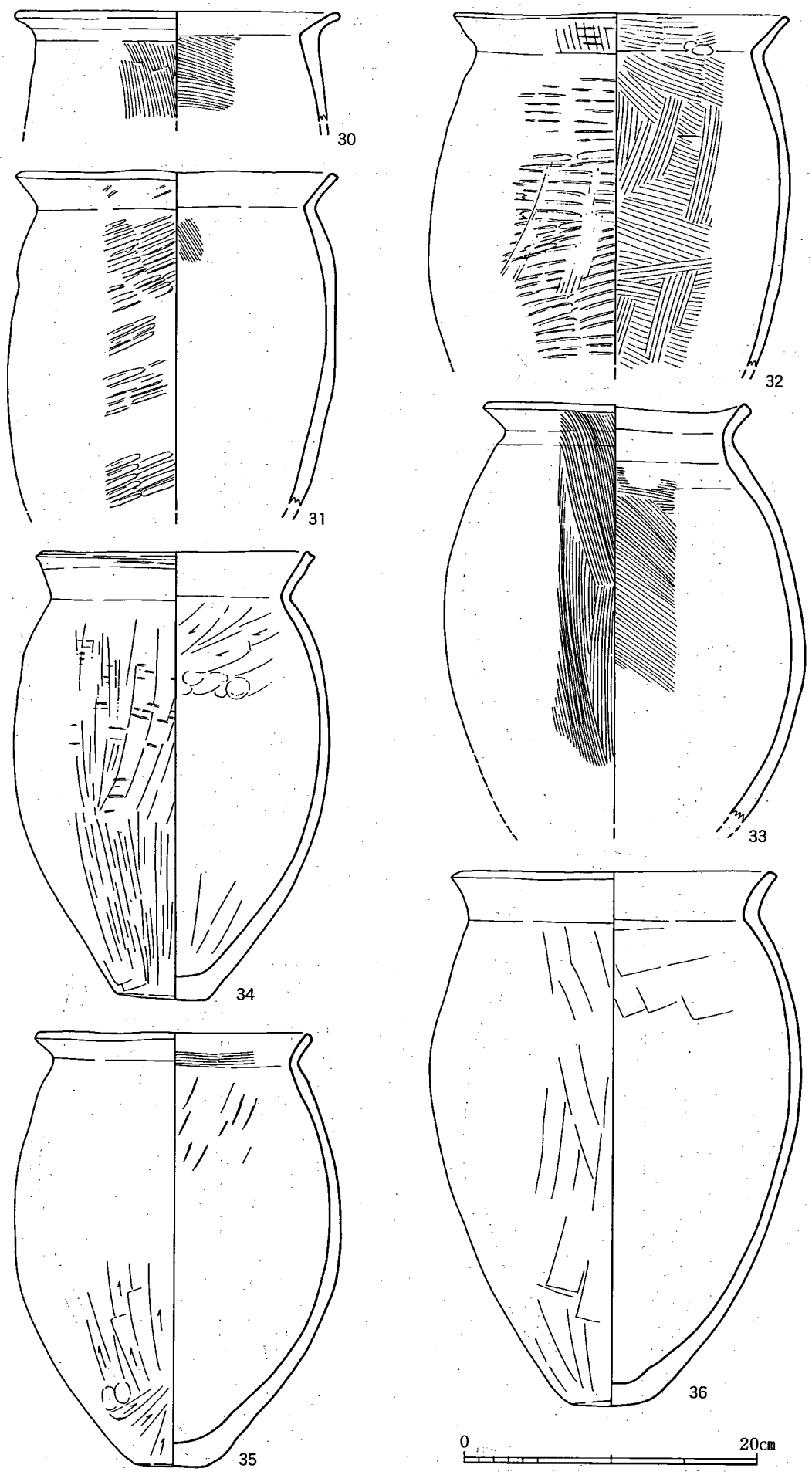


第14図　２号溝出土土器実測図２（1/4）

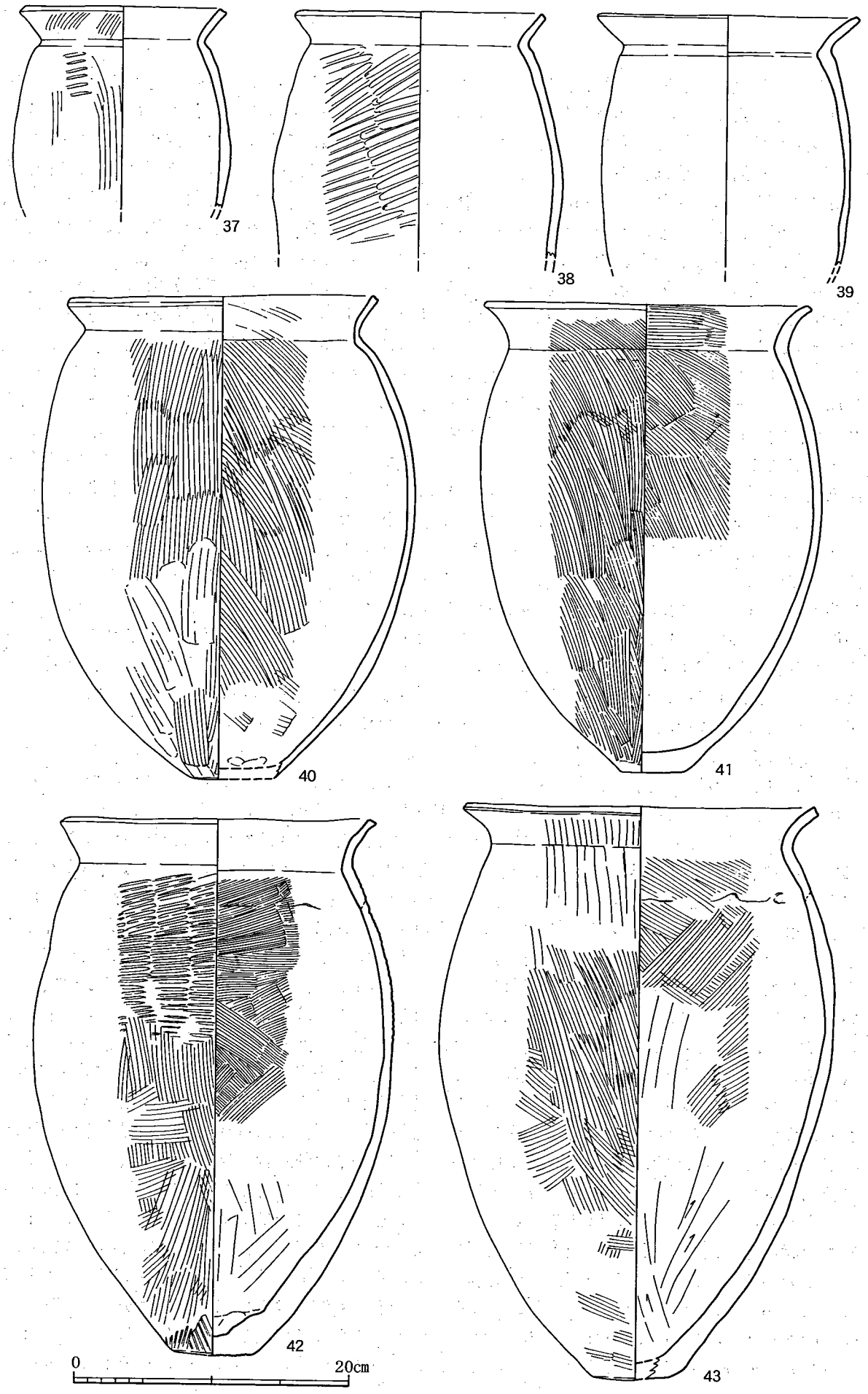
を受けて赤褐色に変色し、内面は茶褐色が黒色に変色している。内面の下半の器面が剥落していることから煮沸使用していたと見られる。また、口縁部は変色が著しく、吹きこぼれか注ぎ口であろう。27は内外ハケだが、外面は口縁部までハケが入り、胴中位から下がったところに帯状に削り状擦過が入る。色調は内外灰褐色だが、胴下位は外面がやや赤化して見え、内面は黒色に変色し、煮沸使用されているといえる。28はほぼ完形で、底部は小さな平底である。内外板ナデ、下位は削り状擦過とするべきものもあるが、原体は同じである。内面の胴下半は器面が剥落している。色調は、外面は上半が黄褐色だが、中位は煤が付着し黒灰色、下位は2次焼成を受け赤褐色を呈する。煮沸使用とみてよい。29は半分欠損するが、ほぼ完形に復元できる。口縁が大きく外傾し、最大径を口縁部に持つ。また、底部は小さく尖底に近いので、他のものとはプロポーションが異なる。外面は外面上半がハケ、中位は削り状擦過で、消されずに残ったタタキが見られる。下位はハケだが、削り状擦過ともいうべきものもある。色調は、外面口縁部は白黄褐色、肩部は煤が付着するため黒く変色している。下位は2次焼成を受け、赤化する。30は口縁部が大きく外傾し、最大径を持つので、29と同様のプロポーションを持つと思われる。内外ハケで、外面は煤が付着しており茶褐色から橙褐色、内面は橙褐色。31は外面タタキ、内面ナデで一部にハケ。色調は灰褐色だが、外面の胴下半が2次焼成を受けて赤褐色に変色している。器面の剥落も著しいので煮沸使用していると思われる。32は、外面は口縁部までタタキが入りその後若干ハケを施す。内面は口縁部まで丁寧なハケが入る。色調は内外灰黄褐色で変色は見られないが、内面に円形のコゲがある。下半が欠損しているので煮沸使用については明確でない。33は、外面は口縁部まで丁寧なハケが入るが下半は器面が剥落している。内面は、口縁部はナデ、頸部以下は丁寧なハケで、下半は器面が剥落している。色調は、外面は上位が橙褐色、中位が暗茶褐色、下位は黒色。内面は上半が橙褐色、下半が暗黄茶褐色。煮沸使用している。34は約半分が残っており、小さな平底を呈す。外面の上半は口縁部までタタキの後、縦ハケでタタキを消しており、下半は削り状擦過。内面は板ナデ。下半は器面が剥落している。色調は黄褐色を基調とするが内面は煮沸使用のため変色している。35はほぼ完形で小さな平底を持つ。外面は板ナデ、下半は削り状擦過。内面は口縁部がハケ、胴部は板ナデ。下半は器面が剥落している。色調は灰黄褐色を基調とし、中位に帯状に煤が付着し、下半は2次焼成を受け赤化しているので煮沸使用とみてよい。36は中位が欠損するがほぼ完形に復元できる。底部はやや膨らみを持つ小さな平底。調整は内外板ナデで、内面の下半は器面が剥落している。色調は黄褐色を基調とし、外面は中位に煤が帯状に付着し、下半は2次焼成を受けて赤化している。内面は下半に煤やコゲの付着が見られる。37は外面タタキのち口縁部までハケが施され、内面はナデ。色調は内外白黄褐色を基調とするが外面は暗茶褐色に変色した部分がある。38は外面タタキのみ、内面ナデ。色調は外黄茶色で煤付着あり。内面暗白黄褐色。39は最大径を口縁部に持つ。内外ナデのみでつくりが悪い。外面灰白褐色から灰茶色、内面灰白黄褐色で、変色は見られない。40は底部を欠損するがほぼ完形で、小さな平底を持ち、外面は上半が丁寧なハケ、下半は削り状擦過。内面はハケのみ。外面褐色、内面暗茶色で底部が黒色に変色、上位に赤化が見られる。煮沸使用しているようだが、変色や器面の剥落が弱く、使用頻度が少なかったものと思われる。41はほぼ完形で、最大径が口縁部にあるタイプで、小さな平底を持つ。外面は口縁部から胴中位まで入念なハケが施され、下半は削りのちハケのようである。内面は口縁部から胴中位までハケが入っているが、下半は器面が剥落しているため確認できない。色調は赤褐色で胴中位に帯状に煤が付着する。胎土に他の土器に見られる角閃石を含まず、色調も異なるので搬入品の可能性が高い。煮沸使用している。42はほぼ完形で、やや膨らみのある平底を持つ。外面は上半と底部・底部付近にタタキがあり、中位から下位は目の太いハケがタタキを消している。内面は上半が外面とは異なる目の細かい原体のハケ、下半は板ナデであるが、器面は剥落している。内外灰白色から赤褐色、外面の中位は煤が付着し、内面の中位にはコゲが付着するので煮沸使用しているといえる。43はほぼ完形に復元でき、小さな平底を持つ。外面は口縁部がハケ、肩部は板ナデ、中位から胴下位までハケで下位は器面が荒れている。内面は上位がハケ、中位から底部は板ナデで器面は剥落している。外面上位は灰白色だが、中位は帯状に煤が



第15図　2号溝出土土器実測図3（1/4）

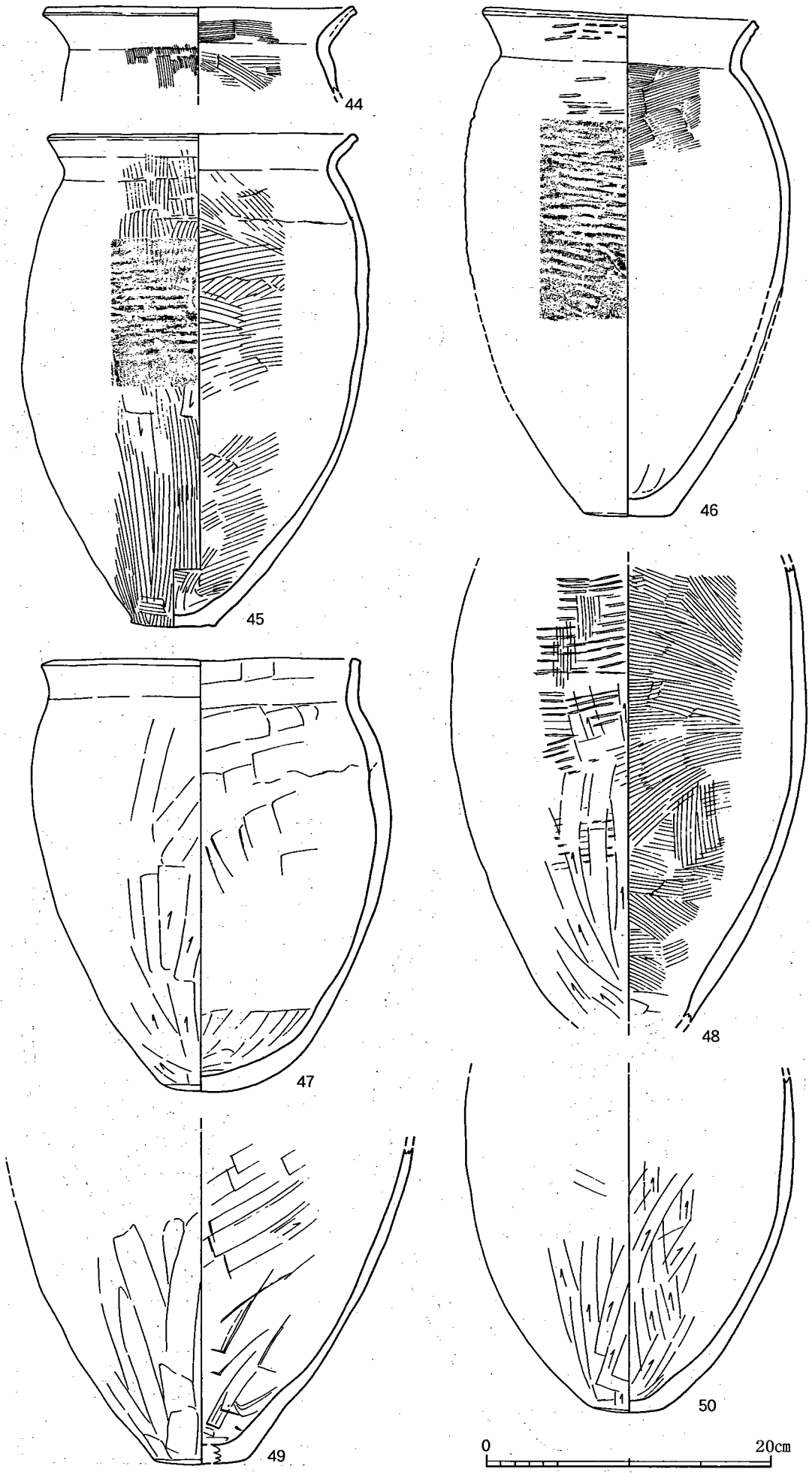


第16図　2号溝出土土器実測図4（1/4）

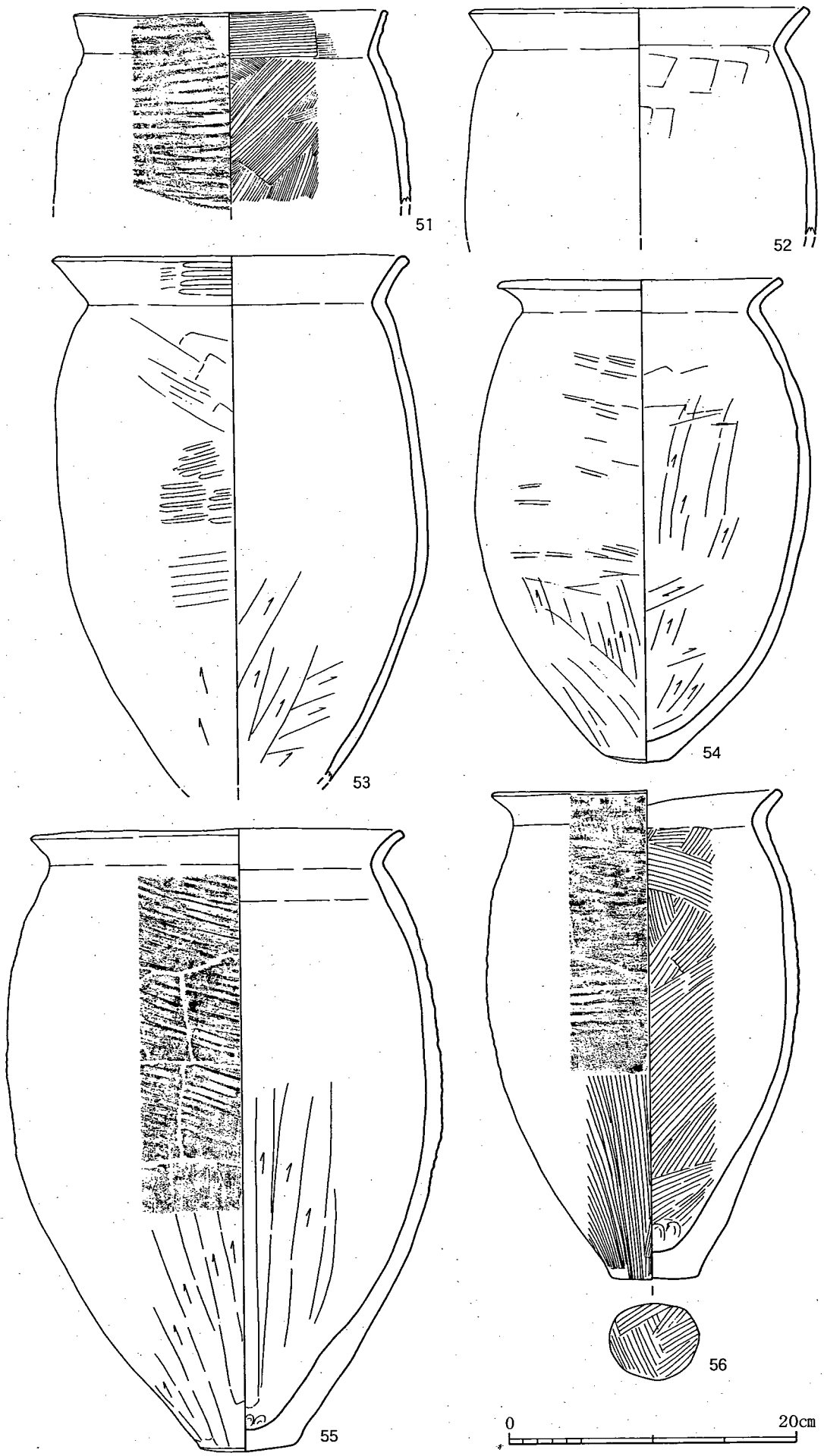


第17図　２号溝出土土器実測図５（1/4）

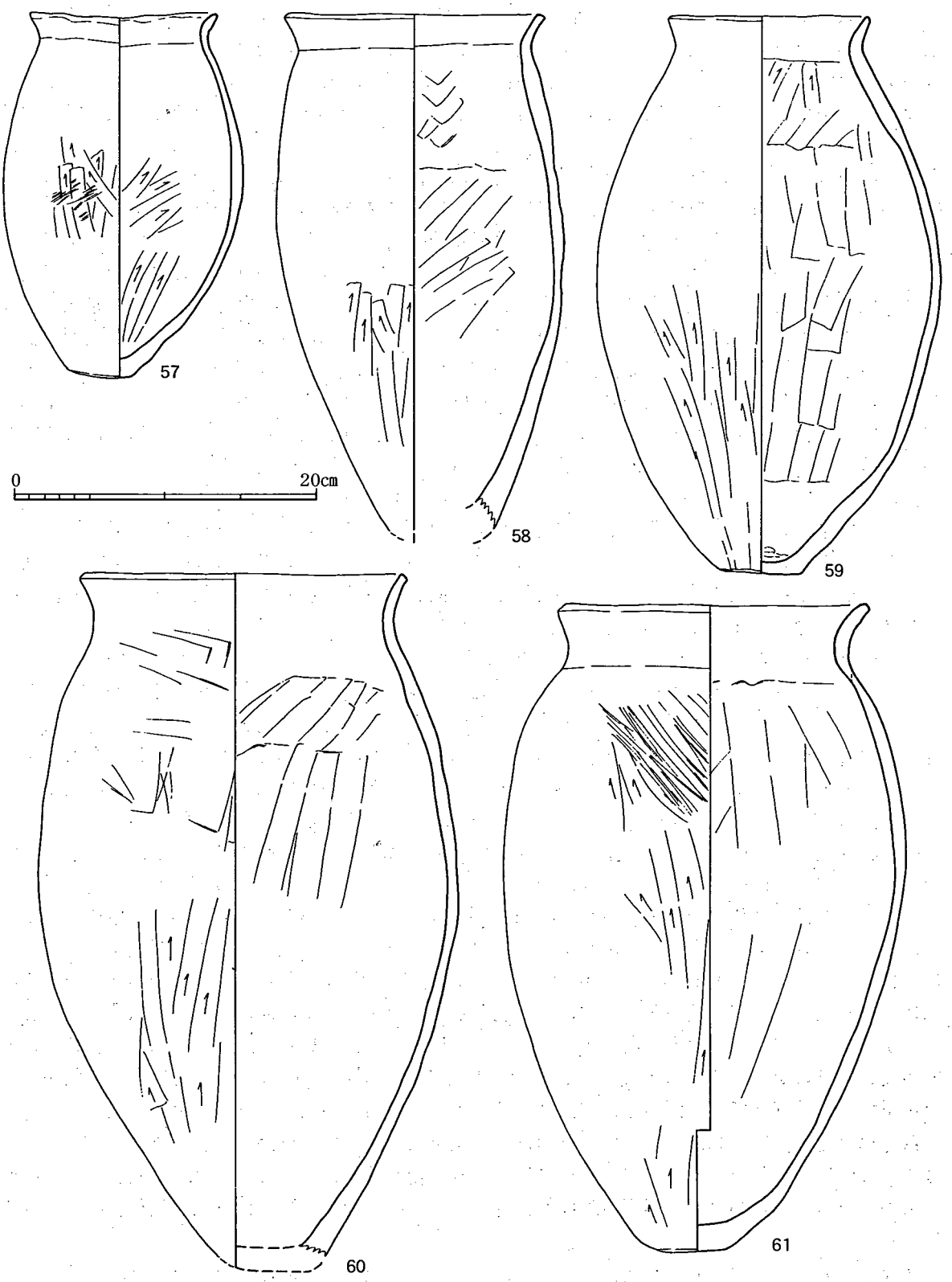
付着し、下位は2次焼成を受けて赤化している。内面は中位から底部まで黒く変色しており、煮沸使用したといえる。44は内外ハケだが、外面は目が細かく内面は目が太い。色調は褐色から暗褐色で、変色が見られる。45は完形に復元でき、底部は平底。外面は上半がタタキ後ハケ、中位はタタキ後削り状擦過、下位は目の太いハケのみである。内面は目の粗いハケのみ。色調は内外橙褐色で、使用による変色は見られない。46は完形で、小さな平底を持つ。外面は口縁部から胴上半がタタキ、下半はナデで、中位は器面の剥落が著しい。内面は肩部が目の細かいハケ、それ以下は器面が剥落しているため明瞭でないが、ナデであろう。外面は黄橙褐色を基調とし、中位は煤が帯状に付着しており、下位は2次焼成を受けて、赤褐色に変色している。47は口縁・胴部が欠損しており、大きくひずんでいるので、器形が他と異なっている。外面は、上半は板ナデ、下半は削り状擦過、内面は板ナデだが、中位は器面が剥落している。内外灰白色を基調とし、外面の中位は煤が帯状に付着、下位は2次焼成を受けて赤変している。内面は中位から下が黒く変色している。48はひずみのある器形を反転復元しているため、本来の器形でないと思われる。外面の上半がタタキ後ハケ、下半はタタキ後削り状擦過。内面は入念なハケが全面に入る。色調は灰黄褐色を基調とし、胴中位の片側に赤変が見られる。49は底部がやや膨らみを持つ平底で、外面削り状擦過、内面板ナデ。内外暗灰褐色から白黄褐色で一部黒色に変色している。50は膨らみを持つ小さな平底で、外面上半はタタキの後板ナデ、下半は底部まで削り状擦過。内面は削り状の板ナデ。色調は内外灰黄褐色を基調とし、外面中位は煤が帯状に付着しており、下半は2次焼成を受けて赤化し器面も荒れているので、煮沸使用しているといえる。51は口縁部までタタキが入る、内面は口縁まで丁寧なハケが入る。色調は黄茶褐色を呈する。52は内外板ナデ、色調は内外茶褐色だが、外面は黒色に変色しているので煮沸使用の可能性高い。53は外面上半がタタキののち板ナデでタタキはほとんどナデ消されている。下半は削り状擦過。内面は上半がナデ、下半は削り状板ナデ。色調は灰黄褐色を基調とし、外面下半は2次焼成を受けて赤化しており、器面が剥落している。54はやや膨らみをもつ平底を持つ。胴下半が半分欠損しているが完形に復元できる。上位から中位はタタキのちナデで、タタキはほとんどナデ消されている。下半は削り状擦過。内面は削り状板ナデ。色調は灰黄褐色を基調とし、外面下半は2次焼成を受けて赤褐色を呈する。55はほぼ完形で、底部はやや膨らみをもつ平底で、外面上半はタタキ、下半は削り状擦過。内面は上半が丁寧なナデ、下半は削り状板ナデ。色調は淡茶褐色から暗褐色を呈しており、変色や赤化は弱いので、煮沸使用の頻度は少なかったと思われる。56はほぼ完形で平底、調整は外面は口縁部が削り状板ナデ後ナデ、上半はタタキ、下半は底部までハケが入る。内面は頸部から底部までハケ。色調は淡褐色で変色が顕著でないが、煤は付着しており、煮沸使用はされている。57はほぼ完形で、ひずみがあり、底部はやや膨らみのある平底で、外面は上位が板ナデ、中位は削り状擦過、下位は板ナデ。内面は上半が板ナデ、下半は削り状板ナデ。色調は灰黄褐色を基調とするが、全体に煤けて変色しているが赤化していない。58は底部が欠損しているが、ほぼ完形に復元できる。大きくひずんでおり、つくりは悪い。外面は上半がナデ、下半は削り状擦過だが、器面が剥落している。内面は板ナデ。色調は内外灰褐色で、中位は煤が帯状に付着する。下半は2次焼成を受けて赤化しているので、煮沸使用されている。59は完形に復元でき、平底をもつ。外面上半はナデ、下半は削り状の擦過。内面は板ナデ。色調は灰黄褐色を基調としており、変色と認められない。内面は暗褐色に変色だが、焼成不良であろう。60は底部を除いてほぼ完形に復元できる大型品である。外面は上半が板ナデ、下半は削り状擦過。内面は板ナデで、下半は器面が剥落している。色調は淡黄褐色を呈するが、外面下半は2次焼成を受けており、内面の中位も黒く変色している。61はほぼ完形で、小さな平底をもつ。外面は上半が板ナデ、中位から下位は削り状擦過。内面は板ナデ。色調は灰黄褐色を基調とし、外面中位は煤が帯状に付着しており、下半は赤褐色に変色しているので、煮沸使用されている。62・63は凸帯に刻目を持つ直口の大型壺で、64も頸部片だが、おそらく同一型式であろう。いずれも外面は口縁部までハケが入り、内面は62・64がハケ、63は口縁部がハケ、肩部は削り状擦過。色調は黄橙色を基調としており、変色は見られない。65は完形で、頸部は刻目のない断面方形の凸帯がつく。底部は平底。凸帯下に線刻らし



第18図　2号溝出土土器実測図6（1/4）



第19図　2号溝出土土器実測図7（1/4）



第20図　２号溝出土土器実測図８（1/4）

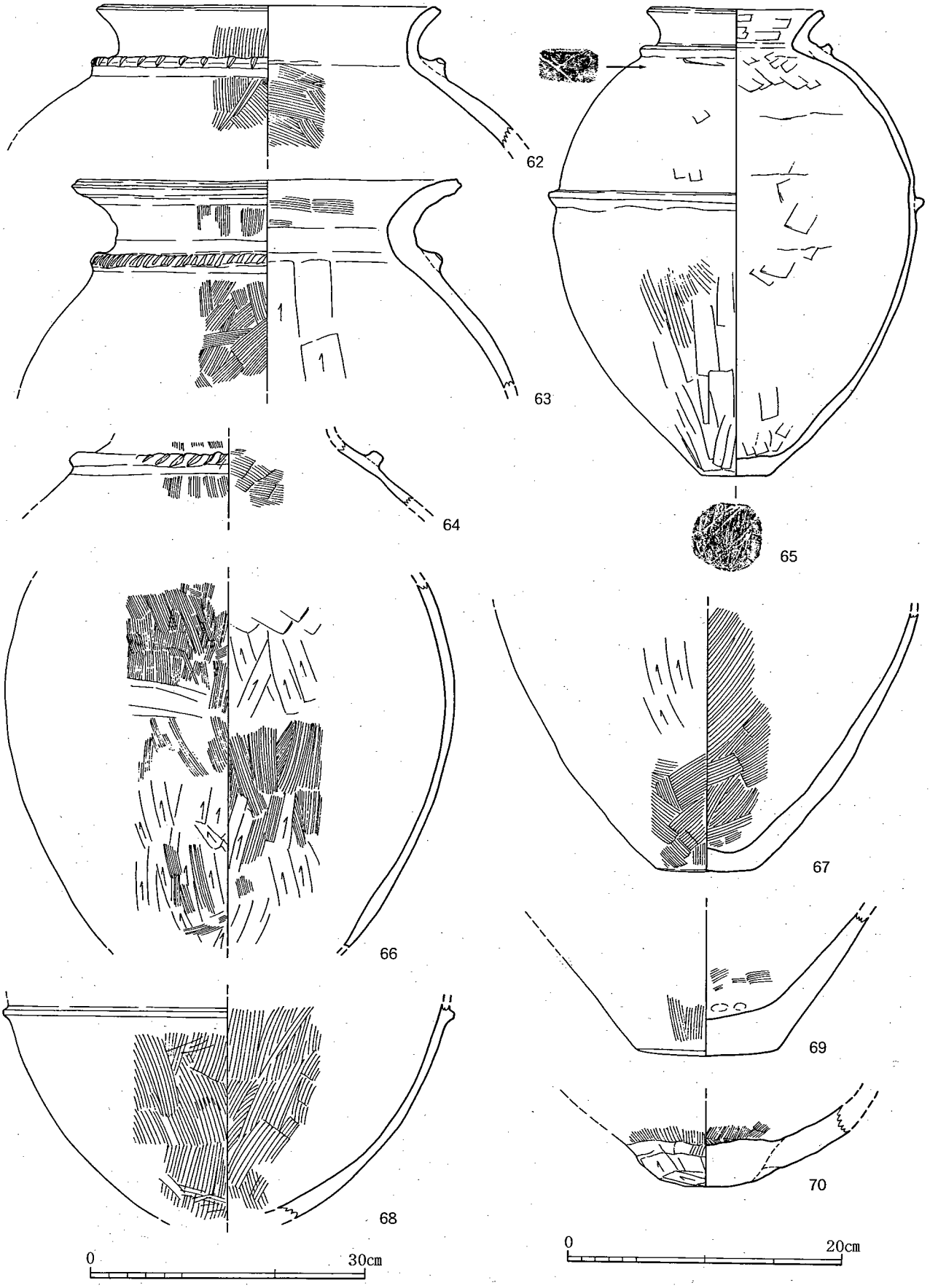
いものがある。外面は上半が板ナデ、中位はハケ、下位は削り状擦過、底部はハケが入る。内面は板ナデ。色調は外面黄褐色、内面暗黄褐色で、内外変色が見られない。66は球形胴で胴部凸帯はない。外面は上半がハケ、下半は削り状擦過。内面は上半がハケ、中位はハケ、下半は削り状板ナデ。色調は内外灰白色で、変色はなく、器面の剥落もない。67は平底、外面は中位が削り状擦過、下位はハケ、内面は上半・下位が丁寧なハケ、中位は削り状擦過が入る。68は均整に見えるが反転復元のためで、ゆがみが大きい。内外ハケ、内外赤褐色を呈する。69はやや膨らみをもつ底部で、内外ハケ。色調は、外面は橙褐色、内面は白黄橙色を呈する。70は凸レンズ状の底部で、外面はハケ後削り、内面はハケ。色調は、外面は橙褐色、内面は黒褐色を呈する。71から75は最大径を口縁部に持つ小・中型品である。71は完形で、底部は平底。外面タタキ後ハケ、内面は板ナデ。色調は内外赤褐色を呈する。72は外面上半がハケ、下半は削り状擦過。内面上半はハケ、下半は摩滅しているため観察できない。色調は灰黄褐色を呈する。煮沸使用していると思われる。73は完形品で底部は平底、内外ハケ。色調は暗黄茶褐色を基調としており、外面の下半は2次焼成を受けて赤化し、内面の下半は黒く変色しているので煮沸使用していると見てよい。74はほぼ完形で、底部はやや膨らみを持つ平底。外面はハケ、内面は指ナデ。均整なつくりだが、調整は粗い。色調は黄橙色で、外面は煤けて変色し、内面は変色が見られない。75は内外板ナデ、色調は外面暗茶褐色から灰黄褐色。内面淡灰黄褐色から暗黒茶色で、煮沸使用しているような変色が見られるが、内面は変色していない。76は平底で、外面はハケ、内面は摩滅しているため不明。色調は内外黄橙色を呈する。77は小型甕の平底で外面は削り状擦過。内面はナデ。色調は外面赤茶褐色、内面暗茶褐色を呈する。78はレンズ状底部だが、つくりが悪く、丸底を呈する。内外板ナデ、色調は外面茶褐色で2次焼成を受けて赤化している。内面は黒褐色で、器面が剥落している。79は平底で、外面削り状擦過、内面板ナデ。外面は２次焼成を受けて赤褐色に変色し、内面は暗黄茶褐色で、煮沸使用されている。

高杯（80～92）　80～86は杯部で、80は外面口縁部が横ハケ後暗文、杯部は磨き。内面は摩滅しているが磨きが見られる。色調は内外橙褐色。81は外面口縁部横ナデ、杯部はハケ。内面は口縁部が横ハケ、杯部は縦ハケ。外面は灰黄褐色から淡黄褐色、内面は白黄褐色を呈する。82は外面口縁部が横ハケ、杯部が磨きの後、暗文が入る。内面は暗文で、内外橙褐色を呈す。83は内外摩滅だが、外面杯部に削り状擦過、内面は磨き。色調は内外赤褐色。84は口縁部と杯部の接合部に凸帯が貼り付けられているもので、外面は口縁部が横ナデ、杯部はハケ、内面は摩滅しているので観察できない。色調は内外灰黄褐色を呈する。85は内外摩滅で観察しにくいが、外面は口縁部が横ナデ、杯部が削り状擦過。色調は灰黄褐色を呈する。86は他のものより口径がやや小さく身が深いもので、外面は磨き、内面は口縁部・杯部が磨き、脚部は絞りが入る。色調は内外灰黄褐色から橙褐色。87は脚部で、外面は削り状擦過、裾部ハケ。内面脚部は絞り、裾部はハケ。色調は内外灰白色を呈する。88は脚部で、外面磨き、内面は脚部が削り状擦過、裾部が横ハケ。色調は内外橙褐色を呈する。89は裾に縦に２つ並ぶ小孔を等間隔に3箇所持つもので、外面磨き、内面は口縁部・杯部が磨き、脚部は絞りが入り、裾部は横ハケ。色調は橙褐色から淡褐色を呈する。90は外面削り状擦過、内面は絞りがなく板ナデ。色調は内外白黄色を呈する。91は同一個体と思われる杯部と脚部で、杯部は内外暗文、脚部は磨き、裾部は外面磨き、内面ハケ目で穿孔が4箇所に入る。色調は白黄褐色から灰色を呈す。92は裾部で、外面磨き、内面は摩滅。色調は外面黄茶褐色から橙褐色。

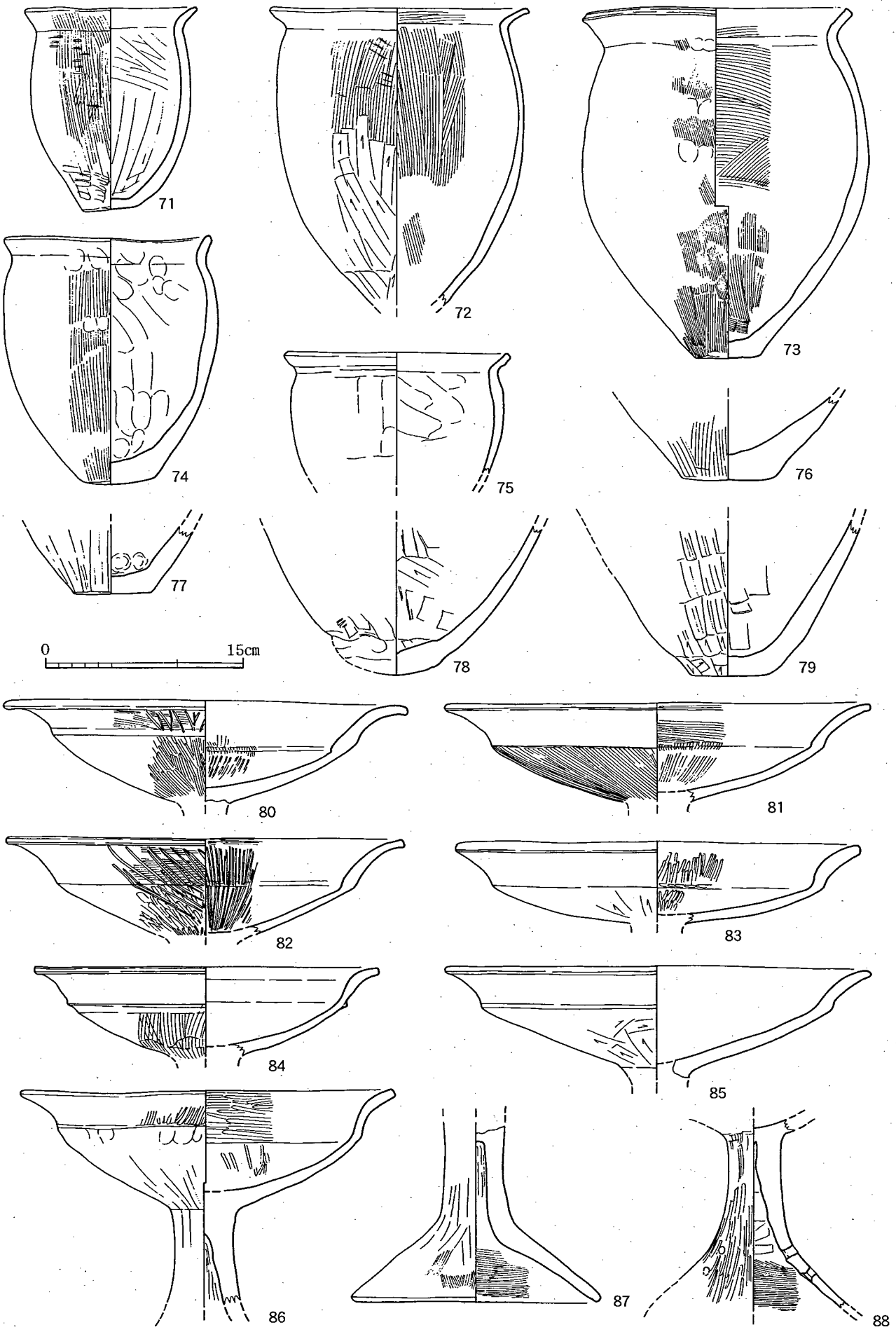
台付鉢（93～95）　93は下半部で、外面は削り状擦過、内面は中位がハケ、下位はナデ。台内面はナデ。内外橙褐色を呈する。94は完形に復元できる台付鉢で、内外ハケ。外面は灰黄褐色、内面は灰褐色を呈する。95は器種不明の脚部で、外面ハケ、内面ナデ。色調は外面黒褐色、内面黒色を呈する。

長頸壺（96）　胴部片で、外面は上半ハケ、下半削り状擦過。内面はナデ。色調は内外黄茶褐色。

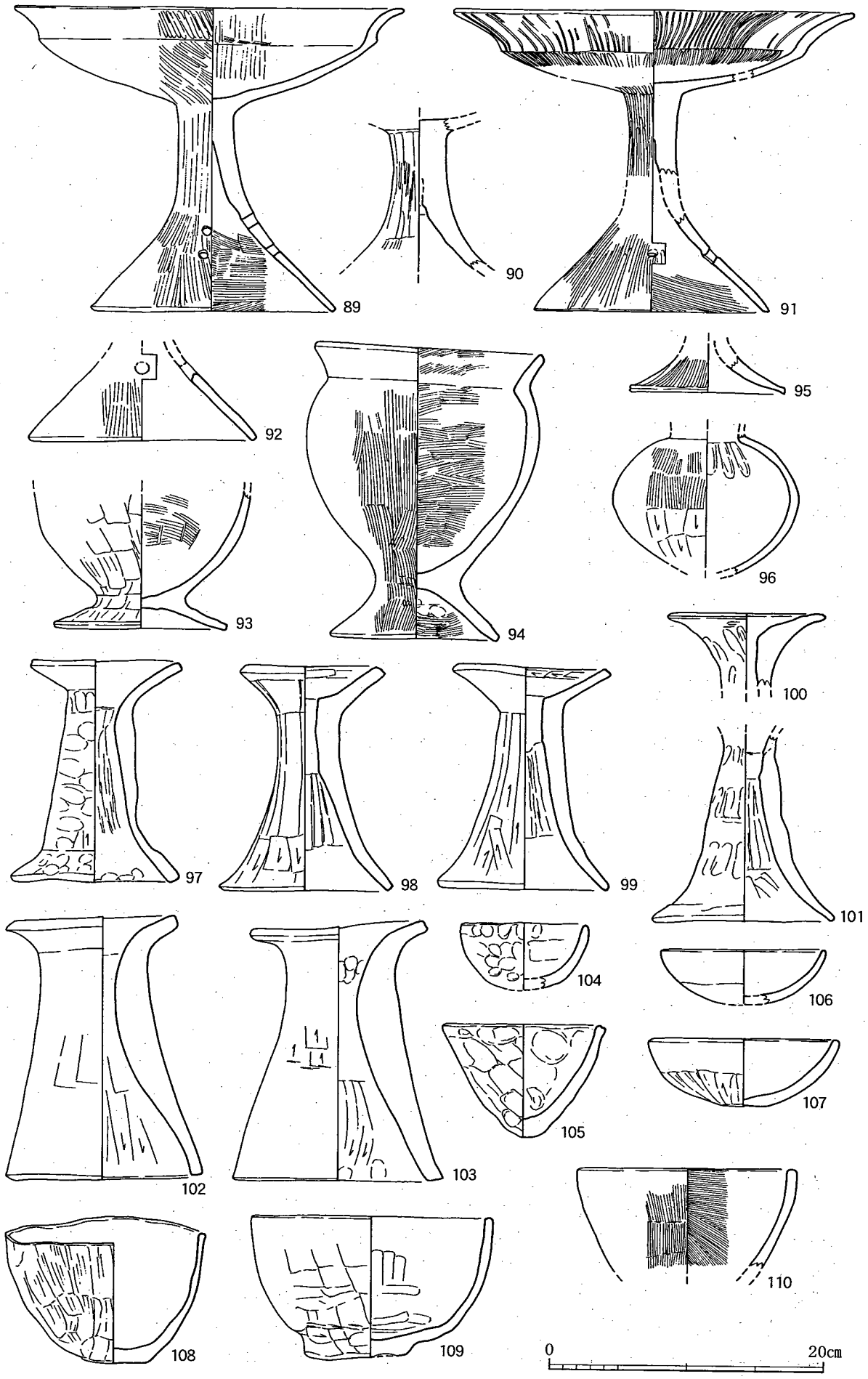
器台（97～103）　97・101～103は体部が中空になるタイプだが、98～100は体部に口縁部からの穿孔があるもので、支脚に近い。97は完形で、口縁部は内外ナデ、体部は外面指押さえ、内面絞り。裾部は外面指押さえ、内面ナデ。内外黄褐色を呈する。98は完形で、外面は削り状擦過、内面は板



第21図　2号溝出土土器実測図9（65～68は1/6、他は1/4）



第22図　2号溝出土土器実測図10（1/4）



第23図　２号溝出土土器実測図11（1/4）

ナデ。色調は内外暗茶褐色。99は完形で、外面は口縁部がナデ、体部から裾部は削り状擦過。内面は口縁部が板ナデ、体部は絞り、裾部はナデで、内外茶褐色を呈する。100は体部から裾部で、外面は体部が指押さえ、裾部がナデ、内面は体部が絞り、裾部はナデ。色調は黄褐色から灰黄褐色。102・103は97～100と異なり、口縁部が短く、体部との屈曲がなだらかで、器壁が厚いものである。両者とも、外面は口縁部ナデ、体部から裾部板ナデ、内面は口縁部から体部はナデ、裾部は削り状擦過。色調は黄褐色を呈する。

杯（104～107）　104は丸底で、手捏ね土器のように指押さえで、色調は外面黄茶褐色、内面暗褐色。105は尖り底状の底部で、外面板ナデ、内面ナデ。色調は内外黄褐色を呈する。106は外面上半横ナデ、下半削り状擦過後ナデ、内面は摩滅しているがナデ。色調は外面橙色、内面は黄橙色を呈する。107は外面上半ナデ、下半削り状擦過。内面ナデ。色調は内外黄橙色を呈する。

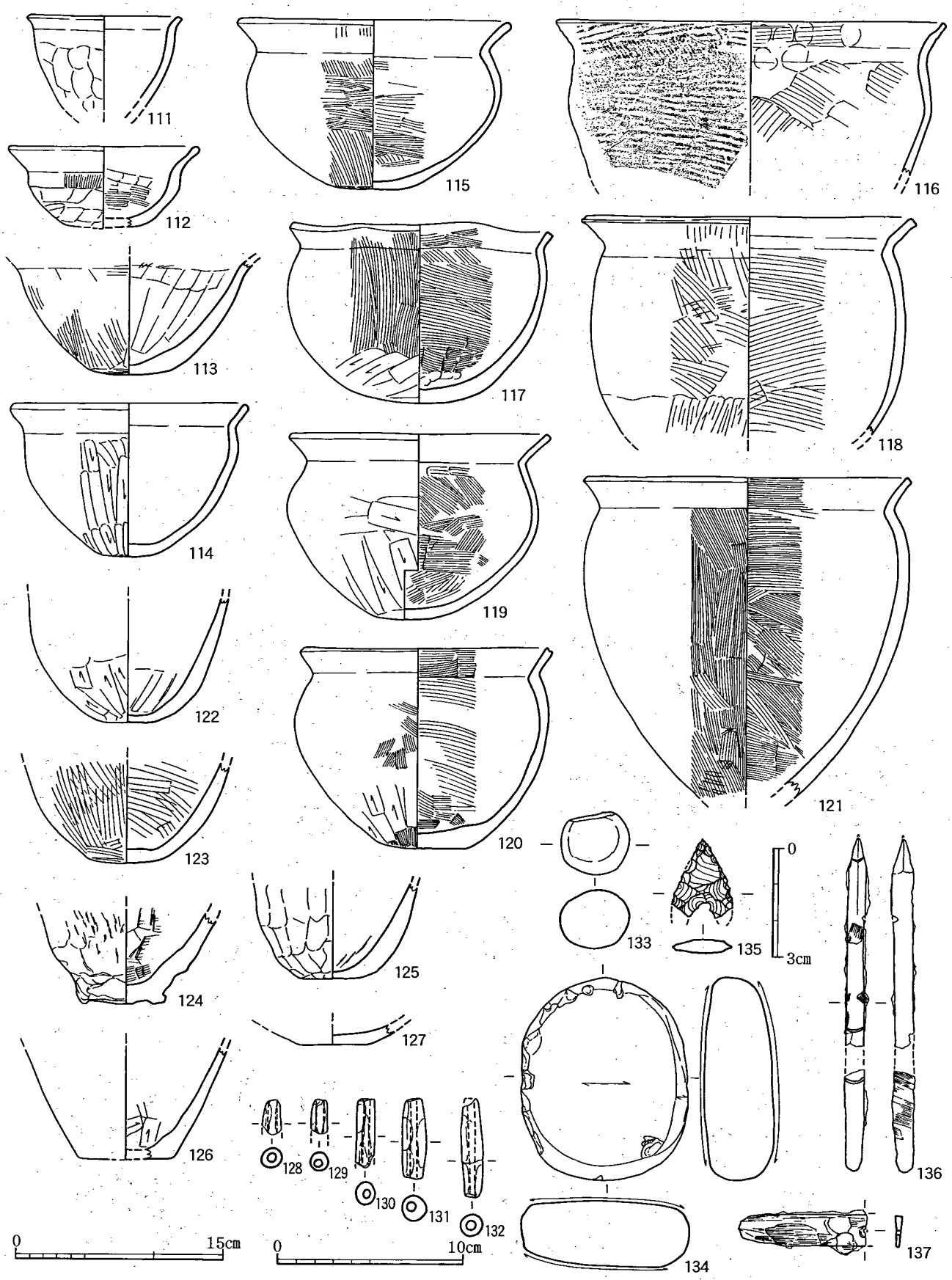
鉢（108～121）　108～110は無頸鉢で、108は内外ナデ、外面は黄褐色から灰黒褐色。109はほぼ完形で平底。外面は削り状擦過。内面は板ナデ。内外黒色を呈する。110は内外丁寧なハケで、外面は全体に煤けているため、灰黄橙色から黒色内面黒灰茶褐色を呈する。111～121は有頸鉢で、111・116・118・121は身の深いもので、甕としてもよいタイプで、111～115・117・119・120は一般的なものである。111は小型で、外面削り状擦過、内面ナデ、内外黒褐色を呈する。112は小型で、外面削り状擦過、内面ハケ・ナデ。内外橙褐色を呈する。113は丸みのある平底で、内外削り状擦過。内外灰黄褐色を呈する。114はほぼ完形で、底部はやや丸みのある平底。外面削り状擦過、内面板ナデ。内面は器面の剥落目立つ。内外茶褐色を呈する。115はほぼ完形で、底部はやや丸みのある平底。内外ハケで、内面は器面の剥落目立つ。内外白黄橙色。116は頸部の屈曲がほとんど無いタイプで、外面は口縁部までタタキのち、一部ハケ、内面は目の太いハケ。内外灰黄褐色で、煮沸使用したような変色や器面の剥落が無い。117はほぼ完形で、丸味のある平底。外面は上半がハケ、下半は削り状擦過。内面はハケ。内外灰黄褐色。118は外面上半がタタキ後ハケ、下半は削り状擦過。内面は目の太いハケ。内外白灰色から黒色。119はほぼ完形で、底部は丸みのある平底。外面は中位から下は削り状擦過。内面はハケ。内外白黄褐色。120はほぼ完形で、底部は平底。色調は内外淡褐色を呈する。121は最大径を口縁部に持つ甕にも近い。内外丁寧なハケで、均整なつくりである。色調は内外黄橙色で、煮沸使用の痕跡なし。

底部（122～127）　122～126は小型の甕か鉢の底部であろう。122は小さな平底で、外面削り状擦過、内面板ナデで、器面の剥落がある。外面は、上位は茶褐色だが、下位は2次焼成を受けて赤化している。内面は黄褐色に、コゲがあるので、煮沸使用されている。123は丸みをもつ平底で、内外目の太いハケ。色調は外面淡黄褐色から灰褐色で、赤化は無い。内面はやや黒ずんで黒褐色を呈する。124はつくりの悪い不整形な平底で、外面は粗いナデ、内面は板ナデ。色調は外面黒茶橙色、内面は黒色。125は丸みのある平底で、上半が板ナデ、下半は削り状擦過。内面は板ナデ。色調は外面茶褐色だが2次焼成を受けて赤化している。内面はやや黒ずんで暗茶褐色を呈すので、煮沸使用している可能性が高い。126は平底で外面ナデ、内面ナデで、内底は削り状擦過。色調は外面灰黄褐色から暗灰茶色、内面黒灰色。赤化しておらず、煮沸使用については不明。127は上げ底状の平底で、胴部への傾きから球胴か扁平胴になるので、長頸か無頸壺の底部であろう。つくりは丁寧で、胎土も良い。内外ナデ、色調は外面黄橙色、内面は黒色だが、これは焼成不良によるものと思われる。

土錘（128～132）　128～130は欠損、131・132はほぼ完形である。128は本来の最大径まで残っていないが現状で径1.1cm、重量1.1ｇ。129は最大径1.0cm、重量1.3ｇ。130は最大径1.2cm、重量4.1g。131は最大径1.5cm、重量6.4g。132は最大径1.2cm、重量5.0g。これらは弥生時代の遺物とは限らず、混入品の可能性もある。

石弾（133）　133は円礫だが、擦った痕跡が見られるので石弾の可能性がある。径3.7cmの球形で、重量は53.2g、石材は砂岩。

摩石（134）　完形品で、上下2面を使用している。側面は平滑に仕上げている。長軸10.8cm、短



第24図　2号溝出土遺物実測図（127～133・135・136は1/3、135は2/3、他は1/4）

軸8.9cm。厚さ4.1cm。重量は581.2g、石材はデイサイト。

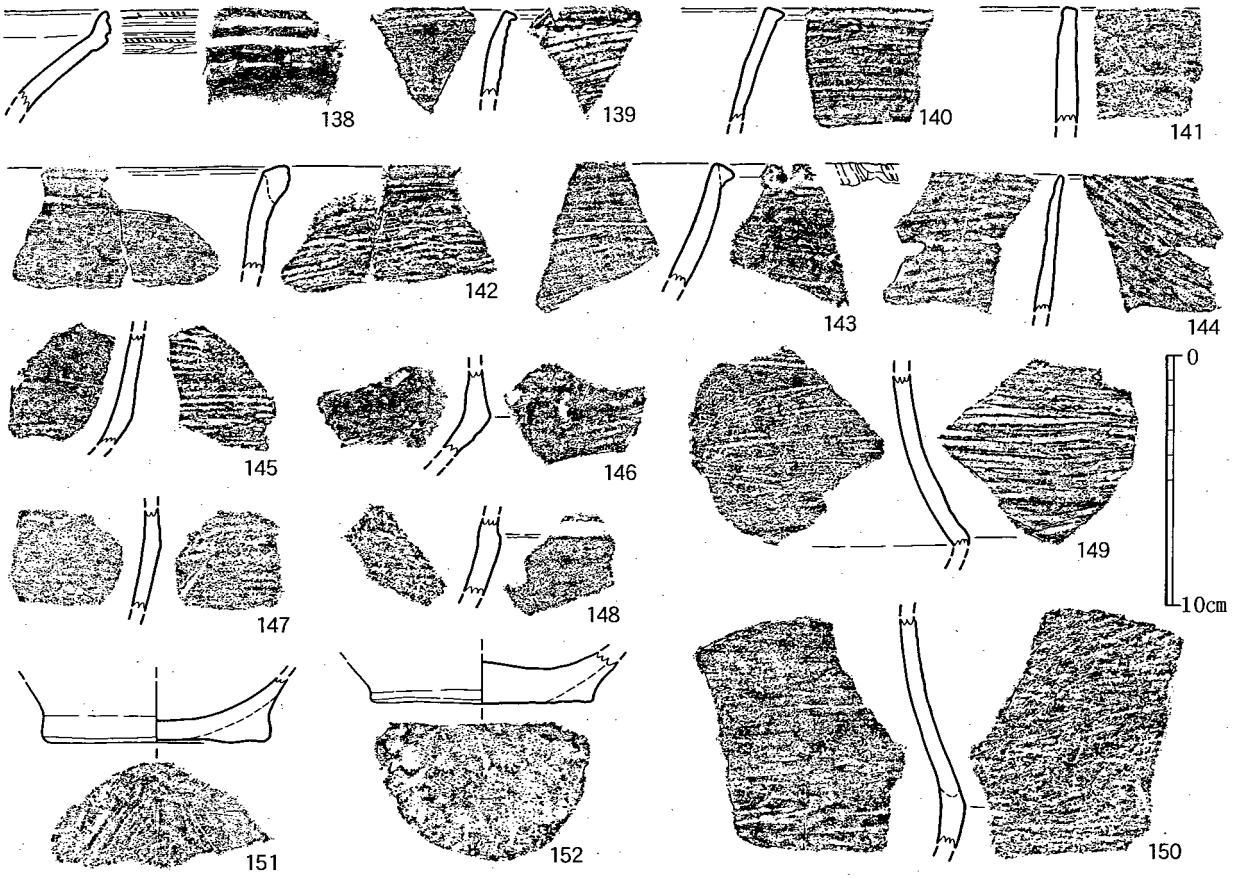
打製石鏃（135）　基部を欠損している。側縁が薄く、刃は鋭利である。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ4mm。重量は0.8gを測る。石材は姫島産黒曜石である。

鉈（136）　一部欠損しているため、全長は不明。断面は弧状で、下部に樹皮が巻かれている。現存長で、16.3cm、幅1.1cmを測る。

刀子（137）　柄部で、木質と目釘孔がある。中世の混入品の可能性が高い。現存長で、6.9cm、幅1.5cm、厚さ5mmを測る。

縄文土器（138～152）　溝に混入したものと思われる。138～144は深鉢の口縁部である。138は口縁が大きく外反する磨消縄文系の精製深鉢で、直立する口縁部外面に2本の沈線を巡らせ、その上下に不鮮明なRL縄文を施している。外面はヘラ磨き、内面はナデ。色調は内外にぶい暗褐色を呈する。139は内面擦過、外面斜位の二枚貝条痕の後、口唇部をナデて、平坦面を作っている。色調は内外漆黒色を呈する。140は外面横位の条痕、内面ナデ。色調は外面白黄褐色、内面黒色を呈する。141は外面横位の条痕、内面ナデ。色調は外面暗黒灰色、内面暗灰褐色を呈す。142は口縁を肥厚させて断面方形を呈し、外面横位の二枚貝条痕、内面ナデ。色調は外面暗褐色、内面黒灰色を呈す。143は口縁に断面三角形の刻目凸帯を貼り付けている。内外横位の条痕。色調は外面にぶい暗褐色、内面黒灰色。144は外面斜位の二枚貝条痕、内面横位の二枚貝条痕。色調は内面暗黄褐色、外面暗黒褐色を呈する。

145～147・149～150は深鉢甕の胴部片、148はマリ形土器の口縁部である。145は屈曲の弱いもので、外面横位の二枚貝条痕、内面ナデ。色調は外面にぶい暗灰褐色、内面黒灰色。146は屈曲が顕著で、小片のため傾きは不確実である。内外摩滅のため調整は不明。色調は外面にぶい黄褐色、内面黒灰色を呈する。147は小さな屈曲に見える稜線は条痕のためにできたものであろう。外面は横



第25図　2号溝出土縄文土器実測図（1/3）

位の二枚貝条痕、内面ナデだが内外とも摩滅している。色調は外面暗褐色、内面黒灰色。148は口唇部が欠損しており、口縁下の湾曲が残っている。外面は横位の条痕後ナデて、丹塗りしている。内面はナデ。149は肩部に最大径のあるものと思われ、口縁の外反は小さい。外面は横位の二枚貝条痕、内面は横位の条痕。色調は外面黄褐色、内面淡黒色。150は胴部が屈曲し、口縁部が大きく外反するタイプで、外面は横位の条痕、内面はヘラ磨き。色調は内外暗褐色を呈する。

151・152は深鉢の底部で、151は外面ナデで、内面は条痕。外底部は条痕後ナデ。色調は外面橙褐色、内面灰黒色。152は外底に回転台に使用したと思われる植物繊維か網代の圧痕があるが、ナデているため明らかでない。調整は内外ナデ。色調は内外黄白色で変色は見られない。

3号溝（図版18-2、付図1）

調査区南部の平坦面に位置し、東西方向に走り、東は斜面部で切れ、西は1号溝に切られている。幅は最も広い所で1.62m、最深部で20.4cmを計る。浅い幅広な溝で、立ち上がりも緩やかである。床面はほぼ平坦である。遺物はほとんどなく、混入品も多いので、1号溝に切られていることから弥生後期後葉以前としかいえない。

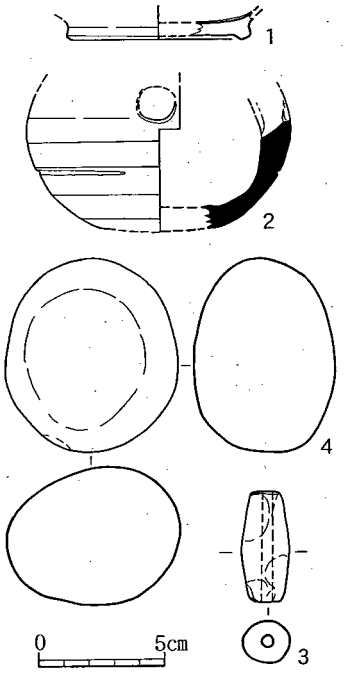
出土遺物（図版25-3、第26図）

白磁皿（1）　底部で、断面方形のやや外に開く低い高台がつく。釉は乳白色。胎は灰白色。

須恵器甕（2）　体部下半で、外面は回転ヘラ削り、内面はナデで、穿孔が見られる。最大径は復元で10.6cm。

土錘（3）　大型で、上下の平坦面の縁が丸みを帯びており、他の土錘とは形態を異にしている。最大径19cm、重量13.9g。

石弾（4）　硬質砂岩の円礫だが、石弾の可能性を残す。長軸7.7cm、短軸6.8cm、厚さ5.6cm。重量は387.4g。



第26図　3号溝出土遺物実測図（1/3）

3．中世の遺構と遺物

1．掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版2-3、第27図）

中央調査区の平坦面東端に位置する。柱が1つないが1×2間であろう。梁行2.88m、桁3.72mで、柱間スパンは梁行は均一だが、桁行は大きく異なる。柱痕は残っていなかった。主軸はN-21°-Eで、柱穴は径18～28cm、深さは8～18cmである。建物の内部には床柱になりそうなものもあるが確実でない。図化できる遺物が少なく、遺物から時期を特定できないが、おそらく2・3号掘立柱建物跡と同時期であろう。

出土遺物（第30図1）

弥生後期甕（1）　柱3から出土した底部片で、外面は粗いナデ、内面はナデ。色調は内外黄褐色。

2号掘立柱建物跡（図版3-1、第27図）

中央調査区の平坦面東端に位置する。規模は2×4間で、梁行7.13m、桁行4.07mで、柱間スパンは梁行は20cm、桁行は17.5cmで、柱痕は残っていなかった。主軸はN-31°-Eで、柱穴は梁行の径が小さく、桁行が16～26cmであるのに対し、12～14cmしかない。深さはやはり梁行の柱穴が浅

く、桁行が６～21cmであるのに対し、３cmしかない。図化できる遺物が少ないが、時期は12～13c代であろう。

出土遺物（第30図2）

土師器皿（２）　柱９から出土した口縁部片で、内外摩滅しており、調整は不明瞭。内外黄橙色を呈する

３号掘立柱建物跡（図版3-2、第28図）

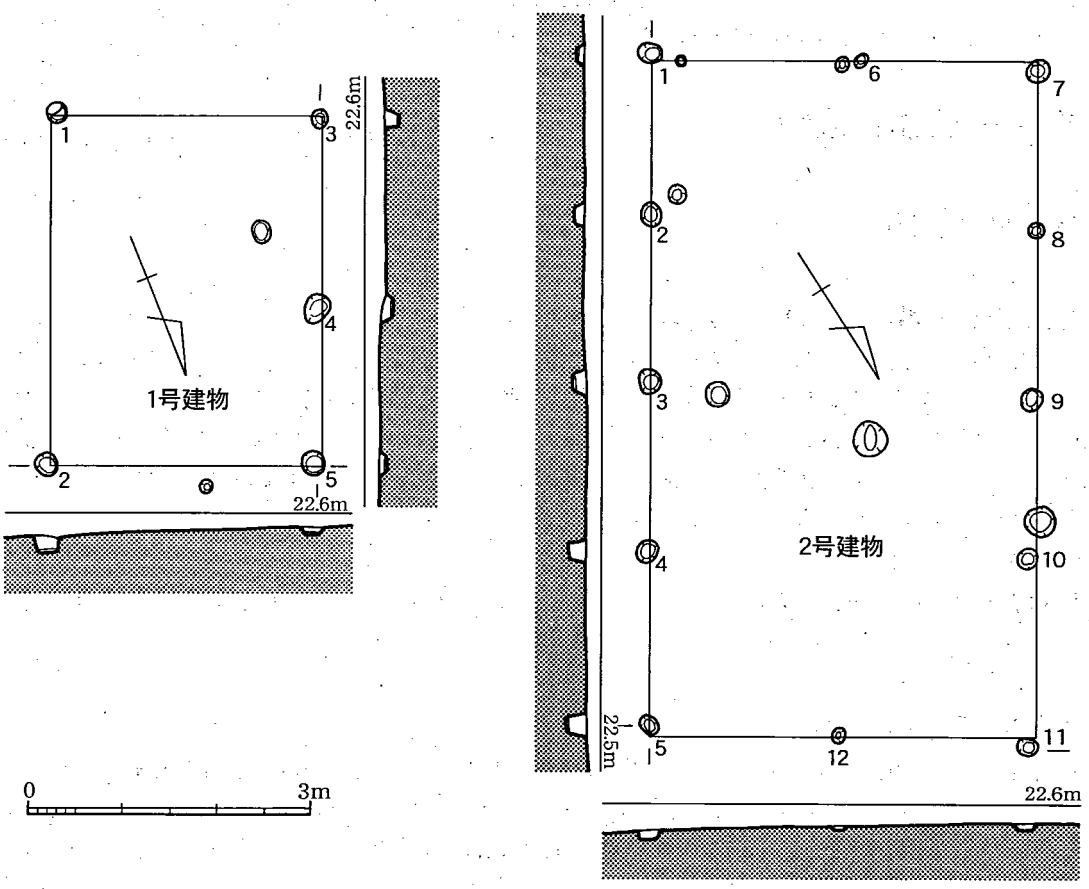
中央調査区の平坦面東端に位置し、規模は１×３間で、梁桁につく２面庇であろう。梁行6.84m、桁行4.46mで、庇を含めると、梁行7.13m、桁行5.38m。主軸はN-31°-Eで、柱穴は庇と建物の間に大きな差はなく、径21～36cmで、深さは50～70cmである。建物の内部には床柱になりそうなものもあるが確実でない。柱間スパンは不均一で、2.1～2.6mで、庇は梁行はほぼ同じだが、梁行のスパンが短く、1.00～1.25mである。柱痕は残っていなかった。図化できる遺物が少ないが、時期は12～13c代であろう。

出土遺物（第30図3～7）

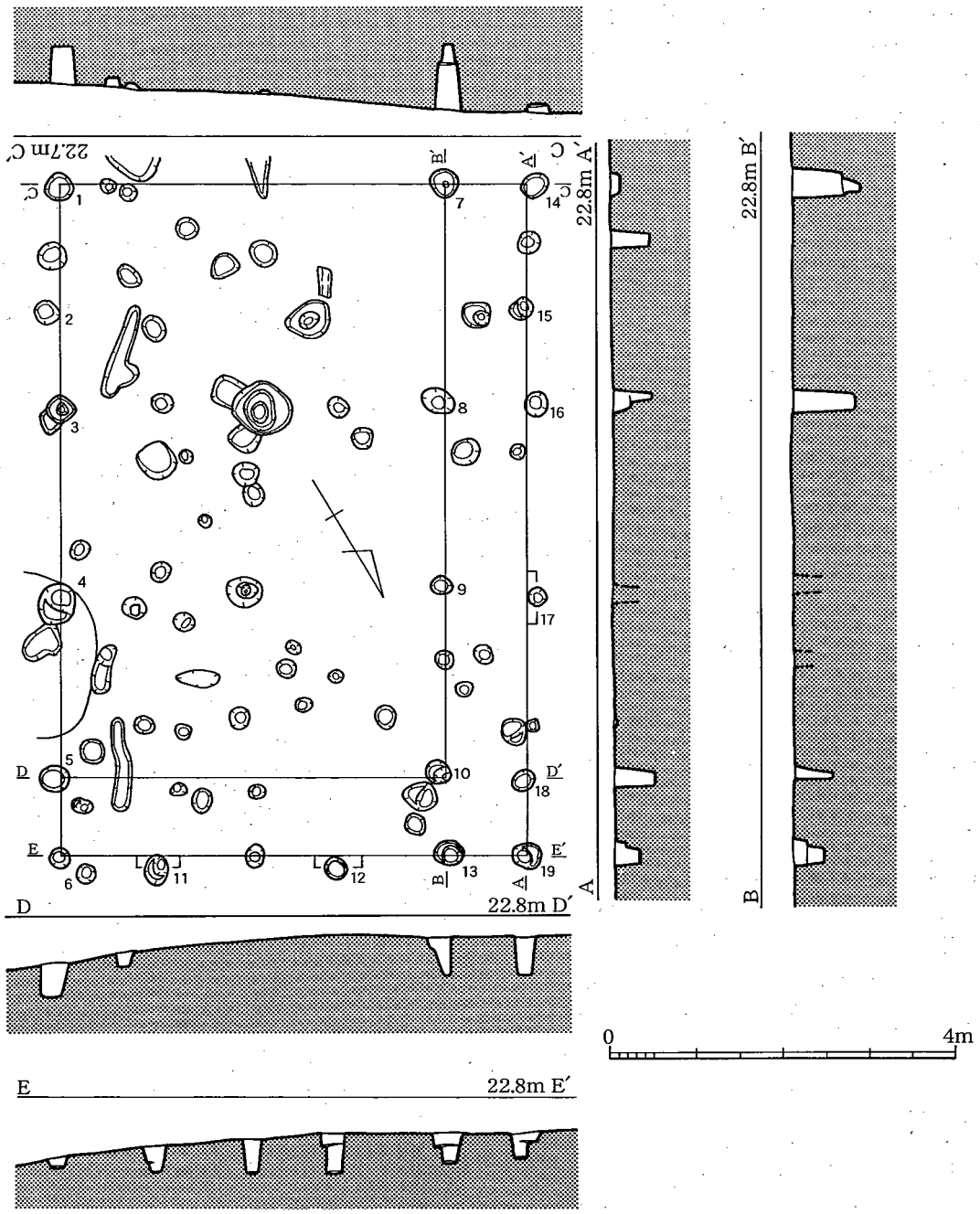
土師器皿（3・6）　柱１から出土した底部片で、外面横ナデ、底部は糸切り、内面ナデ。復元底径8.4cm。内外黄橙色を呈する。柱７から出土した底部片で、体部への立ち上がりから、身の深いものと思われる。内外摩滅しているので、調整は観察不能。色調は黄橙色を呈する。

瓦器椀（5・7）　柱４から出土したの底部片で、断面三角形の低い高台がつく。内外摩滅で、調整は観察できない。色調は内外灰黒色。７は柱７から出土した口縁部片で、内外摩滅しており調整は観察不能。色調は内外とも口縁部は灰黒色、口縁下は灰白色を呈する。

青磁皿（４）　柱３から出土した同安窯系の底部片で、復元底径6.0cm。内底にヘラと櫛書きの花文が見られる。釉は黄味を帯びた緑色で、胎は灰色。



第27図　１・２号掘立柱建物跡実測図（1/80）



第28図　3号掘立柱建物跡実測図（1/80）

4号掘立柱建物跡（図版3-3、第29図）

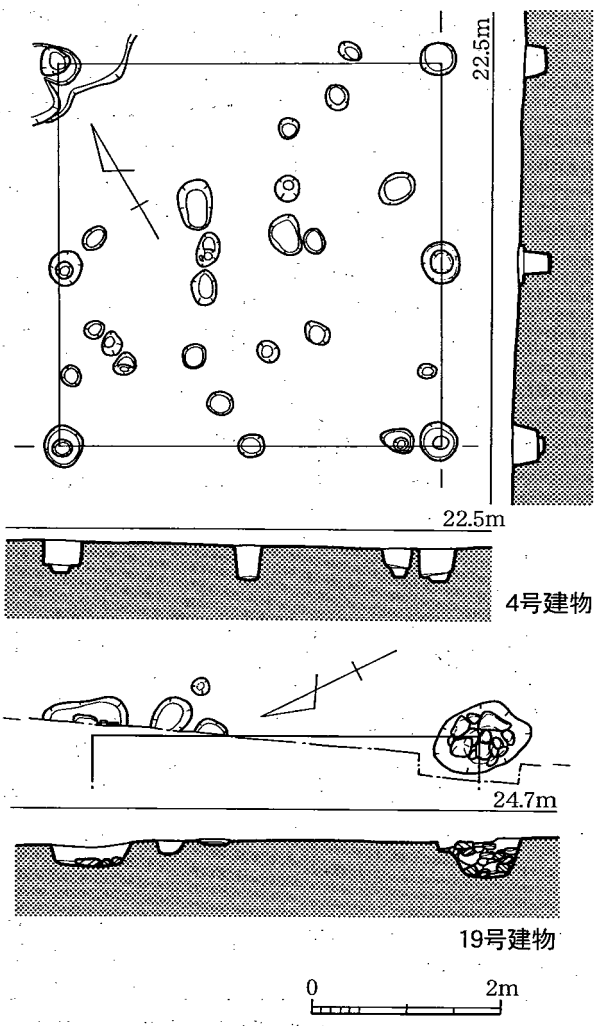
北調査区の北の平坦面の端に位置する。1×2間で、梁行4.10m、桁行4.10mである。柱間スパンは梁行は4.10m、桁行は2.05mで、柱痕は残っていなかった。主軸はN-31°-Eで、柱穴は径36～41cmでほぼ均一である。深さは20～33cmでこれもほぼ等しい。建物の内部にはピットがあるが、床柱になりそうなものはない。図化できる遺物がなく、時期は特定できないが、周囲の中世遺構とセットをなすと思われる。

19号掘立柱建物跡（図版4-1、第29図）

北調査区の北の平坦面の端に位置し、西側調査区外に主体がある。梁行1間で、桁行は不明であ

る。主軸はN-58°-Wで、柱穴は平面方形の掘形で、長さ98cm、幅70cmで、深さは20～41cmである。掘形内には、小石が入っており、中央が開いていることから、柱痕は残っていなかったものの、柱の周りに石混じりの裏込めを入れて固めたものと思われる。

図化できる遺物がなく、時期は特定できないが、周囲の中世遺構とセットをなすと思われる。



第29図　4・19号掘立柱建物跡実測図（1/80）

2．土坑

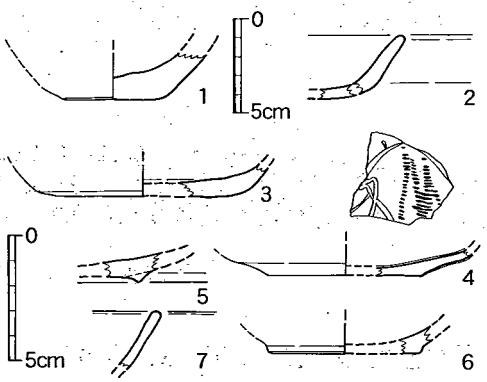
1号土坑（第31図）

中央調査区南西端の平坦面に位置し、調査区外に南半分がかかっているため、全容が不明だが、細長い平面プランを呈すると思われる。小礫が充填されているが、人為的なものかもしれない。長軸2.40m、幅は調査した範囲で93cm、深さは44cmの浅い土坑である。遺物はわずかで、図化できる土器は須恵器甕のみだが、これは混入品と思われる。時期は特定できない。

出土遺物（図版31-2、第35図1・2）

須恵器甕（1）　口縁部片で、二重口縁を呈し、内外ナデ、復元口径12.4cmを測る。

水晶製切子玉（2）　上下6面の面取りがあり、穿孔は一方向である。長さ1.5cm、幅1.1cm、重量2.1g。古墳時代のものと中世のどちらに属するものか不明。



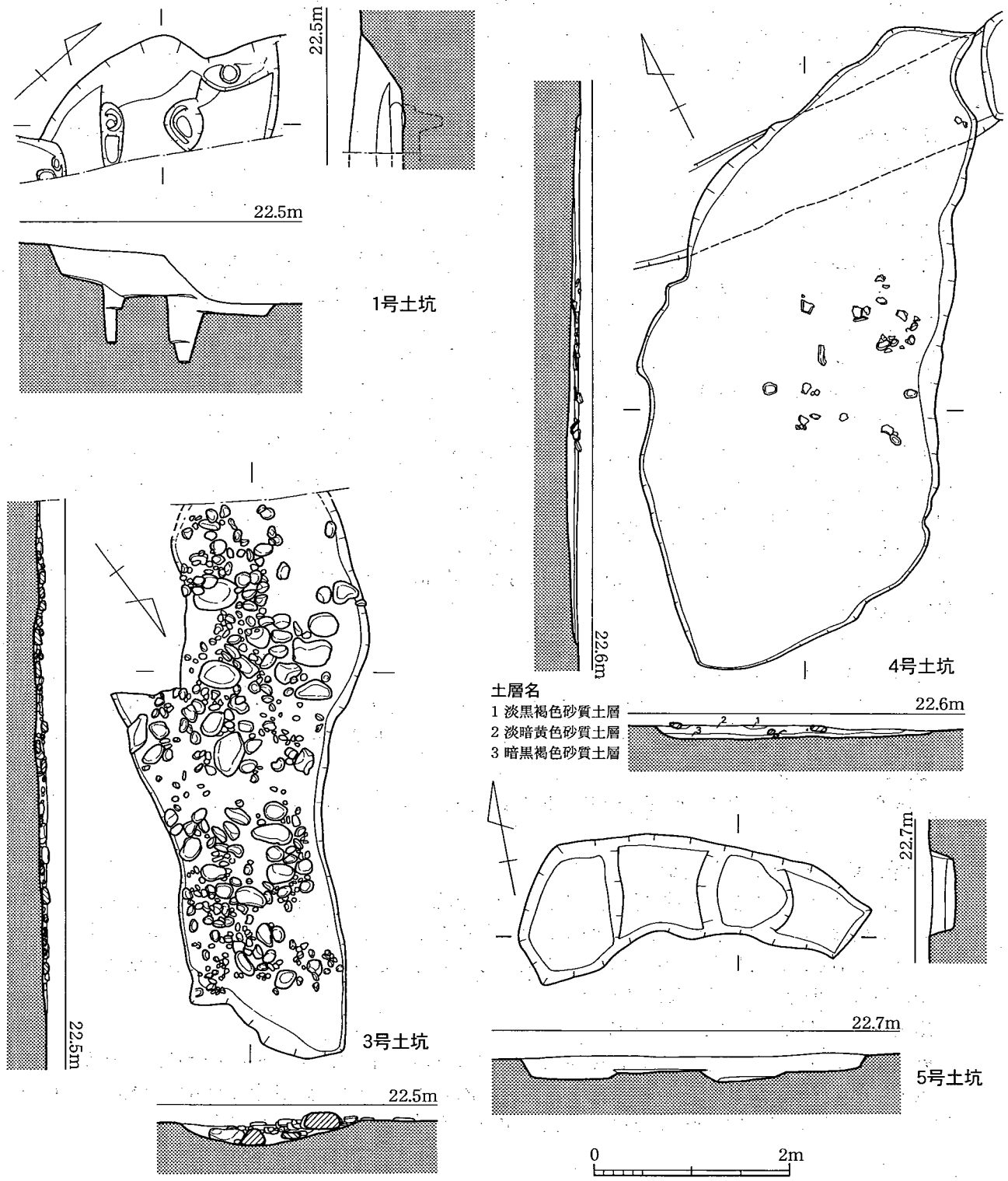
第30図　1～3号掘立柱建物跡出土土器実測図（1は1/4、他は1/3）

3号土坑（図版4-2、第31図）

中央調査区南端の平坦面に位置する土坑で、調査区外に伸びるため全容は明らかでない。調査した部分で、長さ5.78m、幅2.66mと大きいが、深さは20cmと浅く、底面には中央部分に人頭大の円礫があり、その周囲に小礫が充填されている。暗渠が崩壊したものかもしれないが、自然地形の可能性もある。図化できる遺物がないため、時期は不明だが、1号石列と関係する可能性もある。

4号土坑（図版4-3･4、第31図）

中央調査区南西端の平坦面に位置し、平面プランは不整形で、長軸6.93m、短軸3.10mで、深さは11cmと浅く、底面はほぼ平坦であるが、東側が若干深い。遺物は遺構の東半分に集中しており、埋土上位から円礫とともに出土したものが多く、流れ込みと思われる。出土遺物から、12c後半に比定される。



第31図　1・3～5号土坑実測図（1/60）

出土遺物（図版31-2、第35図3～14）

土師器皿（3）　底部片で、底径は11.2cmで、器壁が厚い。底部は摩滅しているが糸切り、内面は煤が付着する。

青磁椀（4）　龍泉窯系の底部片で、やや外に張り出す断面方形の低い高台がつく。胴部内面には片切彫りの花文がある。高台径7.2cm。

黒色土器椀（5）　底部片で、断面三角形の小さな高台がつく。外面は削り状のナデ、内面は磨き。

縄文土器（6）　口唇部はナデで平坦で、その外縁に刻み目がある。内外横位の条痕、内外にぶい黄灰色を呈する。

複合口縁壺（7）　口縁部片で、復元口径16.4cm。口唇部は平坦面を持ち、内外横ナデ、色調は内外黄橙色で、変色なし。

弥生後期甕（8・12）　口縁部片で、口唇部は、内側がやや尖っている。外面は口縁部横ナデ、肩部縦ハケ、内面は口縁部ナデ、肩部斜位のハケ。色調は外面黄白色、内面にぶい黄褐色。12は肩部片で、外面にタタキ、内面ナデ。色調は外面橙色、内面黄色から黄橙色を呈する。

弥生土器底部（9・10）　9は弥生後期の小型壺か杯であろう。底部は丸みを持つ平底。内外ナデで、色調は内外黄白色。10は弥生後期の壺の底部で、ややふくらみのある平底をなし、復元底径6.4cmを測る。内外ハケで、色調は外面にぶい黄褐色、内面にぶい茶褐色を呈する。

土師器甕（11）　口縁部片で、口縁部と頸部の間の屈曲は緩やかで、稜を持たない。復元口径は15.0cm、外面口縁部はナデ、肩部はハケ、内面は口縁部ナデ、肩部は削り。色調は外面赤褐色を基調としているが、内面は灰白色に変色しており、煮沸使用したためであろう。

打製石斧（13・14）　13は基部で、断面は基部が厚く、下部に向かって薄くなる。横断面はやや反っている。結晶片岩製で、重量76.1g。14は刃部と基部が欠損している。石材は凝灰岩製で、重量は136.5gを測る。

5号土坑（図版5-1、第31図）

中央区中央部西端の平坦面に位置する不整形の浅い土坑である。長軸3.62m、短軸1.36mで、深さは26cmと浅く、底面は西側が若干深い。遺物は少ない。時期は12c後半から13c後半。

出土遺物（第35図15）

瓦器椀（15）　底部片で、断面逆台形の小さな高台がつく。内外摩滅で調整は観察不能。

6号土坑（図版5-2、第32図）

中央調査区南東端の斜面上位に位置する長方形の土坑で、長軸2.00m。短軸9.0mで、深さ22cmと浅い。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりも急であることから、土壙墓の可能性がある。中央部分にピットがあるが、切り合い関係は不明。出土遺物で図化できるのは弥生後期から古墳前期のものだが、混入の可能性が高い。時期は不明。

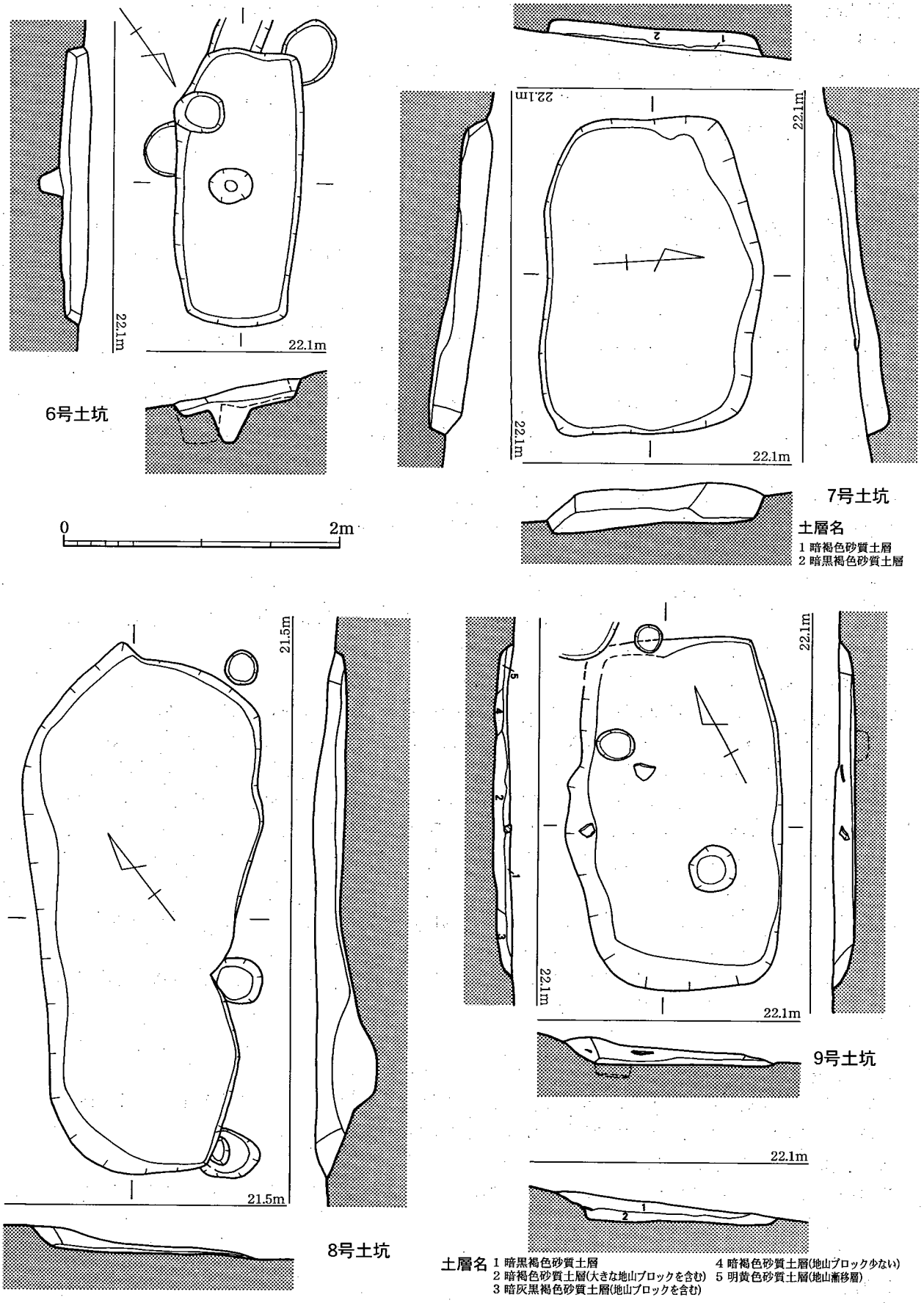
出土遺物（図版32-1、第35図16・17）

弥生後期甕（16・17）　16は小型甕の口縁部片で、復元口径11.0cm。内外ナデで、色調は外面暗黄褐色だが口縁部が煤付着のため変色している。内面は黄褐色。煮沸使用したものであろう。17は口縁部で、復元口径19.0cm。外面ナデ、内面摩滅。色調は内外黄褐色を呈する。

7号土坑（図版5-3、第32図）

中央調査区南東端の斜面上位に位置する方形の土坑で、長軸2.27m。短軸1.55mで、深さ25cm。床面はほぼ平坦で、墓の可能性を残す。時期は12c～13c代であろう。

出土遺物（図版32-1、第35図18～21）



第32図　6～9号土坑実測図（1/40）

土師器皿（18）　完形品で、口径12.8cm、器高4.0cm、底径5.3cm。底部は糸切りだが、丸みを持つ。

瓦器椀（19）　口縁部片で、内外灰黒色。

ガラス小玉（20）　20はガラス小玉で、径2mm、厚さ1.7mm、重量0.18gで、色調は紺。

弥生後期壺（21）　胴部片で、断面三角形の小さな刻み目突帯がつく。内外ハケ。色調は外面橙色、内面白橙色を呈す。

８号土坑（図版5-4、第32図）

中央調査区南東端の斜面上位に位置する長方形の土坑で、長軸3.84m。短軸1.70mで、深さ15cmとわずかしかない。床面は南東隅が深いが、これは他の遺構との切り合いであろう。時期は12c～13c代と思われる。

出土遺物（図版32-1、第35図22～26）

土師器小皿（22）　復元口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.4cm。内外ナデ、底部はヘラ切り。色調は内外黄褐色。

瓦器椀（23）　口縁部で内外摩滅のため調整は観察できない。色調は口縁部黒色、その下灰白色。

瓦質土鍋（24）　口縁部か。断面長方形の突帯がつく。内外ナデ。色調は内外茶褐色で、外面の口縁下に煤が付着している。

弥生土器の口縁部（25）　内外橙色を呈する。復元口径は13.0cm。

土錘（26）　半欠で、中央部が膨らまないタイプで、径0.95cm。

９号土坑（図版6-1、第32図）

中央調査区南東端の斜面上位に位置する長方形の土坑で、長軸2.53m。短軸1.55mで、深さ15cmとわずかしかない。平面プランから土壙墓の可能性がある。時期は13c後半。

出土遺物（図版32-1、第35図27～36）

土師器皿（27～31）　27は底部から体部への立ち上がりが急で器高2.9cmを測る。28は口縁部で、復元口径11.0cm。外面はナデ、内面は板ナデ。色調は内外黄白色。29は底部片で、底径10.4cm。30は底部片で、底径7.0cm。色調は黄白色。31は底部片で、底径4.6cm。底部は糸切り。色調は黄白色。

瓦器椀（32～34）　口縁部で、32は大きく内湾するもので、色調は内外口縁部黒色、その下は灰白色。33は口縁端部がやや外反する。内外摩滅しているが、上半はナデ、下半は削り状のナデ。色調は口縁部黒色、その下は灰白色、下半は灰色。34は復元口径15.0cm。色調は口縁部が黒色、その下は灰白色、下半は灰色。

備前焼（35）　甕の胴部片で、外面は外面ナデ、内面は指ナデと押さえ。色調は内外茶褐色で、肩部は自然釉がかかっており、灰白色を呈する。

白磁（36）　玉縁口縁椀の口縁部で、玉縁は太く、やや下垂している。復元口径17.0cm。釉は乳白色。胎は灰白色。

10号土坑（図版6-2、第33図）

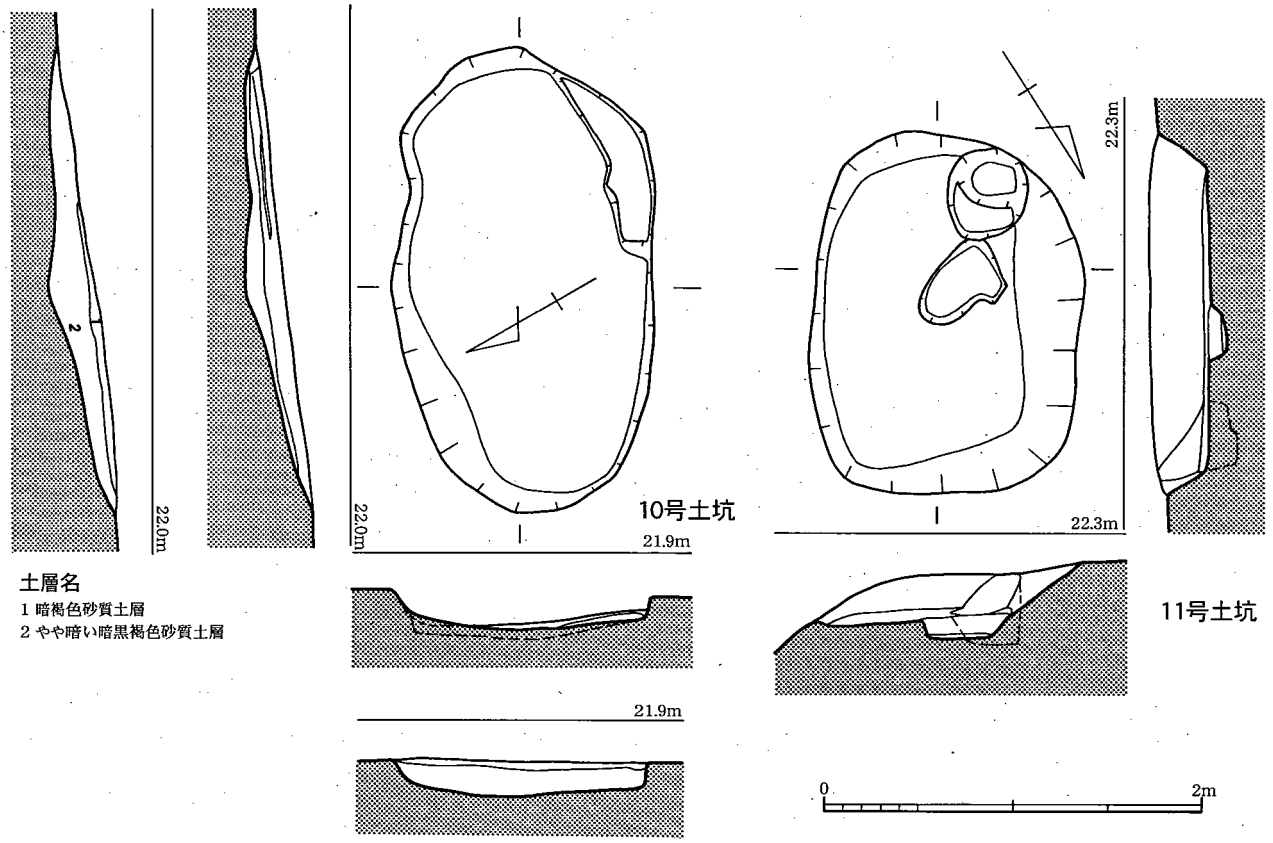
中央調査区南東端の斜面上位に位置する長方形の土坑で、長軸2.45m。短軸1.36mで、深さ18cmと浅い。平面プランから土壙墓の可能性がある。時期は14c前半。

出土遺物（図版32-1　、第35図37）

瓦器椀（37）　完形に復元でき、平底で、高台はない。色調は口縁部が黒色、その下は灰白色。外面口縁から中位はナデ、下位は押さえ。内面はナデ。

11号土坑（第33図）

中央調査区南東の斜面上位に位置する略方形の土坑で、長軸1.94m。短軸1.42mで、床面はほぼ



第33図　10・11号土坑実測図（1/40）

平坦で最も深い所で深さ32cmと浅い。平面プランから土壙墓の可能性がある。時期は12c～13c代と思われる。

出土遺物（図版32-1、第35図38）

瓦器椀（38）　口縁部片で、色調は口縁部が黒色、その下は灰白色を呈する。

12号土坑（第34図）

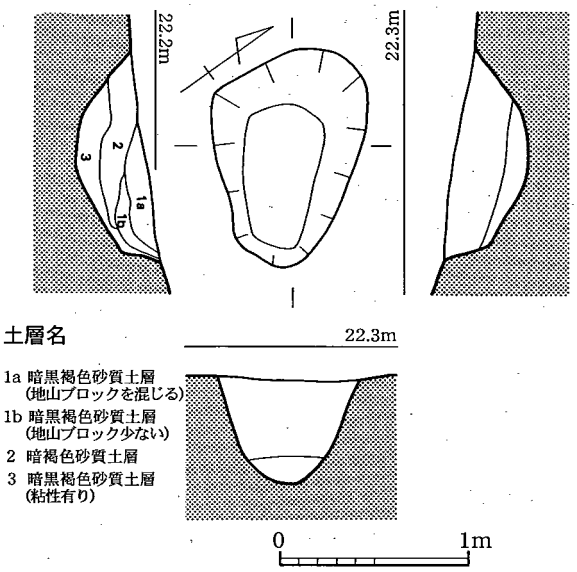
中央調査区南東端の斜面上位に位置する不整形の土坑で、長軸1.13m。短軸0.84mで、床面は皿状で最も深い所で深さ60cmと浅い。遺物が少ないが、時期は12c～13c代と思われる。

出土遺物（図版32-1、第35図39～41）

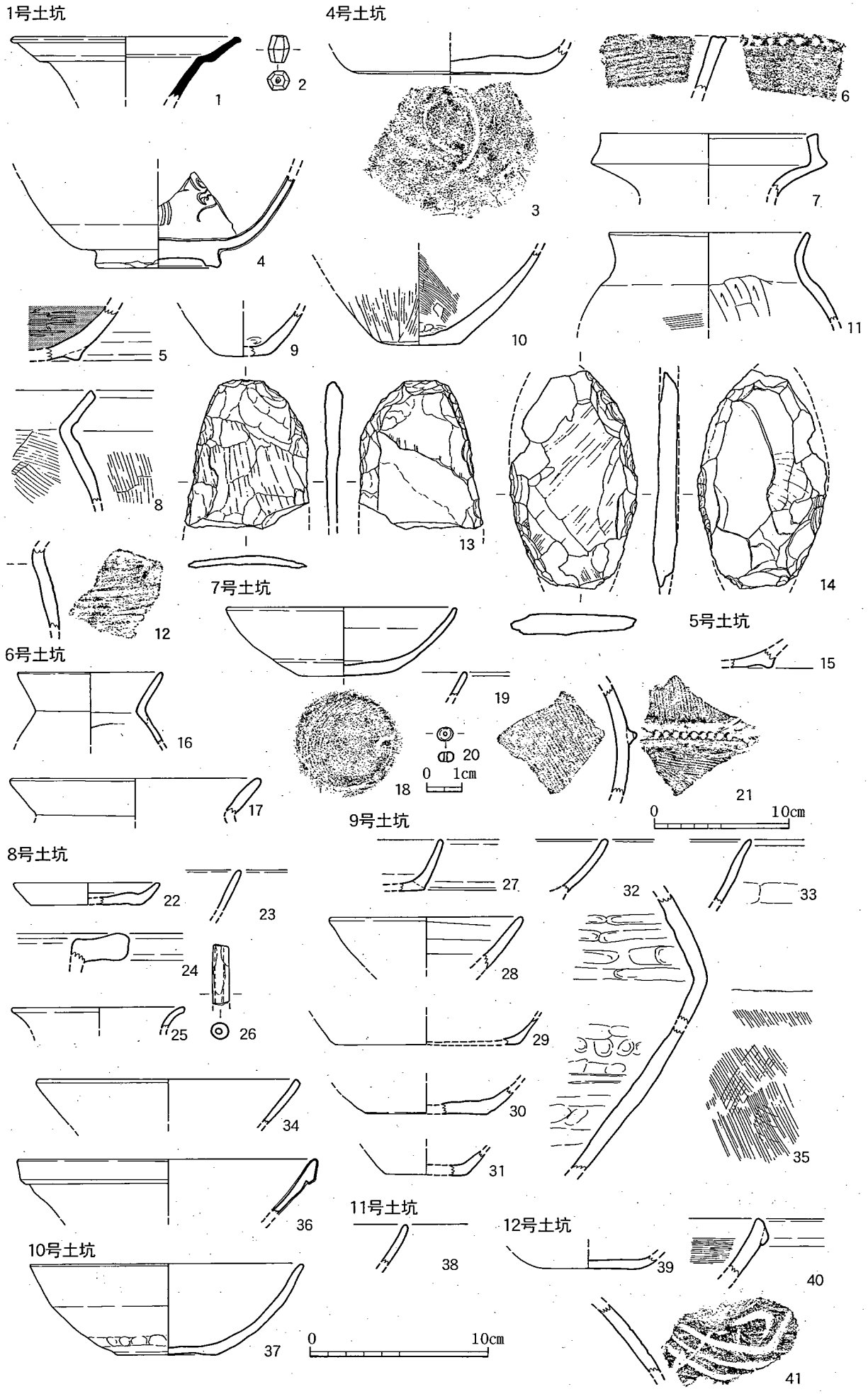
土師器皿（39）　底部片で、底部は糸切りと思われる。復元底径は5.2cm。内外摩滅のため調整は観察できない。色調は内外黄橙色を呈する。

瓦質鉢（40）　口縁部片で、口縁部の外面を肥厚させて玉縁をなす。調整は、外面は粗いナデ、内面はハケ。

縄文土器深鉢（41）　肩部片で、肩が張る器形であろう。片部に沈線の渦巻き文がある。胎土は良く、色調は内面黄橙色、外面黄灰褐色を呈する。



第34図　12号土坑実測図（1/40）



第35図　1・4～12号土坑出土遺物実測図（7～12・16・17・21・25・35は1/4、20は2/3、他は1/3）

3．廃棄土坑

1号廃棄土坑（図版8-1・2、第36図）

中央調査区南東部の斜面下位に位置する。平面形は長靴形だが、遺物が縁に集中し、検出面からやや浮いているものもあることから、本来のプランではない。長軸3.55m、短軸2.60mあり、深さは深い所で36cmである。出土遺物には斜面の下に流れたものあり、斜面下位のピットから出土したものと接合する。

炭化米は、団子状に固まって出土しており、拡がりを持たないばかりか、これ以外にはまったく出土していないので、団子状のものが廃棄されたと考えられる。また、炭化米は籾柄が無いので、強飯の握り飯の一部なのではないだろうか。遺構の時期は出土遺物から13c代であろう。

出土遺物（図版32-2、第37図1～16）

土師器皿（1～4）　1は内外ナデ、底部は糸切り。復元口径6.5cm、器高1.1cm、底径4.4cm。内外黄橙色。2は内外ナデ、底部は糸切りで板状圧痕あり。口径7.3cm、器高0.9cm、底部6.0cm。色調は灰黒色を呈する。3は内外ナデ、底部は糸切り、口径7.6cm、器高1.1cm、底径6.0cm。色調は内外黄白色を呈す。4は内外ナデ、底部は糸切り。口径7.2cm、器高0.9cm、底径5.6cm。色調は黄橙色だが、2次焼成を受けた破片は赤変している。

土師器椀（5）　復元口径6.3cm。内外黄白色を呈する。

黒色土器椀（6）　6は完形に復元できる黒色土器の椀で外に張り出す高台がつく。口径24.8cm、器高6.0cm、高台径7.4cm。外面はナデ、内面は器面がほとんど剥落しており、観察できない。外面にぶい黄橙色、内面は器面の残っているところで黒色。

瓦器椀（7～9）　7は完形に復元でき、断面台形のわずかな高台がつく。外面は上半がナデ、下半は押さえ。内面は板ナデ。口径14.8cm、器高5.6cm、高台径5.0cm。色調は内外口縁部黒色、口縁下灰白色、体部は黒灰色。8は完形に復元でき、断面低台形のわずかな高台がつく。外面上半はナデ、下半は押さえ。外底はヘラ切り。口径15.6cm、器高5.8cm、高台径5.2cm。色調は内外口縁部黒色、口縁下灰白色、体部は黒灰色。9は瓦器椀の底部片で、高台はわずかながらついている。復元高台径は3.2cm。内外ナデ。

瓦質土鍋（10・11）　10は口縁部片で、口縁部は鋤先口縁状で、内外ナデ、色調は内外黄橙色。11は瓦質の片口鉢で、口縁は肥厚して玉縁状をなす。外面は斜位のハケ、内面は横ハケで、擦り目はなく、こね鉢であろう。色調は内外青灰白色。

須恵器甕（12）　口縁部で、肩部に最大径をもち、口縁は大きく外反し、口唇部は肥厚して丸みを持っている。内外剥落が多く、肩部の外面は格子目のタタキが入る。色調は内外黄橙色。

白磁椀（13）　内面は櫛書き文が入る。口径7.5cm、器高3.8cm、高台径6.2cm。釉は乳白色で、外面は下位まででそれ以下は露胎。内面は全面かかっている。高台は断面長台形を呈し、外面の露胎部分はヘラ削り。

青磁椀（14）　底部片で、高台は断面方形で、高台径6.6cm。高台の畳み付けと外底はヘラ削りで露胎となっている。見込みに片切彫りの花文が入る。釉は淡緑色で、胎は灰色。龍泉窯系である。

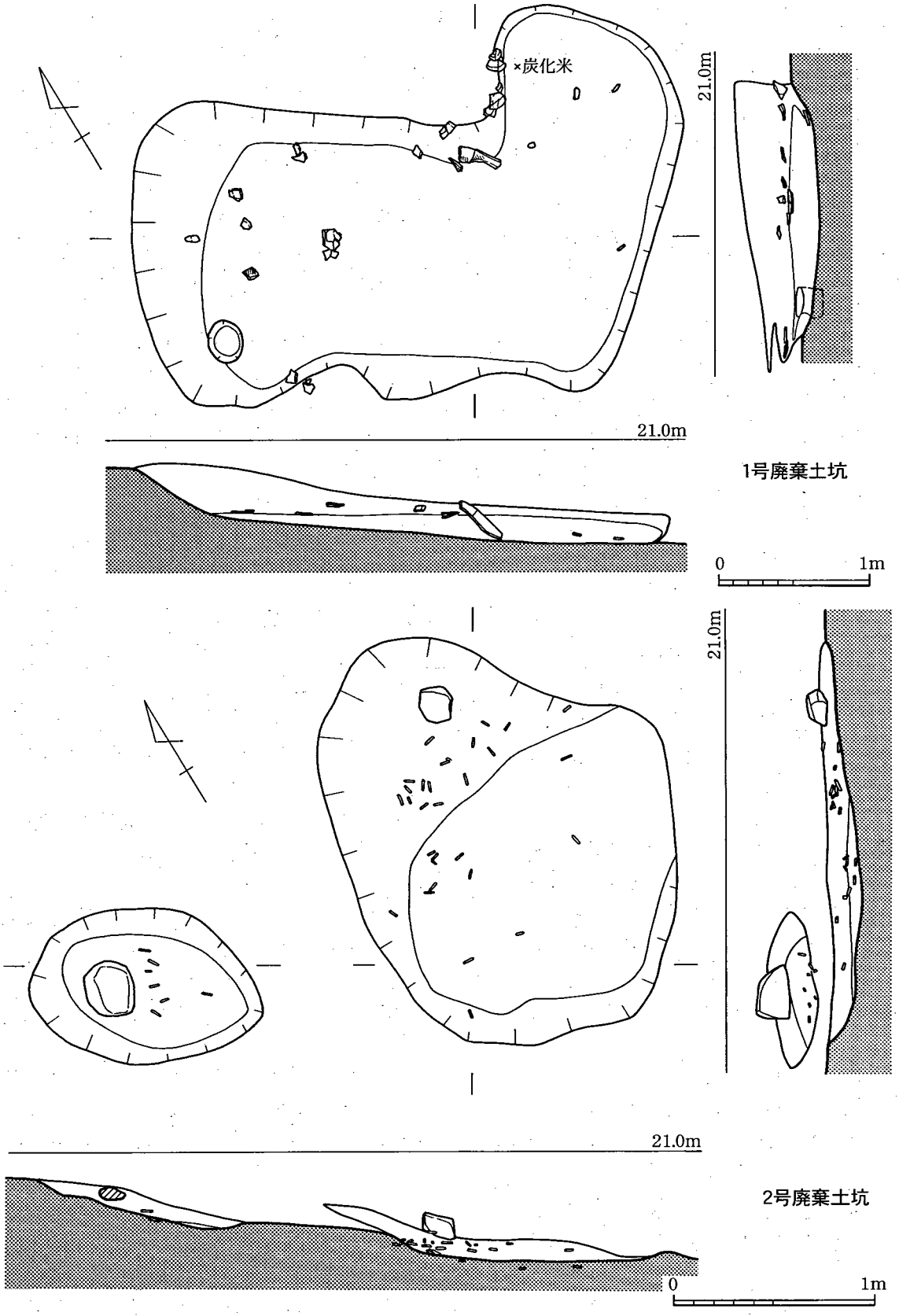
土錘（15・16）　15は長さ4.4cm、径1.4cm、重量6.9ｇ。16は長さ5.5cm、径1.2cm、重量6.1ｇ。

2号廃棄土坑（図版8-3、第36図、表1）

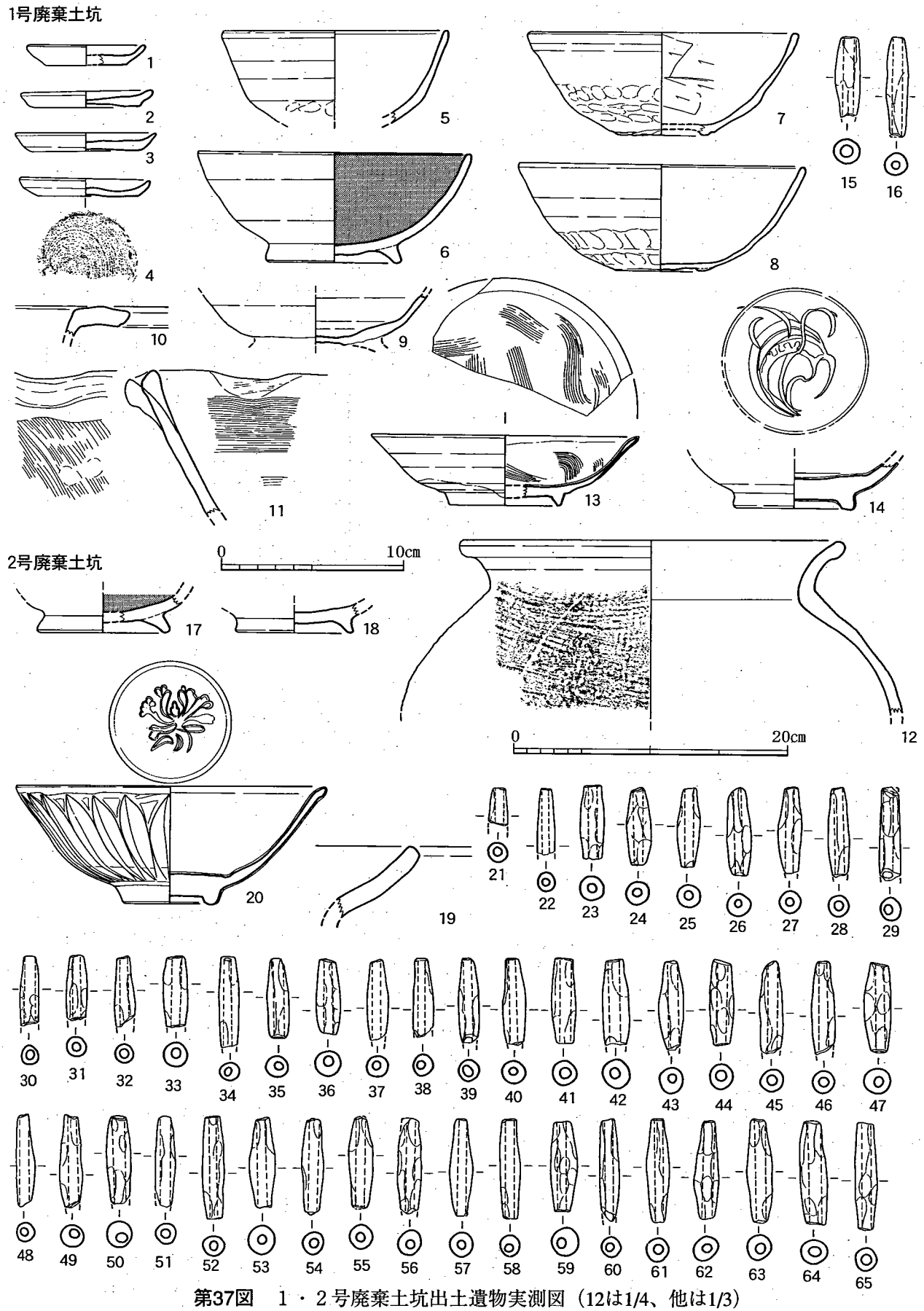
調査区南東部の斜面下位に位置する。当初2つの土坑と考えていたが、土錘のみが廃棄されたまったく同様の遺構であり、両者の中間からも土錘が出土していることから、土坑の底面の深い部分が残ったもので、本来1つのものであったと思われる。そのため、本来のプランは不明である。深さは最も深い所で16cmしかない。遺構の時期は出土遺物から13c代である。

出土遺物（図版32-2・33-1、第37図17～65）

黒色土器（17）　底部片で、外に張り出す高台がつく。高台径は7.2cm。色調は内外灰黒色。



第36図　1・2号廃棄土坑実測図（1/30・1/40）



第37図　1・2号廃棄土坑出土遺物実測図（12は1/4、他は1/3）

瓦器椀（18）　底部片で、外に張り出し細長い逆三角形の高台がつく。内外は灰黒色を呈する。

瓦質土鍋（19）　口縁部で、内外ナデ。外面口縁下黄白色、その下はにぶい暗褐色。

青磁椀（20）　ほぼ完形に復元できる龍泉窯系の鎬蓮弁文椀で、低い断面方形の高台がつく。釉は淡緑色、胎は灰白色。ピット131出土の破片と接合する。

土錘（21～65、表１）　欠損しているものも多いが、形態・サイズ・重量ともにほぼ均一で、完形であれば、程度に個体差があるが中央がやや膨らむもののみで、長さ4.7～8.8cm、径1.0～1.5cm。重量は6.0ｇ～10.1gにおさまる。

表１　２号廃棄土坑出土の土錘計測表　（単位cm、ｇ）

番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量
21	(1.9)	1.1	(2.0)	33	(3.8)	1.5	(6.6)	45	(4.3)	1.3	(6.1)	57	5.3	1.4	5.7
22	(3.6)	1.1	(3.1)	34	(5.0)	1.2	(4.9)	46	(5.1)	1.3	(6.1)	58	(5.5)	1.3	(6.1)
23	4.0	1.3	6.5	35	4.3	1.3	4.5	47	4.9	1.5	9.1	59	4.9	1.5	10.1
24	4.2	1.4	5.2	36	4.1	1.3	6.3	48	5.1	1.1	4.4	60	5.5	1.1	5.3
25	4.4	1.3	4.9	37	(4.4)	1.2	(4.5)	49	(5.1)	1.3	(5.3)	61	5.6	1.3	5.5
26	4.7	1.2	6.0	38	(4.2)	1.1	(4.4)	50	(4.4)	4.8	(6.7)	62	5.4	1.4	6.4
27	(4.8)	1.3	(5.3)	39	(4.6)	1.2	(4.5)	51	(5.0)	1.2	(4.9)	63	5.7	1.4	8.8
28	4.7	1.3	4.7	40	(4.6)	1.3	(6.2)	52	5.6	1.3	6.6	64	5.7	1.5	8.5
29	(5.0)	1.2	(6.1)	41	4.7	1.3	6.6	53	4.9	1.5	8.7	65	5.7	1.3	7.9
30	(3.8)	0.9	(3.3)	42	(4.5)	1.4	(9.0)	54	5.2	1.3	5.2				
31	(3.5)	1.2	(3.6)	43	(4.9)	1.3	(5.8)	55	5.1	1.4	6.3				
32	(3.8)	1.2	(3.3)	44	4.8	1.3	(7.5)	56	(5.2)	1.3	(7.7)				

４．墓

１号墓（図版9-1～3、第38図）

中央調査区の南東端に位置し、大きな掘形と主体部で構成されている。掘形の平面プランは不整な略方形で、長軸4.06m、短軸1.84m。底面は凹凸が大きく、主体部の周辺は高いが、壁際が深くなっている。深さは深い所で42cm。掘形内部は埋土と裏込めがあり、人頭大の礫は埋土にも含まれるが、裏込め土直上で多く見られる。裏込めは20cmほどあり、主体部は掘形から掘込まれている。主体部の壁を構成する礫の上面も、掘形の床面から15cm程高い。

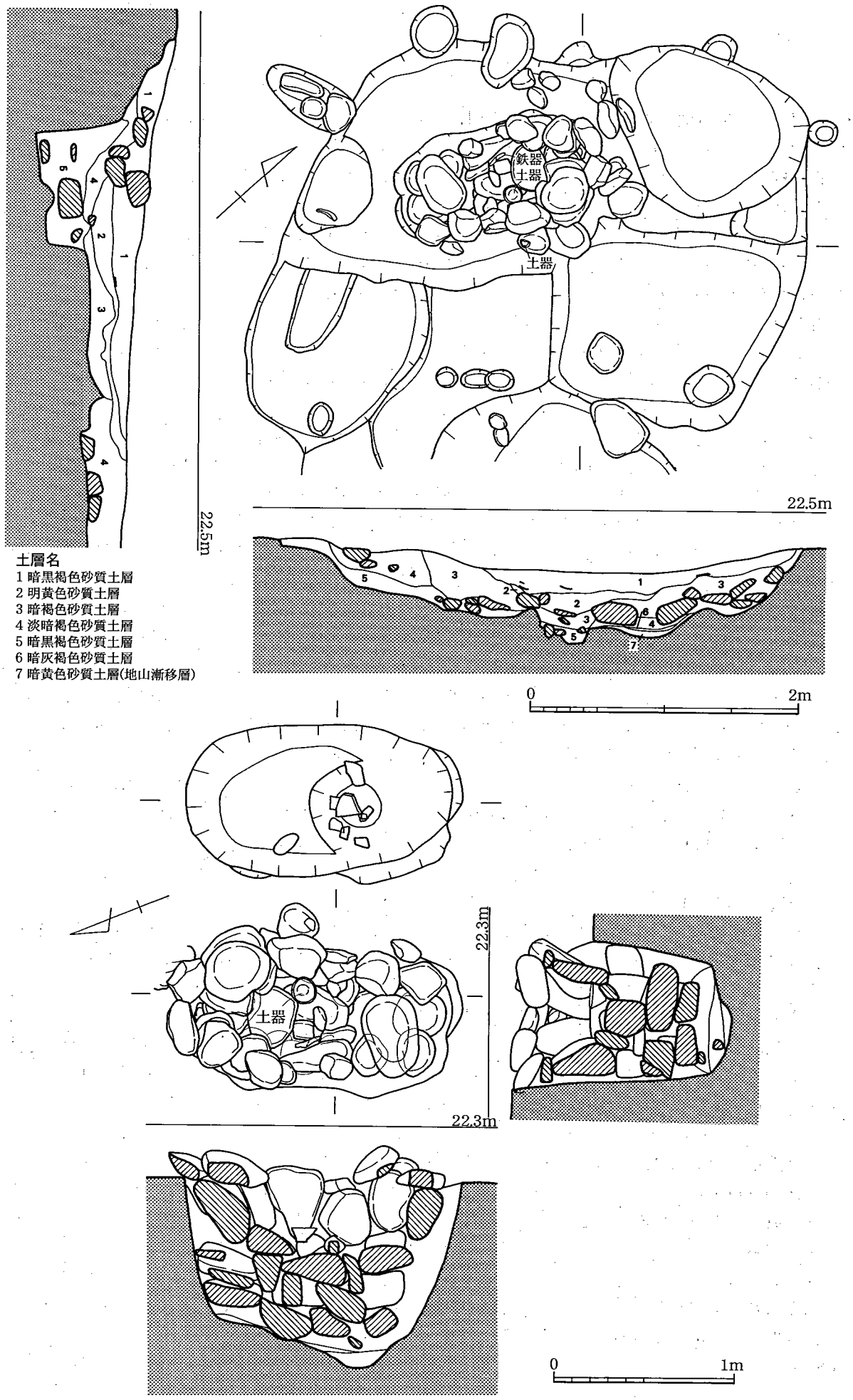
主体部は、偏平で大きな礫により壁と床を構成されており、掘形の床面から掘込まれている。掘形は長軸180cm、短軸82.5cm、深さは105cmである。石で構成された内法を復元すると、長軸約120cm、短軸約30cm、深さは約65cmである。主軸方向はN-21°30′-Eで、掘形の主軸とは異なる。主体部内には偏平な石が落ち込んでおり、蓋石であったと思われる。これらの蓋石は掘形に架けるだけの長さがない。このことから、土層からは痕跡が確認されなかったが、礫で構成された空間内部に木棺があり、蓋石は棺上に乗っていたものと思われる。この蓋石の上に完形の瓦器椀があるが、棺外の副葬品であろう。棺内の副葬品は刀子のみである。

つまり、１号墓の構築過程は以下のとおりである。まず、大型の掘形を設けて主体部の掘形を掘削した後、主体部内に裏込めを入れて壁と床に石を貼り、掘形の床面にも裏込めを入れて石を貼る。その後、遺体と刀子を納めた箱形木棺を入れて蓋石を乗せ、その上に瓦器椀を置き、土を被せたものと思われる。遺構の時期は出土遺物から13c後半～14c前半である。

出土遺物（図版33-2、第40図1～17）

１～4・14は埋土からの出土で、このうち１・４は副葬品と思われる。５～13・15～17は裏込め出土である。

瓦器椀（1・3）　完形品で、やや外に張り出す断面三角形の低い高台がつく。外面は口縁部から体部中位はナデ、下位は押さえ後弱い磨き。内面はナデの後磨き。底部は回転ナデ。口径15.6cm、器高5.6cm。３は完形に復元できる瓦器椀で、外面口縁部はナデ、体部中位は押さえ、下位は粗い



第38図　1号墓実測図（1/30・1/40）

板ナデで、内面はナデの後弱い磨き。内外口縁部黒灰色、口縁下灰白色、体部は灰色を呈す。復元口径16.0cm、器高5.9cm。

青磁椀（2）　体部片で、内面には片切彫りの花文がある。釉は淡緑色、胎は灰色を呈す。龍泉窯系であろう。

刀子（4）　先端は欠損しているのではなく丸みをもつ切先であろう。刃は両方にあり、両関で、鞘とは呑口で半月形を呈する。外面に木質が付着しており、鞘に納まった状態であったと思われる。長さは現存17.0cm、うち刃部は9.6cm、刃部の最大幅は3.1cm。

瓦質鼎（14）　脚部で、器面は摩滅しているが押さえの痕跡が全面に残り、断面は楕円形である。2次焼成を受けて赤化しており、灰褐色を呈する。

黒色土器椀（5）　底部で、外に張り出す高台がつく。外面は底部までナデ、内面は摩滅。色調は外面黄白色。内面漆黒色。復元高台径で8.0cmを測る。

土師器椀（6・7）　6は底部で、低い断面方形の高台がつく。内外摩滅しており、調整は観察できない。復元高台径7.0cm。色調は内外黄白色。7は土師器椀の底部で、断面が扁平な方形の低い高台がつく。高台の畳付けに回転台に使用したと思われる板状の痕跡が見られる。復元底径6.2cm。外面押さえ、内面は摩滅で観察できない。色調は外面黄白色、内面灰黒色。

瓦器椀（8～12）　8は完形に復元でき、底部は扁平な方形の低い高台がつく。口縁部から中位はナデ、下半は押さえ。内面は摩滅しているので観察できない。内外口縁部黒灰色、口縁下灰白色、体部は黒灰色を呈す。9は底部片で、外面は押さえ、内面は上位がナデ、下位は押さえ。底部もナデ後押さえ。10は底部で、外に張り出す断面台形の低い高台がつく。復元高台径6.4cm。外面上位はナデ後磨き、下位は押さえ後ナデ、一部磨き。内面はナデ後磨き。11は口縁部で、傾きは不正確。調整は内外ナデ、色調は外面口縁部が黒灰色、下位は灰白色。内面にぶい暗黒灰色。復元口径15.0cm。12は口縁部で、内外ナデ後粗い磨き。復元口径16.0cm。他のものと異なり、器壁が厚く、須恵質で、色調も内外青灰色である。

青磁椀（13）　龍泉窯系鎬蓮弁文椀の口縁部片である。蓮弁が大きい。釉は淡明緑色、胎は灰白色。

土錘（15～17）　15は半欠で、最大径1.1cm、重量3.9g。16は完形で最大径9.5cm、重量5.0g。17は完形で最大径9.0cm、重量4.4g。

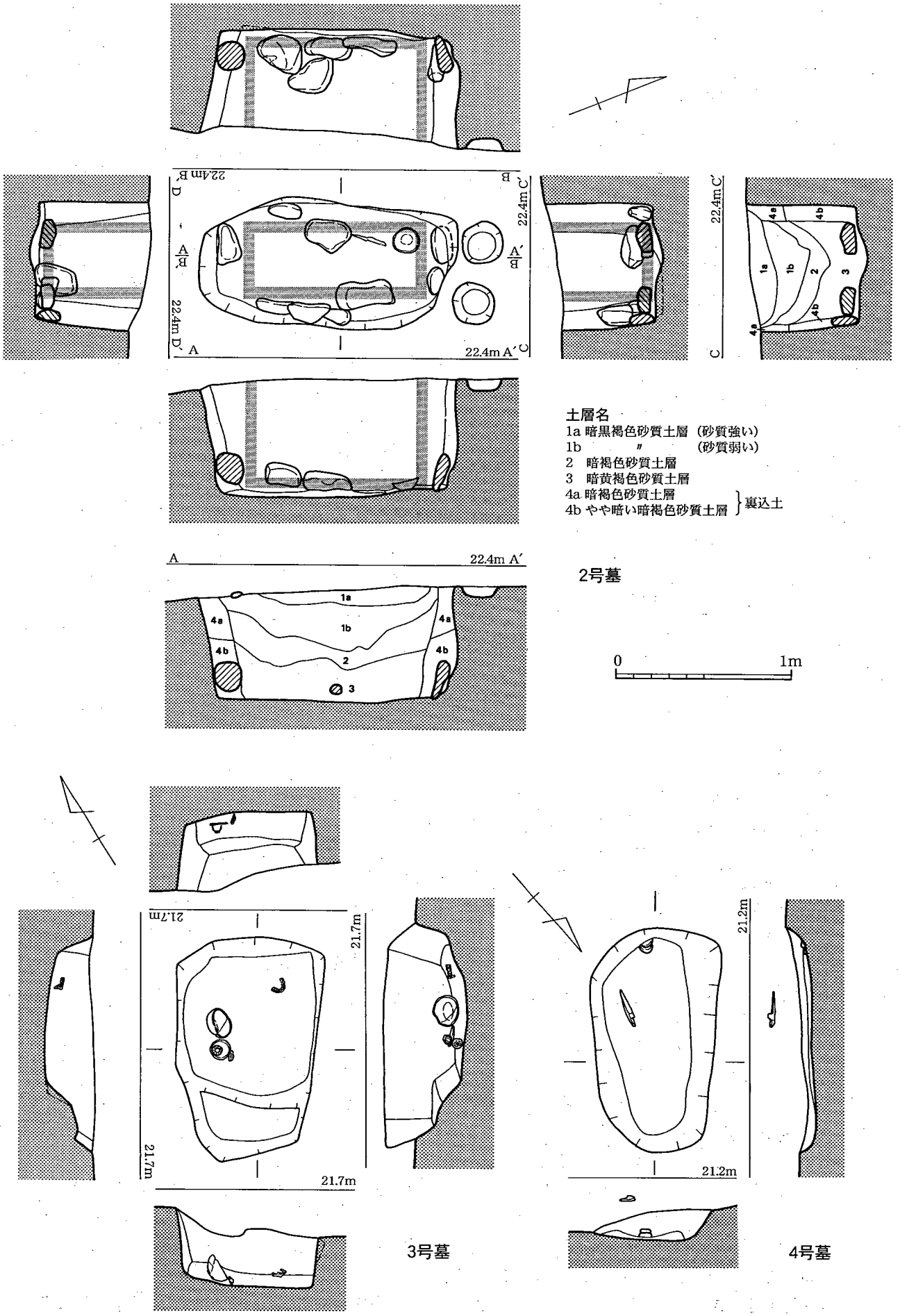
2号墓（図版10-1、第39図）

中央調査区の南東端に位置する。掘形の平面プランは不整な長方形で、長軸147cm、短軸72cm。床面はほぼ平坦で深さ69cm。主軸方向はN-22°-Eで内部には4面の壁の下部に偏平な石が立っている。これは裏込めを用いて壁に貼ったもので、床面にある石は倒れたものである。石は全面に貼ったものではなく、しかも1段のみで、1号墓のように床や壁を埋めたものではない。このことと、土層の状況を考え合わせると、木棺を納めた後に、掘形との隙間に石を入れて棺を固定したと考えられる。木棺は長さ103.5cm、幅45cmに復元される。棺の高さは、棺内に落ち込んだ土層が、裏込めの上に被っていないことから、遺構面まで達していたものと思われる。木棺内には刀子が副葬されていた。遺構の時期は出土遺物から13c後半～14c前半である。

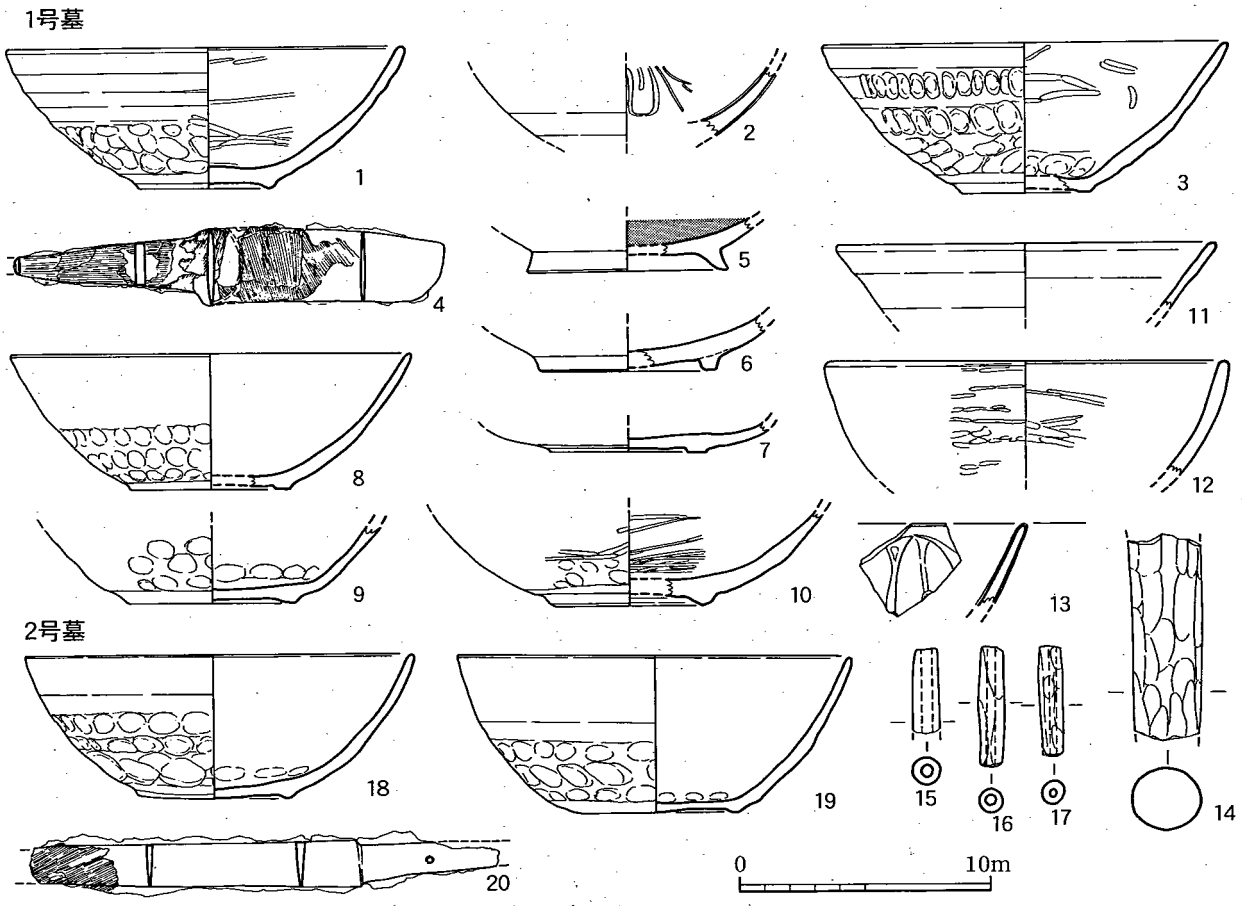
出土遺物（図版33-2、第40図18～20）

瓦器椀（18・19）　完形品で、18は口径15.5cm、器高5.7cm、19は口径15.6cm、器高6.3cmと異なるが、成形・調整・色調は同じで、わずかな高台がつき、外面上半はナデ、下半は押さえ。内面はナデ、内外ともに口縁部黒灰色、口縁下灰白色、体部灰色を呈する。同じ工人によって作られたものかもしれない。

刀子（20）　左右両端が欠損している。刃部に木質が残っており、鞘に入れられた状態と思われる。両関で、柄部には目釘孔が見られる。長さは現存18.8cm、うち刃部は13.3cm、刃部の最大幅は1.8cm。



第39図　2～4号墓実測図（1/30）



第40図　1・2号墓出土遺物実測図（1/3）

3号墓（図版10-2～4、第39図）

中央区中央南東部の斜面下位から検出された。長軸126cm、短軸84cmの方形で、深さは30cmしかなく上面には施設らしいものは確認できなかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南に1段のテラスを持つ。このテラスを除くと、直方体に近い墓坑となる。主軸方向はN-32°10′-Eである。

墓坑の中央から南西よりに鏡・青磁の合子・瓦器椀が副葬されている。鏡は床面よりやや浮いており、合子は倒立して蓋が落ち、瓦器椀は横倒しになっていることから、元位置から動いていることがわかる。しかしながら、それぞれの遺物が近接していることから、大きく動いていないと思われ、これらは木棺によって作られた空間内にあったものが埋没による土砂によって動いたと推定される。木棺は、墓坑床面に棺材の痕跡が認められず鉄釘がないことから、組み合わせか木釘を用いた箱形であろう。遺物はいずれも墓坑の中央部分に向かって傾いていることから、天井中央部分が崩落したと考えられる。

人骨は歯しか残っておらず中央から北東隅よりに出土した。墓坑が正方形に近く、長さが短いことから屈肢葬と思われる。出土遺物から、時期は12c後半であろう。

出土遺物（図版33-2・34、第42図1～5）

1は埋土出土、2～5は副葬品である。

土師器小皿（1）　口縁部がわずかに外反する。内外ナデ、底部はヘラ切り。色調は内外黄白色。復元口径9.6cm、器高1.7cm。

瓦器椀（2）　完形品で、底部ヘラ切り後、断面方形の小さな高台がつく。外面の上位はナデ、中位は磨き、下位は押さえが1列めぐる。内面は磨き。

青白磁合子（3・4）　蓋身で、釉は淡黄緑色、胎は灰白を呈する。3は蓋で、上面は中央に鎬蓮弁が13枚と中央に房子が10個つく。下面は露胎。4は身で、外面には鎬蓮弁が配されている。底部

は蛇の目高台で、口縁部内面・外底部・胴部下位は露胎である。

和鏡（5）　面径10.8cm、高さ0.6cm。縁の断面は方形、裏面は平坦で薄い。鏡の遺存状態が悪く、砂が吸着しているため鏡の表面が剥落するので錆が落ちない部分が多く、文様ははっきりしない。円形の紐座に半球形の紐がつき、紐孔は半月形で小さい。突帯が内区と外区を区画しており、内区には翼を広げた鶴と松葉文があり、外区には松葉文が等間隔にめぐっているものと思われる。鏡には裏表に厚さ1mm程の薄い板片が付着しており、板目の方向は裏表でわずかに異なっている。このことから、表裏は異なる板材であり、曲げ物の蓋板と底板が付着したものと思われる。また、この板片を除去すると、鏡面には繊維が付着していた。痕跡のみの部分が多いが、布自体が劣化してはいたが遺存していた。その布目の方向に異なっている部分が見られるがこれは布の合わせ目と思われる。裏面は錆が十分に落ちないこともあり、繊維は確認できなかったが、鏡は裏面を下にして、鏡面で布端を畳んだものと思われる。

4号墓（図版11-1、第39図）

中央調査区中央南東部の斜面下位から検出された。平面プランは長軸127.5cm、短軸73.5cmの長方形で、深さは18cmしかない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、主軸方向はN-41°-Eである。刀子は床面よりかなり浮いて出土しているが、副葬品と思われる。時期を特定できる遺物がないが、12c～13c代であろう。

出土遺物（図版33-2、第42図6・7）

刀子は副葬品だが、須恵器は混入品と思われる。

須恵器杯（6）　埋土出土の口縁部片で、復元口径18.4cm、色調は内外青灰色を呈する。

刀子（7）　副葬品であろう。ほぼ完形品である。関部は欠損しているが、両関と思われる。木質は柄部と刃部の両方に見られ、鞘に収まった状態であったと思われる。目釘孔は一つ見られる。長さは現存21.5cm、うち刃部は14.4cm、刃部の最大幅は2.1cm。

5号墓（図版11-2、第41図）

中央調査区の平坦面南東端部から検出された。6号墓のプランが不明確だが、切っているものと思われる平面プランは長軸202.5cm、短軸82.5cmの長方形で、深さは48cm。壁はほぼ垂直に立ち上がり、主軸方向はN-43°30′-Eである。墓坑内部には石が充填されているが、床面の中央は石は一列にほぼ同じ高さで並んでおり、北壁には3段に積んだ石があり、その他の辺も壁・床を構成していた石が倒れ込んだもの状態であった。おそらく床と壁に石を貼って、構成された空間に木棺を入れ、蓋石を被せたものであろう。石で囲まれた空間の大きさは復元できないが、おそらく長さ約90cm、幅約40cmであろう。

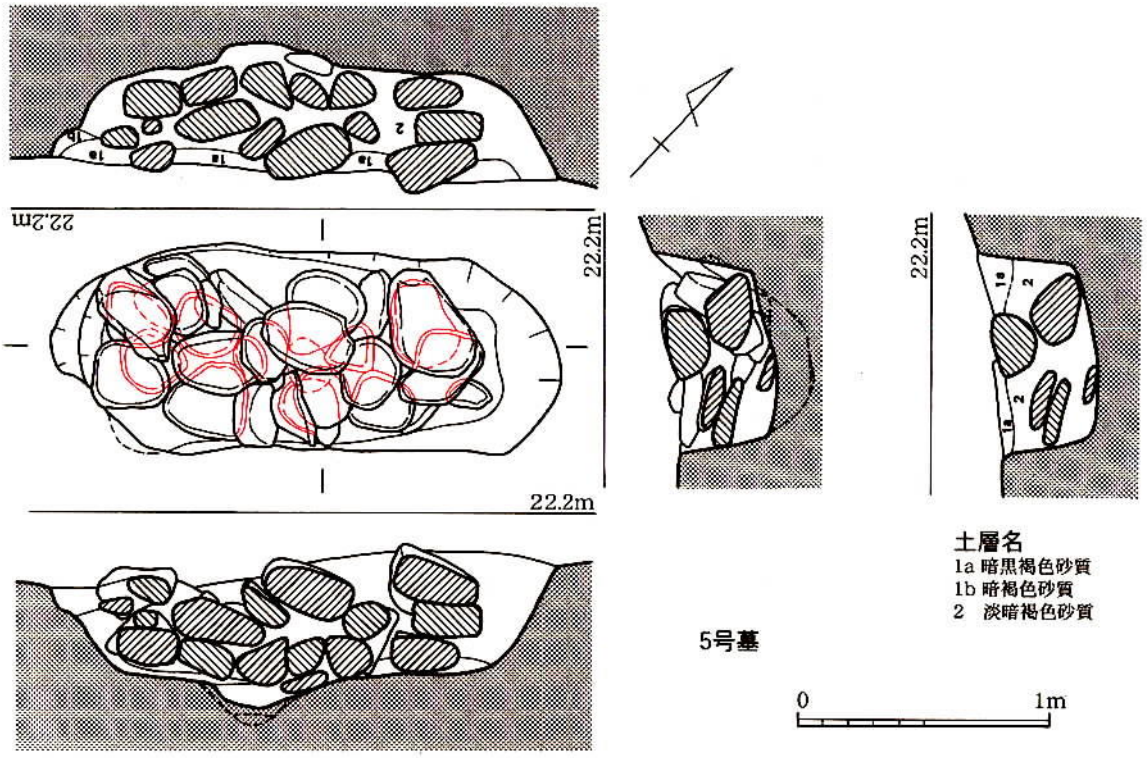
図下できる遺物がなかったが、他の墓と大きな時期差はないであろう。6号墓を切っていることから13c後半から14c前半代と考えたい。

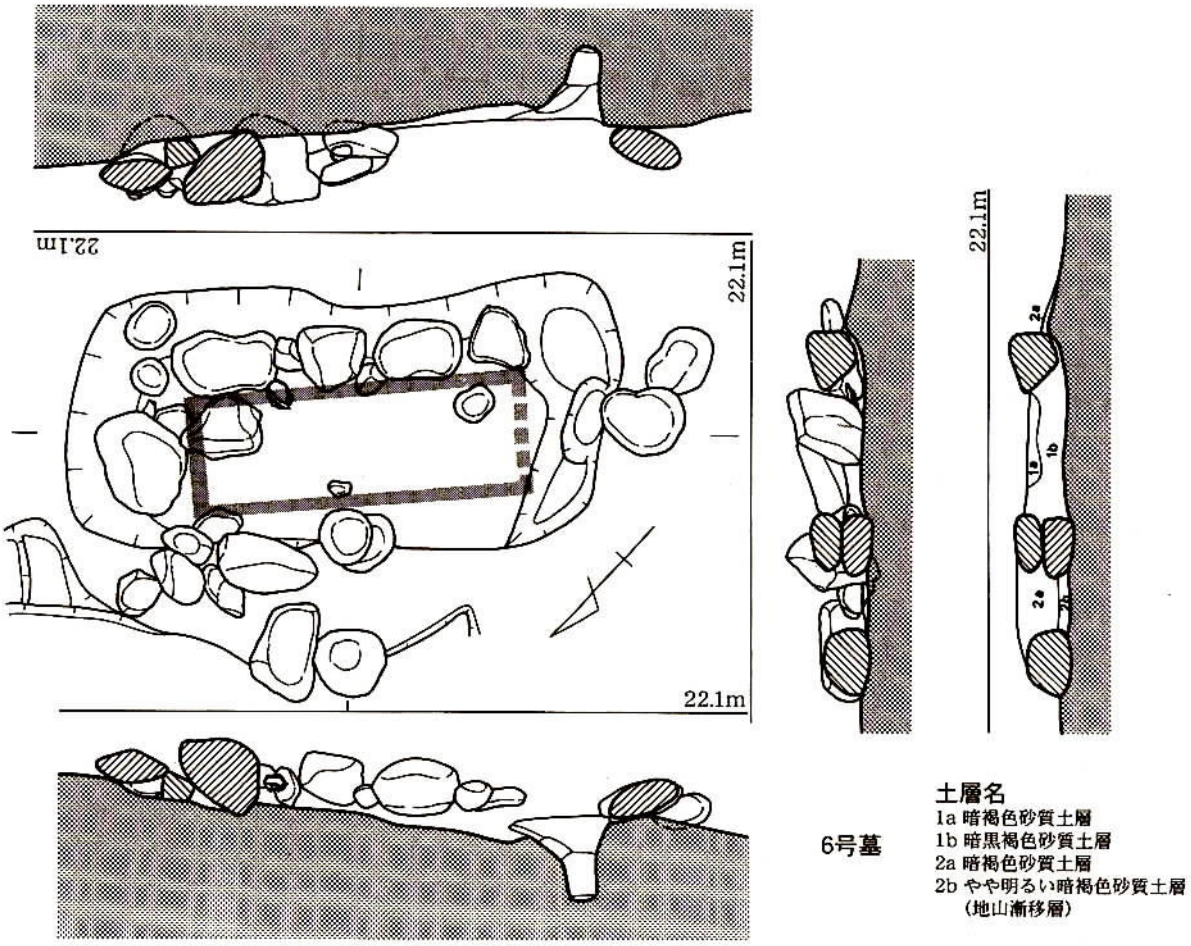
6号墓（図版11-2、第41図）

中央調査区の平坦面南東端部から検出された。平面プランは長軸222cm、短軸106.5cmの長方形で、深さは40.5cmしかない。主軸方向はN-47°-Eである。

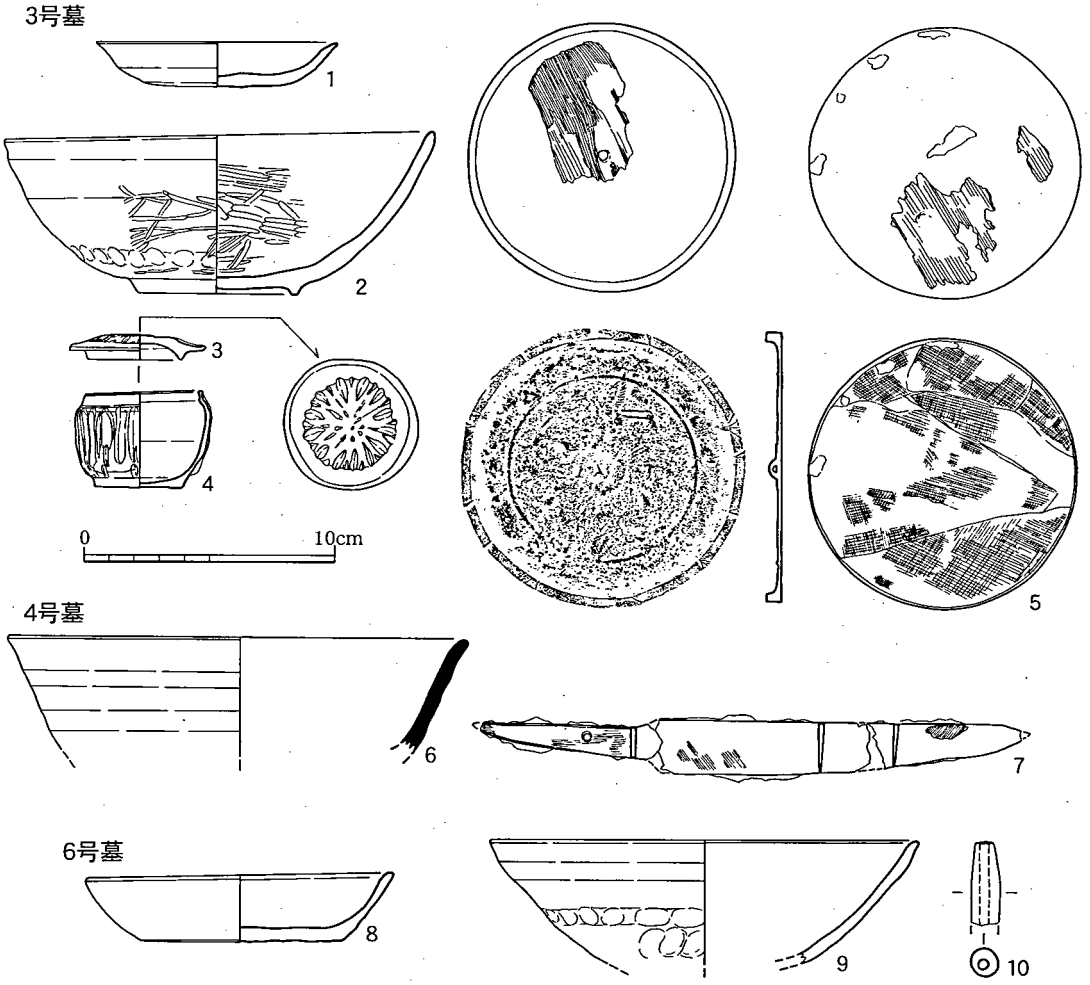
人頭大より大きい方形の石が北・西辺に並んでおり、東・南辺には石がないがやや離れた所にほぼ同じ大きさの石が集中している。本来並んでいたものが乱れたものと思われる。また、石の並びより内側に落ち込んだ石は積んであったものが倒れ込んだものと思われる。実際、北辺には上に積んであるものがあることから、最低でも2段は積んでいただろう。したがって、4壁を石で囲まれているので、その内部に木棺があったものと思われる。推定される木棺の規模は135×48cmの長方形で、高さは不明である。

東辺の石列の内側から瓦器椀が落ち込んだ状態で出土しており、副葬品の可能性がある。時期は





第41図　5・6号墓実測図（1/30）



第42図　3・4・6号墓出土遺物実測図（1/3）

12c中～後半であろう。

出土遺物（図版33-2、第42図8～10）

土師器皿・瓦器椀は副葬品で、土錘は混入品である。

土師器杯（8）　完形品で、口径12.3cm、器高2.7cmを測る。調整は内外ナデ、底部は糸切りで、板状圧痕が見られる。色調は内外黄橙色を呈する。口縁部には煤が付着するが、火を受けたような赤変は見られない。

瓦器椀（9）　復元口径17.0cm、調整は外面上半がナデ、下半は押さえ。内面は摩滅しており、観察できない。色調は、内外口縁部は黒灰色、口縁下は黄白色、胴部は灰白色を呈す。

土錘（10）　埋土出土の半欠品で、最大径1.1cm。重量は4.3ｇ。

5．竪穴状遺構

1号竪穴状遺構（図版11-3・4、第43図）

平面形はほぼ方形で、壁もほぼ垂直である。長軸1.66m　短軸1.35m、深72cmを計る。土層からみて短期間に埋没したようである。土坑の周囲にピットが見られるが、掘立柱建物跡を構成するような配置ではない。もしくは、簡易的な覆屋のような施設が存在した可能性もある。

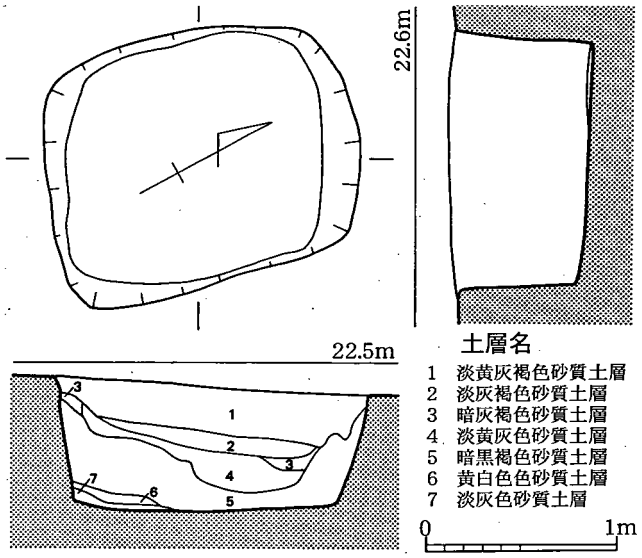
遺物は少なく、機能を特定する材料がないが、4号掘立柱建物跡に近接しており、関連する施設の可能性があるので、ほぼ同時期であろう。

6．集石遺構

1号集石遺構（図版12、第44図）

中央調査区南東部の斜面中位に位置する。平面形は不整形だが、本来正方形であったと思われ、残りの良い西側は礫が遺構の西辺に沿って直線的に敷かれている。斜面の下位にあたる東半分は石が流出したものと思われ、遺構の立ち上がりが残っておらず、礫も櫛歯が抜けたようにまばらである。

遺構の規模は、長軸5.6m、短軸5.45mで、深さは深いところで37cmしか残っていない。人頭大の偏平な円礫が床面に敷かれているが、面を揃えているのは一部で、礫の上にも礫を重ねるなど、面を形成しているとすれば非常に粗雑なつくりである。



第43図　1号竪穴状遺構（1/40）

遺物は少なく、本遺構の機能を特定するものがない。8・9は混入品で、時期は12c後半から13c前半であろう。

出土遺物（図版35-1、第45図1～15）

土師器杯（1）　復元口径は15.8cmを測る。底部は糸切りか。調整は内外ナデ。色調は内外黄灰色を呈する。

黒色土器杯（2）　復元口径18.6cm。胎土は瓦質に近い。色調は外面黄白色、内面灰黒色を呈する。

土師器椀（3）　口縁部片で、色調は内外黄白色。

瓦質土鍋（4）　口縁部片で、口縁部の内面端は稜を持って屈曲する。内外ナデ、色調は外面にぶい明褐色、内面黄橙色。

瓦質摺鉢（5）　口縁部片で、口縁部はやや外反し、肥厚して玉縁状をなす。外面口縁部は横ハケ、体部は縦ハケ、内面は斜位のハケ。内面には擦り目が見られるが一部のみなので単位は不明。色調は外面が灰黒色、内面は灰白色。

備前焼（6）　大甕の胴部片であろう。扇形のスタンプ文がつく。色調は内外にぶい暗赤褐色を呈する。

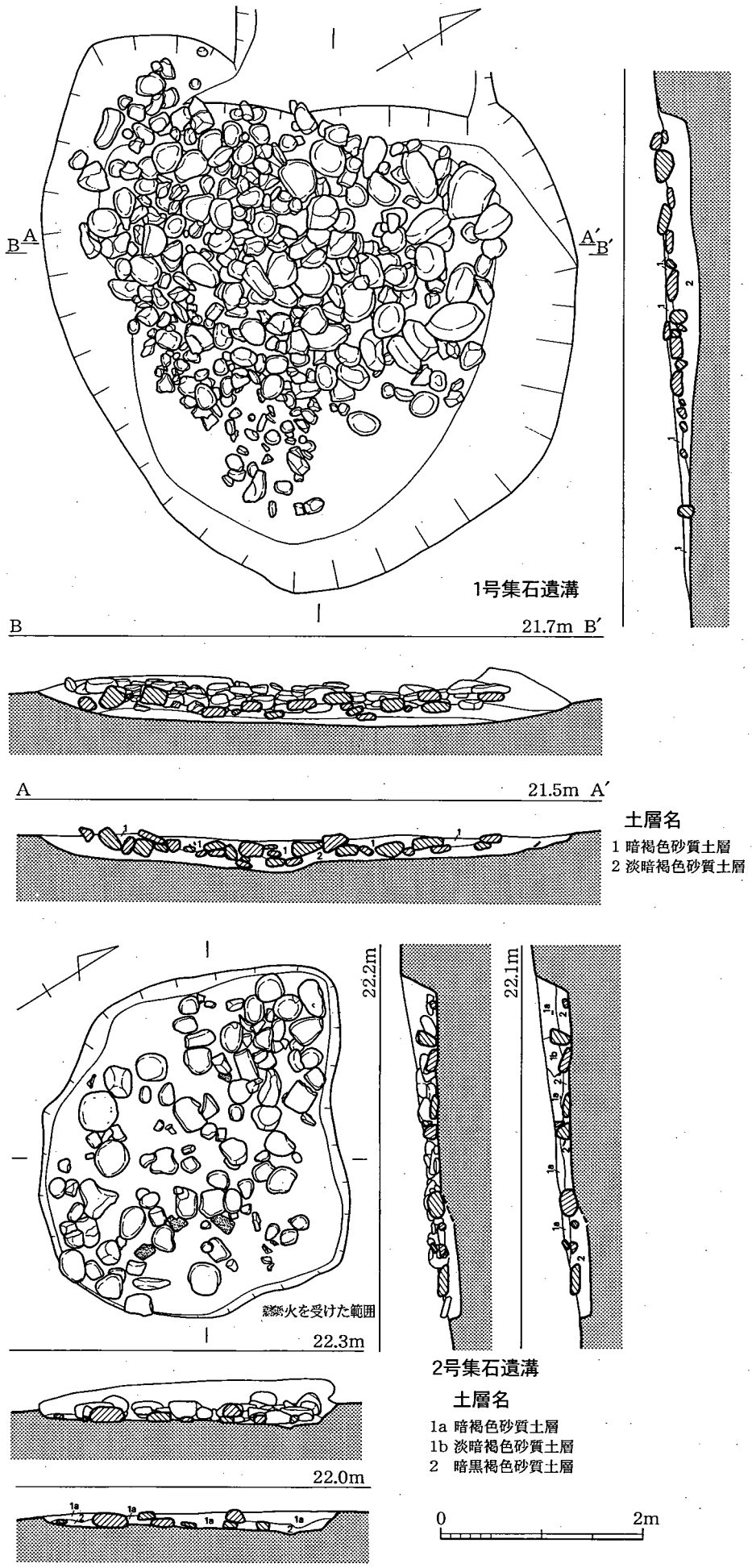
青磁椀（7）　胴片で、内面に櫛書き文が見られる。釉は淡黄緑色。胎は灰色。同安窯系である。

須恵器蓋（8）　内外ナデで、天井部のみ回転ヘラ削り。色調は暗青灰色を呈する。復元口径は18.0cm。

小型丸底壺（9）　口縁部は直線的だがやや内湾気味。肩部が丸みを持って屈曲する。内外黄白色。

瓦質鼎（10）　脚部片で、断面円形である。成形時の押さえの痕跡を残す。色調は黄白色を呈する。

土錘（11～15）　11～14は中央部の膨らみの小さい柱状で、長さは4.0～6.0cm、最大径は1.0～1.1cmで、重量は4.7～6.1gにおさまる。11は、長さ4.0cm、最大径は1.1cmで、重量は5.7ｇ。12は長さ4.6cm、最大径は1.0cmで、重量は5.5ｇ。13は長さ5.3cm、最大径は1.1cmで、重量は4.7ｇ。14は長さ5.9cm、最大径は1.1cmで、重量は6.1ｇ。15は、長さは5.6cmと変わらないが、径は他より太く1.6cm、重量は16.9gと一回り大きい。



第44図　1・2号集石遺構実測図（1/60）

2号集石遺構（図版12-1・13-1、第44図）

調査区南東部の斜面中位に位置する。平面形は略方形で、長軸3.39m、短軸3.05mを計る。深さは深いところで32cm。人頭大の偏平な円礫が面を揃えて床面に敷かれているが粗雑である。わずかであるが、火を受けている石もある。しかしながら、炭化物が少なく、焼土もないことから、この遺構で火を使用した確実な証拠がないので、別の場所で火を受けたものを再利用した可能性も考えられる。あるいは斜面の下位に存在していたのかもしれないが、削平で失われているため不明である。

遺物は少なく、混入品も多いが、時期は12c～13c代であろう。

出土遺物（図版35-1、第45図16～24）

土師器皿（16）　底部片で、内外ナデで、底部は糸切り。

縄文土器深鉢（17）　口縁部はやや外反し、口縁下に刻目突帯がつく。内外横位の条痕で、色調は外面黄白色から暗褐色、内面黒灰色を呈する。

弥生後期甕（18）　口縁部片で、口唇部は内側がやや尖る。復元口径22.4cmで、調整は内外ナデで、色調は内外橙色。

土師器壺（19）　口縁部片で、外面ナデ、内面ハケ。復元口径14.0cm。口縁部は直線的で口唇部はやや内傾する。色調は内外黄橙色。

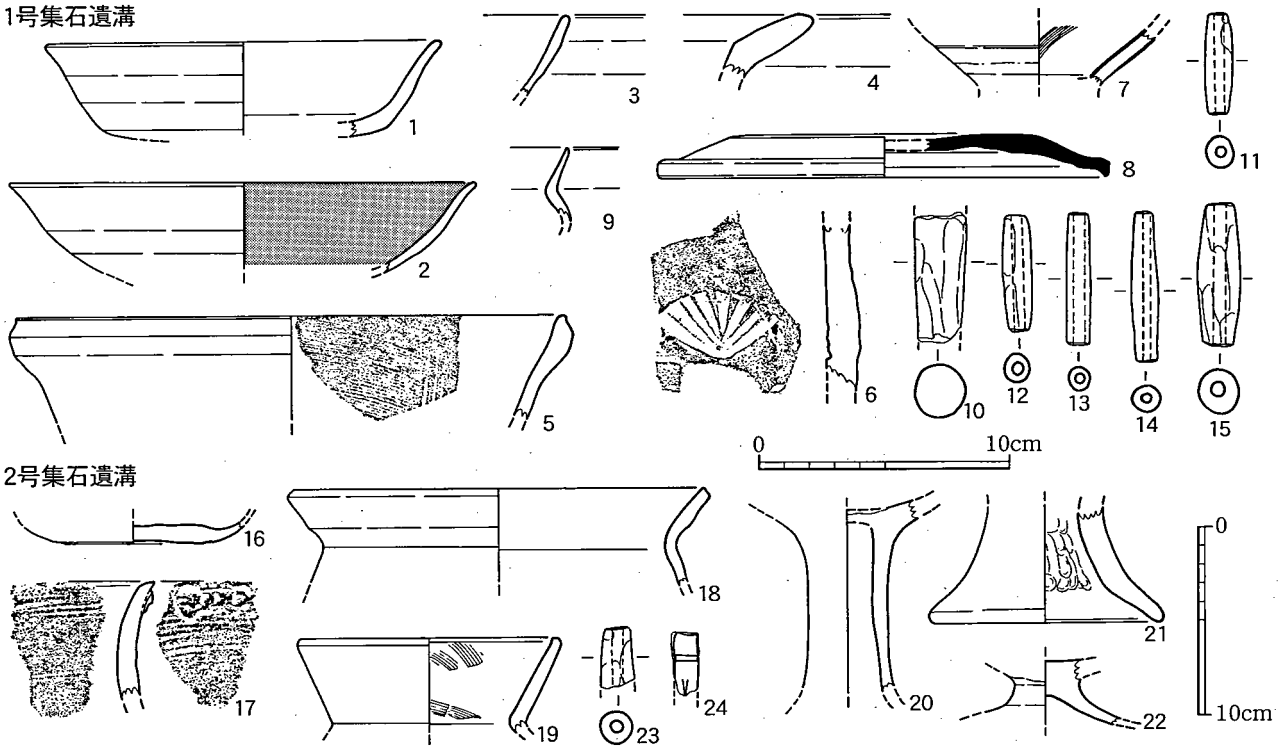
高杯（20）　脚部片で、調整は外面ハケ、内面は絞りがなく全面ナデ。色調は内外黄橙色を呈する。

器台（21）　裾部で、外面はナデ、内面は押さえとナデ。色調は内外黄橙色からにぶい暗黄橙色。復元裾径は12.5cm。

小型器台（22）　脚部片で、色調は内外にぶい暗黄褐色。

土錘（23）　半欠で、長さ2.4cm、最大径1.2cm、重量3.9ｇ。

不明鉄製品（24）　扁平な板状のもので、下端は刃がついているようだが、明らかでない。長さ2.6cm、幅1.1cm、厚さ3㎜。



第45図　1・2号集石遺構出土遺物実測図（5・9・18～22は1/4、他は1/3）

7．井戸

1号井戸（図版16-1・2、第46図）

調査区北側に位置する石組の井戸で、井戸本体と掘形部分があるため平面プランは楕円形を呈している。井戸自体は、一部崩れているが、平面正方形で、内法で96cm四方であろう。

西側の掘形部分は井戸枠の裏込めとなっており、断面形は掘形側が浅く、井戸部分が極端に深くなっている。これは深い穴を掘るための施工上の工夫であろう。井戸枠の裏込めの土層は、石を組みながら土を入れたものと思われ、ほぼ水平な土層が見られる。また、裏込めからは弥生土器が多く出土し、弥生時代の遺構を掘削した土を埋めたことが予測される。石の間には粘土はなく、砂質の土を挟んでいる。

井戸枠は人頭大より大きい偏平な河原石で構成されており、下にいくほど大きくなっている。石組枠の平面形は正方形を呈している。北側の石積みが崩れかかっており、井戸の内部に井戸枠に使われたと思われる円礫が落ち込んでいる。石組みの最下部の石に敷かれた円礫の上から完形に近い土師皿が出土していることから、これが底面と思われるが、調査の危険性からこれを除去して確認することができなかった。これを底とすると、深さは1.85mある。調査中は渇水期であったためか水が湧いてこなかったが、4号溝の最深部は湧水層にあたっているので、本来この深さで水が湧いていたであろう。井戸の周囲にもピットが見られるが、掘立柱建物跡を構成するような配置ではない。もしくは、簡易的な覆屋のような施設が存在した可能性もある。時期は12c前半～13c代であろう。

出土遺物（図版35-2、第47図）

1～21は埋土出土で、2・3は底近くから出土している。　22～28は裏込め出土である。

土師器小皿（1～3）　1は内外ナデ、底部は糸切り。復元口径7.4cm。器高1.5cm。復元底径は5.6cm。内外黄橙色。2は完形で、口径6.9cm。器高1.0cm。底径5.8cm。外面ヘラ削り、内面ナデ、底部はヘラ切り。色調は内外黄白色。3は完形で、口径7.9cm、器高1.2cm。底径6.7cm。内外ナデ、底部は糸切りで、板状圧痕が見られる。

土師器皿（4・5）　4は内面ナデ、底部は糸切りと板状圧痕が見られる。色調は内外黄白色で、2次焼成を受けて変色している。復元底径10.0cm。5は底部片で、内外ナデ、底部は糸切り。色調は復元底径9.0cm。色調は外面にぶい黄白色。内面にぶい暗白灰色。

土師器椀（6）　やや外に張り出す高台がつく底部片で、復元高台径7.7cm。内外磨きで、高台は内外ナデ。色調は黄白色。胎土は精良。

瓦質土鍋（7）　口縁部片で、内外ナデで、口縁部内面は屈曲している。外面は煮沸使用によって暗黒褐色に変色している。内面は黄橙色。

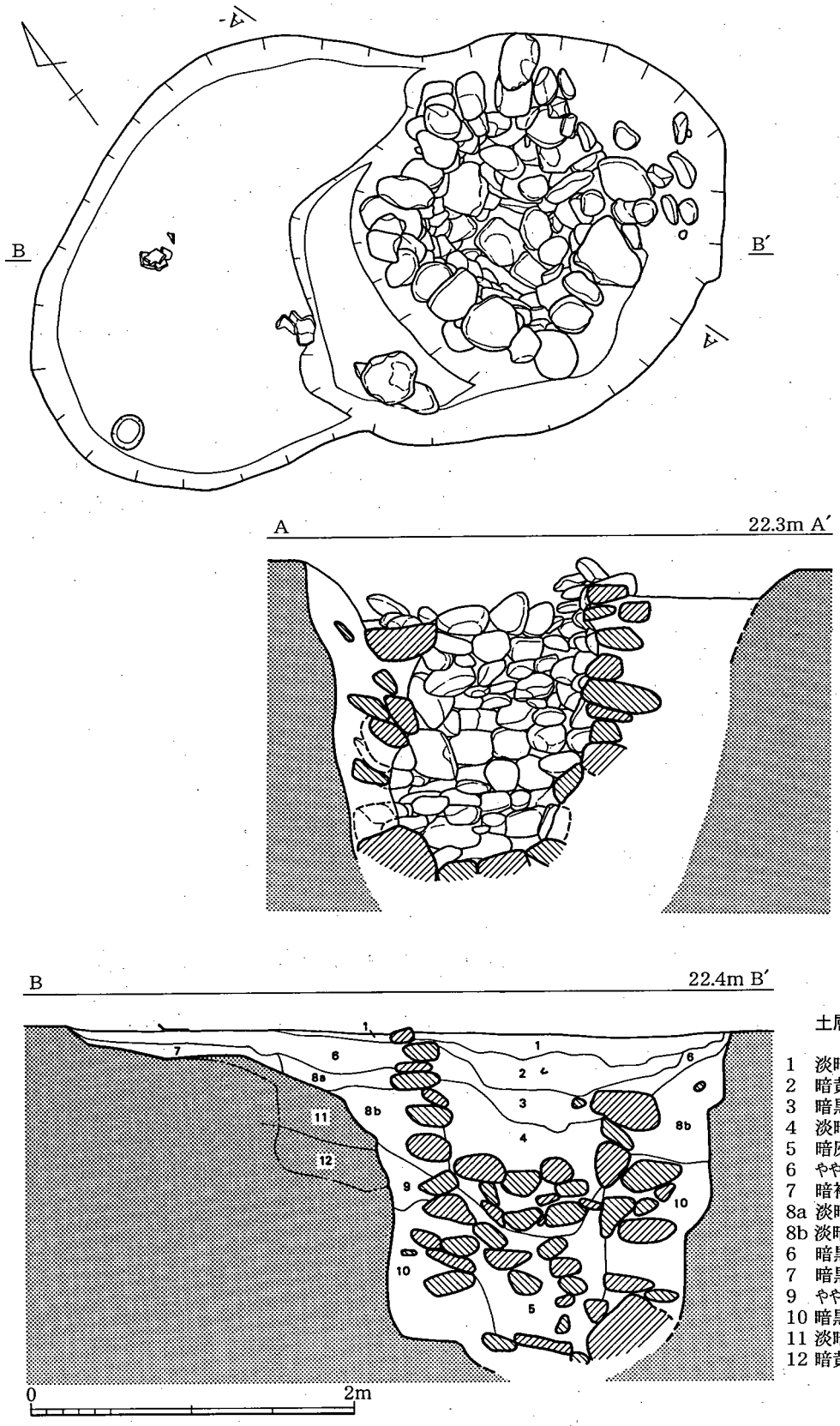
青磁椀（8）　同安窯系の口縁部片で、傾きから身の深いものと思われる。外面は無文、屈曲はなく、内面には細い沈線による花文がある。釉は内外にかかっており、淡緑色で、胎は灰白色。

大型鉢（9・10）　口縁部片で、9は口縁下の断面方形の突帯がないが同一型式の大小であろう。調整も等しく、外面はナデ、内面はハケ。口唇部は平坦面をなしている。色調は、外面暗灰色、内面黄白色。10は内外黄橙色。

無頸鉢（11）　口縁部が内湾するタイプで、復元口径19.2cm。外面はナデ、内面は押さえ。色調は外面黒褐色、内面はにぶい暗褐色。

甕（12・13）　口縁部で、肩部は口縁部に比べて器壁が厚い。復元口径20.3cm。外面口縁部はナデ、肩部は摩滅。内面はナデ。色調は外面にぶい暗褐色、内面黄橙色。13は胴部中位に最大径となる甕で、口縁部はやや内湾するもので、口唇部は内側がやや尖る。復元口径は24.0cm。外面はハケ、内面は削り状の板ナデ。色調は内外黄白色から黄橙色。

杯（14）　外面は口縁部がナデ、中位はタタキ、下位は板ナデ。内面は指ナデ。色調は外面茶褐色、内面は黄褐色。

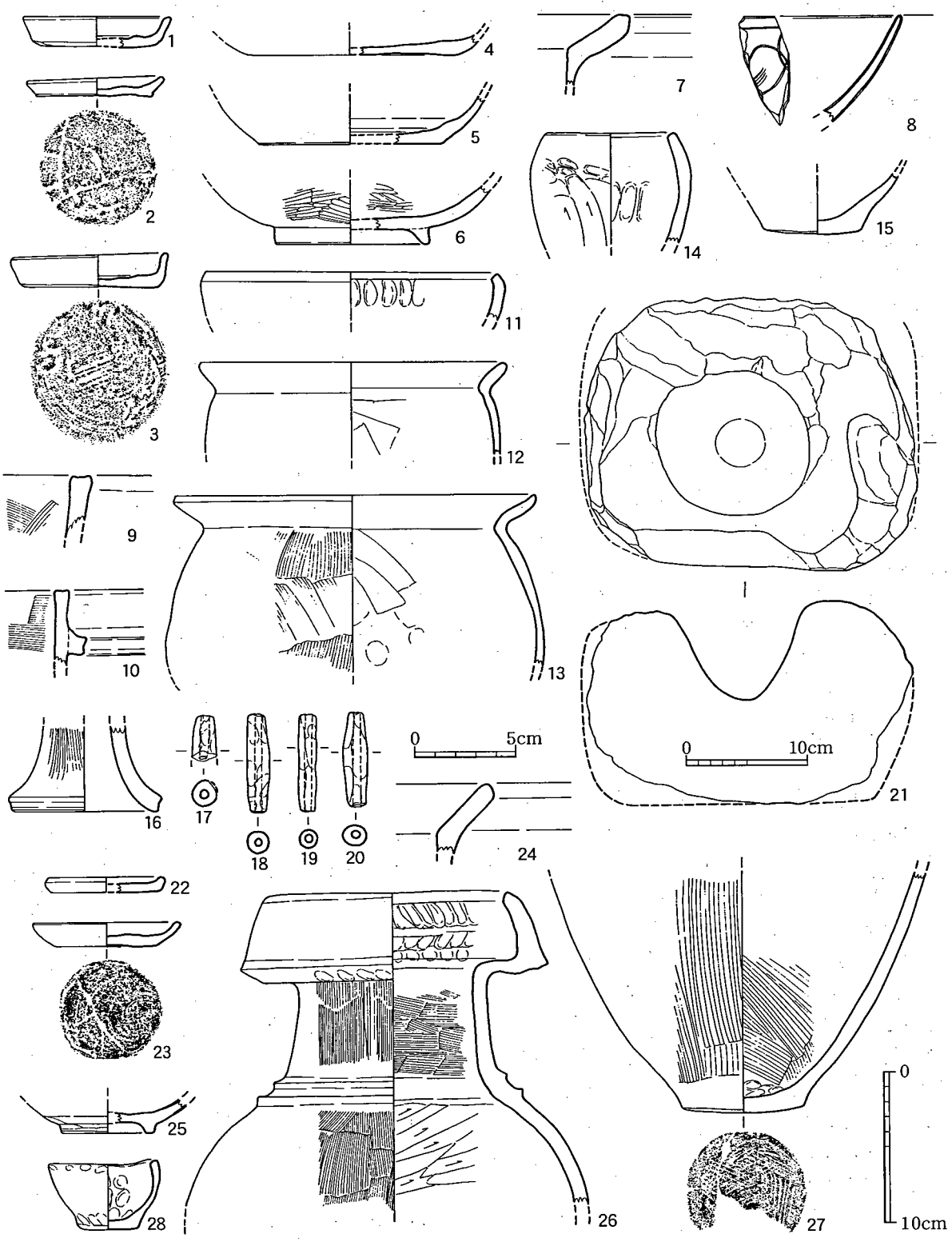


土層名

1 淡暗黒褐色砂質土層
2 暗黄褐色砂質土層
3 暗黒褐色砂質土層
4 淡暗黒褐色砂質土層
5 暗灰色砂質土層
6 やや暗い暗黒褐色砂質土層
7 暗褐色砂質土層
8a 淡暗褐色砂質土層
8b 淡暗黒褐色砂質土層
6 暗黒褐色砂質土層
7 暗黒褐色砂質土層
9 やや暗い暗灰色砂質土層
10 暗黒褐色砂質土層
11 淡暗褐色砂質土層
12 暗黄褐色砂質土層

埋土
裏込土
地山

第46図　1号井戸実測図（1/40）



第47図　1号井戸出土遺物実測図（10・16・26～28は1/4、21は1/5、他は1/3）

底部（15）　甕と思われ、やや丸みのある平底。復元底径7.1cm。外面は器面が剥落して調整が観察できない。内面はナデ。色調は外面赤橙色、内面黄白色。

器台（16）　裾部片で、外面は縦ハケで、裾部はナデ。内面はナデ。裾径10.2cm。色調は、外面は黄白色から黄橙色、内面は黄白色。

土錘（17～20）　17は半欠で、長さ23cm、最大径11.3cm、重量は3.4g。18は長さ4.9cm、最大径1.2cm、重量は6.3g。19は長さ4.8cm、最大径0.9cm、重量は3.8gである。20は長さ4.7cm、最大径1.2cm、重量は6.2g。

凹石（21）　裏面は欠損が多いが、使用面は良く残っている。平面形は方形で、上面中央には径7.6cmの孔が穿たれており、孔の内面は使用のため平滑である。断面は孔を除けば方形であったと思われる。現存する法量は長さ27.0cm、幅22.2cm、高さ16.0cm。石材は淡赤色のやや硬質の凝灰岩で、五輪塔や石臼の石材とは異なる。

土師器小皿（22・23）　22は内外ナデ、底部糸切り、復元口径6.0cm、器高0.8cm、底径5.3cmで、色調は黄橙色。23は内外ナデ、底部糸切り。口径7.8cm、器高1.2cm、底径5.1cm。内外黄橙色。

瓦質土鍋（24）　口縁部で、口縁部の内面は屈曲している。内外ナデ。外面は煤が付着しているため暗褐色、内面は黄橙色。

灰釉陶器（25）　椀の底部片で、断面方形の高台がつく。釉は内外にかかっているが。底部は露胎である。見込みは釉が蛇の目形に掻き取られている。外面と底部は回転ヘラ削り、内面は釉がかかっているため不明。釉は暗灰白色で、胎は黄灰色。

複合口縁壺（26）　調整は丁寧だが器壁が厚く歪みが大きい。頸部は2条の断面三角形の突帯がつく。外面は口縁部の複合部がナデ、外反部が押さえ、頸部・肩部はハケ。内面は口縁の複合部が指3本を単位として押さえられている。外反部はナデ、頸部はハケ、肩部は削り状の板ナデ。口径16.0cm。色調は内外黄橙色。

壺底部（27）　底部はやや丸みのある平底で、底径は8.0cmを測る。調整は、外面は底部までハケが入る。内面はハケ。色調は、外面は黄橙色、内面はにぶい黄橙色から灰黒色を呈すが、煮沸使用による変色ではない。

8．門状遺構

1号門状遺構（図版16-3・4、第48図）

北調査区中央部で、柵状遺構の北端に位置する。検出時には方形プランの柱穴が複数切り合っているように見え、偏平な面を持つ石が見えていたことから、これを礎石とする2本柱の門であろうと考えたが、掘り進めるとさらにその下部に小礫の集石が拡がっていた。そのため集石を伴う不整形の土坑に方形プランの柱穴2つが切り合った形となった。

北側に突出する柱穴は、土坑と切り合う部分が少なく。本来の形状を残している。1辺70cmの正方形で、深さは22cm。中央からずれているが、径は25cmの偏平な河原石がある。床面から浮いているが、これは裏込めして高さを調整したものと思われる。ちょうどこの石と同じ高さで、東端の石製品が面を持って据えていた。この面は五輪塔の水輪の側面を削って平坦にしたもので、面径は24cmで、平滑である。裏面は水輪の側面の丸みを残しており、北側の柱穴と同様に、裏込めしたものと思われる。礎石間は約1mある。五輪塔の水輪転用礎石の面の高さは22.60mで、現遺構面と大き差がない。

さらにこの五輪塔の水輪転用の礎石の西に隣接して偏平な河原石があり、これもまた礎石の1つであろう。平面形は略方形で、1辺が25cm程ある。石の面の高さは前2者にほぼ等しく、これに対応するものは見られないが、おそらく北側柱穴に切られたものであろう。礎石の根締石と見られる石が同じ高さでめぐっている。したがって、ほぼ南北に主軸をとる2組の2本柱の門が復元される。礎石間は約1mあったと思われる。

その下に軸を異にする集石遺構があるが、やはり面をもつ大きな河原石があり、東側には平坦面が作られてないが、五輪塔の水輪があり、同様の遺構であったと思われる。下部の遺構は、上面の２者のように明確でなく、これも２組みの遺構が切り合っているのかもしれない。集石の下は裏込めで、遺構の掘形は深いところで55cmに達する。時期は12～13c代か。

出土遺物（図版36-1、第49図）

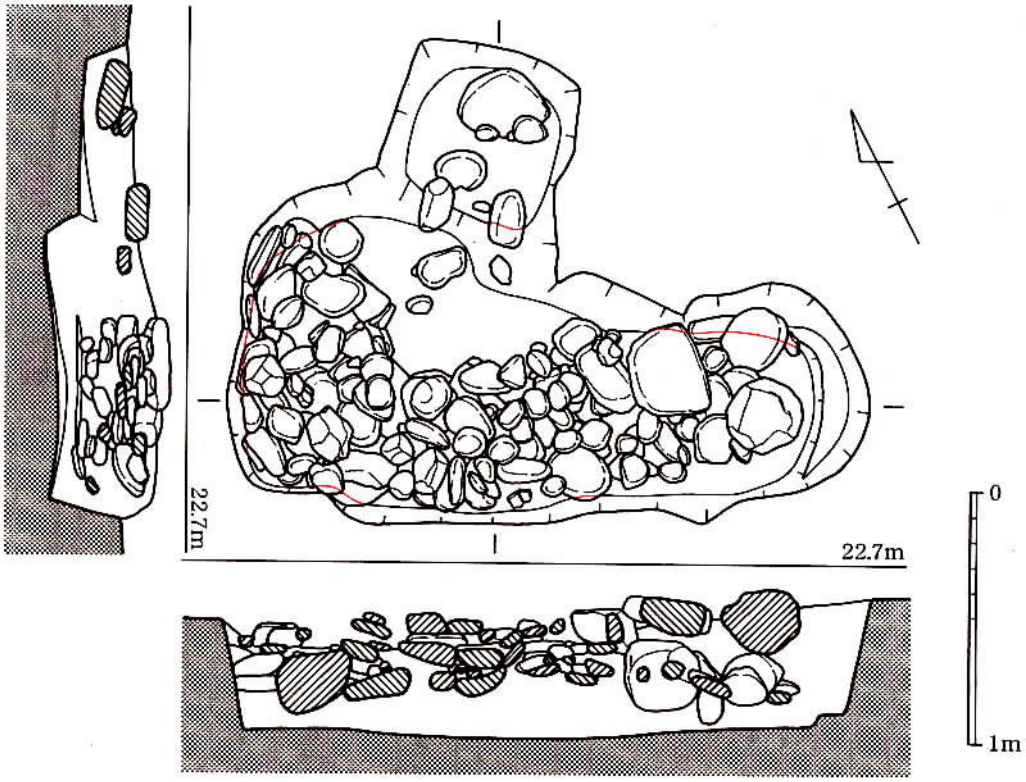
瓦質鉢（1・2）　口縁部片で、口縁部はわずかに肥厚して断面方形を呈し、内外にぶい灰黒色。２は土鍋で、口縁部はわずかに外反する。復元口径28.5cmで、やや歪みがある。調整は口縁部がナデ、胴部は削り。内面はナデ。色調は外面に煤が付着しており、黒褐色を呈する。内面は暗黄褐色で、口縁部は変色している。

口縁部（３）　形状は鉄絵鉢の口縁部に近いが、弥生中期の鋤先口縁の可能性もある。口唇部が丸みを持ってやや下垂し、内端は稜をもって屈曲する。内外ナデで、色調は内外黄橙色。

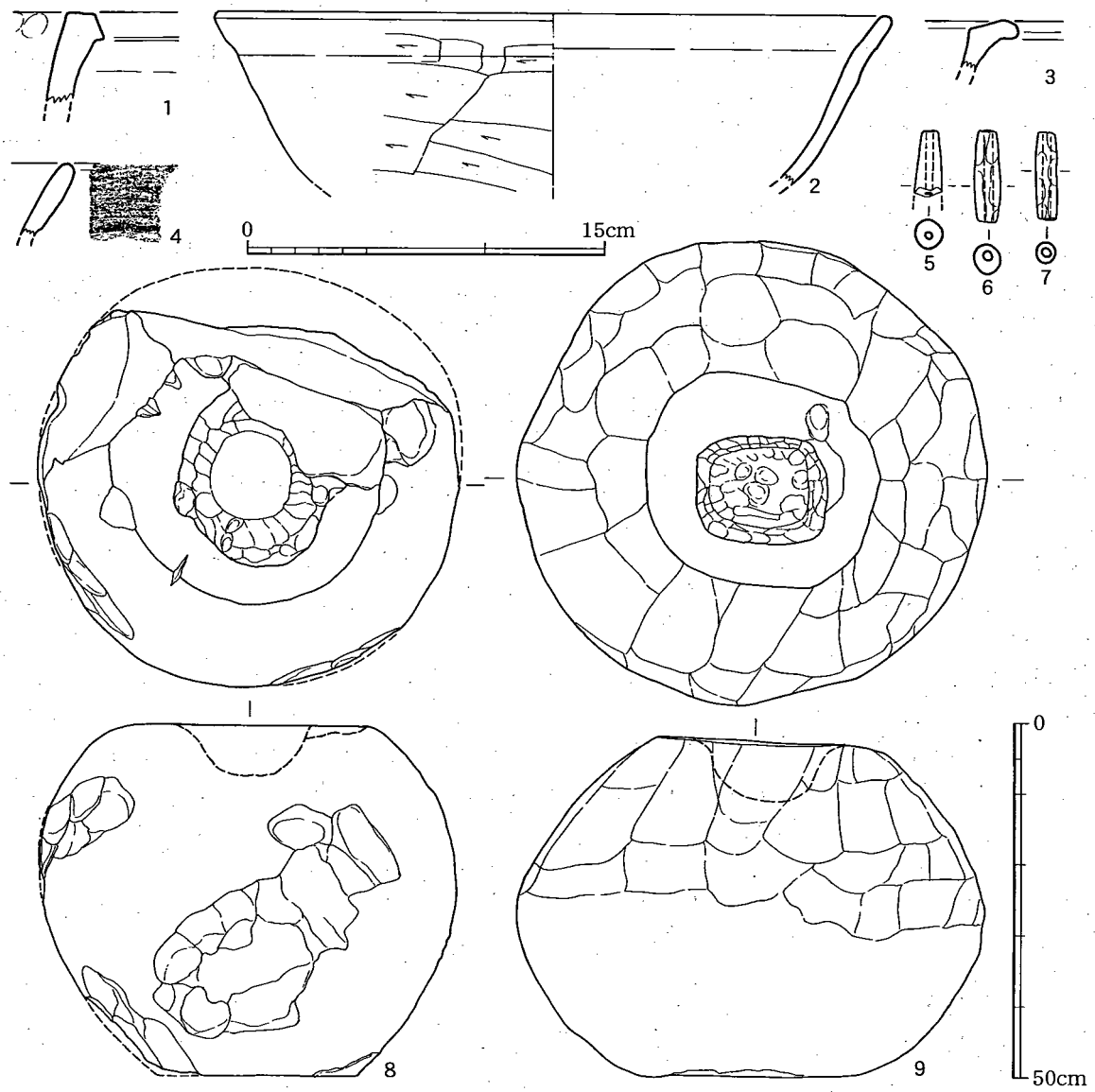
縄文土器深鉢（４）　口縁部片で、外面横位の条痕、内面ナデ、色調は外面暗茶褐色、内面黒灰色。

土錘（5～7）　５は半欠で、中央が膨らむタイプで最大径1.2cm。重量は3.1g。６は完形で上下端がわずかにすぼまるタイプで、長さ3.8cm、重量は4.9g。７は完形でほぼ柱状である。長さ3.7cm、重量2.8g。

五輪塔水輪（8・9）　８は2/3が残っており、断面は均整な球胴で、径は上面が19.4cm、最大径は中位にあり29.2cm、下面は19.2cmで、上面より下面の方が短い。つくりはよく、面は平滑に仕上げられており、上面にはほぞ孔が開けられており、ノミ痕を良く残す。平面形はほぼ円形である。灰白色の軟質の凝灰岩製で変色は見られない。９は完形で、断面は扁球状の胴部で、径の上面は14.2cm、最大径は中位で32.6cm。下面は14.3cmで、上下はほぼ等しい。上面中央にほぞ孔が開いており、ノミ痕を良く残す。ほぞ孔の平面形は長方形である。表面は、上半はノミ痕を残しているが下半は摩滅している。凝灰岩製で灰白色を呈する。



第48図　１号門状遺構実測図（1/30）



第49図　１号門状遺構出土遺物実測図（8・9は1/5、他は1/3）

9．柵跡

１号柵跡（図版18-1、第50図）

北調査区東部で、４号溝に沿っており。南から北へN-4°-E方向に伸びた後、北に湾曲している。復元した長さは10.73mで、柱間は1.94～2.50mで、ややばらつきがある。柱穴は径28～34cm、深さは12～20cmでほぼ均一である。底面に石が入ったものがあるが、混入したものではないようである。おそらく、高さを揃えるためにいれたものだろう。図化できる遺物は少ないが、12c後半であろう。

出土遺物（第51図1）

黒色土器椀（１）　椀の底部片で、内外ナデ、底部はヘラ切り後横ナデ。断面三角形の高台がつく。体部への立ち上がりから身の浅いものと思われる。復元底径は6.4cm。色調は外面黄白色、内面灰黒色。

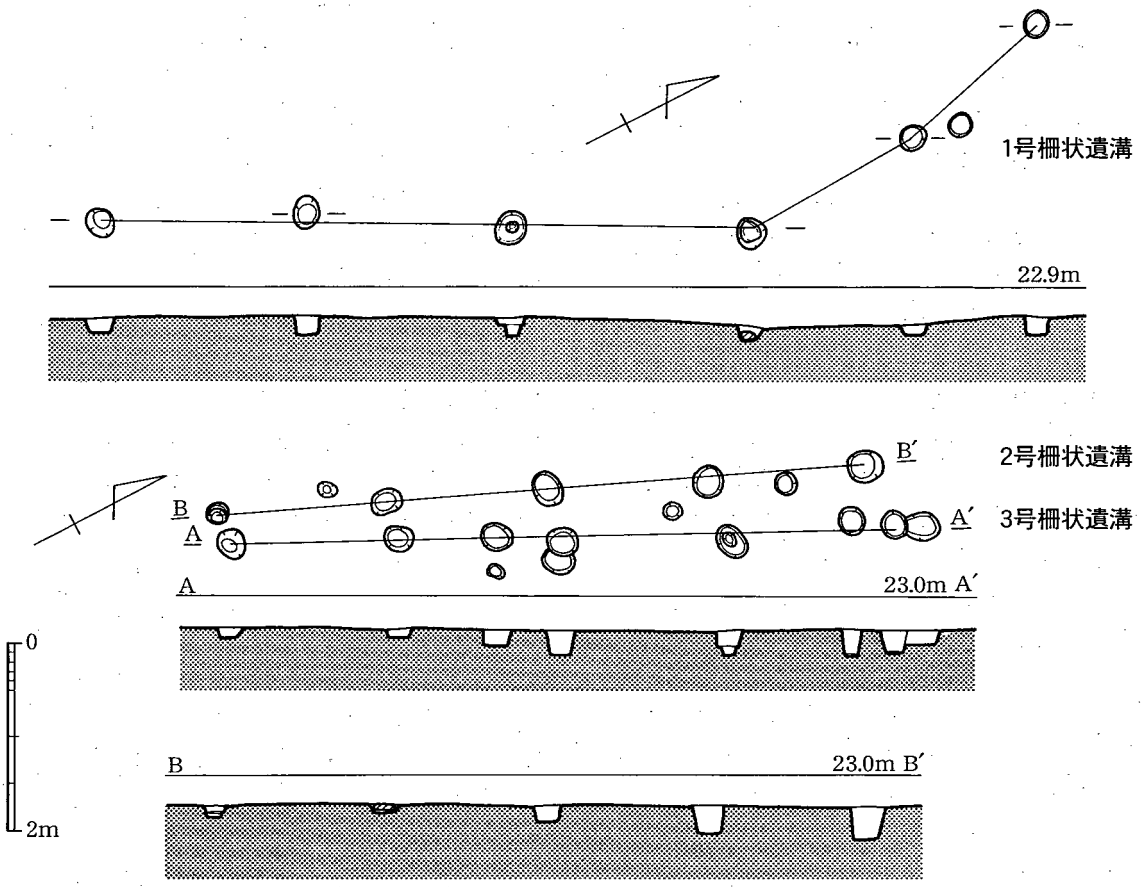
２号柵跡（図版18-1、第50図）

北調査区東部で、４号溝に沿っており。南から北へN-28°-E方向に走っている。復元した長さは

7.40mで、柱間は1.76～1.80mで、ほぼ均一である。柱穴は径28～38cm、深さは10～26cmでほぼ均一である。底面に石が入ったものがあるが、床面からやや浮いているので、混入したものであろう。図化できる遺物がなく、時期は特定できないが、１号柵跡に前後する時期であろう。

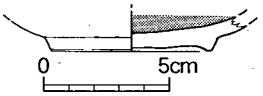
３号柵跡（図版18-1、第50図）

北調査区東部で、４号溝に沿っており。南から北へN-4°-E方向に伸びた後、北に湾曲している。復元した長さは6.86mで、柱間は1.72～1.84mで、ややばらつきがある。柱穴は径21～38cm、深さは12～33cmでばらつきがある。底面に石が入ったものがあるが、混入ではないようである。おそらく、高さを揃えるためにいれたのだろう。図化できる遺物がなく、時期は特定できないが、１号柵跡に前後する時期であろう。



第50図　１～３号柵跡実測図（1/80）

10. 溝状遺構



第51図　１号柵跡出土土器実測図（1/3）

４号溝（図版20-2・21～23・図版24-1～6、第52～55図）

北調査区に位置し、西側に開くコの字形を呈する。溝はコの字形の南北辺が幅広で、東辺は狭い。石積みは北辺と東辺北側のみに見られ、北辺は底面に集石による階段を設けている。

まず、北辺について説明する。北辺は石敷部分と、２段に分かれる階段部分の３つに分けられる。２段目を上がると遺構面に達するが、４号溝の縁から２本の細い溝が同方向に走っている。北辺は長さ約14.8mで、幅は３辺の中で最も広く6.4m、深さも最も深く約1.7mある。石敷部分は東コーナーから始まっており、幅の狭い部分と幅の広い部分に分かれている。幅の広い部分は、後に記述す

る階段状集石のテラスとほぼ同規模であるから、段こそもたないが階段を意識したものと思われ、幅の狭い部分は階段への通路であろう。通路部分は長さ約５m、幅は1.6～1.9mで、底面の端には敷いていない。幅の広い部分は東西2.25m、南北2.5mで、床面全面に敷いている。

石は小礫が多いが人頭大のものまで含まれ、厚さは５～10cmほどで、裏込め土の上に置かれており、裏込め土は固く締まっていたことから、叩締めて整地したものと思われる。石敷面はほぼ平坦だが、石敷のない東辺の底面とほぼ同じ高さから始まり、西に向かって次第に高くなっている。通路の東端は、敷いている石より大きなものを並べている。小礫の流出を防ぐと同時に、石敷の端部を示したものであろう。石敷の下からは水が湧いており、隣接する１号井戸の底面がほぼ同じ高さであるので、湧水層があるものと思われる。石敷の裏込めは固く叩締められており、石敷があるのは水が湧くためであろう。

第１段は石敷より大きな石を皿状に敷いている。皿状にするために、第１段の東辺には石敷の裏込めと同じ土を帯状に溝を横断して置き、その上に人頭大より大きな石を並べてテラスの端部を設けている。その結果、東辺は直下の石敷面から約40cm高くなっている。東辺端部の西側と南・東辺は壁に沿って石を貼っているが、北辺はほとんど石がない。こうしてできた皿状の集石の中に土を入れ、第１段目の面を形成している。調査時にはこの裏込め土を認識しておらず、掘り下げてしまった。この面には石敷はなかったが、五輪塔の火輪の裏面が利用されており、火輪を倒立して裏面を第１段目の面に合わせている。この高さが第１段の東辺の石列とほぼ一致していることから、標高20.80m程で面を設けていたものと思われる。このことから、第１段目は東西約20m、南北約34mとなる。

第２段目は、第１段目と約20cmほどしか段差がない。テラスには石を貼らず、地山面を使用しており、東西約20m、南北約42mとなる。西辺にはこの面から地山の壁に沿わせた石積みがあり、大きな石で野面積みし、最上部は列状に丁寧に並べている。直下からは50cmほど高くなっている。

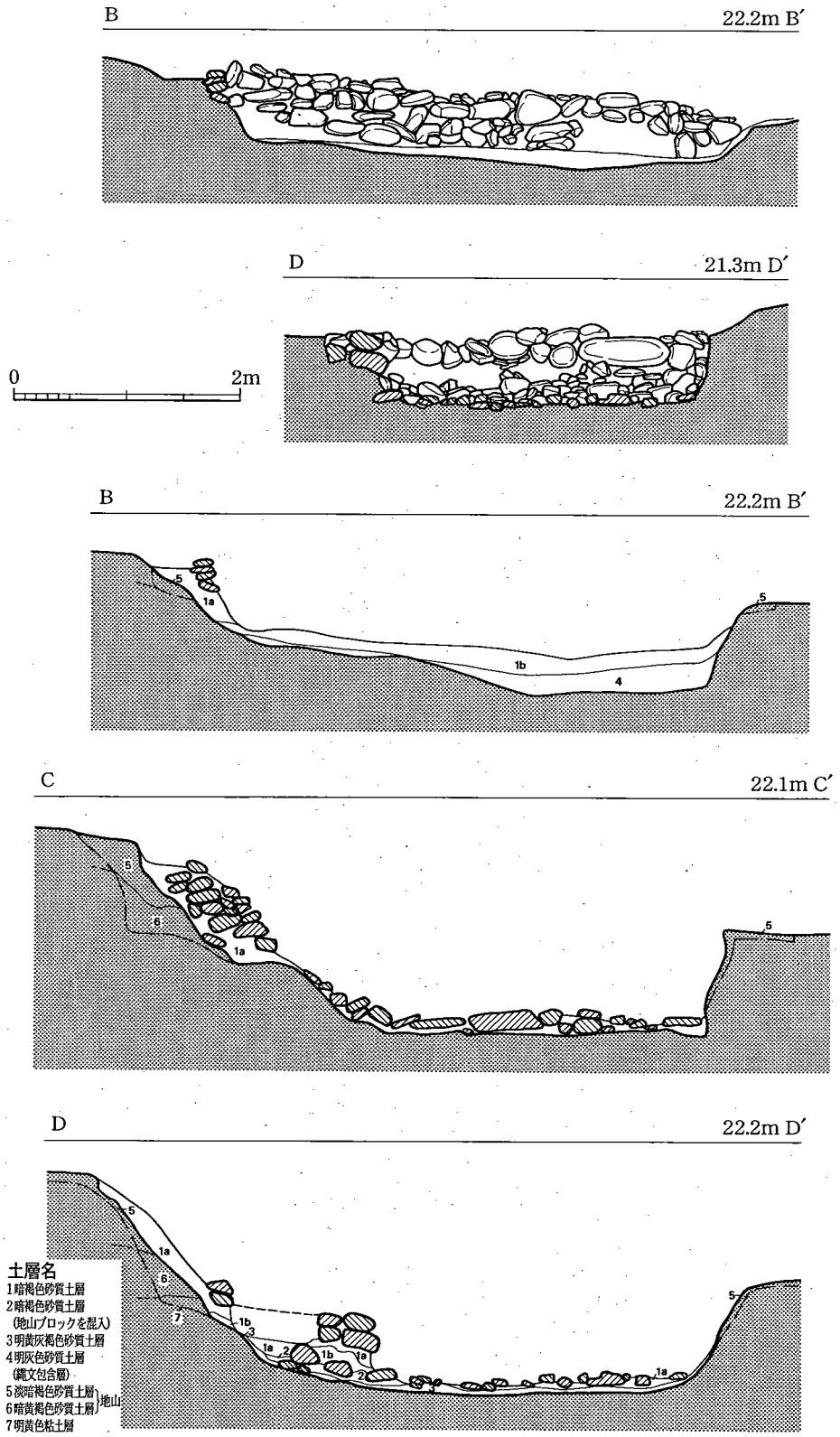
この石積みの上は北調査区の遺構面だが、北辺の南北縁に合わせて小溝が見られた。長さは北側が6.7m、南側が7.5mで、幅は50cm～1.7m。非常に浅く不明確であるため、遺構ではなく水が流れた跡かもしれない。

北辺の南壁には石垣状の石積みがある。この石積みは上下２段に分かれており、１段目と２段目の間には幅約50cmの細長いテラスがある。地山をテラス状に掘削した後裏込め土を入れながら積んだものと思われる。一番下に大きな石が並んでおり、その上に大きさが均一でない石が野面積みされている。上段は第１段の面から積まれたもので長さ6.4m、高さは均等でなく、階段の各面の高さから積んでいるため、西に行く程浅くなる。最も高い所では90cmある。下段は石敷面から積んだもので、長さ約３m、高さは幅の広い部分と通路部分とで異なっており、前者は約40cm、後者は約25cmである。北壁は立ち上がりが急で、石積み等はない。

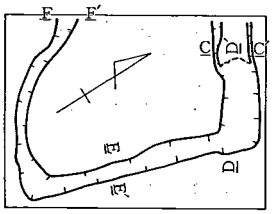
次に東辺だが、長さ約28mで、幅は最も狭く約２～3.5m、深さは石積みのないところが浅くなっており、石積み部分は約2.1m、ない部分は深い所で1.3mである石積みがあるのは東辺の中央から北側で、北辺の石積みとはつながっていない。東辺の石積み部分と北辺のそれの間にわずかな石積みが残っているので、本来あったが崩落したのであろう。したがって、石積みは本来北辺から連続しており、長さ約９mに及んでいただろう。石積みの残っている部分は、一番下に大きな石が列をなしており、その上に大きさが均一でない石が野面積みされている。中には石臼や五輪塔の部材を利用しており、石臼は石積みに利用するために打欠いたものと思われる。石積みは底面から積まれており、石積みのある部分の底面が深いのはなんらかの関係があるからなのだろう。高い所で約1.5mある。

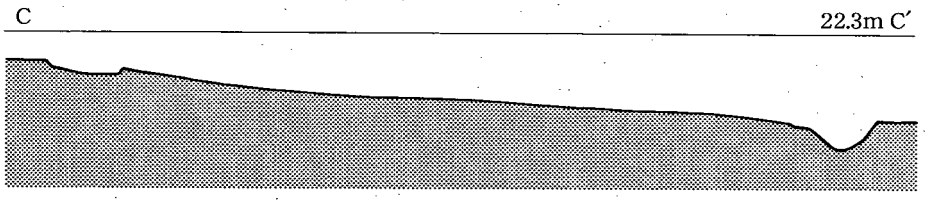
最後に南辺だが、他の２辺と異なりS字に湾曲している。全体の長さは約29m、幅はほぼ均一で1.3～3.2mだが、南コーナー部分が最も広くなっている。深さは幅の狭い部分が最も浅く約45cmで、そこから東は極端に深くなり81cmとなる。逆に東へは緩やかな斜面で、最も深いコーナー部分は約１mとなる。

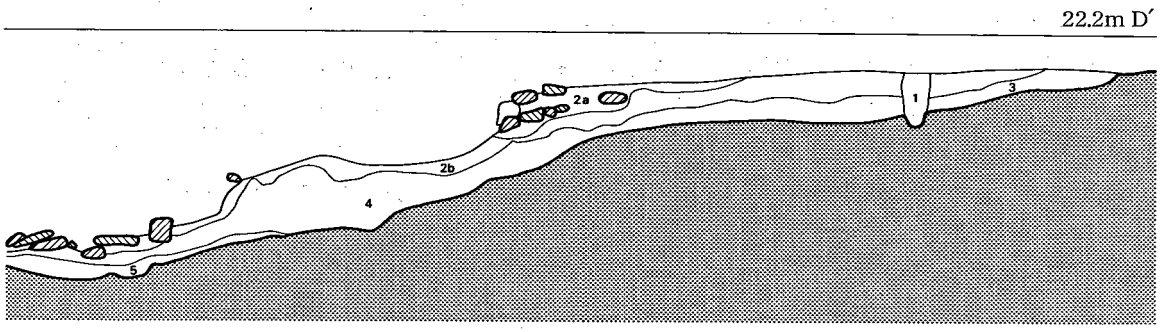
第52図　4号溝北辺階段状集石遺構実測図（1/60）

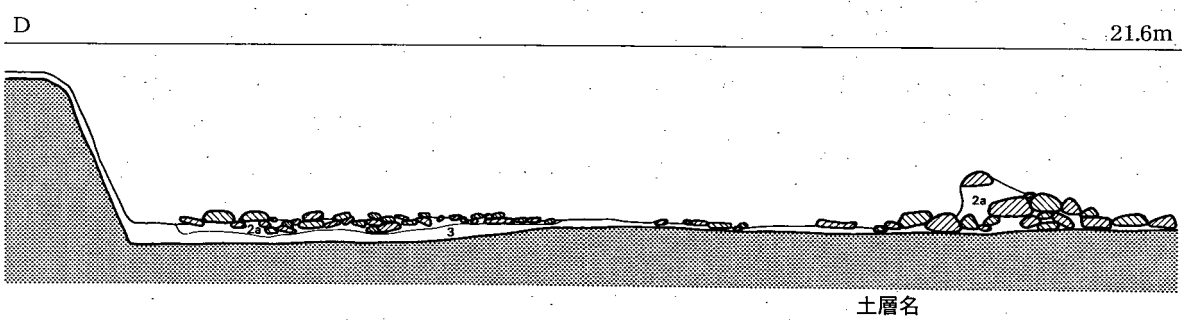


第53図　4号溝階段状集石遺構土層断面・見透し実測図（1/60）



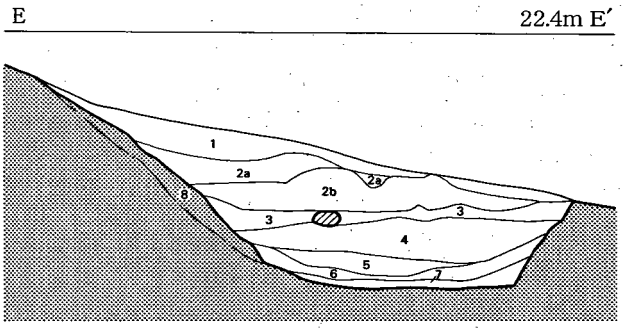






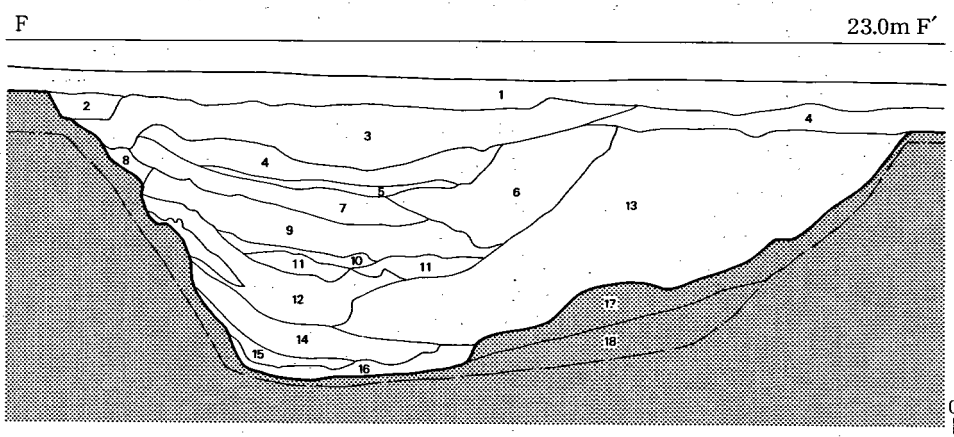
土層名

1　暗黒褐色砂質土層（ピット埋土）
2a 暗褐色砂質土層
3b やや明るい 暗褐色砂質土層 地山ブロックを混入する } 裏込土
4　暗灰色砂質土層　（縄文包含層）
5　暗黄褐色砂質土層



土層名

1　淡明黄褐色砂質土層
2a 淡灰黒褐色砂質土層
3b 淡灰褐色砂質土層
4　淡暗褐色砂質土層
5　灰褐色砂層
6　淡暗褐色砂質土層
7　青灰色砂層
8　黄褐色砂質土層(地山)



土層名

1　暗黄橙色砂質土層（水田床土）
2　暗黄褐色砂質土層
3　黒褐色土層
4　淡灰黒褐色砂質土層　} 堆積土層
5　灰黒色砂質土層
6　淡灰褐色砂質土層
7　淡黄褐色砂質土層
8　暗黒灰褐色砂質土層
9　暗灰色砂質土層
10 暗黄褐色砂質土層
11 暗灰黒褐色砂質土層
12 暗黒褐色砂質土層　} 掘り直した溝の埋土
13 暗黄灰褐色砂質土層
14 灰黒褐色砂質土層
15 暗黒灰色砂質土層
16 暗黒褐色砂質土層
17 黄褐色砂質土層
18 黒灰色砂層　} 地山

0　2m

第54図　4号溝土層断面図（1/60）

溝の西壁・東壁の土層から、溝は１度掘り直されている。最初に掘られた溝の幅が検出された幅で、掘り直された溝幅は狭くなっている。石積みは最初の溝に伴うもので、掘り直された際に石積みを掘り崩したところもあるであろう。

最初に掘られた溝は、厚い堆積から見て、ある時期一度に埋ったことがわかる。遺物もこのことを示しており、最も古いものは12c前後で、間を置いて13c後半に遺物量のピークがある。土層ごとに遺物を取り上げていないが、このことから築造は12c前後で、13c前半には廃絶し、13c後半に掘り直されている。

出土遺物（図版36-2・37・図版38-1、第56～61図・表２）

土師器皿（第54図1・2）　１は内外ナデで底部は糸切り。復元口径10.9cm、器高1.4cm、復元底径9.0cm。色調は内外黄白色。２は内外摩滅で観察不能。復元口径14.8cm、器高2.4cm、復元底径5.8cm。色調は内外黄白色。

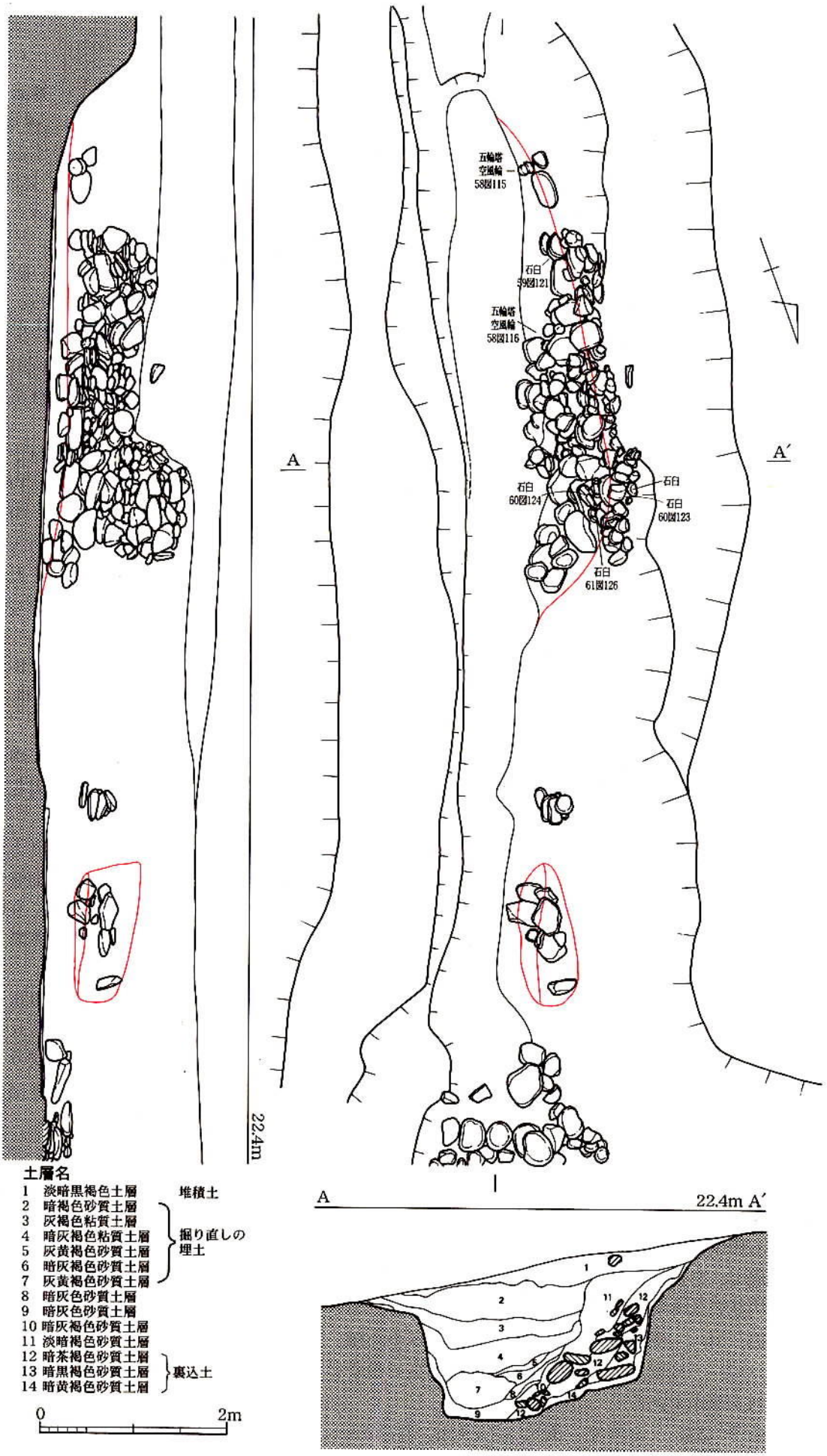
土師器椀（３）　外に張り出す断面三角形の高台がつく。復元高台径は8.0cm。外面はナデ、内面は摩滅しており観察できない。

黒色土器椀（４）　復元高台径6.4cm。色調は外面黄白色、内面漆黒色。

須恵器杯（5・6）　５は口縁部で、復元口径12.4cm。内外ナデ、色調は内外青灰色。６は底部で、外にやや張り出す断面長三角形の突帯がつく。外面はナデ、内面は磨き。色調は内外青灰色。

須恵器鉢（7～10）　東播系の鉢の口縁部で、７・８はナデで平坦面にしているものがあり、内外ナデ。色調は内外青灰色。７の色調は口縁部のみ暗青灰色。９は口縁の上端がやや伸びるもので、復元口径25.4cm。内外ナデ、色調は内外青灰色だが、口縁部は暗青灰色から黒色。10は口縁部の上端が伸びたもので。内面には5本単位の摺り目が見られるので、摺鉢である。内外ナデ。外面青灰色、内面暗青灰色。

瓦質鉢（11～34）　口縁部片で、11は口唇部をナデで平坦面にしており、調整は内外ナデ、色調は内外灰黒色。12は口唇部がナデ、外面の口縁部はナデ、体部は押さえ、内面はナデ。色調は内外灰黒色。13は口唇部がやや内傾するもので、外面は口縁下が磨き、体部は削り。内面はナデ。外面暗灰色。内面は、口縁部は暗灰色だが、それ以下は黄白色。14は口縁部の外面をやや肥厚して、玉縁状にしている。外面は摩滅のため観察できないが、内面はナデだが、ハケ目もある。色調は内外にぶい淡灰色。15は口縁部の外面をやや肥厚しており、外面体部は削り、内面はナデ。内面には摺り目が見られるが単位はわからない。16は口唇部を内外両方に肥厚している。外面の口縁部はナデ、体部は削り。内面はナデ。内外暗黒灰色。17は口縁部が屈曲して短く外反し、内外口縁部はナデ、体部はハケである。色調は、外面口縁部は黄橙色、体部は鈍い暗褐色。内面は黄橙色。18は口縁部の屈曲が長いもので、外面の体部は器面が剥落しているので観察できないが、外面の口縁部と内面はナデ。色調は内外にぶい暗褐色。19は口縁部が大きく外傾したもので、身が浅くなるものと思われる。口唇部はナデで平坦にされており、外面は、口縁部はナデ、体部は削り、内面はナデ。内外黄白色を呈す。20は19同様傾きの大きいもので、口縁部は屈曲後やや内湾し、口唇部は上端がやや伸びる。色調は外面漆黒色。内面暗灰褐色。21は口縁部が肥厚して玉縁状をなし、上端がやや伸びる。外面は口縁部がナデ、体部は削り。内面はナデ。色調はにぶい暗褐色、内面は黒灰色を呈す。22は、外傾が弱く、口唇部が上に伸びている。外面は口縁部がナデ、体部は削り、内面はナデ。色調は、外面は煤が付着しており暗褐色、内面はにぶい黄褐色。23は口縁部が短く外反するもので、口縁部のみ器壁が薄くなっている。外面は、口縁部はナデだが、体部は摩滅しているため不明。内面はナデ。24は、口縁部は肥厚して断面三角形状をなし、外面口縁部はナデ、体部は押さえ、内面は、口縁部はナデ、体部は板ナデ。色調は、外面は煤付着のため漆黒色。内面は灰黒色。25は口縁部が肥厚して断面三角形状をなし、外面口縁部はナデ、体部は削り、内面はナデ。色調は内外灰黒色。26は口縁部が肥厚して断面三角形状をなし、上端は丸みを持つ。外面口縁部はナデ、体部は削り、内面はナデ。色調は外面暗褐色、内面明黄灰色。27は口縁部が肥厚して断面三角形状をなし、上端は尖っている。外面口縁部はナデ、体部は削り、内面はナデ。色調は内外暗褐色を呈す。28は



第55図　4号溝東辺石積み部実測図・土層断面図（1/60）

口縁部が屈曲しないものか屈曲部分そのもので、縁部は肥厚しており上端が尖るもので、外面は摩滅しているが削り、内面は削り。色調は外面にぶい明灰白色。内面灰白色。29は片口の口縁部で、内外ナデで、内面には摺り目があるが単位は不明。色調は、外面灰黒色。内面灰褐色を呈する。30は口縁が肥厚して小さな玉縁状を呈し、内面に3本単位の摺り目をもつ。復元口径29.4cm。外面は、口縁部はナデ、口縁下は押さえ。体部は削り。内面はナデ。色調は、外面は煤が付着しているため漆黒色。内面は灰黒色。31は口縁部が外傾した後やや内湾するもので、復元口径は19.3cm。外面の口縁部はナデ、体部は削り。内面はナデ。色調は外面煤付着のため暗茶褐色、内面はにぶい灰褐色。32は外面口縁下に方形突帯をつけて鍔とした羽釜で、口縁部はナデ、体部はハケ。内面はハケ。色調は、外面口縁部は黄白色だが、鍔下は暗褐色。内面は黄白色。33は口縁下に細長い鍔がつくもので、口唇部は尖っており、内傾する。色調は、口縁部は黄白色、鍔下は暗褐色。内面は黄白色を呈する。34は口縁下に断面長方形の鍔がつくもので、外面の鍔上は横ナデ、鍔下は指ナデ。内面は板ナデ。色調は内外にぶい黄褐色で、口縁部は煤が付着する。

瓦質土鍋（35～41）　35は、口縁部は外傾し、肥厚している。内外ナデで、色調は、外面は煤が付着しているため黒褐色。内面黄橙色。36は大きく外傾し、内外ナデ、色調は内外黄白色。37は口縁部がやや大きく外反し肥厚する。形態から近世の瓦器である高村焼の鉢の可能性もある。内外ナデ・色調は外面黄白色、内面青灰色。38は口縁が大きく外傾し口唇部は肥厚して丸くされている。内外ナデ。色調は、外面は煤が付着しており暗黒褐色、内面は黄橙色。39は口縁が肥厚して大きく外傾し、内外ナデ。色調は、外面は煤が付着しており暗黒褐色、内面は黄橙色。40は口縁が外傾し、復元口径25.6cm。外面は、上半はナデ、下半は削り、内面はナデ。色調は外面が煤つきのため漆黒色、内面は暗黒褐色。41は口径が外傾するもので、復元口径37.6cm。外面口縁部は横ナデ、体部は板ナデ、内面は口縁部がナデだが、体部は摩滅のために観察できない。色調は内外黄白色から黄橙色を呈する。

瓦質湯釜（42）　耳部で、縦断面・横断面とも台形で、径7mmの孔が開けられている。内面は押さえの後ハケ。色調は、外面は、上半部は灰白色で、下半部は煤が付着しているため暗褐色を呈する。内面は灰白色を呈する。

瓦質羽釜（43・44）　扁平な球形胴で、口縁が内湾するタイプの胴部片である。43は断面方形の突帯が肩部につく。外面は器面が剥落しており観察不能。内面はナデ後横ハケ。色調は外面煤付着のため漆黒色に変色、内面は明青灰色で、胎土は土師質に近い。44は長い突帯が肩部につくもので、外面は粗いナデ。内面はナデだが鍔より下は器面が剥落している。色調は外面が黄白色を基調としているが2次焼成を受け、赤化して淡赤橙色を呈する。内面はにぶい暗黄色を呈する。

瓦質鉢（45）　底部片で平底で、現存部では擦り目は見られない。内外ナデ。色調は灰黒色を呈する。

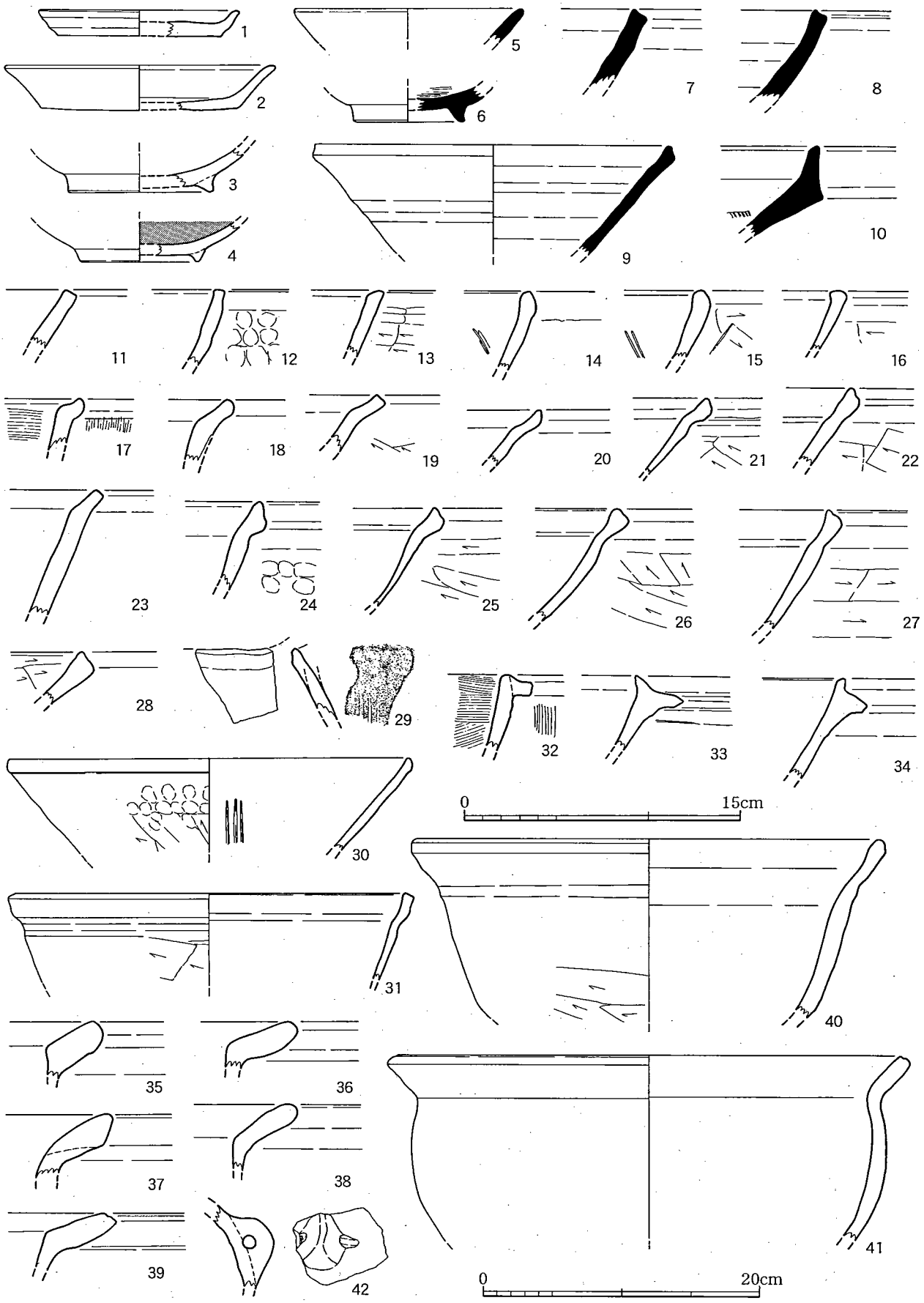
瓦質火鉢（46・47）　46は口縁部で、外面は２条の小さな貼り付け突帯の間に菊花文のスタンプが入る。内外ナデで、色調は内外黄橙色。47は底部で断面長台形の脚がつく。内外ナデ、色調は外面灰白色、内面灰黒色を呈する。

瓦質摺鉢（48～50）　底部片で、48は平底で、外面は器面が剥落しているため明確でないが、外面にハケかあるいは回転台の板状痕跡が見られる。内面にはナデの後８本単位の擦り目が入る。内外淡灰色を呈する。49は平底で外面がナデ、内面はナデの後単位不明の擦り目が入る。擦り目は底部には同心円状に入り、体部には縦方向に入る。色調は外面淡黄灰色、内面灰黒色。50はやや丸みをもつ平底で、外面は横位の削り、内面はナデ後６本単位の擦り目が入り、胴部は縦方向だが、底部は同心円状に入るものと思われる。外面暗褐色、内面にぶい褐色で土師質に近い胎土である。

緑釉陶器（51）　胴部片で、小片のため傾きは不正確。内面は横ナデ。

青磁椀（52）　底部片で、外面は、釉は底部までかかっておらず下位は露胎、釉は黄緑色、胎は灰白色。同安窯系である。

青白磁合子（53）　身部で、復元口径4.8cm、器高2.3cmである。外面には凹線が入る。釉は青灰



第56図　4号溝埋土出土遺物実測図1（9・30・31・41は1/4、他は1/3）

色で、外面の体部下位までかかっており、それ以下から外底は露胎である。内面は全面釉がかかる。胎は灰白色。

白磁椀（54～62・65・66）　54～62は口縁部で、54は玉縁口縁で、釉は緑がかった乳白色で、胎は灰白色。55は小さな玉縁口縁で、釉は乳白色、胎は灰白色を呈する。56は、釉は乳白色、胎は灰白色。57は口唇部が短く外傾するもので、釉は緑がかった乳白色、胎は灰白色。58は口縁外面が肥厚し、小さな玉縁を持つ椀の口縁部で、釉は乳白色、胎は灰白色。59は小さな玉縁口縁で、釉は乳白色で、胎は灰白色。60は口縁外面が小さく外傾するもので、釉は乳白色、胎は灰白色を呈する。61は口縁外面が内面に丸身を持って小さく外傾するもので、釉は乳白色、胎は灰白色を呈する。62は口縁端部がやや外反するもので、釉は乳白色、胎は灰白色を呈する。65・66は底部片で、両者とも外に張り出す断面逆台形の高台が付き、釉は乳白色、胎は灰白色を呈する。65は復元底径6.4cmで、外面はヘラ削りである。66は復元底径5.8cmで、外面は体部の下位まで釉がかかり、下位は露胎。外面はヘラ削り。

白磁皿（63・64）　63は上げ底で復元底径4.0cm。外底は露胎、釉は乳白色、胎は灰白色を呈する。64は、復元底径3.6cmで、外面はヘラ削りで露胎、内面は乳白色の釉がかかる。胎は灰白色。

縄文土器深鉢（67）　口縁部で、内外横位・斜位の二枚貝条痕で、色調は外面黄橙色、内面黒灰色を呈する。

68～75は弥生後期から古墳時代前期の土器である。

鉢（68・71）　口縁部は外傾した後口唇部が上に伸びる。復元口径20.5cm。外面は口縁部がナデ、体部は荒いナデ。内面は、口縁部はナデ、体部は上位がハケで下位は削り。色調は内外黄橙色。71はややひずんでおり、復元口径13.6cm、器高6.8cm。内外摩滅しているため調整は観察できない。色調は内外黄白色。

甕（69・70）は口縁が大きく外反する甕の口縁部で、復元口径17.0cm。器壁が薄いことから庄内甕であろう。外面はハケ、内面はナデ。色調は黄白色。70は布留式甕の口縁部と思われ、内湾している。内外ナデで、色調は、外面は変色しており暗黄白色から暗褐色、内面は暗黄白色。

高杯（72・75）　杯部で、口縁部と杯部の接合部の外面は段をなす。内外ナデ、色調は内外黄橙色。胎土は精良。75は高杯の脚部だろう。復元裾径18.6cmで、外面ハケ、内面ナデ。色調は黄白色を呈する。

小型丸底壺（73）　口縁は内湾しつつ直立気味に立ち上がる。復元口径8.2cm。外面は口縁部ナデ、肩部は押さえ、内面はナデの摩滅。復元口径19.0cm。

柄杓（74）　手捏ねの小型品で、色調は黄橙色から黄白色を呈する。

須恵器杯（76・80～82）　76は椀の口縁部で、口唇部がやや外傾する。内外ナデ。色調は内外青灰色。80～82は椀の底部で、断面方形の高台がつく。80は復元高台径8.1cm。内外ナデ、色調は内外青灰色。81は復元高台径9.2cm。内外ナデ、色調は内外青灰色。82は復元高台径15.6cm。内外ナデ、色調は内外青灰色。

須恵器壺（77）　底部片で、外底はヘラ削り、内底は未調整。

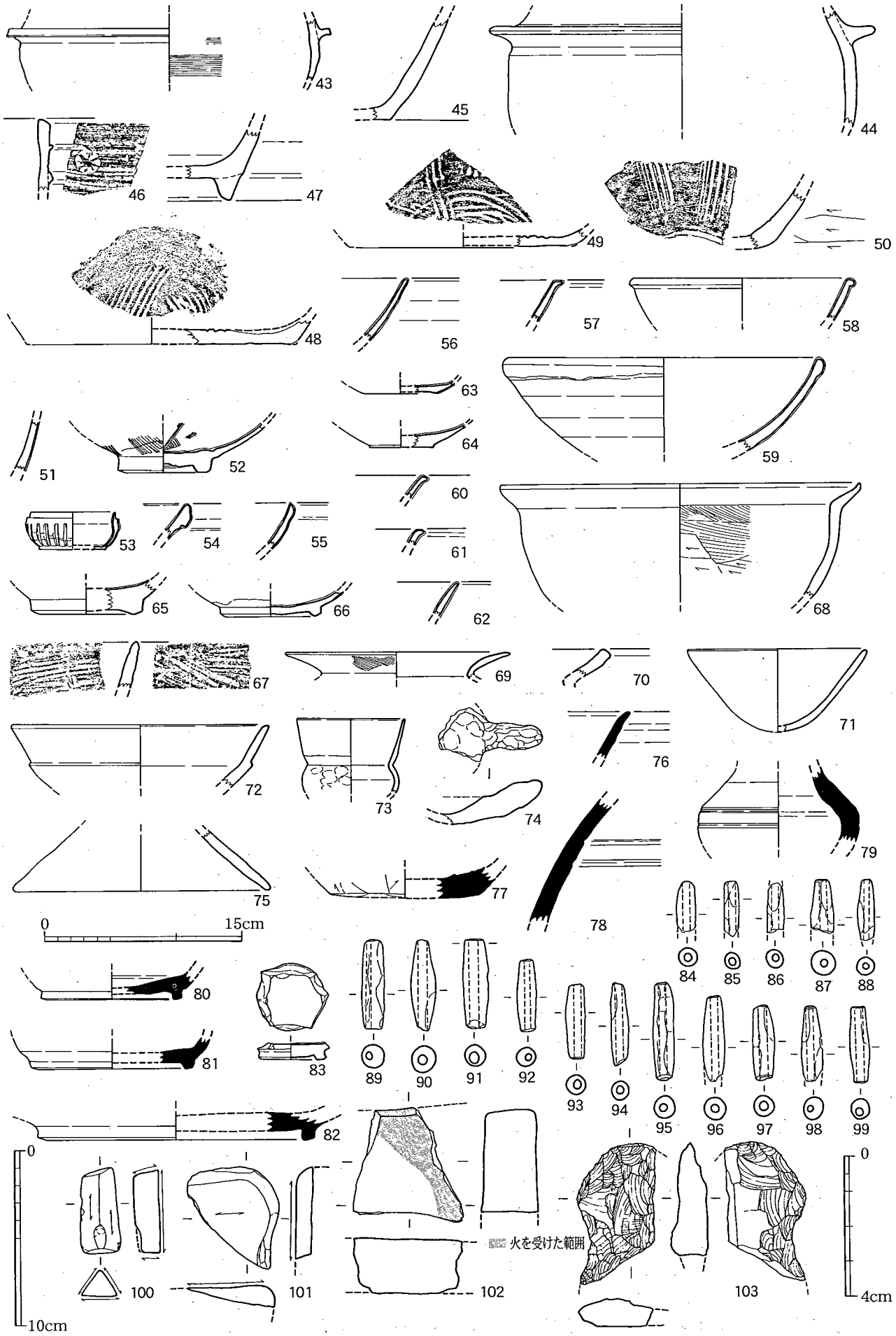
須恵器大甕（78）　頸部で、中位に沈線が２条入る。内外ナデ。色調は外面灰黒色、内面青灰色を呈する。

須恵器瑠（79）　胴部片で、最大径9.0cm。肩部と胴部中央に沈線が入る。内外ナデ、色調は内外青灰色。

白磁皿転用円盤状製品（83）　底部を再利用したもので、径3.8cm、高さ1.0cm。外面はヘラ削りで露胎。内面は乳白色の釉がかかっている。上から側縁を打ち掻いている。

土錘（84～99、表２）　中央が膨らむものと、円柱状をなすものがあるが、大きな差は見られない。欠損しているものもあるが、長さ4.4cm～5.5cm、最大径0.9～1.5cm、重量4.8～8.0ｇに纏まる。

砥石（100・101）　100は手持ち砥石で、三角柱状をなす。5面全面が使用されている。いずれの面も平坦であり、使用による窪みはない。長さ4.7cm、幅2.3cm、重量20.9g。頁岩を使用している。



第57図　4号溝埋土出土遺物実測図2（68～75は1/4、103は2/3、他は1/3）

101は置き砥石で、使用面はよく使われており平坦である。多面は欠損しているため、1面しか確認できない。硬質砂岩を使用しており、自然礫を利用している。

不明石製品（102）　断面は欠損しているが方形を呈するものと思われる。高さは3.5cm。表面に煤が付着している。石材は軟質の凝灰岩で、重量は192.7g。

打製石器未製品（103）　側縁は打ち掻きが見られるが、刃をなすものではないようである。長さ3.2cm、幅2.1cm。重量8.6ｇ。姫島産黒曜石製。

銅製金具（104）　紐を緊縛すると思われる方形の部位と、それと一体になっている輪部と、これと組み合っている輪部がある。

鉄製品（105～114）　105は小型のノミか鏨であろう。刃部らしいものがある。長さ5.0cm、幅1.5cm、厚さ８㎜。106・107・109・112～114は不明鉄製品で、106は上下欠損で、長さ3.7cm、幅1.2cm、厚さ４㎜。107は欠損した端部で、長さ3.3cm、幅９㎜、厚さ６㎜。108は先端が曲がっているので、釘の可能性がある。長さ1.6cm、幅1.5cm、断面径３㎜。109は上下欠損で、長さ3.4cm、幅1.2cm、厚さ３㎜。110・111は断面径2㎜ほどの細長いもので、釣針・針・穿孔具などの可能性がある。110は長さ2.6cm。111は5.3cm。112は欠損した端部で、長さ4.0cm、幅５cm、厚さ５㎜。113は薄い板片で、長さ3.0cm、幅1.4cm、厚さ１㎜。114は板片が湾曲したもので、長さ2.0cm、幅1.0cm、厚さ３㎜。

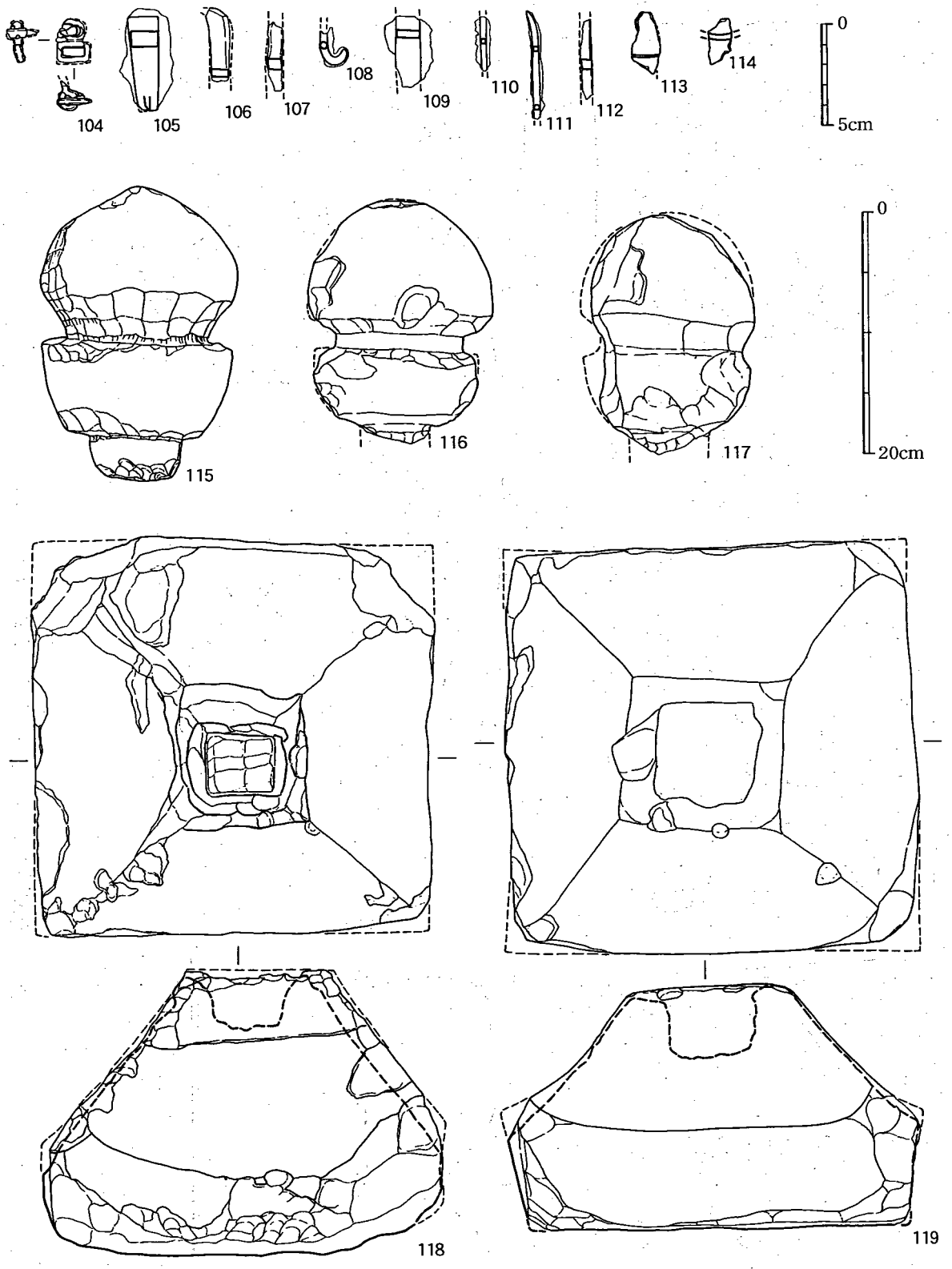
表２　４号溝出土の土錘計測表

（単位cm、ｇ）

番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量
84	(2.9)	1.1	(2.7)	88	(3.5)	1.4	(3.0)	92	4.1	1.1	4.8	96	(4.7)	1.3	(6.6)
85	(3.1)	1.1	(2.0)	89	5.1	1.3	9.1	93	4.7	1.1	4.8	97	4.3	1.3	4.7
86	(2.7)	1.0	(2.5)	90	5.2	1.5	8.0	94	4.8	1.1	4.4	98	(4.4)	1.6	(4.8)
87	(3.0)	1.4	(5.0)	91	5.0	1.4	6.1	95	5.6	1.2	7.2	99	4.3	1.2	5.0

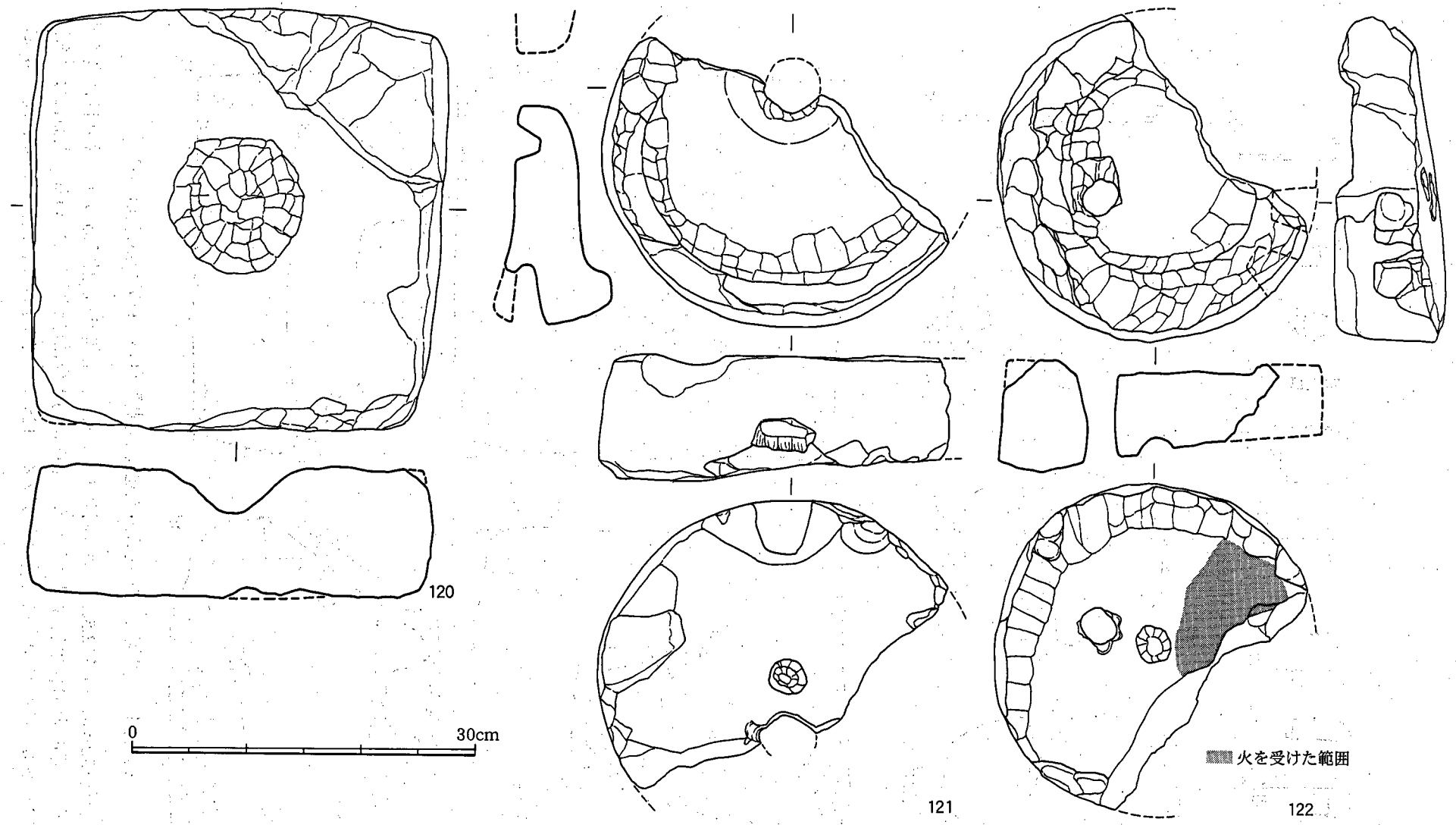
五輪塔部材（115～120）　集石に利用されていたもので、115～117は五輪塔の空風輪で、118・119は火輪、120は地輪である。115は完形で頂部が尖っており、空輪の下部は削られているため、中位に稜をもつ。風部は下部に向かって湾曲している。116・117は欠損部が多いため、頂部の形状は不明確だが、全体は逆卵形で、空・風輪の間には台形の溝が入る。頂部は半球状なので、尖りや突起はないものと思われる。いずれも灰白色の凝灰岩製。115は長さ24.4cm、幅15.8cm。116は長さ20.0cm、幅15.7cm。117は長さ19.6cm、幅13.5cm。118・119は四隅を欠損しており軒先が不明瞭であるが、棟の湾曲から見て大きく反らないと思われる。118の裏面は湾曲しているが、119の底面はほぼ平坦。頂部には方形のほぞ孔があり、ノミ痕がよく観察される。柔らかい多孔質の凝灰岩製である。118は32.7×33.0cmで高さ23.8cm。119は34.0×33.5cm、高さ20.1cm。120はほぼ完形で平面正方形、断面長方形を呈する。36.8×35.7cm、高さ11.3cm。中央に円形の浅い窪みがある。灰白色の凝灰岩製。

石臼（121～126）　挽臼で、121は半欠の上臼で欠損が多い。径約16cm、高さ9.4cm。皿受けは浅く、突帯内面側はノミ痕をよく残している。供給口は平面円形で、裏面には軸受けの孔が見られ、擦り目は残っていないか、本来無かった可能性もある。側面には挽手孔があけられている。良く使われているので、軸受け孔周辺と側縁部を残して面が擦り減っている。硬質凝灰岩製で、淡青灰色を呈する。122は1/4残存する上臼で、つくりが粗く、上面と下面が平行でない。径約14.5cm、高さ9.8cm。皿受けは浅く、側縁の突帯は扁平で、上面にもノミ痕を良く残す。供給口は平面方形を呈する。下面には擦り目はなく、中央に軸受孔がある。柔らかい凝灰岩製で、灰白色を呈するが、下面には煤が付着する部分がある。123はほぼ完形の上臼で、径16.8cm、高さ13.3cm。皿受けは浅く、周縁部の断面方形の突帯内面側はノミ痕をよく残している。下面には擦り目が無く、側面には挽手孔がある。上面には供給口があり、上下両面から穿たれている。孔の平面形は正方形で、ノミ痕を良く残す。下面中央には浅い軸受け孔がある。柔らかい凝灰岩製で、白灰色を呈す。124は上臼の

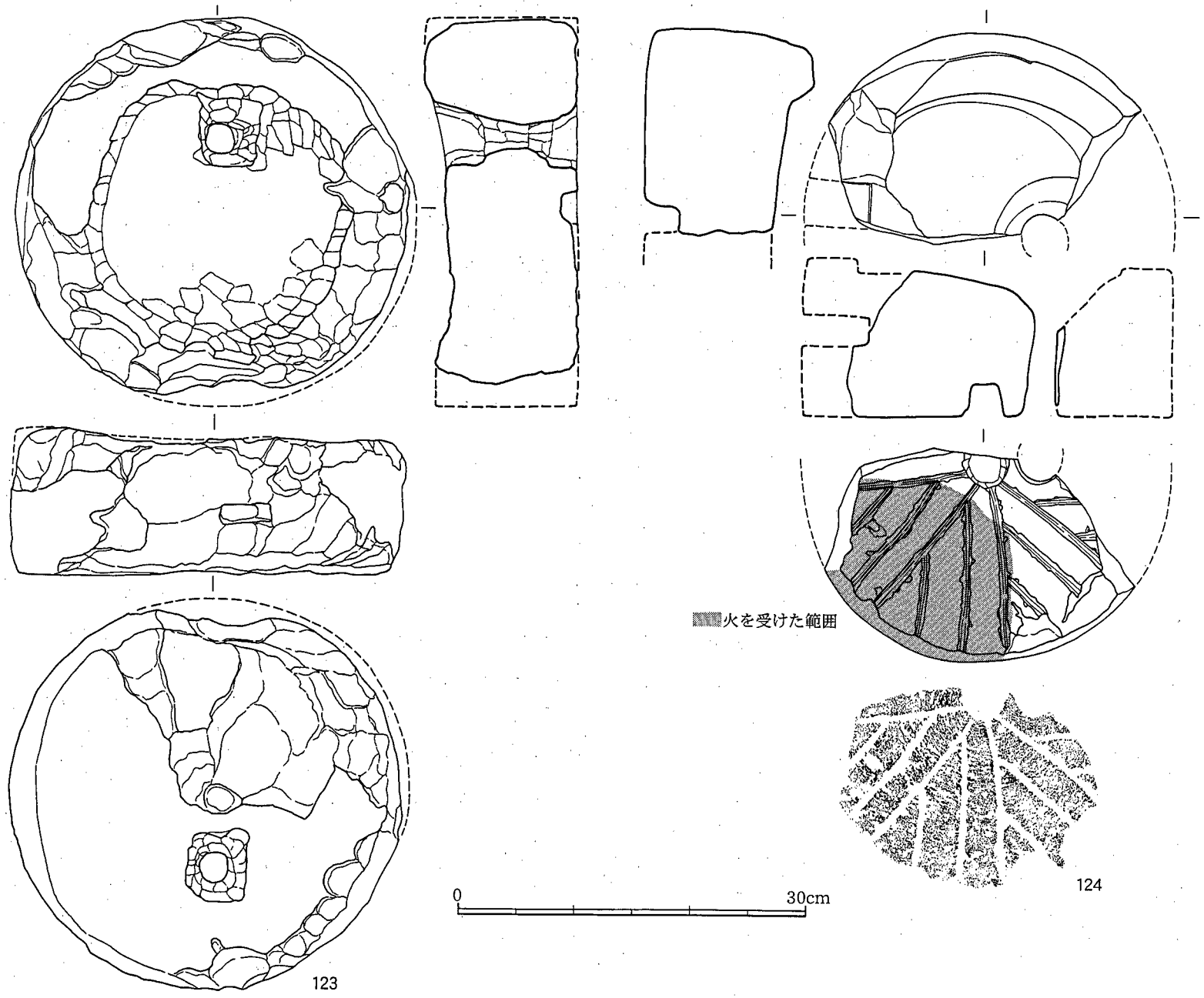


第58図　4号溝埋土・集石出土遺物実測図（115～119は1/5、他は1/3）

1/3残欠で、径15.5cm、高さ12.5cm。擦り目は3本単位で、全体で8分割であろう。擦り目は良く残っているが、同心円状の使用痕も認められる。下面は約半分に煤が付着している。上面には平面円形の供給口があり、下面に中央に軸受け孔がある。125は半欠の下臼で、面径15.8cm、高さ14.6cm



第59図　4号溝集石出土石製品実測図1（1/5）



第60図　4号溝集石出土石製品実測図2（1/5）

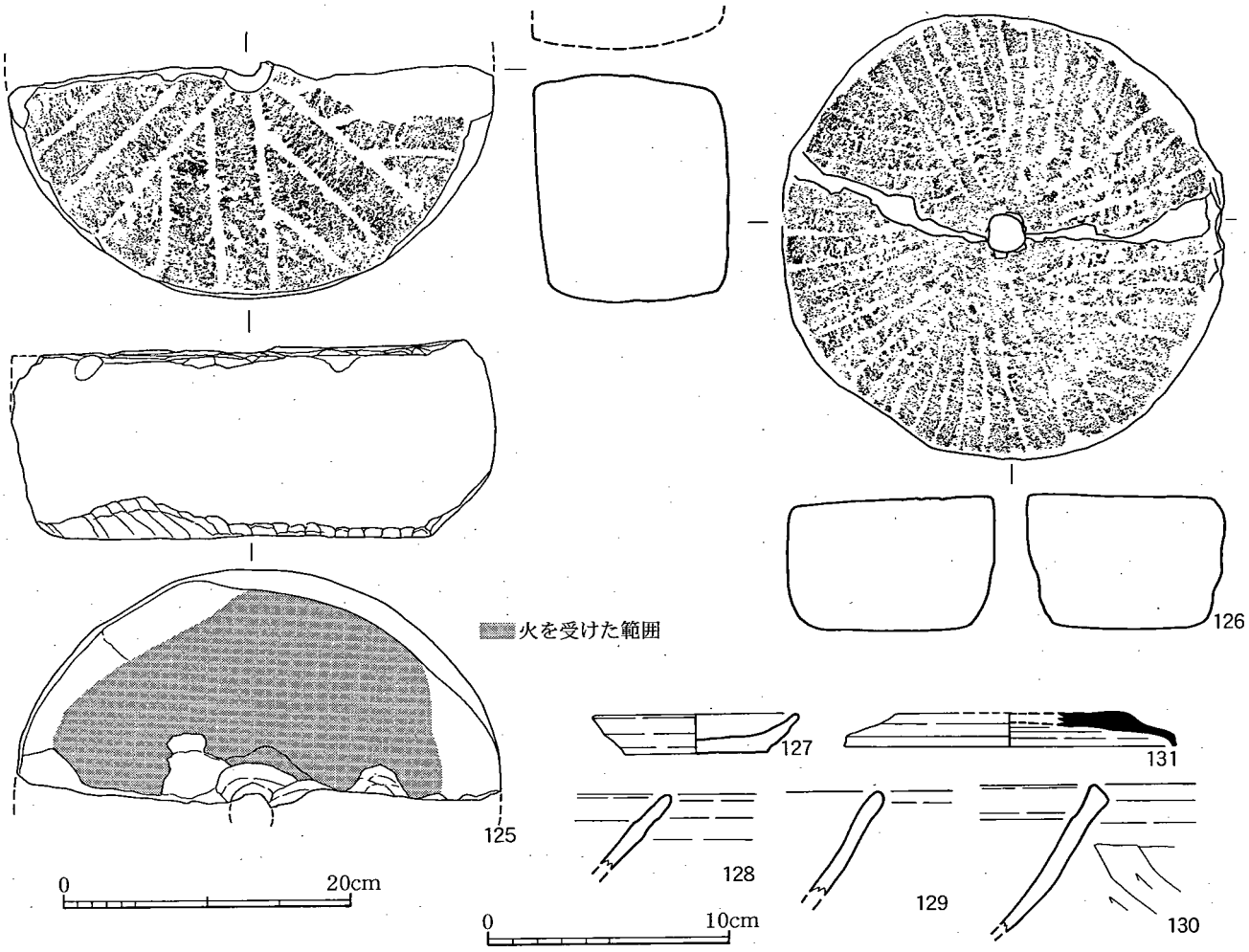
を測る。３本単位の擦り目が入り、全体では8分割されていると思われる。中央に下面から穿たれた軸孔があり、外面は丁寧に仕上げられていて平滑である。硬質の凝灰岩で、淡青灰色を呈すが、下面に煤が付着している。126は完形の下臼で、径15.3cm、高さ14.3cmを測る。擦り目は10～12本単位で、４分割されている。良く使われているので、軸孔周辺を残して、面が擦り目が減っている。減っている部分には同心円状の使用痕が残っており、目が擦りきれている部分もある。側面は欠損が多く、旧状がほとんど残っていない。中央に下面から穿たれた軸孔が開いている。石材は硬質凝灰岩製で、淡白灰色を呈する。

127～130は集石の裏込め出土である。

土師器小皿（127）　内外ナデで、底部は糸切り。復元口径8.6cm、底径5.8cm、器高1.4cm、色調は内外黄橙色を呈する。

瓦質鉢（128～130）　傾きが小さく身の浅いもので、内面の口縁下に小さな段がつく。外面口縁部は横ナデ、胴部は斜位のナデ、内面はナデ。色調は、外面は煤が付着しているので暗黒色に変色している。内面はにぶい暗黄灰色。129は傾きが小さく身の浅いもので、口縁部がわずかに外反する。調整は外面は口縁部がナデ、胴部は器面が剥落している。内面はナデ。色調は内外漆黒色を呈する。130は傾きが小さく身の浅いもので、口縁部が肥厚して断面三角形を呈し、内面口縁下に小さな段を有する。外面は口縁部がナデ、胴部は斜位の削り。内面はナデ。内外黄橙色を呈す。

須恵器蓋（131）　口縁部が湾曲するもので、外面はナデ、天井部は回転ヘラ削り。復元口径は13.5cm、器高1.4cm。内外青灰色を呈する。



第61図　４号溝集石・裏込め出土遺物実測図（125・126は1/5、他は1/3）

5．近世の遺構と遺物

1．土坑

近世の土坑は５基検出されたが、時期を特定できるものは少なく、周囲との遺構との関係から近世と想定した。

２号土坑（図版4-2、第62図）

中央調査区南端の平坦面に位置する。正方形の南東コーナーから南辺を一にする長方形が派生するような平面プランで、深さも正方形側が若干深い。２つの土坑が切り合ったものかもしれないが、検出時には判別できなかった。人頭大の円礫が床面に見られるが、長方形部分に密に見られ、正方形側では床面の端部に集中している。遺物は少なく、近世陶器・瓦器がわずかに出土している。時期は比定しにくいが、南区の遺構に近い18c～19c代であろう。

出土遺物（図版38-2、第63図）

瓦質鉢（１・２）　１は片口の口縁部で、調整は押さえのみ、色調は黄白色を呈する。２は平底で、摩滅しているため調整は不明。色調は淡灰褐色を呈す。

十能（３）　半円形の柄部と思われる。

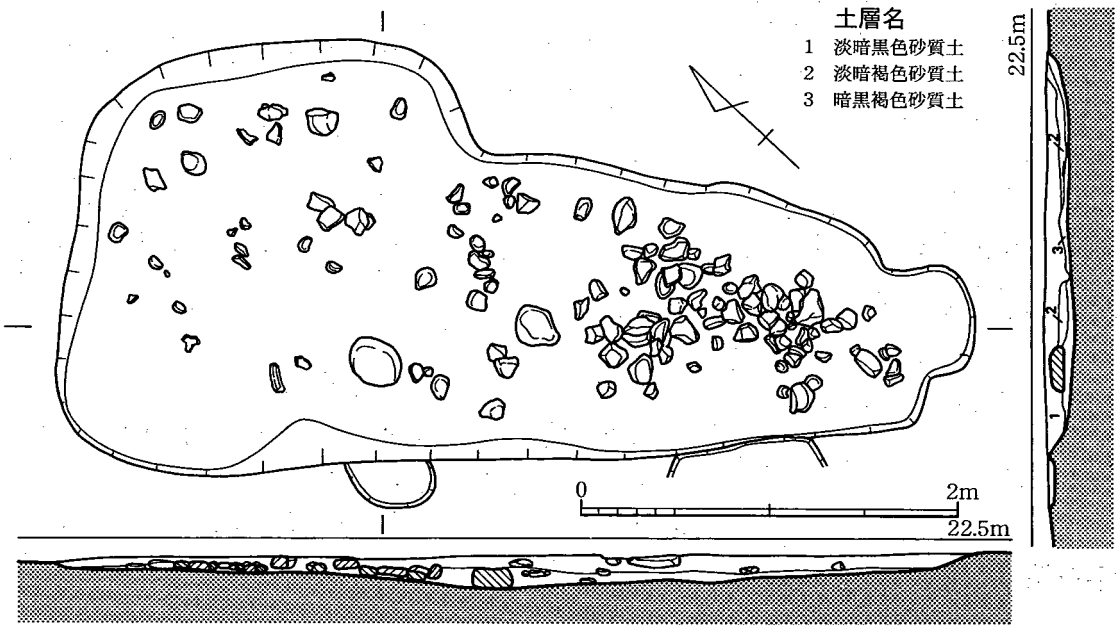
須恵器甕（４）　肩部片で、ヘラ記号らしい破線がみられる。内外青灰色。

瓦質火鉢（５）　口縁部で、復元口径は30.5cm。口縁部は逆L字形で、口縁淡部が肥厚して断面玉縁状を呈する。外面はナデ後磨き、内面はナデ。色調は灰黒色だが、燻された銀色。

14号土坑（第65図）

南端区の北東寄りで検出した土坑。平面形は略円形で長さ1.40m、幅1.15m、深さ0.25mを測る。土坑内からは８つの礫が存在する。これらは底面から若干浮いた状態にあり、石の下端レベルがほぼ一に揃っている。このことから木棺を埋置した墓である可能性も考えられよう。

時期は遺物が少ないため特定できない。



第62図　２号土坑実測図（1/40）

15号土坑（第65図）

南端区の北壁寄りで検出した土坑。平面形は隅丸方形で一辺の長さ2.50m、深さ0.35mを測る。底面は摺鉢状に近い。

時期は遺物が少ないため特定できない。

16号土坑（図版7-1、第65図）

南端区の東壁寄りで検出した土坑。平面形は卵形で長軸長1.35m、短軸長0.90m、深さ0.50mを測る。壁の立ち上がりは直に近く、底面はフラットになる。

時期は遺物が少ないため特定できない。

17号土坑（図版7-2、第65図）

南端区の東壁寄り、1号石列に接する部分で検出した土坑。平面形は円形で長軸長0.85m、短軸長0.80m、深さ0.35mを測る。土坑内には10～20cm程の礫が充填されているが、配置の規則性は見られない。時期は18c～19c代であろう。

出土遺物（図版38-2、第64図）

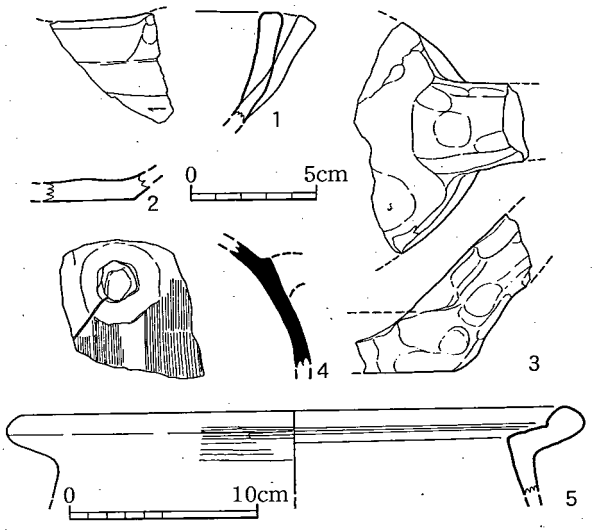
染付椀（1）　灰色の胎に緑味がかった灰色釉を施す。外面に呉須で草文を描く。内面に細かい貫入が入る。畳付は露胎となり砂目が残る。復元口径12.4cm、復元高台径4.6cm、器高7.0cmを測る。

土師質土器甕（2）　口径70.0cm、器高69cmあまりの大形の甕。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がナナメ方向のケズリ、体部内面がナデ、体部外面の底部近くには指頭圧痕が残る。胎土は精良で、色調は明黄褐色。

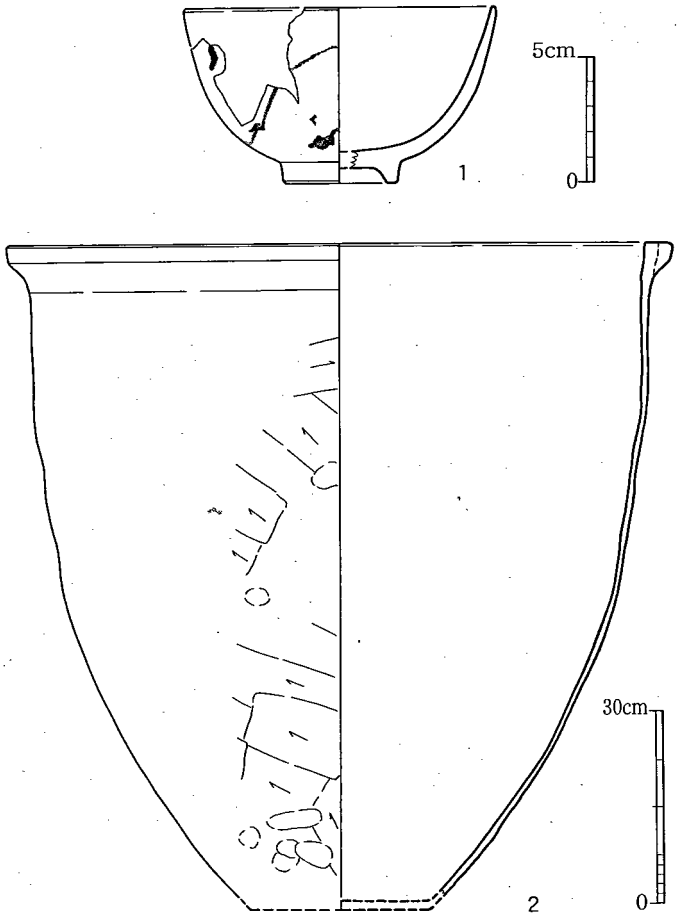
18号土坑（図版7-3、第65図）

土坑17の北西部で検出した土坑。平面形は円形で径0.75mを測る。底面は二段になっており、あるいは桶状遺構の桶抜き取り痕とも考えられる。

時期は遺物が少ないため特定できない。



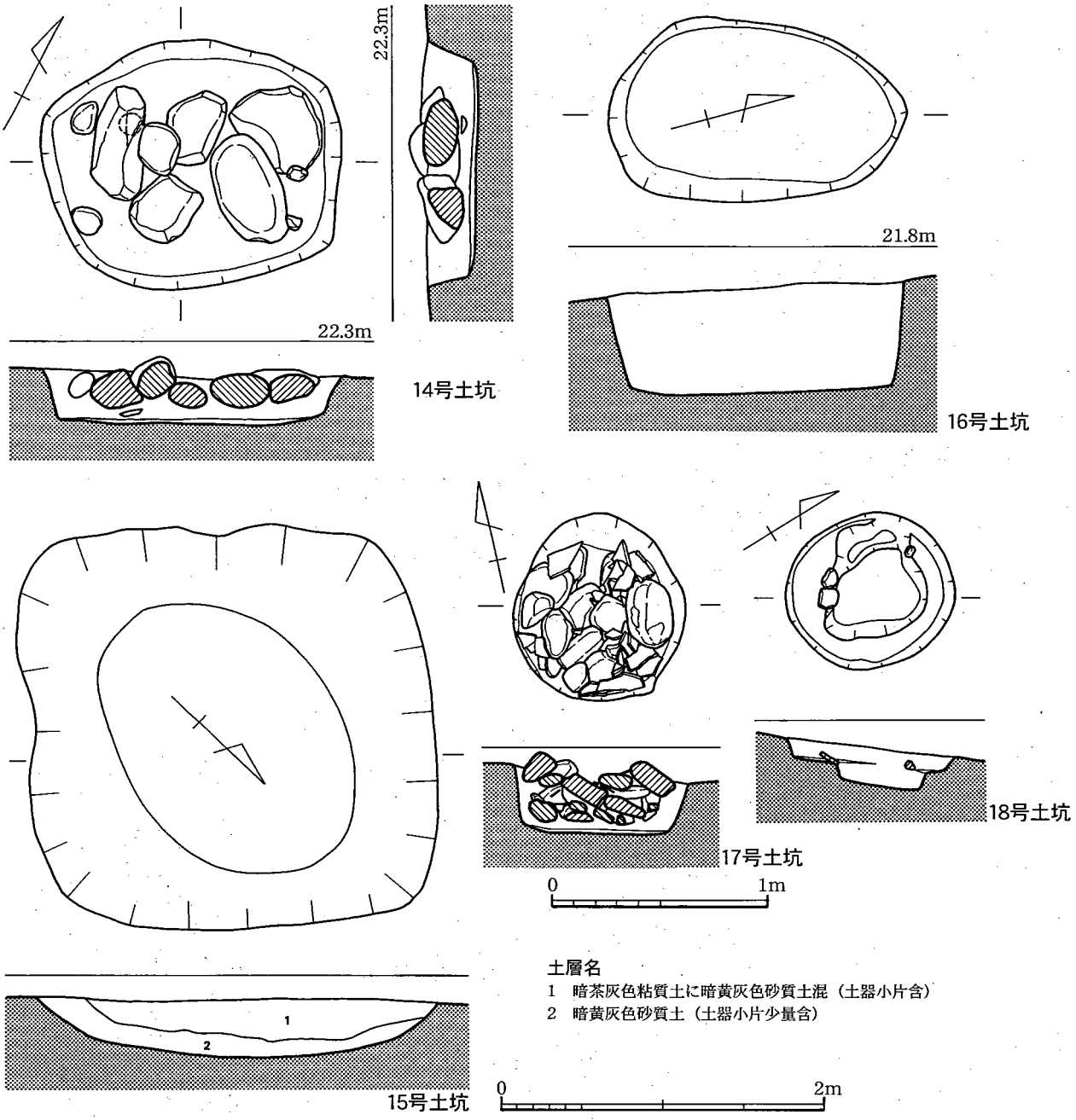
第63図　2号土坑出土遺物実測図（4は1/4、他は1/3）



第64図　17号土坑出土土器実測図（1は1/3、2は1/8）

2．集石遺構

6号集石遺構（図版13-2、第66図）



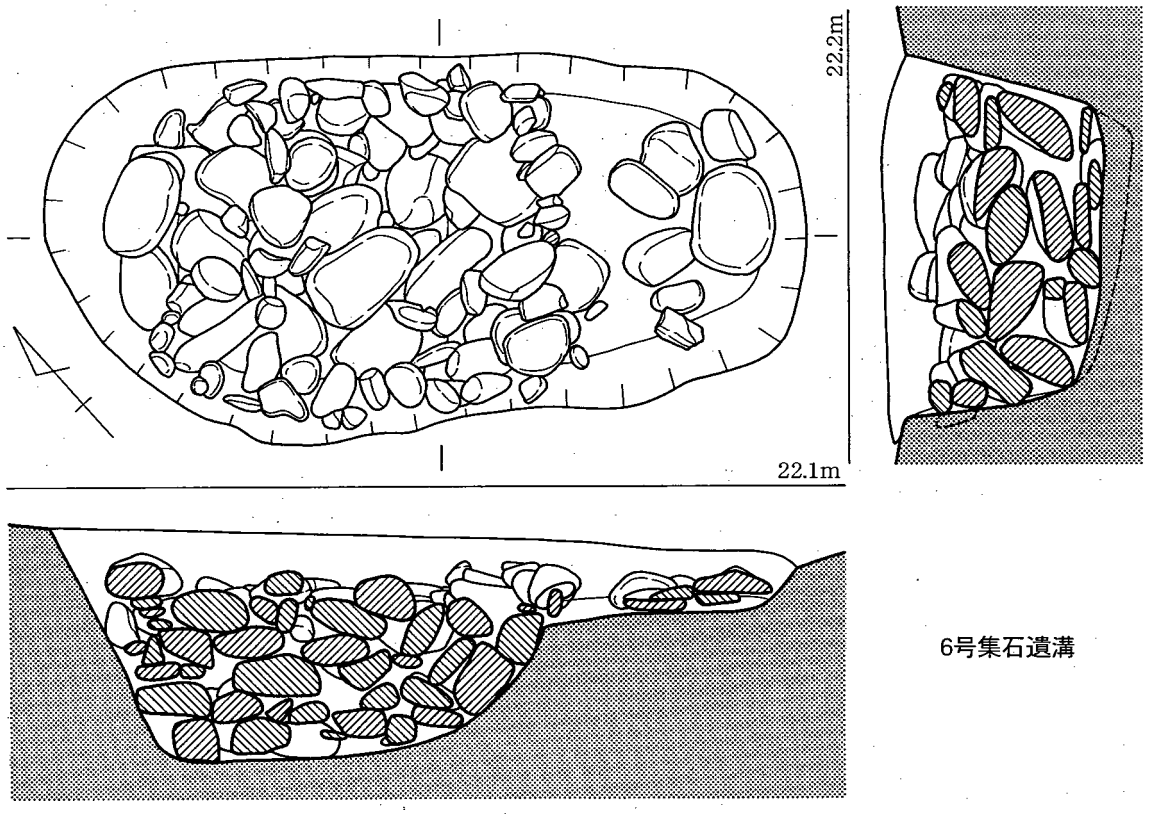
第65図　14～18号土坑実測図（1/30・1/40）

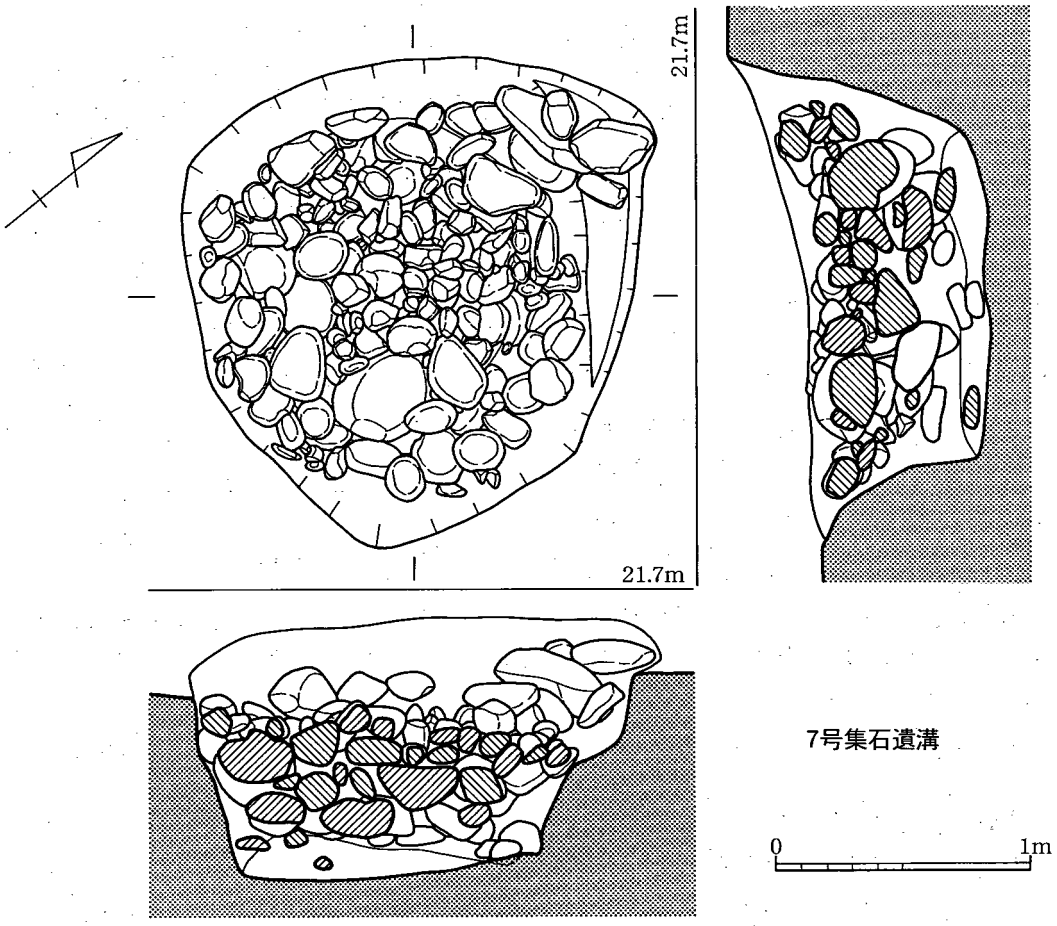
南端区の北東寄りで検出した。平面形は長円形で二段掘りとなる。上端は長軸長2.00m、短軸長1.00m、下端は径0.75mを測る。遺構内には径5～30cm程の礫が充填されているがテラス部分にはややまばらである。

時期は遺物が少ないため特定できない。

7号集石遺構（図版13-3、第66図）

南端区の南東隅部で検出した。平面形は不整円形で6号集石と同様に二段掘りとなる。上端径1.35m×1.20m、下端径0.8m×0.9mを測る。遺構内には特に中層から上層にかけて径5～25cmの礫が充填されているが下層はまばらである。時期は遺物が少ないため特定できない。





第66図　6・7号集石遺構実測図（1/30）

3．石列遺構

1号石列遺構

（図版14・15、第67・68図）

南端区の北東壁際に沿って検出した石列で約26m分確認した。重機による表土除去の段階では、特に北東側に礫が集石状に広がっていたため面の確認は困難であったが、最終的に石列は山国川と直交して築かれており、1～3段の石積みがなされていることを確認した。後述する1号道路状遺構や埋甕・桶状遺構の配置と考え合わせると、建物の基壇化粧を兼ねた区画施設であると考えられる。石列の控えの掘形は石列の面から幅0.9～3.6mと出入りが著しい。

裏込めは北側では径1m程の大きな礫をはじめとした大小の石で、中央部では黒色砂質土を充填した後に小礫で、南側の寄りでは黒色土で施している。

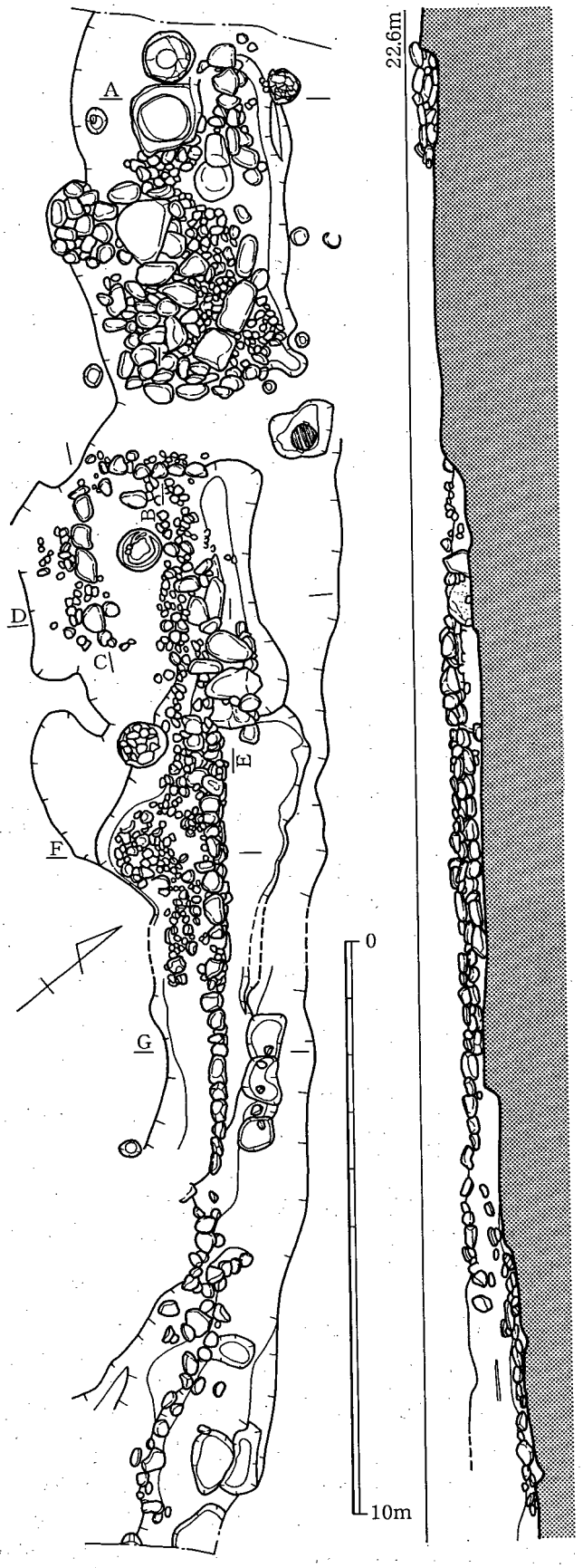
石列には中央部やや北寄りでとぎれる部分があり、これは通路と考えられる。通路幅は1mで硬化しており、両側は礫を並べて護岸している。また石列の中央近くには長さ1.6m、幅0.8mほどの張り出し部があり、ここには暗渠施設を設けている。この施設に伴う溝については北は先の通路状遺構まで、南は5mほど下った位置までは溝状になっているが、それ以南については不明確である。

時期は18c後半～19c前半代と考えられる。

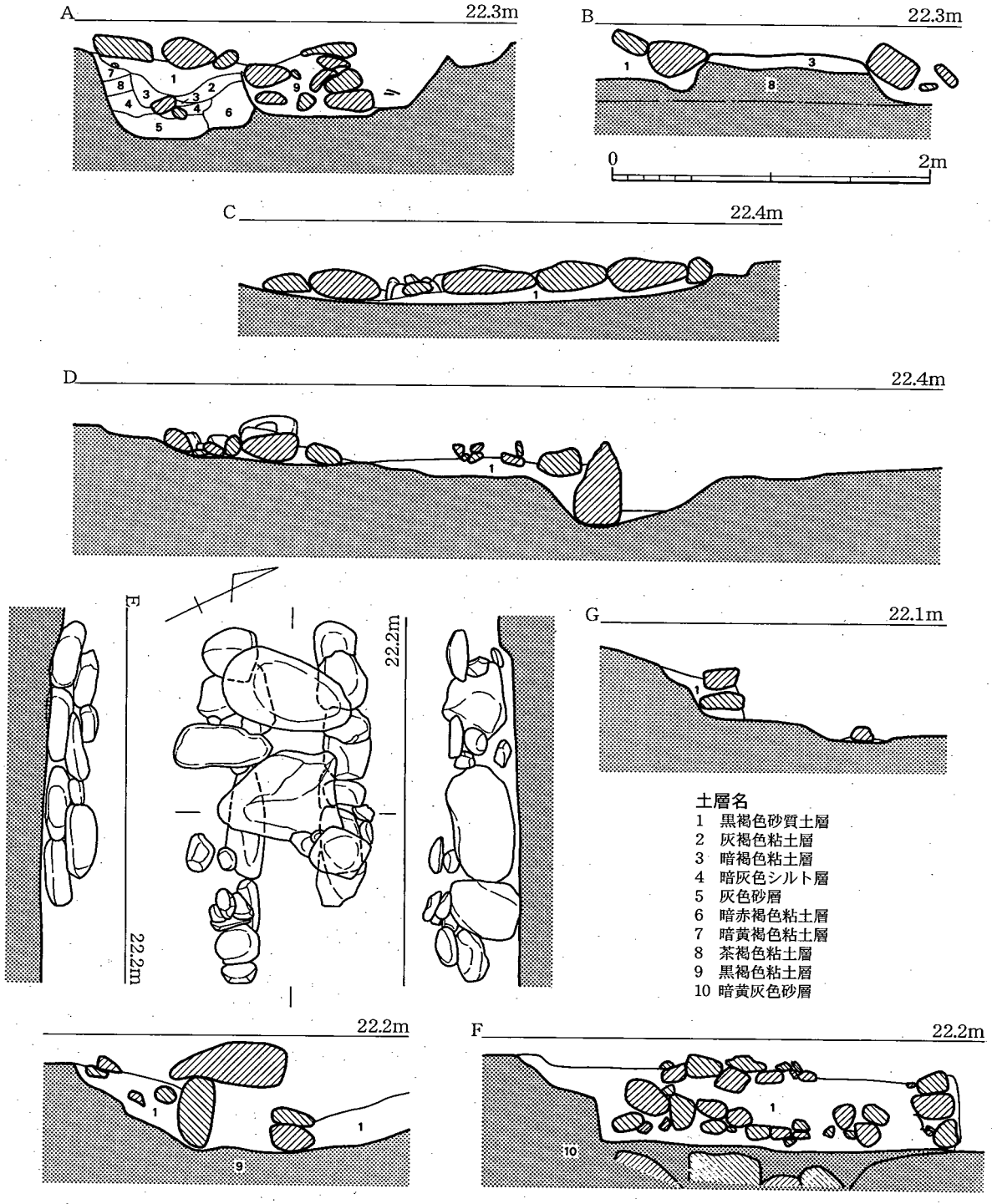
出土遺物（図版39、第69・70図）

1号石列を覆う集石から出土したものである。掲載したものは残りの良いもので、これ以外にパンケース1箱分の陶磁器類が出土している

染付椀（1～7）　1は茶灰色の胎に乳白色（口縁部は茶灰色）の釉を施す。外面の体部下位から底部にかけては露胎となる。外面にコバルト釉による施文がなされる。復元口径は8.2cm、復元高台径4.1cm、器高5.2cmを測る。2は白色の胎に透明釉を施す。畳付は露胎となる。全面に細かい貫入が見られる。外面には赤色で扇文、赤ないしは緑・白で萩と思われる草文を描く。口径8.2cm、高台径3.4cm、器高5.8cmを測る。3

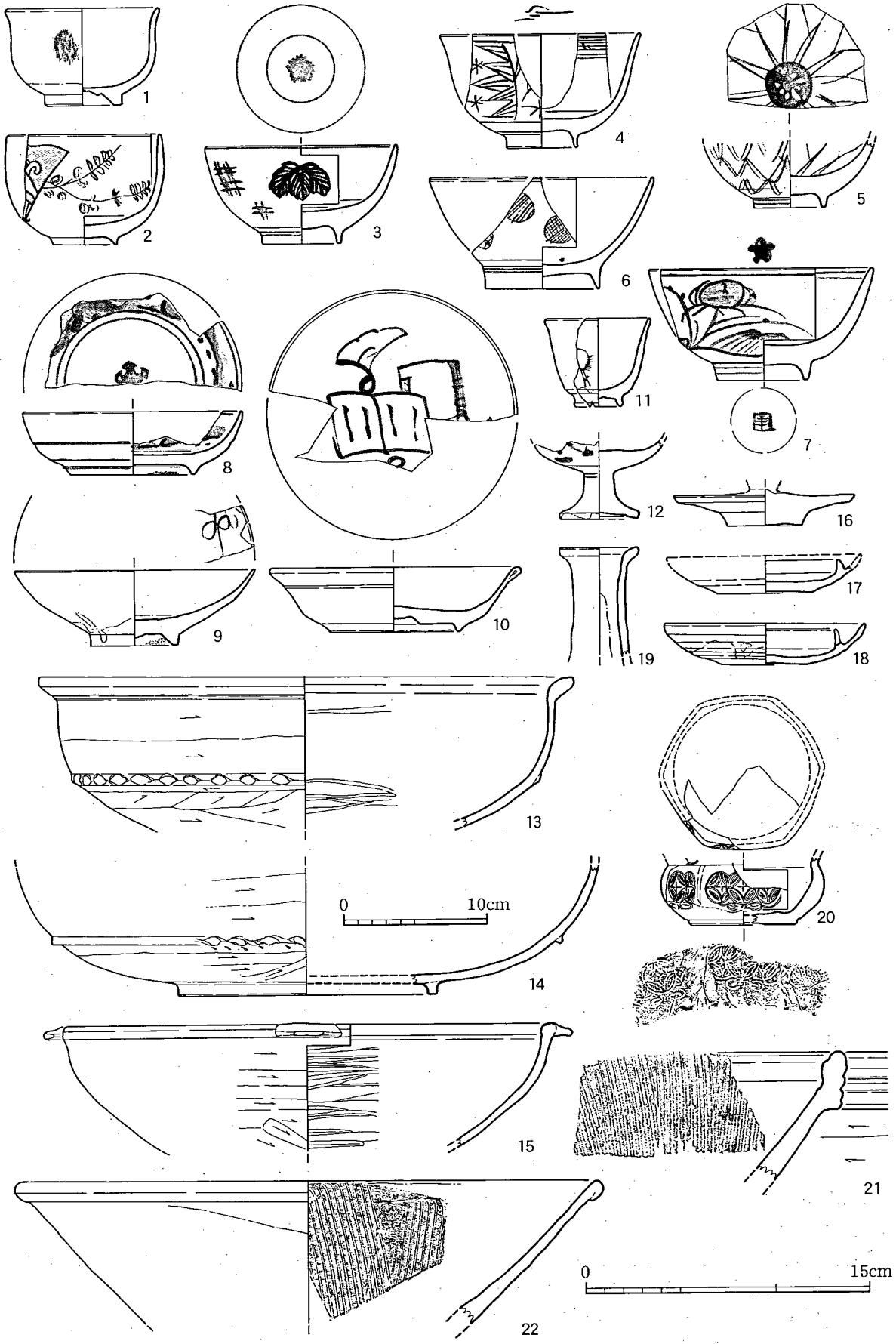


第67図　1号石列実測図（1/120）



第68図　1号石列土層断面図（1/40）

は白色の胎に透明釉を施す。外面には桐と「井」文を描く。上位の「井」は3箇所に、下位は2対1組で6箇所に配される。見込みには花文を描く。口縁部の内外面に各1条の、外面の体部と高台部の間に3条の界線を廻す。口径10.2cm、高台径4.2cm、器高5.2cmを測る。4は明灰色の胎に青みがかった薄い釉を施す。外面に青色の呉須で笹文を内面の口縁部に7条の平行線を廻す。畳付は露胎となる。復元口径10.6cm、高台径3.7cm、器高6.0cmを測る。5は白色の胎に薄い透明釉を施す。見込みに花文様の文様を配し、そこから放射状文を描く。外面は網目文。高台径3.8cm。6はいわゆる広東椀。灰色の胎に透明釉を施す。内外面に細かい貫入が入る。内面には3箇所に目跡が残る。外面には格子・平行線を入れた円文を散らす。復元口径11.9cm、復元高台径6.0cm、器高5.9cmを測



第69図　1号石列出土遺物実測図1（13～15は1/4、他は1/3）

る。7は灰色の胎に灰色がかった透明釉を施す。高台畳付の内側に砂目が残る。外面には草花文を描き、見込みにはコンニャク判で梅花文を押す。底部外面に書かれたものは落款か。復元口径11.8cm、復元底径4.8cm、器高5.9cmを測る。

染付皿（8～10）　8は灰色の胎に緑がかった透明釉を施す。高台畳付の内側に砂目が残る。畳付は露胎となる。見込みには緑色の梅花文がコンニャク判で押される。復元口径11.6cm、高台径6.6cm、器高3.3cmを測る。9は白磁の器形をしている。明灰色の胎に青みを帯びた灰色釉を施す。体部下半から底部にかけては露胎となる。高台畳付の内面には砂目が残る。見込みは輪状に掻き取る。口縁部内面には呉須で文様が描かれる。復元口径12.8cm、復元高台径4.6cm、器高4.0cmを測る。10の底部は蛇の目で、口縁部は外側に折り返して玉縁状にする。灰色の胎に薄い灰色釉を施す。復元口径13.2cm、底径6.8cm、器高3.4cmを測る。

染付猪口（11）　淡茶色の胎に黄味がかった灰色釉を施す。全面に細かい貫入が入る。体部外面の高台際から底部にかけては露胎となる。外面には黒で草文を描く。復元口径5.6cm、復元高台径2.4cm、器高4.7cmを測る。

仏飯器（12）　体部上半を欠く。外面には施釉するが、底部は露胎となる。底径4.2cm。

土師質土器こね鉢（13・14）　13の口縁部は屈曲して外反し、肥厚する。体部の中央には一条の突帯を廻し、棒状工具により押さえて刻みを入れる。調整は口縁部がヨコナデ、体部は内面がヘラミガキ。外面は突帯上位が横方向のケズリ、下位はヨコないしはナナメ方向のケズリ。色調は外面が暗黄褐色、内面が橙褐色。胎土は精良。復元口径は37.6cmを測る。14は13と同じ形状を呈する。色調は明黄灰色。復元底径18.2cmを測る。ともに高村焼と考えられる。

土師質焙烙（15）　丸く肥厚した擬口縁に外方に張り出す鍔状の口縁を貼り付ける。把手は幅3cmほどで、2箇所に設ける。調整は口縁部がヨコナデ、体部内面が横方向のミガキ、外面は横方向のケズリ。色調は暗黄褐色。胎土は精良で微砂粒を少量含む。復元口径35.0cm。

陶器蓋（16）　壺蓋でつまみを欠失する。胎は茶灰色で上面は濃い緑色の厚い釉を施す。底面は糸切り。

陶器灯明皿（17・18）　ともに茶灰色の胎に茶褐色の釉を施す。体部下半から底面はケズリで露胎となる。18は芯出が残る。17の復元底径5.0cm、18は口径10.6cm、底径4.2cm、器高2.2cmを測る。

陶器徳利（19）　徳利の首部。内面の上半から外面にかけて暗茶色の釉を施す。胎は茶灰色。口径4.2cmを測る。

陶器小鉢（20）　小鉢と考えられるが口縁部を欠く。平面形は角丸六角形に復元される。体部外面には七宝文を型押しする。胎は茶灰色で外面の上半に化粧を施す。調整は内外面ともナデ調整。最大径8.6cm、底径5.4cmを測る。

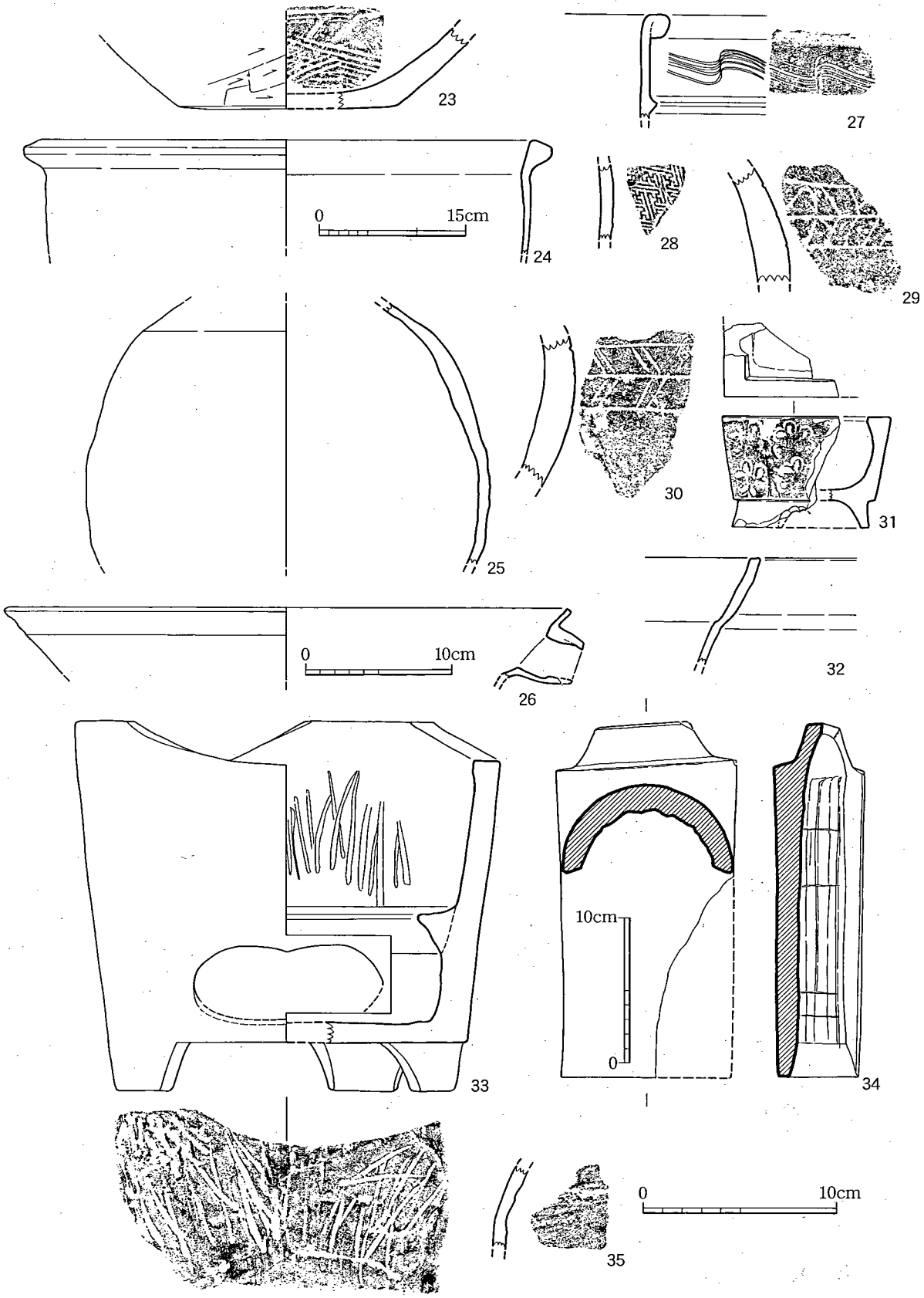
陶器摺鉢（21～23）　21は口縁部の破片で内面に9本1単位の筋目を入れる。調整は口縁部から内面にかけてはヨコナデ、外面はヨコ方向のケズリ。色調は明茶灰色で、胎土は精良。22は口縁部を外方に折り返し玉縁状にする。内面に12本1単位の筋目を入れる。口縁部のみ施釉する。調整は内外面ともヨコナデ。胎は黒色粒を多く含むもので、色調は暗茶褐色。復元口径31.0cmを測る。23は底部。色調は茶褐色。内面に筋目を入れるが単位は不明。調整は外面がナナメ方向のケズリ。

陶器甕（24）　口縁部が外傾し、また肥厚するもの。調整は口縁部がヨコナデ、内面は器壁の剥落が著しく調整不明である。外面はケズリのちナデか。色調は淡茶灰色。復元口径64.0cmを測る。

瓦質土器壺（25）　球形の壺の上半部。調整は内面がヨコナデ、外面はナデ。色調は灰色で、胎土は精良である。

瓦質土器片口鉢（26）　径2.7cmの片口をもつ鉢。色調は黄褐色～黄灰色を呈する。径は小片のため不確実だが、復元すると39cmほどとなる。

瓦質土器火鉢（27～30）　27は口縁部を外側に巻き込み、丸く肥厚させる。口縁下には一条の断面三角形の突帯を廻し、その間には波状の櫛描きを施す。色調は外面が明黄灰色、内面は灰色。胎土は精良。28は体部の破片で外面に綾杉文を型押ししている。色調は暗黄褐色。29は体部が丸みを



第70図　1号石列出土遺物実測図2（26・34は1/4、24は1/6、他は1/3）

帯びるもの。外面には３条の界線を廻し、その間に綾杉文を線掘りする。色調は黄灰色。胎土は精良。30は29と同形の体部下半の破片。外面の施文も29と同様でこれらは同一個体の可能性もある。

瓦質土器鉢（31）　箱形の体部にハの字に開く高台をもつ。体部外面に花文をスタンプする。調整は口縁部から体部外面にかけてがミガキ、内面及び底部はナデ。色調は暗灰色。胎土は精良。

瓦質土器鍋（32）　口縁部の破片である。調整は口縁部がヨコナデ、他はナデ。色調は灰色。

瓦質土器焜炉（33）　平面形は円形で、口縁部の３箇所がくぼむ。体部内面の下寄りに断面三角形の羽が廻り、その下部には送風口となる窓があけられる。脚は逆台径のものが３箇所に付く。調整は内面上半がナデのち棒状工具によるカキアゲ、下半がヨコナデ後ナデ、底部はナデ。外面は体部がナデ、底部がナデのち棒状工具による撫でつけ。復元口縁部径22.0cm、器高19.0cmを測る。色調は外面と内面下半が黒灰色、内面上半が明黄褐色。

丸瓦（34）　玉縁の丸瓦。内面の体部には模骨痕が、玉縁部には布目が残る。色調は灰色～暗灰色。長さ24.5cm、幅12.3cmを測る。

縄文土器（35）　調整は内面がナデ、外面が条痕のちナデ。色調は外面が暗灰白色、内面は暗灰色を呈する。

４．桶状遺構

１号桶状遺構（第71図）

南区の中央部で検出した。掘形は平面形が円形で上端幅1.95m、下端幅1.1m、深さ0.60mを測る。桶は径1.05m、深さ0.50mを測るが木質は残っておらず、その痕跡のみを確認し得た。

遺物が出土していないことから時期は特定できない。

２号桶状遺構（図版17-1・2、第71図）

南端区の北端部、１号埋甕の５m程南側で検出した。北側は調査区外となるが、掘形は長さ1.60m以上、幅1.25mの不整形となる。底面は二段掘りで、中央付近に桶を配置し掘形との隙間を小石で充填して固定させている。桶は径0.50m、深さ0.15mを測る。蓋板は４枚からなる。

遺物が出土していないことから時期は特定できない。

３号桶状遺構（第71図）

南端区の中央部、１号桶状遺構の南側で検出した。掘方の平面形は円形で、径1.35m、深さ0.2mを測る。掘形の底部に２枚の底板が遺存する。遺物が出土していないことから時期は特定できない。

４号桶状遺構（図版17-3、第71図）

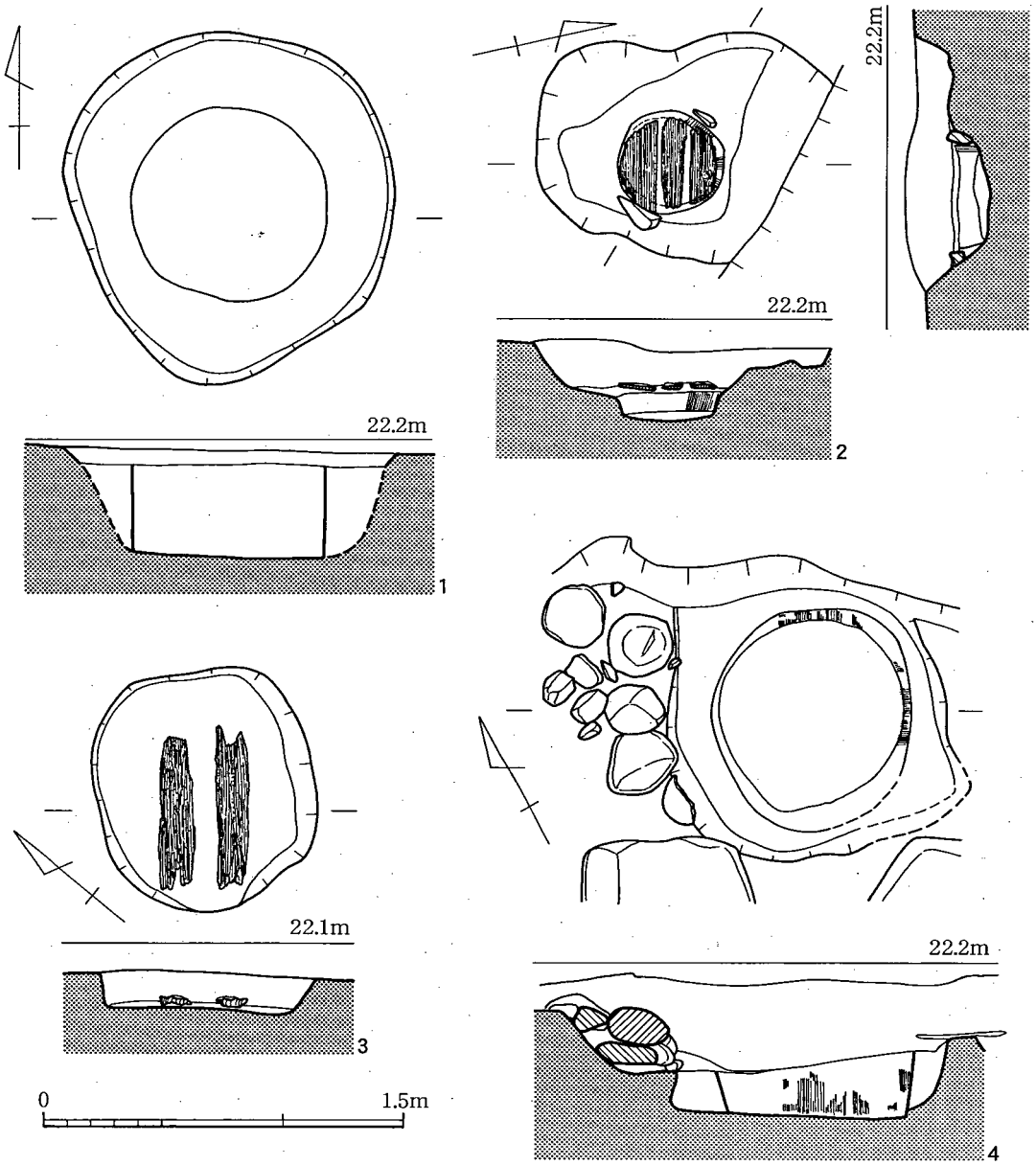
南端区の北端部、２号埋甕の南で検出した。掘方の平面形は一辺1.50mの略方形でその中央部に径1.20m、深さ0.35mの桶を埋設する。桶は側板がわずかに遺存するのみで、その枚数等は不明である。遺物が出土していないことから時期は特定できない。

５．埋甕

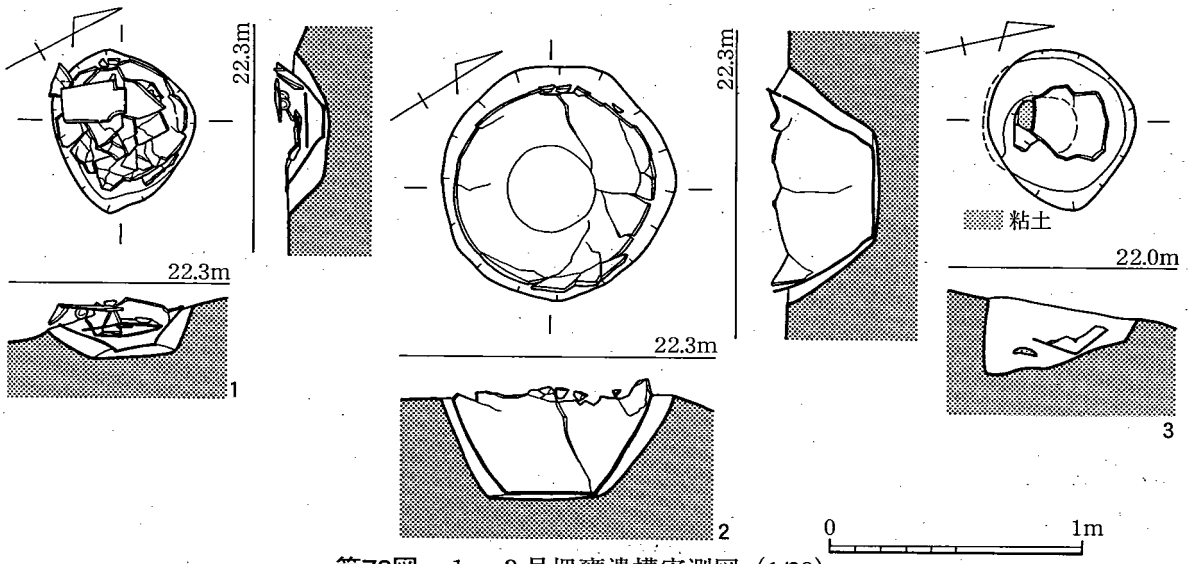
１号埋甕（図版17-4、第72図）

南端部の北隅部、１号石列の外側で検出した。

掘形の平面形は不整円形で、上端径は0.75～0.80m、下端径0.45m、深さ0.20mを測る。埋甕はやや底を傾けて据えられている。



第71図　1～4号桶状遺構実測図（1/30）



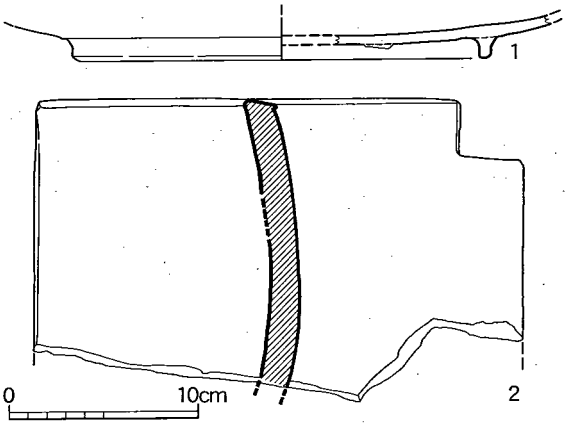
第72図　1～3号埋甕遺構実測図（1/30）

甕の内部から土師質土器こね鉢と平瓦が出土した。

時期は出土遺物から18c～19c代と考えられる。

出土土器（図版40-1、第73・74図）

埋甕（第74図1）　鉢形をするもの。口縁部の内側に粘土帯を貼り付け、口縁部を肥厚させている。調整は内外面ともナデだが、底部内面はハケを施す。色調は明黄褐色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。口径63.0cm、底径17.0cm、器高は8.2cmを測る。



第73図　1号埋甕出土遺物実測図（1/4）

土師質土器こね鉢（第73図1）　高台部の破片で第69図の14と同一形状となるもの。調整は内面がミガキ、外面がヨコ方向のケズリ、高台部はヨコナデ、底部外面はケズリ。色調は明黄褐色。胎土は精良である。復元高台径24.0cmを測る。

平瓦（第73図2）　一方の側辺を欠失する。もう一方の隅部を切り欠いており、片切平瓦と考えられる。調整は凹凸面ともナデ。色調は灰白色。胎土は粗く、砂粒を多く含む。長さ25.7cm、現存幅16.0cm、厚さ1.6cmを測る。

2号埋甕（図版17-5、第72図）

1号埋甕の西側で検出した。掘形の平面形は円形で、上端径1.25m、下端径0.60m、深さ0.50mを測る。甕は掘形中に正置して据えられる。時期は18c後半～19c前半代であろう。

出土土器

埋甕（図版40-1、第74図2）　体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部は外側に粘土紐を廻し、玉縁状に仕上げる。粘土帯の接合痕からみると体部は8回の積み上げによってなっていることが知られ、器壁は全体に均一に薄く仕上げられている。

調整は内面がナデで、体部下半は特に丁寧でミガキ様に仕上げている。口縁部はヨコナデ。外面は指オサエで、指頭圧痕が明瞭に残る。色調は淡黄灰色。胎土は精良。口径85.0cm、底径33.0cmを測る。器高は中位が残っていないため定かでないが、82cmほどとなる。

3号埋甕（図版17-6、第72図）

2号埋甕の南東部約10mの位置で検出した。掘形の平面形は円形で上端径0.85m、下端径0.75m、深さ0.4mを測る。底面は南に傾斜する。埋甕は北に倒れた状態で出土した。底部のみ残存しており、削平を受けたものと思われる。時期は18c後半～19c前半代であろう。

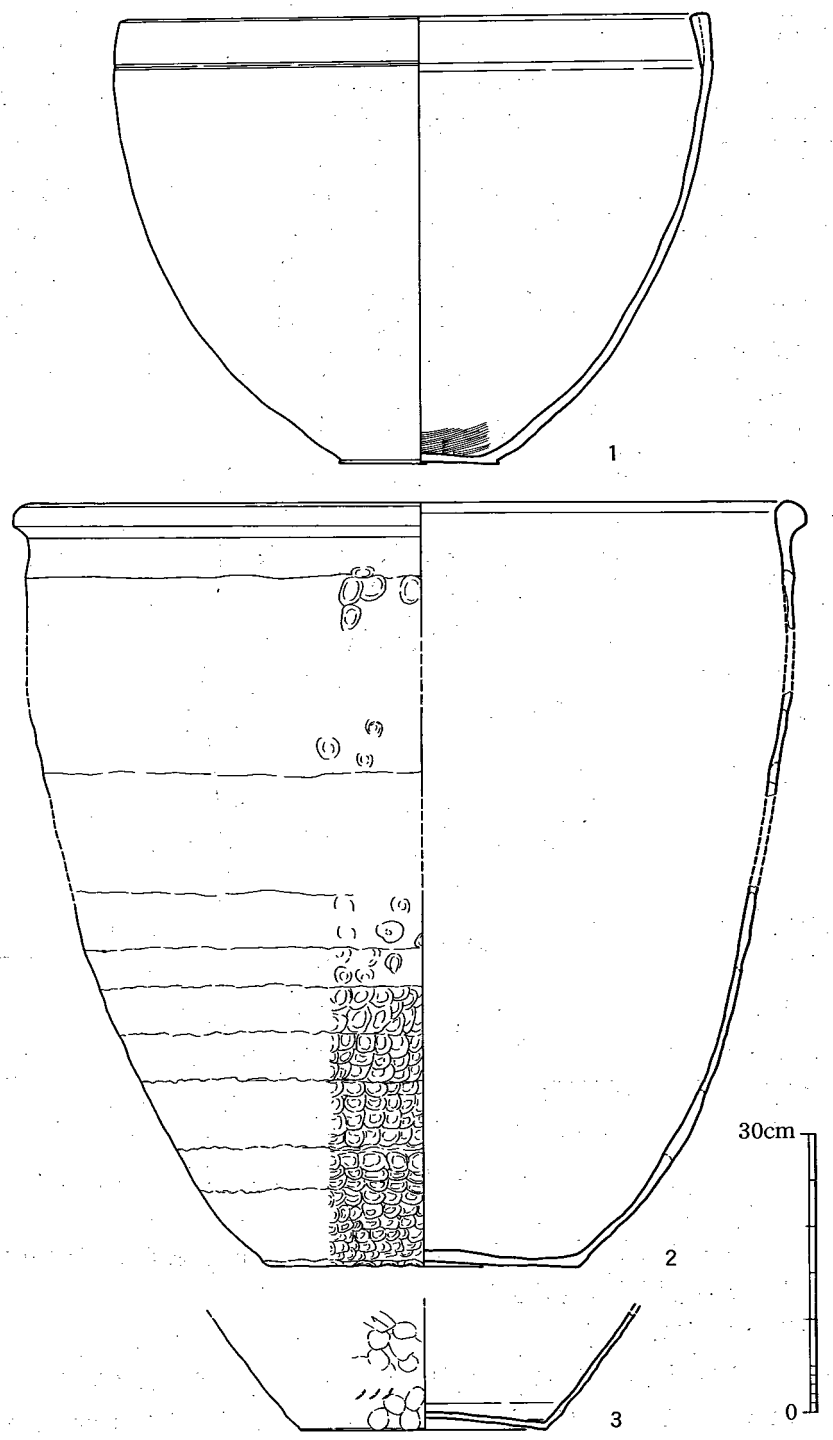
出土土器

埋甕（図版40-1、第74図3）　土師質の甕で底部のみ残存する。底部は上底で、器壁は薄く仕上げられている。調整は内面がナデ、外面は下半が指オサエで指頭圧痕及び爪痕が残っている。上位は指オサエで成形した後、削って仕上げる。色調は黄褐色を呈する。胎土に砂粒を含む。底径26.2cmを測る。

6．道路状遺構

1号道路状遺構（付図1）

1号石列の前面（北東側）をこれに沿って走る道路状の遺構である。幅は確認できる部分で0.6m程で、山国川に向かって下っている。路面は部分的に階段状になり、また、硬化面が認められる



第74図　1～3号埋甕実測図（1/8）

所もある。

遺物が出土していないことから時期は特定できない。

2号道路状遺構

（第75図）

南端区の南東寄りで長さ約5m分を確認した。

道路の切り通し部分の上端幅は2m。下端幅は0.35mを測り、使用による硬化面が見られる。

検出した部分においては道路は4段の階段状になり、山国川方面に下っている。

遺物が少ないことから時期は特定できない。

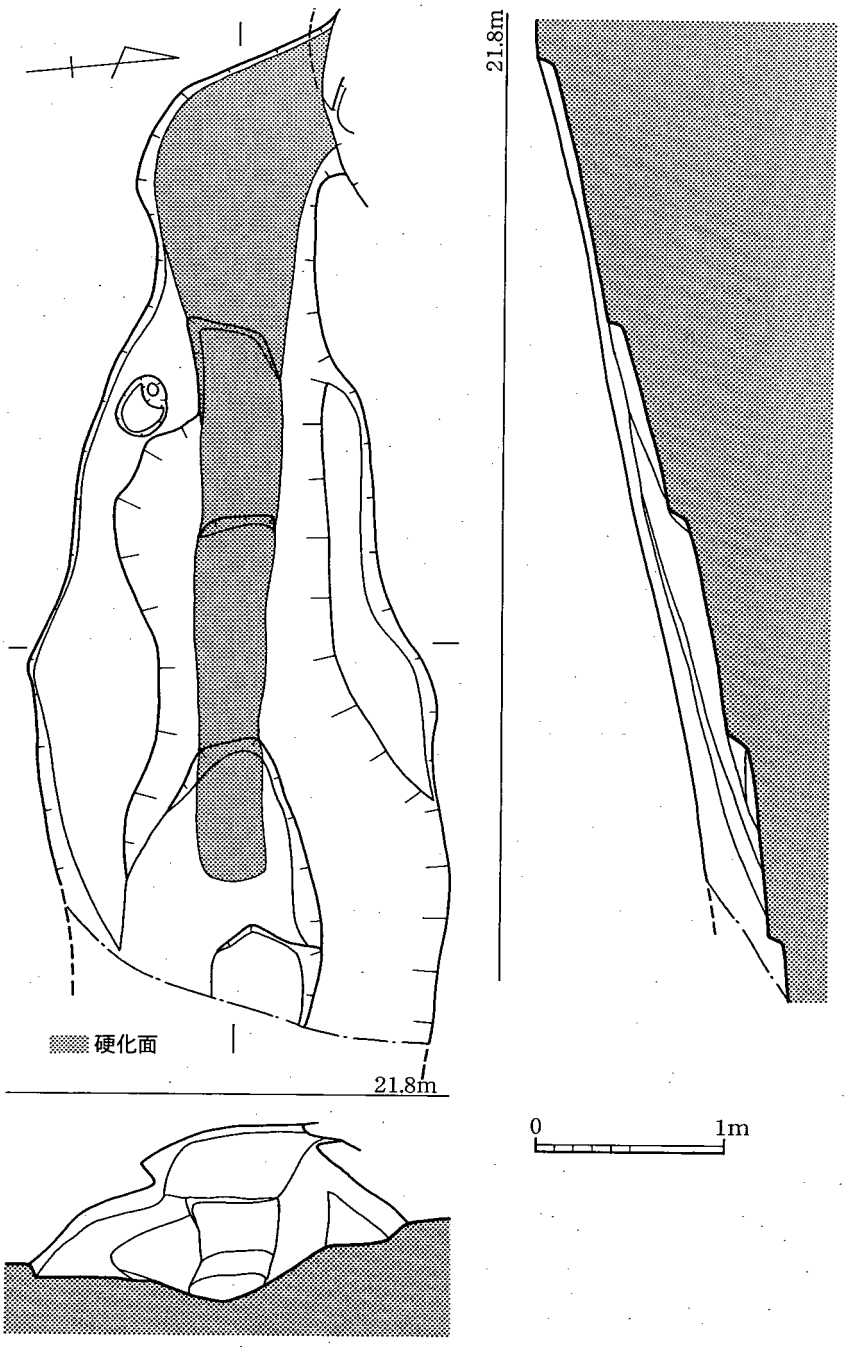
7．溝状遺構

南区からは3条の溝が検出されており、いずれも近世のものと思われる。

7号溝（付図1）

南区の北側で検出た。上端幅0.8m、下端幅0.4m、深さ0.1mを測る。

遺物が少ないことから時期は特定できない。



第75図　2号道路状遺構実測図（1/40）

8号溝（第5図）

南端区の北隅部で2m分検出した。北側はさらに調査区外に延びる。上端幅1.3m、下端幅1.0m、深さ0.2mを測る。

遺物が少ないことから時期は特定できない。

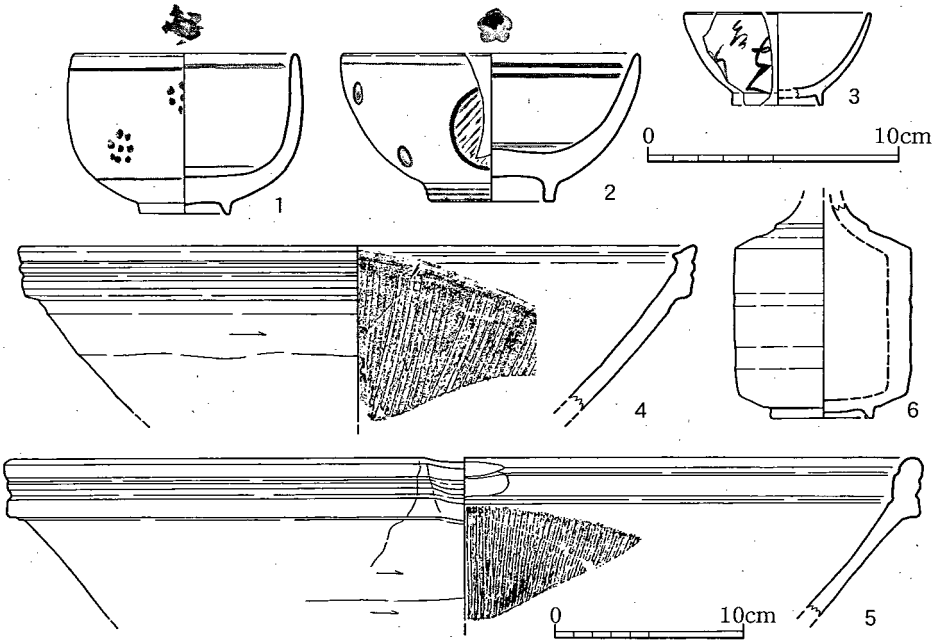
出土遺物（図版40-2、第76図）

染付椀（1・2）　1は灰色の胎に薄い灰色釉を施す。器形がやや歪んでいる。外面には茶色で梅花文を8箇所に散らす。見込みにはコンニャク判で花文を押す。口径9.0cm、高台径3.6cm、器高6.4cmを測る。2は器壁が厚い。灰色の胎にやや青みがかった透明釉を施す。畳付は露胎となり高台外側端部には砂目が残る。体部外面には丸に平行文が3箇所に描かれ、この間に3個一単位の円文（黒縁、中は青）が散らされる。見込みにはコンニャク版で花文が押される。復元口径11.8cm、高台径5.0cm、器高5.9cmを測る。

染付猪口（3）白色の胎に透明釉を全面に施す。外面には赤色で香（？）等の文字が書かれる。

復元口径7.4cm、復元底径3.7cm、器高3.7cmを測る。

陶器摺鉢（4・5）　4は片口の摺鉢で内面に10本1単位の筋目を入れる。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヨコ方向のケズリ。胎土は黒茶褐色。復元口径35.8cmを測る。5は内面に4本1単位の筋目を入れる。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヨコ方向のケズリ。胎土は茶褐色。復元口径48.8cmを測る。



第76図　8号溝出土遺物実測図（4・5は1/4、他は1/3）

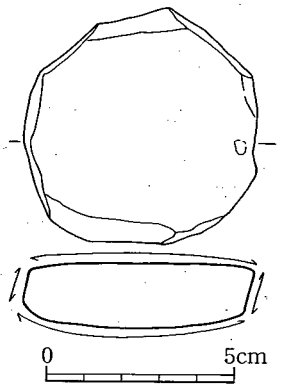
陶器一輪差し（6）　口縁部を欠失する。体部は円柱形で高台をもつ。調整は口縁部がヨコナデ、肩部がケズリ、体部はヨコナデ。胎土は精良。色調は明茶灰色。径6.1cm、高台径4.1cm、残存高8.6cmを測る。

9号溝（付図1）

南端区の北隅部で検出した浅い溝。上端幅0.5m、下端幅0.4m、深さ0.1mを測る。時期は特定できない。

出土遺物（第77図）

瓦玉　平瓦の周縁を打ち欠いた後に全面を磨いて形を整えたもの。径6.1×6.3cm、厚さ1.7cmを測る。



第77図　9号溝出土遺物実測図（1/2）

6．ピット出土の遺物

本遺跡は中世を中心としているため、掘立柱建物跡に付随すると思われるピットが多く見られる。これらから出土した主要な遺物を説明する。

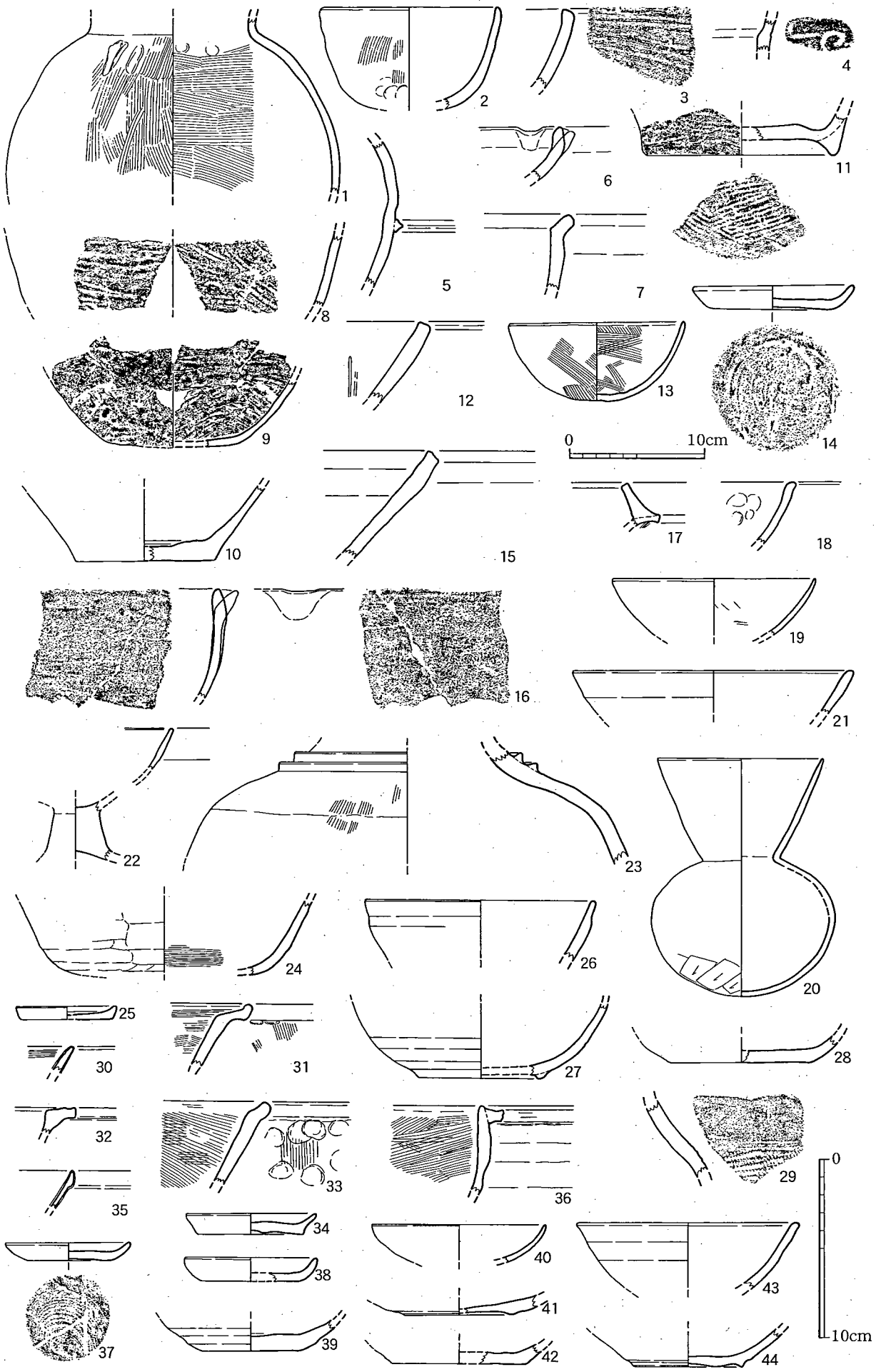
出土遺物（図版41・42-1、第78・79図）

土器・陶磁器（1～66）

1は北区ピット1出土で、弥生後期の壺の肩部である。最大径は24.8cm。「‖」形の浮文が貼り付けられている。内外ハケで、色調は外面白黄褐色、内面は暗白黄褐色。2は北区ピット12出土で、弥生後期の鉢であろう。復元口径6.6cm。外面体部はハケの後ナデ、下位はナデのみ。内面はナデ。色調は外面黒茶褐色。内面淡黒茶褐色。3・4は北区ピット15出土の縄文土器で、3は深鉢の口縁部である。口唇部はナデで、平坦面を持ち、外面は横位・斜位の条痕の後ナデ、内面ナデ。色調は内外黄白色を呈する。4は深鉢の肩部片で、外面は沈線の渦巻文で、内面はナデ。外面はにぶい黄褐色。内面は暗褐色。5・6は北区ピット16出土で、5は瓦質の火鉢の肩部が張る胴部片である。中位に断面三角形の小さな突帯が貼り付けられており、その上下端は調整不良のため、胴部との間に隙間がある。外面は突帯上がナデ、下が削り。内面はナデ。色調は灰白褐色。内面は淡黒色であ

る。6は瓦質の片口鉢の口縁部で、調整は摩滅のため不明。色調は内外灰橙色。7は北区ピット17出土で、瓦質の鉢の口縁部片である。口縁内側はやや突出して外傾しており、調整は外面口縁部がナデ、体部は削り。内面はナデ。色調は外面暗褐色、内面暗褐色を呈する。8・9は北区ピット21出土の縄文土器の胴部と底部で、同一個体の可能性が高い。内外横位の条痕で、外面黄褐色から暗褐色。内面は橙色からにぶい黄褐色。10は北区ピット23出土で、弥生土器の甕の底部片で、平底であることから中期に属する可能性がある。復元底径は10.4cm。色調は内外黄橙色。調整は器面が内外摩滅しているため観察できない。11は北区ピット36出土で、縄文土器の深鉢底部片である。復元底径10.8cmを測り、外面・外底は条痕。内面はナデ。色調は外面暗黄白色、内面黄白色。12は北区ピット38出土で、瓦質の摺鉢の口縁部片で、内外ナデ、口唇部はナデのため平坦にされている。色調外面がにぶい黄白色、内面は灰黒色。13は北区ピット39出土で、弥生後期の完形の椀である。口径13.0cm、来高5.7cm。内外ナデで、外底は粗いナデで、やや丸みをもつ平底である。色調は内外白黄茶色。14・15は北区ピット40出土で、14は完形の土師器皿である。口径9.0cm、器高1.4cm。内外ナデで、底部は糸切り。色調は内外白黄褐色。15は須恵器の鉢の口縁部で、内外ナデ。口唇部はナデで、平坦にされている。色調は内外灰白色。

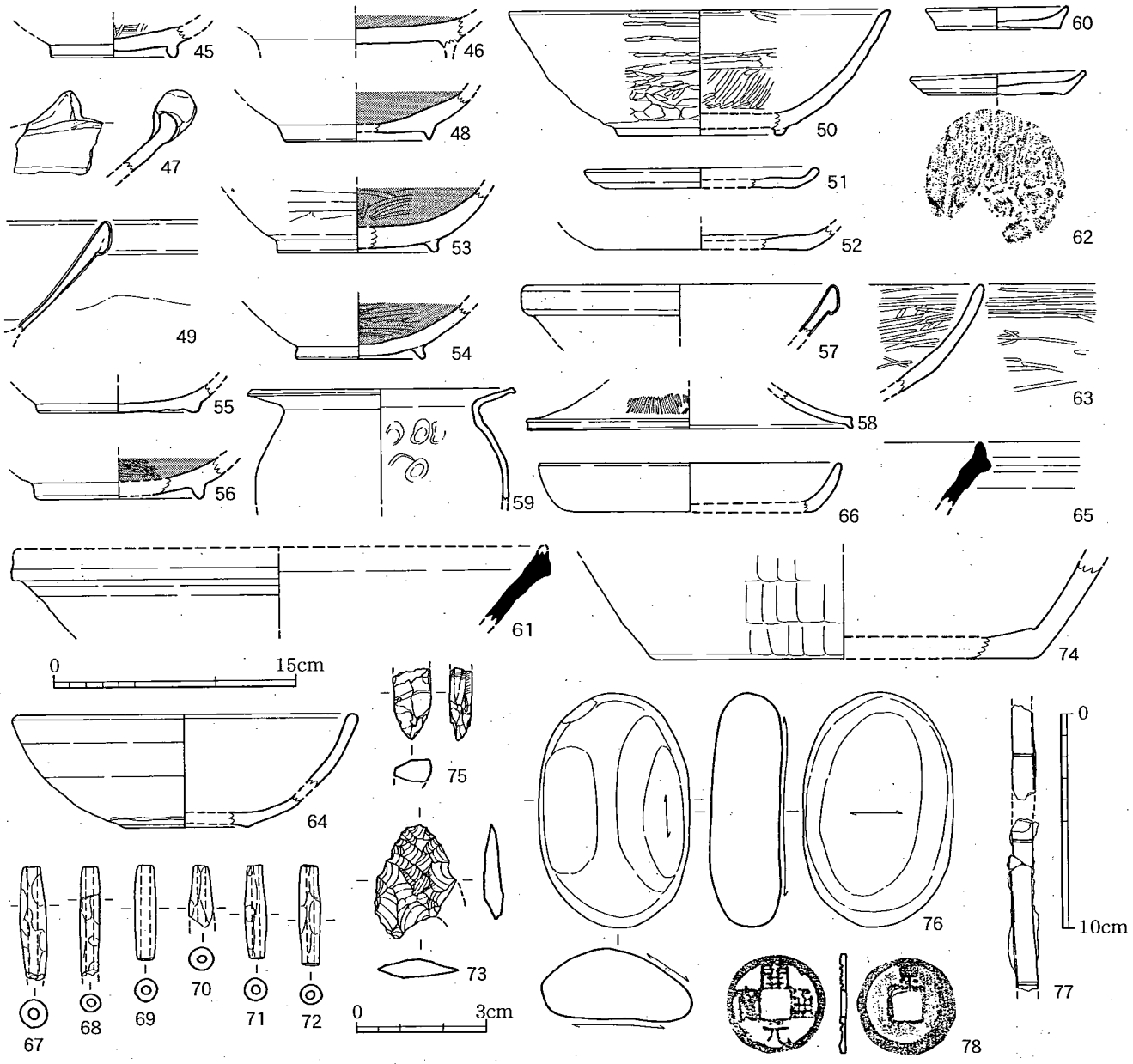
16は中央区ピット5出土で、縄文土器の片口鉢である。内外横位の二枚貝と思われる条痕で、色調は外面暗茶褐色、内面茶褐色。17は中央区ピット12出土で、弥生後期の複合口縁壺の口縁部片である。調整は複合部が内外ナデ、外反部は外面ハケ、内面ナデ。色調は外面白橙褐色、内面白黄褐色。18は中央区ピット14出土で、弥生後期の鉢の口縁部片である。調整は内外ナデ。外面は暗褐色。内面淡暗褐色。19は中央区ピット31出土で、弥生後期の鉢であろう。復元口径15.2cm。調整は内外ナデ、色調は内外白黄褐色。20は中央区ピット31出土で、古墳時代初頭の完形の長頸壺である。口縁部は直線的だがやや内湾する。胴部は扁球形で、口径12.2cm、器高17.7cm。胴部最大径は13.6cm。調整は、外面は口縁部と胴部上半が丁寧なナデ、下半は削り。内面はナデ。色調は内外黄褐色。21は中央区ピット39出土で、瓦器椀の口縁部片である。復元口径15.6cm。調整は内外摩滅のため不明。色調は内外口縁部が灰黒色、体部は変色しておりにぶい暗灰白色。22は中央区ピット40出土で、古墳時代初頭から前期の高杯の口縁部と脚部片で同一個体である。外面は内外ナデの摩滅で、色調は内外黄橙色。23は中央区ピット41出土で、弥生後期の大型壺の肩部である。これは2号溝に同一個体がある。頸部に断面三角形の突帯が2条貼り付けられており、外面はハケの後ナデ、内面はナデだが、器表が剥落している。内外黄橙色。24・25は中央区ピット50出土で、24は土鍋の底部片である。外面は煤付着のため黒色。外面は削り、内面はハケ。内面は器面が剥落しているが残っている部分は暗褐色。25は土師器皿で、復元口径5.6cm。器高0.7cm。内外ナデで、底部糸切り。色調は内外黄橙色から黄白色。26は中央区ピット53出土で、土師器椀である。復元口径12.8cm。外面は口縁部が横ナデ、体部は磨き。内面は摩滅しているため観察できない。内外黄白色。27は中央区ピット54出土で、瓦器椀の底部である。断面三角形の小さな高台がつく。高台径3.8cm。調整は内外摩滅のため不明。色調は内外灰黒色。28はピット59出土の土師器皿の底部である。復元底径7.9cm。内外ナデで、底部は糸切り。色調は外面黄色、内面赤橙色。29は中央区ピット67出土の縄文土器片である。肩が張る鉢の肩部片で、上半はナデ、肩部に2条の沈線、その下にRL縄文がつく。内面はナデ。色調は外面黄褐色から黒灰色。内面黒灰色から黄橙色。30はピット73出土の青磁椀の口縁部片で、内面口縁部に3条の界線が入る。釉は淡緑色。胎は灰色。31はピット76出土の瓦質の鉢である。大きく外傾した口縁の端部が丸まって上に折り返されている。外面は口縁部横ナデ、口縁下は押さえ。体部はハケ。内面はハケ。色調は外面暗茶褐色。内面茶褐色。32は中央区ピット78出土で、弥生土器の鋤先口縁である。調整は内外ナデ。色調は内外にぶい橙色。33は中央区ピット79出土で、瓦質の鉢である。口縁部が小さく外径する口縁部で、外面口縁部は横ナデ、体部は押さえのちハケ。内面はハケ。色調は内外白黄褐色。34は中央区ピット84出土の完形の土師器皿で、復元口径7.2cm。器高1.2cm。復元底径6.0cm。内外ナデ。底部は糸切りで、板状圧痕が見られる。色調は内外白黄褐色。35はピット87出土の白磁椀の玉縁口縁で、玉縁は小さい。釉は乳白色。胎は灰白色。36はピッ



第78図　ピット出土遺物実測図１（1･2･10･13･17～20･22～24･32･40は1/4、他は1/3）

ト95出土の瓦質の鉢で、外面口縁下に方形突帯がつき鍔をなす。外面ナデ、内面ハケ。色調は外面暗茶色、内面明茶褐色。37～44はピット95出土で、37は完形の土師器皿である。口径7.0cm、器高1.0cm、底径4.6cm。内外ナデ、底部は糸切り。色調は内外白黄褐色。38は土師器皿で、復元口径7.4cm、器高1.3cm、復元底径5.4cm。内外ナデで、底部は糸切り。色調は外面茶褐色、内面明茶褐色。39は土師器皿の底部片で、内外ナデ、底部は糸切り。復元底径5.4cm。色調は内外黄白色。40は土師器の皿か。復元口径12.8cm。内外丁寧な横ナデ。外面黄白色から暗茶灰色。内面は煤が付着するため黄白色から黒褐色に変色している。41は瓦器椀の底部片で、わずかながら高台がつく。内外ナデで、色調は外面黄白色から灰黒色。内面は黒色。復元底径6.0cm。42は土師器皿の底部片で、内外ナデで、底部は糸切り。復元底径7.4cm。色調は内外橙色。43は土師器椀の口縁部片で、復元口径12.4cm。内外横ナデ。色調は外面赤橙色から暗赤色。内面黄白色から灰黒色。44は瓦器椀の底部片で、わずかながら断面三角形の高台がつく。復元高台径6.0cm。外面ナデ、内面ナデの摩滅。45は中央区ピット96出土の瓦器椀で、断面方形の高台がつく。復元高台径5.8cm。外面はナデ、内面は磨き。内外灰黒色。46は中央区ピット106出土の黒色土器椀の底部片である。外面はナデ、内面は磨きの摩滅。色調は外面黄白色、内面黒灰色。47は中央区ピット118出土で、縄文土器の浅鉢の口縁部片である。口縁端がやや内湾し、リボンがつく。内外磨き。色調は内外にぶい黄褐色。48は中央区ピット119出土で、復元高台径6.6cm。断面細長い三角形の高台がつく。外面ナデ、内面磨きの摩滅。49は中央区ピット122出土で、白磁の玉縁口縁である。玉縁は幅広で、やや下垂する。釉は乳白色、胎は灰白色。50は中央区ピット123出土の瓦器椀で、短い断面方形の高台がつく。外面上半は横ナデ後磨き、下半は押さえ後ナデ。内面は横ナデ後粗い磨き。色調は口縁部が灰黒色、口縁下が灰白色、体部は暗灰色を呈する。51～54は中央区ピット125出土で、51は土師器皿で、復元口径10.8cm、器高0.9cm、復元底径8.8cm。内外ナデ、底径糸切り。色調は黄白色。52は土師器皿で、復元底径10.0cm。内外ナデ、底径糸切り。色調は内外橙色。53は黒色土器椀の底部片で、断面逆台形の高台がつく。復元底径7.4cm。内外磨きで、外底部はナデ。色調は外面黄灰色、内面黒色。54は黒色土器椀の底部片で、外に張り出す高台がつく。復元高台径6.0cm。外面ナデ、内面磨き。色調は外面淡灰褐色、内面黒色。55は中央区ピット127出土の瓦器椀底部片で、断面逆台形の低い高台がつく。復元高台径は7.4cm。外面ナデ、内面ナデの摩滅。色調は内外灰黒色。56は中央区ピット130出土の黒色土器の椀で、復元高台径7.8cm。外面ナデ、内面磨き。色調は外面黄灰色、内面黒色。57は中央区ピット132出土で白磁椀の玉縁口縁である。復元口径14.6cmで、玉縁口縁は幅が広い。釉は乳白色、胎は灰白色。58・59は中央区ピット135出土で、58は土師器の高杯か器台の裾部である。復元裾径は20.0cm。外面は裾部がナデ、それ以外は磨き、内面はナデ。内外黄白色で、胎土は精良である。59は庄内甕の口縁部で、外面はナデ、内面は押さえ、削り後ナデ。色調は内外暗褐色を呈する。口縁部は大きく外反し、口唇部はやや肥厚する。胎土は比較的緻密である。60は中央区ピット138出土で、土師器皿である。復元口径6.4cm、器高1.1cm、底径5.8cm。内外ナデ、底部は糸切りで、板状圧痕が見られる。色調内外暗茶褐色。61はピット140出土の須恵器鉢の口縁部で、口縁部は肥厚して玉縁状をなす。復元口径は32.8cm。内外ナデ。色調は内外暗灰白色。62は中央区ピット145出土で、口径8.2cm、器高1.0cm、底径6.3cm。内外ナデ、底部は糸切りで、板状圧痕が見られる。色調内外暗茶褐色を呈する。63は中央区ピット146出土の瓦器椀の口縁部片で、調整は外面横ナデ後磨きで、口縁部に入念に施されている。内面は丁寧な磨き。色調は内外灰白褐色を呈する。

64は瓦器椀の口縁部と底部で同一個体で、図上で復元できる。復元口径8.1cm、器高5.1cm、復元底径5.6cm。わずかな高台がつく。内外摩滅しているので、調整は観察できない。色調は、内外口縁部が灰黒色、口縁下は灰白色、胴部は黒色。65・66は中央区ピット148出土で、65は須恵器の鉢の口縁部である。口縁端が肥厚して上に伸びている。内外灰黄白色。66は土師器皿で、復元口径14.0cm、器高2.3cm、復元底径11.6cm。内外ナデで、底部の切り離し方は不明。色調はにぶい黄橙色を呈する。



第79図　ピット出土遺物実測図２（58・61は1/4、73・78は2/3、他は1/3）

土錘（67～72）　67は北区ピット26出土で、一端が欠損している。最大径1.3cm。重量は6.8g。68は中央区ピット11出土で、最大径0.9cm。重量2.8cm。69は中央区ピット67出土で完形である。最大径1.0cm、重量4.7g。70は中央区ピット95出土の半欠で、最大径1.2cm、重量2.8g。71は中央区ピット125出土の完形品で最大径1.0cm、重量は4.18ｇ。中央区ピット126出土で完形品である。最大径1.0cm、重量4.1g。

石製品（73～76）　73は中央区ピット15出土で打製石鏃で、片側の基部が欠損している。長さ2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.45cmで、扁平で幅広である。重量1.7g。石材は姫島産黒曜石。74は中央区ピット74出土で滑石製石臼の底部片で、復元底径18.3cmを測る。外面はノミ痕がよく残っている。色調は暗灰色。75は中央区ピット95出土で、滑石製石臼の転用品で、断面はほぼ方形だが、多くの面をもつ。製品ではなく、未製品であろう。76は中央区ピット97出土で、完形の磨石である。主使用面は平坦で、断面は略三角形を呈する。石材は硬質砂岩で、重量は403.2g。

礎石（図版42-1）　図化していないが、炭化した柱の痕跡が残った礎石片が、２号掘立柱建物跡

の南に位置するピット64から出土している。

金属器（77・78）　77は中央区ピット76出土の鉄器で、形態から鉋と思われるが、刃部は欠損してない。断面は扁平な方形である。78は中央区ピット160出土の完形の銅銭（会昌５年（845）初鋳）で、開元通寶で裏面には「京」が入る。重量は1.7g。

７．包含層出土の遺物（図版41-2・42-2・43・44、第80～83、表３）

縄文土器（1～9）　１は深鉢の肩部片で、外面は頸部がナデでその下にRL縄文が入り、縄文の下位には沈線と思われる窪みがある。内面は横位の条痕。色調は外面暗褐色、内面暗茶褐色。２は精製浅鉢の口縁部で、口縁部は内面が玉縁状に肥厚している。内外面は横ヘラ磨きが摩滅しており、色調は内外漆黒色。３は粗製の浅鉢の肩部で、屈曲して大きく外反する。波状口縁になると思われる。内面ナデ、外面は口縁部がナデ、肩部から下は横位の条痕。色調は内外暗茶褐色。４は深鉢の口縁部で、外面横位の条痕、内面ナデ。色調は内外黒茶色。５は口縁を肥厚させて、断面方形を呈するもので、内外擦過。色調は外面口縁部が灰黒色、内面が黄白色を呈する。６は傾きから深鉢の肩部片と思われる。外面横位の条痕、内面ナデ。色調は外面黄褐色、内面黒褐色を呈する。７・８は深鉢の胴部片であろう。７は外面横位の条痕の後ナデ、内面は横位の条痕。色調は外面黄褐色、内面黒灰色を呈する。８は外面横位の条痕、内面ナデ。内外黄褐色を呈する。９は傾きから肩が張る器形の深鉢の肩部片と思われる。外面に2条の平行沈線が入る。外面横位の条痕、内面ナデ。色調は内外暗茶褐色を呈する。

10～32は弥生中期から古墳時代前期の土器である。

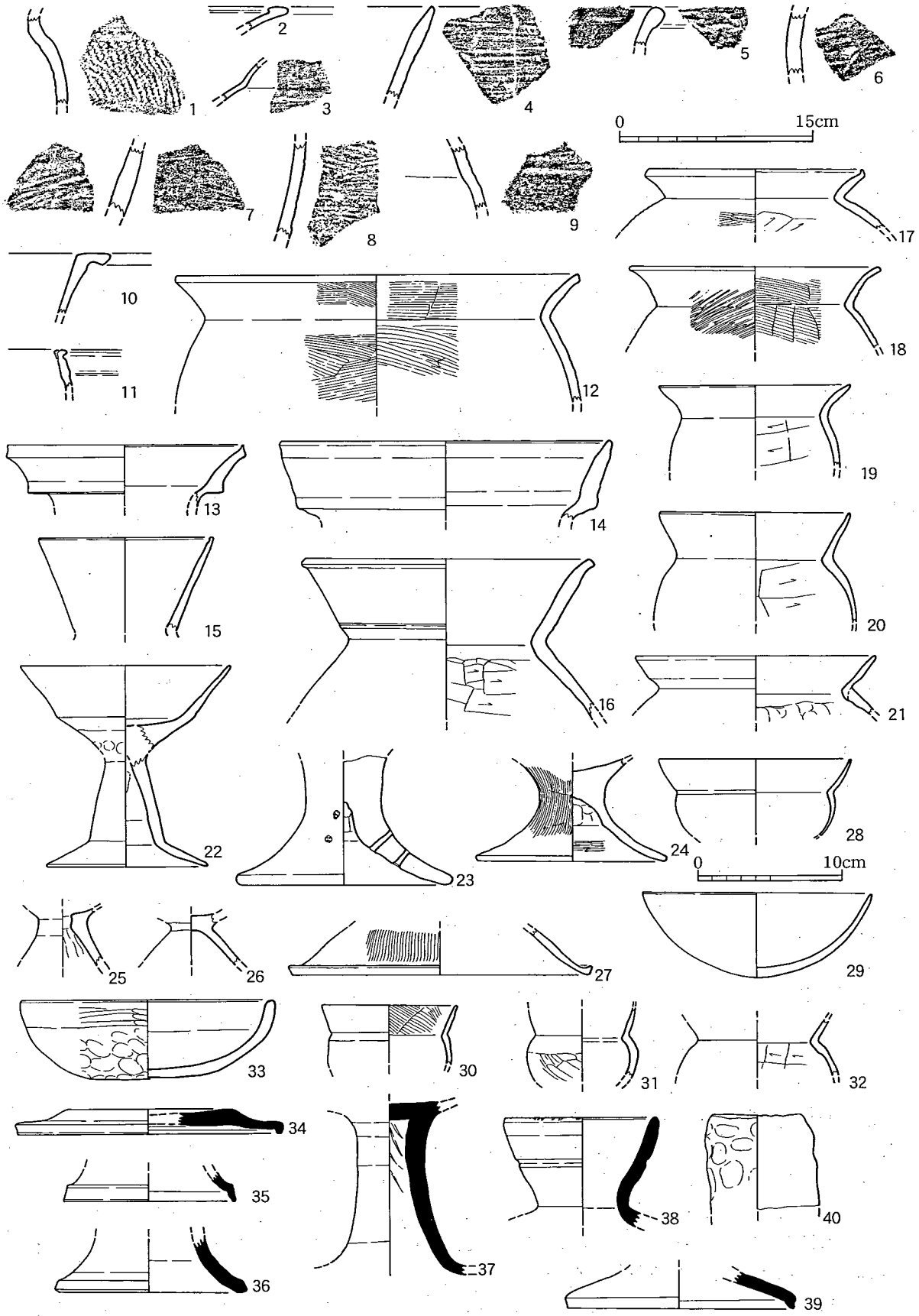
壺（10・11・13・14・16）　10は弥生土器の鋤先口縁で、広口壺であろう。内外摩滅しているがナデと思われる。色調は、外面は煤が付着しており暗黒褐色内面は橙色を呈す。11は弥生中期の短頸壺の口縁部と思われる。胎土は精良で内外ナデ、口縁は肥厚して外面に突帯がつく。口縁下には1条の沈線がある。体部がやや膨らむ器形であろう。色調は外面暗橙色から灰黒色、内面は橙色。13は二重口縁壺の口縁部で、口唇部は上に尖る。内面は屈曲がほとんどない。内外ナデ。復元口径16.4cm、色調は内外黄白色。14は二重口縁壺の口縁部で復元口径23.0cmで、器壁も厚く大型品であろう。内外ナデで、頸部はハケであろう。色調は外面淡黄橙色、内面黄白色。16は布留式の広口壺で、復元口径20.3cm、口縁部は膨らみを持って内湾し、口唇部が外傾するもので、肩部は大きく張らないことから胴中位を最大径とするものだろう。口縁部外面に沈線と、肩部に刺突文と思われるものがある。外面はナデ、内面は口縁部がナデ、肩部は削り。

甕（12・17～21）　12は弥生後期の甕の口縁部で、復元口径27.8cm。内外口縁部までハケ。色調は外面にぶい茶褐色、内面黄褐色。17は庄内甕の口縁部で、復元口径15.2cm。口唇部が内傾しやや上に尖る。外面は、口縁部はナデ、肩部はタタキ、内面は口縁部がナデ、肩部は削り、色調は内外黄白色。18は甕の口縁部で、復元口径17.4cm。外面は口縁部までタタキ、内面は口縁部までハケ。色調は外面黄橙色、内面黄白色。19は小型の甕で、復元口径13.2cm。外面はナデの摩滅。内面は口縁部がナデ、肩部は削り。色調は内外黄橙色から淡橙色。20は小型の甕で、復元口径13.0cm。外面はナデの摩滅。内面は口縁部がナデ、肩部は削り。色調は内外黄褐色。21は口縁がやや内湾し、復元口径17.0cm。外面はナデ、内面は、口縁部はナデ、肩部は押さえ。色調は黄橙色から黄褐色。

長頸壺（15）　口縁部で、復元口径12.2cm。内外ナデの摩滅。色調は内外黄白色。

高杯（22・23）　22は杯部と脚部で同一個体と思われる。口縁部と杯部の接合部は明らかな段を持つ。復元口径14.6cm、復元器高14.0cm。内外器面の摩滅が著しく、調整は観察できない。脚内面はしぼりがある。色調は内外黄橙色。23は小型の高杯の脚部で、復元裾径15.0cm。小さな穿孔が縦に２つ、等間隔に３箇所ある。外面はハケ状工具によるナデ、裾部はナデ。内面は脚部が絞り、裾部はナデ。色調は外面黄橙色から黄白色。内面は焼成不良と思われ、暗黄色から黒色。

台部（24）　台付き器種で、復元裾径13.2cm。外面はハケ、裾部はナデ。内面は、脚部はナデ、



第80図　包含層出土遺物実測図１（1～9・33～40は1/3、他は1/4）

裾部はハケ。色調は黄白色。

器台（25～27）　25は脚部で、穿孔されて中空になっている。内外摩滅しており、調整は観察できない。色調は内外黄橙色。26は器台の脚部で、内外ナデで、色調は内外黄橙色。27は器台の裾部だろうか。復元裾径20.6cm。膨らみを持ち、下端部を上に跳ね上げている。外面は丁寧なハケで、裾はナデ、内面はナデが摩滅している。色調は外面にぶい茶褐色から暗褐色、内面灰黒色で焼成不良と思われる。

鉢（28）　鉢で、口縁部が内湾しながら外傾する。復元口径13.4cm。内外ナデの摩滅。色調は内外黄橙色。

椀（29）　完形の椀で、丸底を呈す。口径15.8cm、器高5.9cm。外面は丁寧なナデ、内面は摩滅。色調は内外黄橙色。

小型丸底壺（30～32）　30は復元口径9.4cm。外面ナデの摩滅で、内面は口縁部ハケ、体部ナデ。色調は内外黄白色。31は小型丸底壺で、口縁は欠損している。最大径は胴部中位にあり、その径6.6cm外面はハケ、内面はナデ。色調は外面黄橙色、内面にぶい黄白色。32は小型丸底壺の肩部で、外面ナデ、内面口縁部ナデ、肩部削り。色調は内外黄白色。

土師器椀（33）　復元口径13.3cm、器高4.1cm。外面は口縁部が磨き、胴部は押さえ後ナデ、内面はナデ。色調は内外黄橙色。古墳時代後期のものであろう。

須恵器蓋（34）　口縁端部は折り曲げて受け部を形成している。復元口径13.8cm、器高1.3cm。内外ナデで、天井部のみヘラ削り。色調は青灰色。

須恵器高杯（35～37・39）　35は低脚高杯の裾部で、復元裾径は9.0cm。色調は外面暗灰色、内面淡青灰色。36は低脚高杯の裾部で、復元裾径は10.0cm。外面暗青灰色、内面淡青灰色。
37は脚部で外面はナデ、内面は絞り、裾部はナデ、色調は内外暗灰色である。39は裾部で、裾端は折り曲げられている。復元裾径12.0cm。内外ナデ。色調内外淡青灰色。

須恵器口縁部（38）　38は提瓶か平瓶で、復元口径7.8cm。口唇部に一部刻み目があるが、めぐるものではない。口縁中位に沈線が1条めぐっている。調整は内外ナデ。色調は外面暗青灰色、内面青灰色。

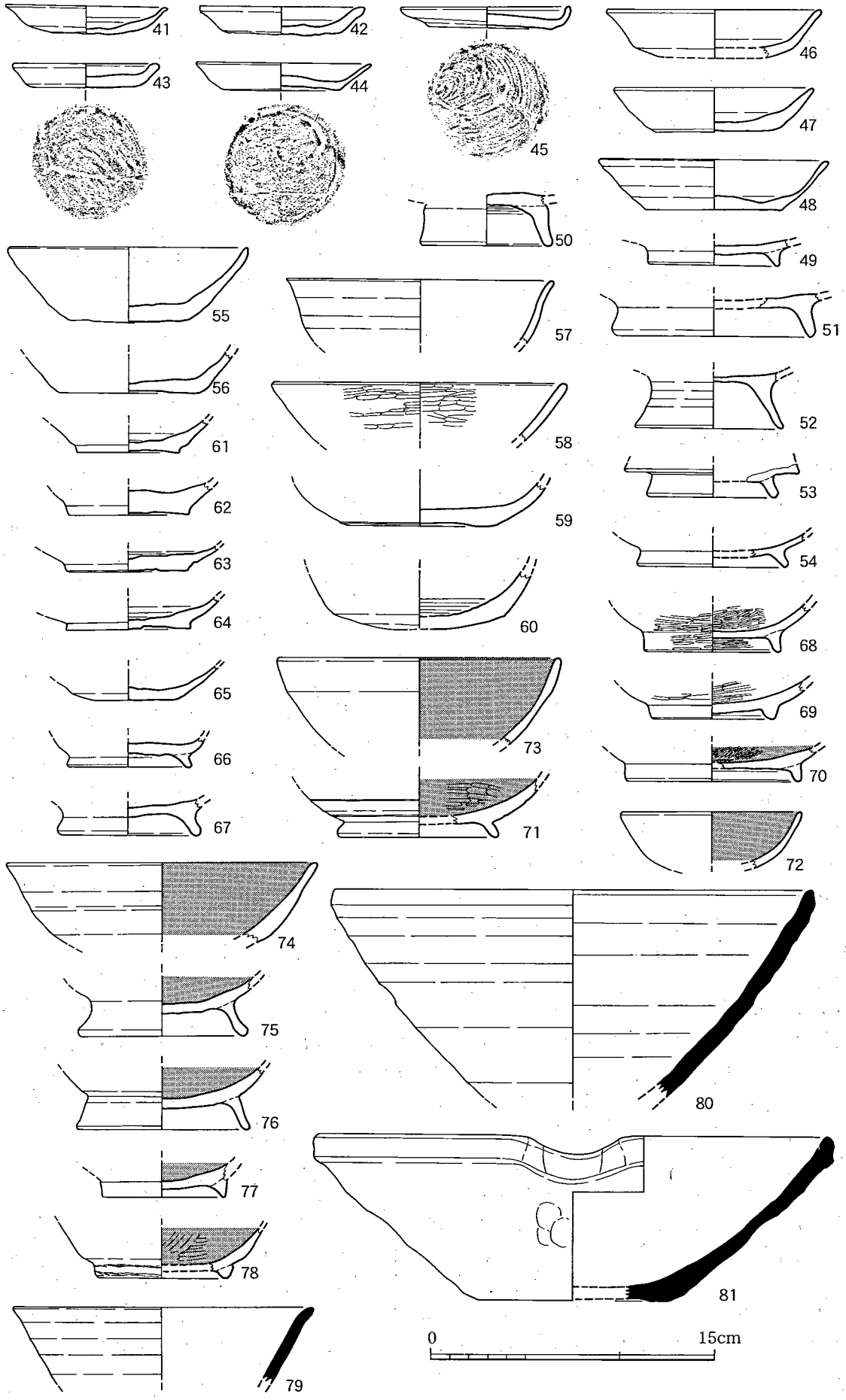
支脚（40）　土製の支脚の端部で、上端は平坦で、径4.7cmの円形を呈する。調整は押さえのみで、色調は火を受けた痕跡が弱く、一部赤化しているが、全体的には黄白色を呈する。

土師器小皿（41～45）　41は完形で、口径8.4cm、器高1.6cm。底径6.0cm。内外ナデ、底部はヘラ切り。色調は内外黄白色。42は完形で、復元口径8.8cm、器高1.5cm。復元底径6.0cm、内外ナデ、底部はヘラ切り。色調は外面黒灰色、内面黄白色。43は完形で口径7.8cm、器高1.3cm。底径5.1cm。内外ナデ、底部は糸切りで板状圧痕が見られる。色調は内外黄白色。44は完形で、口径9.3cm、器高1.4cm、底径6.3cm。45は完形で、口径8.0cm、器高1.1cm。底径6.5cm。内外ナデ、底部は糸切り。色調は内外黄白色。

土師器皿（46～48）　46は復元口径11.3cm、器高2.6cm、底径8.4cm。内外ナデ、底部は糸切りか。色調は外面にぶい黄白色。内面にぶい暗褐色。47は復元口径10.6cm、器高2.4cm、底径7.1cm。内外ナデ、底部は糸切りか。色調は外面灰黒色、内面赤橙色。48は復元口径12.2cm、器高2.7cm、底径7.2cm。内外ナデ、底部は回転ヘラ切り。色調は内外黄白色。

土師器高台付皿（49～54）　49は高台径7.0cm。内外ナデ。底部はヘラ切り後断面逆三角形の高台がつく。色調は内外黄白色。50は高い高台のつくもので、復元高台径8.0cm。内外ナデ。色調は内外にぶい黄橙色。51は復元高台径10.8cm。内外ナデ、色調は内外灰褐色。52は高い高台のつくもので、復元高台径7.9cm。内外ナデ。色調は内外黄橙色。53は皿部と高台部の間に鍔の付くもので、復元高台径7.0cm。内外ナデ、色調は内外黄橙色。54は高台が外に張り出すもので、復元高台径は8.0cm。内外ナデ、色調は内外淡黄橙色。

杯（55～65）　55は復元口径12.8cm、器高4.0cm、復元底径6.4cm。内外ナデで、底部は糸切り。色調は内外黄褐色。56は復元底径7.4cm、内外ナデ、底部糸切り。色調は内外黄褐色。57は口縁部



第81図　包含層出土遺物実測図２（1/3）

が外反するもので、復元口径14.1cm。内外ナデ、内外黄橙色から黄白色。58は復元口径15.6cm、内外磨き。色調は明黄色。59は復元底径8.4cm、内外ナデ、色調は内外黄白色。60は底部が丸みを持ち、外面は体部がナデ、底部は回転ヘラ切り、内面は回転ナデ。色調は内外黄白色。61は復元底径5.6cm、内外ナデ、底部はヘラ切り。色調は内外黄白色。62は復元底径6.4cm、内外ナデ、底部回転ヘラ削り。色調は内外黄白色。63は復元底径6.6cm、内外ナデ、底部は回転ヘラ切り。色調は内外黄白色。64は復元底径6.6cm、内外ナデ、底部は回転ヘラ切り。色調は内外にぶい暗黄白色。65は復元底径4.8cm、内外ナデ、底部は糸切り。色調は外面淡橙白色、内面にぶい灰黒色。

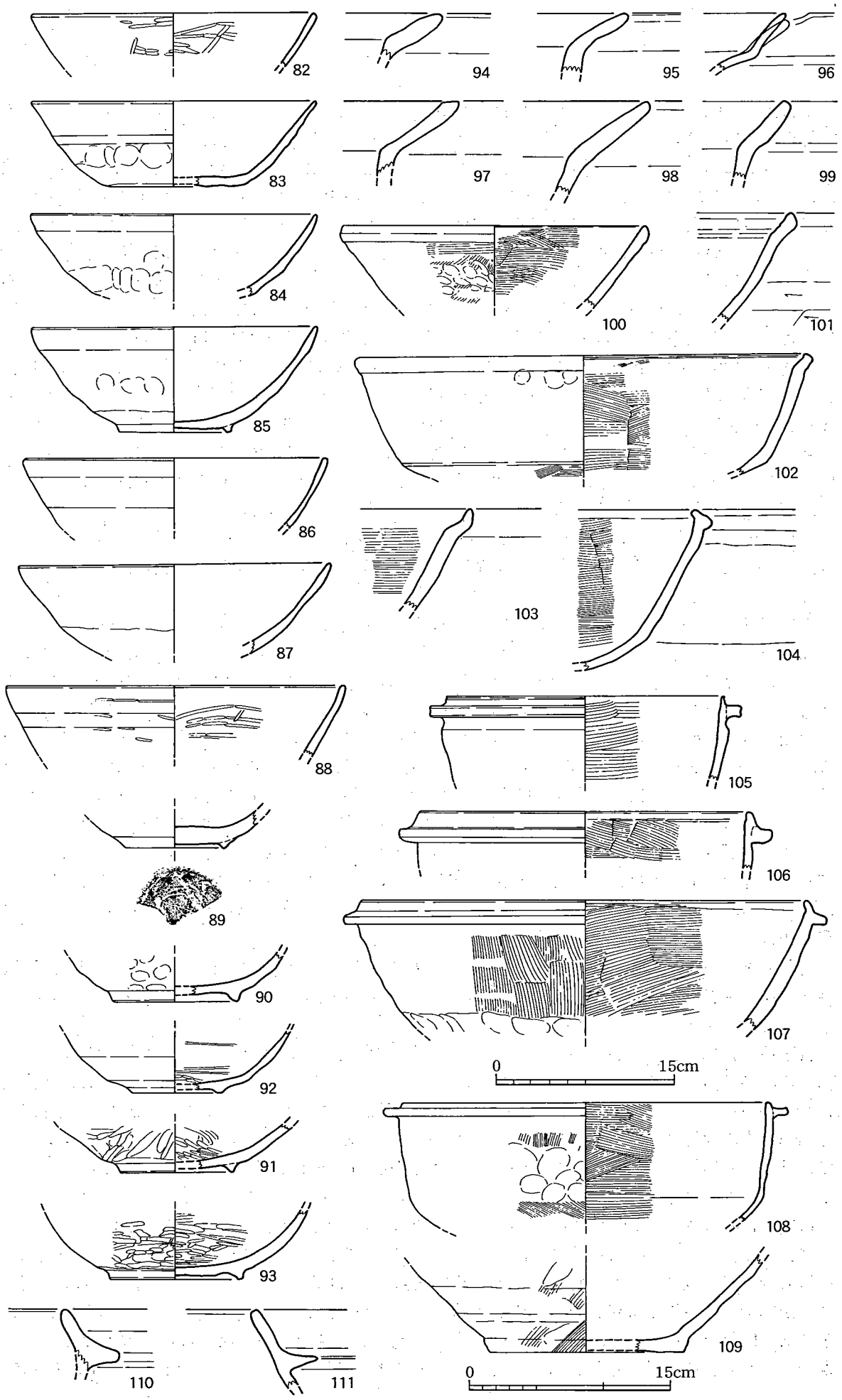
土師器椀（66～69）　66は高台が外に張り出すもので、復元高台径6.6cm、内外ナデ。色調は外面黄橙色、高台内暗黒褐色、内面にぶい灰褐色。67は高台が外に張り出すもので、復元高台径は7.6cm、内外ナデ。色調は内外黄褐色。68は復元高台径7.3cm。内外磨き。色調は内外黄白色で、一部煤つき。69は断面逆台形の低い高台がつくもので、復元高台径6.2cm、外面ナデ、内面磨き。色調は内外黄白色。

黒色土器椀（70～78）　70は復元高台径9.3cm、底部ヘラ切り後高台を貼り付けたもので、外面ナデ、内面磨き。色調は外面黄白色、内面暗灰褐色。71は復元口径15.0cm、内外ナデの摩滅、色調は内外黄橙色だが、内面は器面が剥落したもので、本来暗黒色であろう。72は復元口径9.6cm、外面口縁部は黒色、体部は黄白色、内面は黒色。73は高台が外に張り出すもので、復元高台径8.4cm、外面ヘラ削り、高台内ナデ、内面磨き。色調は外面橙褐色、内面漆黒色。74は復元口径16.9cm、外面ナデの摩滅、内面は磨きの摩滅。外面黄白色、内面灰黒色。75は外に大きく張り出す高い高台がつくもので、復元高台径9.0cm、底部はヘラ切り後高台を貼り付け、外面はナデ、内面はナデの摩滅。色調は外面黄橙色から黄白色、内面黒灰色。76は外に大きく張り出す高い高台がつくもので、復元高台径9.2cm、底部はヘラ切り後高台を貼り付け、外面はナデ、内面はナデの摩滅。色調は外面黄白色、内面黒灰色。77は断面逆三角形の高台のつくもので、復元高台径6.6cm、外面はナデ、内面はナデの摩滅。色調は外面黄白色、内面黒灰色。78は断面三角形の低い高台のつくもので、復元高台径6.6cm、内外磨き、色調は外面暗灰黒色、内面漆黒色。

須恵器杯（79）　79は口縁がわずかに外反する椀で、復元口径6.0cm、内外ナデ、内外暗灰色。

須恵器鉢（80・81）　東播系の鉢で、80は復元口径25.4cm、内外ナデ、色調は内外暗灰白色を呈す。81は口縁外面が肥厚して玉縁状をなすもので、片口をもつ。復元口径27.6cm、器高10.0cm、底形8.7cm。内外ナデで、底部は糸切り。色調は内外青灰色。

瓦器椀（82～93）　82は口縁部片で、復元口径16.0cm。内外横ナデ後磨き。色調は内外口縁部黒色、それ以下は灰色。83は完形に復元でき、底部は高台がつかず、平底をなす。復元口径16.0cm、器高4.8cm、復元底径8.0cm。外面上半はナデ、下半部は押さえ。内面は磨き。色調は暗黄灰色で、内外下半は燻されている。84は復元口径16.0cm。外面上半はナデ、下半部は押さえ。内面は磨き。色調は暗茶灰色から黒灰色で、内外下半は燻されている。85は完形に復元でき、断面逆台形の低い高台がつく。外底に「丨」の線刻がある。口径16.0cm、器高6.0cm、高台径6.4cm。外面は口縁部がナデ、体部は押さえ。内面は磨き。色調は口縁部が黒色、その下が黄灰色、下半は灰黒色。86は口縁部片で、復元口径27.0cm。外面ナデ、内面はナデの摩滅。外面は口縁部灰黒色、体部灰色。内面は口縁部灰色、体部灰黒色。87は口縁部片で、復元口径17.4cm、内外摩滅のため不明。色調は黄褐色。88は口縁部片で復元口径19.0cm。内外ナデ後粗い磨き。外面灰黒色、内面灰色。89は底部片で断面三角形の小さな高台がつく。外底部には記号化した線刻がある。外面体部はナデ。内面はナデ。色調は内外青灰色。90は底部片で断面三角形の高台がつく。外面体部は押さえ。内面はナデの摩滅。91は底部片で断面逆台形の小さな高台が付く。高台径は5.0cm、外面はナデの摩滅で、内面は磨き。色調は内外灰色。92は底部片で小さな逆三角形の高台が付く高台径は6.4cm。外面は体部がナデの後磨き、高台はナデ。内面は磨き。色調は内外灰白色、内面は一部灰褐色。93は底部片で断面逆台形の小さな高台が付く。高台径は7.4cm。体部は内外磨き、底部はナデ。色調は外面灰黒色、内面灰白色。



第82図　包含層出土遺物実測図３（98・100・106・107は1/4、他は1/3）

瓦質土鍋（94～99・112）　いずれも口縁部で、94は内面の口縁下に稜をもって屈曲したもので内外ナデ。外面は煮沸使用のため暗褐色に変色している。内面はにぶい黄白色。95は口縁部が薄く、屈曲の稜がにぶいもので、内外ナデ。色調は外面暗褐色、内面はにぶい暗黄褐色。96は口縁が二重口縁状に屈曲しており、口縁は片口状である。色調や焼成から弥生土器の可能性を残す。内外摩滅しており調整不明。色調は内外黄橙色。97は屈曲した口縁の長いもので、口唇部が平坦面をもち、やや内湾している。色調は外面煤付きで暗灰褐色、内面黄橙色。98は色調鉢の口縁部で、屈曲した口縁が直線的で内外ナデ、外面は煤付着で暗灰褐橙色、内面にぶい暗黄色。99は口縁部が屈曲後やや内湾するもので、内外ナデ、外面は付着しているため暗灰褐色。112は瓦質の土鍋の杷手で、指押さえの痕跡が全面に見られる。鉢部の内面はナデ。内外黒色だが煤は付着していない。

瓦質鉢（100～103・109）　いずれも口縁部で、100は口縁部が肥厚して玉縁状をなし、復元口径22.6cm。外面口縁部はナデ、体部は押さえ後ハケ。内面はハケ。胎土は須恵質に近い。内外灰白色。101は口縁部片で、口縁部が外傾し口唇部が肥厚してやや上に伸びている。外面は口縁部がナデ、体部は削り。内面はナデ。102は口縁部が外傾し、口唇部はナデで平坦をなす。口縁部はナデ、下位はハケ。内面はハケ。色調は、外面は煤が付着しているため暗黄褐色、内面は黄褐色。103は口縁部が外傾した後、口唇部が上に伸びている。外面はナデ、内面はハケ。外面は煤が付着しているため暗黄褐色を呈する。内面は黄褐色。109は底部片だが、平底で粘土の積み上げ痕が残っている。外面はハケ後ナデ、内面はナデ。色調は黄白色で胎土は精良、焼成もよい。近世の鉢か、甕の底部の可能性が高い。

瓦質羽釜（104～108・110・111）　104～108はいずれも口縁部で、104は口唇部が内傾し、外面口縁下が肥厚して玉縁状をなすことで、小さな鍔を設けている。外面はナデで、内面は口縁部までハケ。外面は煤が付着しているため暗黒褐色で、内面は茶褐色である。105は口縁下に断面方形の突帯がつき鍔をなし、口唇部が薄いのが特徴がある。外面はナデ、内面はハケ。色調は外面橙褐色、内面橙褐色。106は外面口縁下に断面方形の突帯がつき、鍔をなす。口唇部先端に向かって薄くなる。復元口径9.4cm。外面はナデ、内面はハケ。色調は内外橙色。107は外面口縁下に断面方形の突帯がつき、鍔をなす。口唇部先端に向かって薄くなり内傾する。復元口径24.9cm。外面口縁部がナデ、体部はハケで、下位は削り。内面はハケ。108は外面口縁下に断面方形の突帯がつき、鍔をなす。体部で屈曲している。口縁部はナデ、口縁下はハケ、体部は押さえ、下位はハケ。復元口径27.6cm。外面は暗黄褐色、内面明黄褐色。110・111は大型の羽釜の口縁部で、器壁が薄く、口縁部が大きく内湾する。110は外面鍔上が灰黒色、鍔下は橙色。内面黄橙色。111は内外ナデで、外面は鍔上が黄橙色、鍔下は黄白色。内面は黄白色。

瓦器火鉢（113・114）　113は胴部片で断面台形の小さな突帯がつく。内外横ナデ。内外黒色で、外面は煤が付着している。114は底部片で高い高台がつくが、全周せず3～4脚と思われる。内外ナデ。復元高台径16.4cm。内外黒灰色。

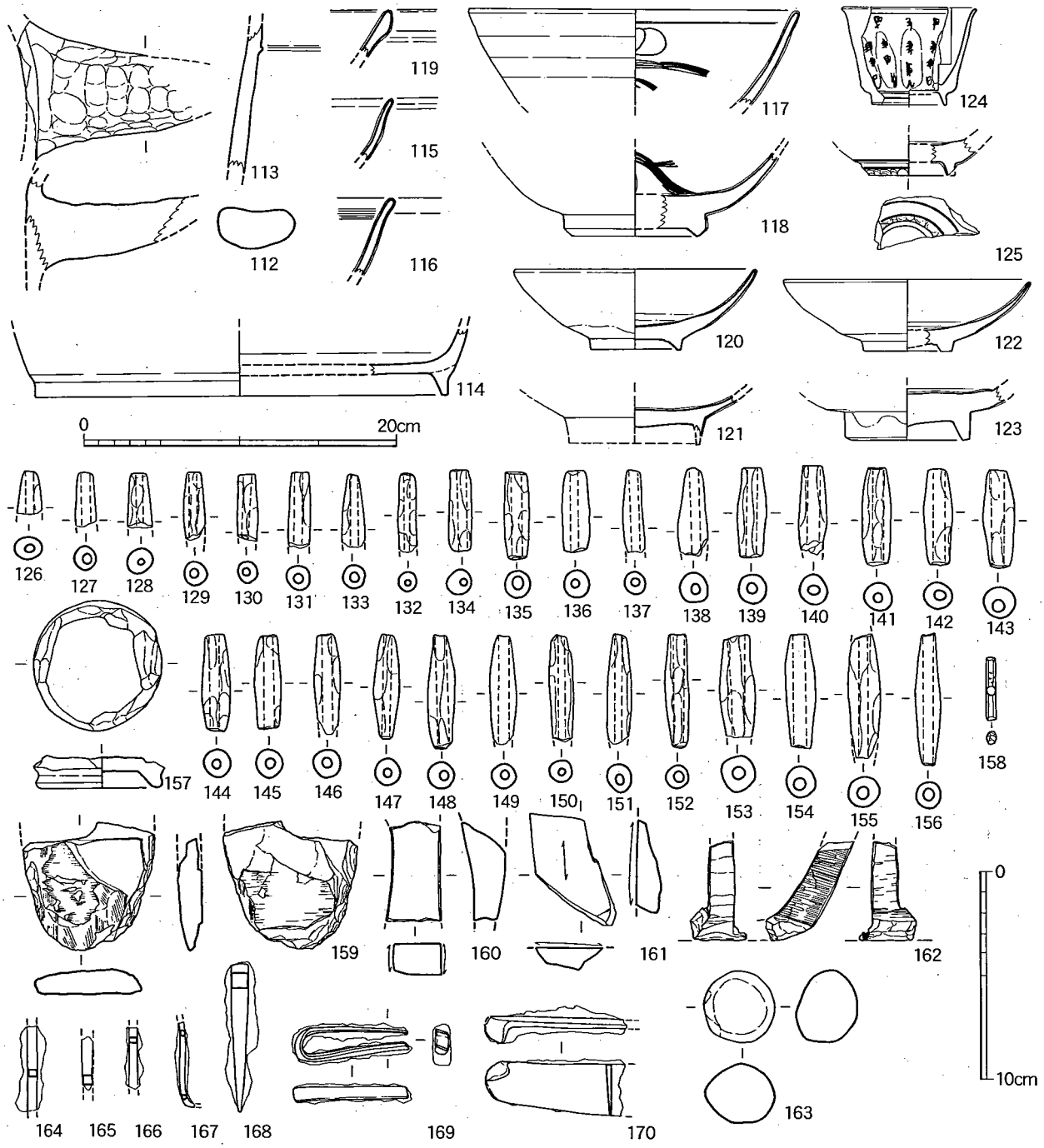
青磁椀（115～118）　115・116は口縁部片で、115は口縁部がわずかに外反して口唇部がやや内湾する。釉は淡灰緑色、胎は灰白色。龍泉窯系。116は口縁部がわずかに外反するもので口縁内面に3条の界線がめぐる。釉はにぶい黄灰色。胎は白灰色。龍泉窯系。117は口縁部片で、復元口径15.6cm。内面片切り彫りの花文が入る。釉は濃緑色で、胎は灰色。龍泉窯系である。118は底部片で、外に張り出す断面方形の高台がつく。復元底径6.8cm。内面に片切り彫りの花文がある。釉は濃緑色。胎は灰白色。龍泉窯系。

白磁（119～123）　119は小さな玉縁口縁で、釉はにぶい灰白色、胎は灰白色。120は皿で、復元口径11.6cm、器高4.1cm、高台径4.3cm。釉は体部下位までかかっており、それ以下露胎。内面は内底縁に釉の掻き取りがある。釉は乳白色、胎は灰色。121は椀の底部片で、高い高台が付く。高台部分が露胎。高台の下端が欠損している。釉は緑ががかった灰白色。胎は灰色。122は皿で、外に張り出す低い逆台形の高台がつく。復元口径11.8cm、器高3.4cm、高台径4.3cm。釉は体部下位までかかっており、それ以下露胎。内面は内底縁に釉の掻き取りがある。釉は乳白色、胎は灰色。123

は椀の底部片で細長い逆台形の高台が付く。釉は高台部分が露胎で、欠損しているが内底縁は釉が掻き取られているものと思われる。釉は乳白色、胎は灰白色。

染付（124・125）　124は猪口で、口縁がわずかに外傾し、外に張り出す細長い高台がつく。外面は口縁下と高台中位に界線が一条めぐり、体部には漢字らしいものがあるが、文様化されている。復元口径6.4cm、器高5.2cm、復元高台径3.6cm。釉は全面にかかっており、透明釉で、胎は灰白色。125は椀の底部片で方形の高台が付く。復元高台径は4.4cm。高台外面に２条の界線がつく。高台の外縁は小さな打ち掻きがめぐっており、円盤状製品に再利用したものと思われる。

土錘（126～156、表３）　いずれも中央に最大径をもつタイプで、成形・色調に大きな差は認められない。欠損しているものを除くと、長さ3.9～6.3cm、径9.0～1.5cm、重量5.4～10.9cmに纏まる。



第83図　包含層出土遺物実測図４（112は1/4、他は1/3）

円盤状土製品（157）　黒色土器椀の底部を再利用したもので、底部は外に張り出す断面長方形の高台がつく。上からの打ち掻きで、面取りしているが、その後の調整はみられない。外面はにぶい暗褐色、内面は黒灰色。

158～163は石製品である。

石筆（158）　長さ3.0cm、径4.5㎜、重量は1.8ｇ。石材は長石石英斑岩であろうか。

打製石斧（159）　刃部片で、刃縁は欠損しているため見られないが、一面が膨らみを持ち、反対面が平坦であることから片刃かもしれない。膨らみを持つ面は研磨がある。長さ5.4cm、幅6.3cm、厚さ1.2cm。石材は緑泥片岩で、重量は56.6gを量る。

砥石（160・161）　160は上下端を欠損している。4面使用しており、各面は平滑でよく使われている。手持ち砥石であろう。長さ4.7cm、幅2.4cm、厚さ1.6cm。砂岩製で重量は28.5g。161は砥石で、1面のみ使用。長さ4.4cm、幅3.2cm、厚さ1.2cm。石材は砂岩製で手持ちの仕上げ砥石であろう。

滑石製石鍋の再利用品（162）　胴下位と底部の屈曲部を使用している。断面は方形で、側面には方形に切るための鋸引きの痕跡が残っている。この鋸引きは途中で止まっており、上下が欠損したためか途中で廃棄されている。断面は方形を呈す。石鍋の外面はノミ痕が残っており。色調も煤が付着したためか外面が暗褐色を呈する。長さ4.7cm、幅1.3cm、厚さ1.3cm。重量は27.7ｇ。

投弾（163）　円礫で投弾と思われる。径3.4cmの球形で、砂岩製。重量は38.5gを量る。

不明棒状鉄器（164～166）　163は現存長4.0cm、幅４㎜、厚さ３㎜。164は現存長2.6cm、幅５㎜、厚さ４㎜。165は現存長2.8cm、幅５㎜、厚さ３㎜。

釘（167・168）　166は断面径2mmの円形で細長く、先端が曲がっている。現存長4.1cm、幅３㎜。167は完形の釘で、断面方形で、先端は細く尖っている。長さ7.1cm、幅８㎜、厚さ８㎜。

毛抜き状鉄器（169）　先端が残っているかは不明である。

鎌（170）　小型品の基部で、一部を折り返している。サイズと装着角度から鉈の可能性もあろう。刃は残っている。

表３　包含層出土の土錘計測表

（単位cm、ｇ）

番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量	番号	長さ	最大径	重量
126	(2.2)	1.2	(2.3)	135	(4.2)	1.2	(6.0)	144	4.6	1.4	7.5	153	(5.0)	1.7	(10.3)
127	(2.6)	1.1	(2.5)	136	(3.9)	1.3	6.5	145	4.5	1.3	5.9	154	5.4	1.4	10.1
128	(2.7)	1.2	(3.6)	137	(4.0)	1.1	(3.4)	146	(4.9)	1.3	(5.9)	155	(6.0)	1.6	(10.9)
129	(3.2)	1.1	(3.6)	138	(4.3)	1.4	(7.8)	147	(5.2)	1.2	(6.5)	156	6.3	1.2	6.8
130	(3.1)	1.1	(3.2)	139	4.4	1.4	6.6	148	(5.3)	1.4	(7.0)				
131	(3.1)	1.1	(3.6)	140	(4.3)	1.4	(6.9)	149	(5.3)	1.3	(7.2)				
132	(3.5)	1.1	(3.2)	141	4.7	1.4	7.1	150	(5.0)	1.1	(4.3)				
133	(3.8)	0.9	(2.9)	142	4.6	1.4	6.2	151	(5.3)	1.2	(8.7)				
134	(4.0)	1.1	(5.4)	143	4.6	1.5	8.2	152	5.4	1.1	6.0				

第４章　自然科学的分析

１．上唐原了清遺跡の炭化米特性と稲作起源

和佐野喜久生*・真鍋智子*・秦　憲二**
(*佐賀大学農学部・**福岡県教育委員会)

本遺跡及びその周辺の地形の概略については、本遺跡の報告者の教示による。本遺跡の所在地は福岡県築上郡大平村上唐原字了清で、現在の集落と同様に自然堤防上に位置し、丘陵との間の低地に当時水田があったと考えられる。本遺地からは、縄文時代晩期から12世紀前半～18世紀の遺構、遺物が発見されたが、その中心となる時代は中世（鎌倉～室町時代）のものである。本遺跡の遺構からは、階段状集石をもつ溝に区画された居館跡や、鏡を副葬した墓や、中国製の陶磁器（龍泉窯などで生産されたもの）を出土した廃棄土坑などが発見されている。

炭化米資料は、中央調査区南部の斜面下位に位置する１号廃棄土坑から団子状（強飯の握り飯の部分のようである）に固まって出土したが、出土遺物から13世紀代のものと判断した。

材　料　及　び　方　法

本報告の炭化米資料は福岡県教育委員会によって発掘調査されたものである。測定できた炭化米粒は、１号廃棄土坑から出土した団子状の塊から離脱した６粒である。計測は、スケール付きの板上（約２mm深の4×8mm間隔の条溝の交点に10粒を並べる）で粒の平面（長・幅）及び側面（厚さ）を接写撮影し、約4.5倍大にプリントしたものから行った。米粒の形態的特性は、粒長・粒幅・粒厚の測定値及び計算によって求めた長／幅比の４項目とした。稲粒の接写写真（第85図）は調査した全６粒を示したが、粒長によって短粒系（Ａ集団）と長粒系（Ｂ集団）の２つのグループに分けた。

表４及び５には、既報（３）に示した稲粒（米・籾）の形態的特性の表し方及び粒型の分類の仕方を示した。なお、日本の古代稲を対象とした長粒系及び短粒系の分類は、粒長で中長粒（粒指数・５）と短粒（粒長指数・３）の境界粒長の上下によって行い、4.3㎜以上が長粒系に、それ以下を短粒系とした。なお、極短粒系は3.8㎜以下のものになる。

表４　稲粒（米、籾）特性の指数、指数別階級値及び特性の表現方法（和佐野、1995）

米粒特性	特性指数（階級値）					
	1	3	5*	7	9	10
粒長(㎜)	(3.5) 極短粒	(4.1) 短粒	(4.7) 中長粒	(5.3) 長粒	(5.9) 極長粒	(6.5) 極大長粒
粒幅(㎜)	(1.3) 極狭粒	(1.9) 狭粒	(2.5) 中幅粒	(3.1) 広粒	(3.7) 極広粒	―
粒厚(㎜)	(0.7) 極薄粒	(1.3) 薄粒	(1.9) 中厚粒	(2.5) 厚粒	(3.1) 極厚粒	―
長／幅比	―	(1.1) 円粒	(1.7) 中形粒	(2.3) 細粒	(2.9) 極細粒	―
籾粒特性	1	3	5	7	9	10
粒長(㎜)	(5.3) 極短粒	(5.9) 短粒	(6.5) 中長粒	(7.1) 長粒	(7.7) 極長粒	(8.3) 極大長粒
粒幅(㎜)	(1.9) 極狭粒	(2.5) 狭粒	(3.1) 中幅粒	(3.7) 広粒	(4.3) 極広粒	―
粒厚(㎜)	(1.3) 極薄粒	(1.9) 薄粒	(2.5) 中厚粒	(3.1) 厚粒	(3.7) 極厚粒	―
長／幅比	―	(1.1) 円粒	(1.7) 中形粒	(2.3) 細粒	(2.9) 極細粒	

*；4.4㎜≦中長粒(4.7㎜)＜5.0㎜，2.2㎜≦中幅粒(2.5㎜)＜2.8㎜
1.6㎜≦中厚粒(1.9㎜)＜2.2㎜，1.4≦中形粒(1.7)＜2.0

結　果　及　び　考　察

本遺跡の炭化米資料は13世紀代（中世）のものであるが、粒特性の比較は中国の新石器時代（B.C.4.000～1.000）の５遺跡、北部九州３遺跡（弥生前～中期）及び韓国の松菊里（紀元前５世紀）のものを対象にして行った。なお、

表5　稲粒（米、籾）の粒長・粒幅指数による粒型分類（和佐野、1995）

		粒長指数						粒幅表現
		1	3	5	7	9	10	
粒幅指数	1	1・1型	1・3型	—	—	—	—	極細粒
	3	3・1型J*	3・3型	3・5型	3・7型	3・9型	3・10型	狭　粒
	5	5・1型J	5・3型J	5・5型J	5・7型	5・9型	5・10型	中幅粒
	7	7・1型J	7・3型J	7・5型J	7・7型J	7・9型	7・10型	広　粒
	9	—**	—	—	—	—	—	極広粒
粒長表現		極短粒	短粒	中長粒	長粒	極長粒	極大長粒	

＊J；従来の分類法による長／幅比・2.0以下のジャポニカ・タイプにほぼ相当する。
＊＊－；本報告（和佐野，1995）の資料中にはみられなかった。

本遺跡の資料と直接に比較の対照となる同時代のものを選択しなかった理由は、基本的にはそれに該当する調査データを所有していないことによるが、下記のように、本遺跡の炭化米粒の系譜・起源を中国の長江下流域かそれ以南に求めなくてはならないからである。これらの中国の４遺跡（大連のものを除く）の古代イネは、年代は弥生時代を数千年遡ることになるが、日本を含めて世界の栽培イネの祖先（遺伝子源）となるものである。また、本資料が属する13世紀の日本はすでに中国・東南アジアとの貿易が盛んであったことも考えると、本遺跡のイネ品種が従来のものとは全く異なるものであっても何ら不思議なことにはならない。

表６には、本遺跡の炭化米資料（Ａ、Ｂの長・短粒系に分けたものを含む）及び上記の比較遺跡の粒特性４項目について、それぞれの平均値、標準偏差及び調査粒数を示した。なお、本遺跡の資料は粒長の変異幅が3.5㎜～4.9㎜の広い範囲に及び、長・短粒系の２つに分かれることから、本遺跡の炭化米資料は２つの異なる集団、上唐原丁清Ａ及び上唐原丁清Ｂの２品種の混合体とみなして分析した。表に示されるように、本遺跡の炭化米粒の粒長平均値は、全体的には長粒系と短粒系の境界値に近い4.28㎜、Ｂ集代は長粒系の4.66㎜となった。また、粒特性のなかでも最も特徴的な傾向は、粒幅が従来の日本の古代米のそれとは異なり、顕著に狭粒（第85図の粒写真の右端にみられるような典型的なインディカ米）になることである。

第84図は、本遺跡の炭化米資料（図中の黒丸印）の長・幅平均値による粒大・形の分布を、既報（１、３）の北部九州及び韓国の16遺跡17資料（図中の白抜き丸印）及び中国の新石器時代の５遺跡（図中の白抜き四角印）のものと比較しながら示した。区別した２つのＡ、Ｂ集団は全く離れた位置に分布し、上唐原丁清Ａは従来の短粒系の粒幅を狭くした狭・短粒系となり、上唐原丁清Ｂは羅家角２層の近くに位置した。

表７には、３資料それぞれの粒厚の度数分布を対照資料と比較しながら示した。上述の北部九州の17資料の粒厚の全平均値は1.88㎜であることから、３集団（原集団を含む）とも粒厚は平均以下の値を示し、やや薄粒である。このことから、この遺跡の周辺での稲作は余り適した環境条件下ではなかったと考えられるが、インディカ系の品種特性も加味される。また、栽培された稲品種が混種であったとすれば、稲作知識と栽培技術はそれほど熟知されていなかったとも考えられる。ただ、このようなインディカ系のイネ品種が実際に栽培されたかどうかの確証はない。13世紀という時代背景を考えると、インディカ系の米が輸入された可能性もある。

表８には、長／幅比の度数分布を前表と同じように示した。北部九州の全平均値1.69に比べると、３集団とも大きい値（狭粒になる）を示し、中国の５遺跡の平均値（2.00）と同じ値となった。

表９は、３つの炭化米資料それぞれの粒型分布を、類似する対照遺跡と比較したものである。本遺跡の全資料の粒型分布は、粒数は少ないが草鞋山及び大嘴子両遺跡のものとよく類似する。本遺

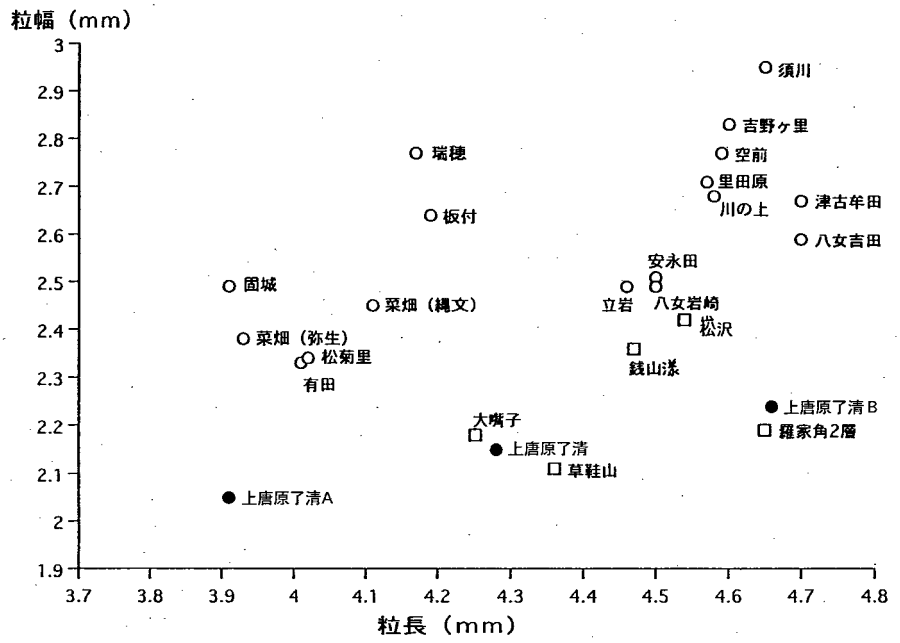
表6　上唐原了清及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値及び標準偏差

遺跡名	上唐原了清	上唐原了清A	上唐原了清B	羅家角2層	草鞋山	崧沢	銭山漾
時代	11世紀	11世紀	11世紀	B.C.4000	B.C.4290	B.C.4000	B.C.3310
所在地	福岡県築城郡	福岡県築城郡	福岡県築城郡	浙江桐郷	江蘇青浦	上海市	浙江呉興
長（mm）	4.28	3.91	4.66	4.65	4.36	4.54	4.47
S.D.	0.46	0.41	0.19	0.42	0.29	0.41	0.26
幅（mm）	2.15	2.05	2.24	2.19	2.11	2.42	2.36
S.D.	0.14	0.16	0.07	0.29	0.21	0.14	0.21
厚（mm）	1.70	1.67	1.74	1.69	1.46	1.95	1.83
S.D.	0.07	0.11	0.00	0.19	0.13	0.48	0.15
長／幅比	1.99	1.90	2.08	2.14	2.08	1.91	1.91
S.D.	0.13	0.06	0.14	0.27	0.23	0.37	0.17
調査粒数	6	3	3	33	39	22	84

S.D：標準偏差

遺跡名	大嘴子	松菊里	菜畑	板付	立岩
時代	B.C.1000	B.C.5	弥生前期	弥生前期	弥生中期
所在地	遼寧大連	忠清南道	唐津市	福岡市	飯塚市
長（mm）	4.25	4.02	3.93	4.19	4.46
S.D.	0.29	0.37	0.28	0.24	0.21
幅（mm）	2.18	2.34	2.38	2.64	2.49
S.D.	0.15	0.27	0.20	0.18	0.14
厚（mm）	1.67	1.59	1.95	1.80	1.74
S.D.	0.11	0.23	0.24	0.13	0.12
長／幅比	1.96	1.73	1.66	1.59	1.80
S.D.	0.14	0.12	0.12	0.11	0.13
調査粒数	62	122	38	120	100

S.D：標準偏差



（上唐原了清A：短粒　上唐原了清B：長粒）

○　北部九州,韓国
●　上唐原了清
□　中国

第84図　上唐原了清及び比較対照遺跡（北部九州、韓国）の炭化米粒の長・幅平均値の分布図

跡の炭化粒の粒型でもっとも特徴的なことは、北部九州の弥生時代のものには極希にしかみられない3・5型（第85図の写真の右端のもの）の狭・中長粒型のものが6粒の中に存在していたことである。しかし、この粒型は本表に示した中国の4遺跡（大嘴子遺跡のものは粒型指数は同じでも、粒形が異なる）には比較的多く見られるもので、本遺跡の炭化米粒の系譜・起源は中国の長江下流域に求められることがわかる。ただし、紀元前数千年の中国の新石器時代のイネに直接その起源を求めるのではなく、これらの祖先系統（遺伝子源）から派生したと考えられる、その後のイネ品種を想定（現在の栽培品種には多くみられるものである）したものである。なお極短小粒のものは、九州北岸域及び韓国の古代イネには多くみられるものである。

以上のように、本遺跡の炭化米資料（団子状の塊から離脱した6粒）から計測できた米粒はわずかではあったが、その粒特性は本遺跡の年代が所属する13世紀という日本の時代背景をよく反映したものであると言えよう。すなわち、本遺跡の廃棄土坑から出土した陶磁器は竜泉窯で作られたもの（江南の浙江省・寧波港から積み出された）であり、13世紀頃の日本（九州・福岡の博多津など）は、中国や東南アジアとの陶磁器などの貿易が盛んだったことである（5）。当然のことであるが、

表7　上唐原了清及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差

	粒厚（mm）									平均値	標準偏差
遺跡名	1.0	1.2	1.4	1.6	1.8	2.0	2.2	2.4	2.6	(mm)	
上唐原了清			1	3						1.70	0.07
上唐原了清A			1	1						1.67	0.11
上唐原了清B				2						1.74	0.00
羅家角2層		3	6	13	10	1	1			1.69	0.19
草鞋山	2	5	29	3						1.46	0.13
崧沢	1	2	2	2	3	5	5	2		1.95	0.48
銭山漾			4	38	28	12	2			1.83	0.15
大嘴子		1	15	38	8					1.67	0.11
松菊里	7	3	29	64	15					1.59	0.23
菜畑弥生		1	6	10	11	9	1			1.95	0.24
板付		1	4	50	57	8				1.81	0.13
立岩			13	54	31	2				1.74	0.12
分類（指数）	薄粒（3）			中厚粒（5）			厚粒（7）				

表8　上唐原了清及び比較遺跡の炭化米粒長／幅比の頻度分布・平均値・標準偏差

	長／幅比									平均値	標準偏差
遺跡名	1.0	1.2	1.4	1.6	1.8	2.0	2.2	2.4	2.6	(mm)	
上唐原了清					4	1	1			1.99	0.13
上唐原了清A					3					1.90	0.06
上唐原了清B					1	1	1			2.08	0.14
羅家角2層				2	9	6	9	4	1	2.14	0.27
草鞋山				3	9	18	7		2	2.08	0.23
崧沢			6	6	2	3	3	1	1	1.91	0.37
銭山漾			1	24	37	16	4	1		1.91	0.17
大嘴子				1	9	19	28	3		1.96	0.14
松菊里			16	75	28	3				1.73	0.12
菜畑弥生			13	20	5					1.66	0.12
板付		3	62	52	3					1.59	0.11
立岩			5	48	39	7				1.81	0.13
分類（指数）	円粒（3）			中形粒（5）			細粒（7）				

表９　上唐原了清及び比較遺跡の炭化米の粒型分布表

	上唐原了清　６粒　粒長指数					計	上唐原了清Ａ　３粒　粒長指数					計
	1	3	5	7	9	(%)	1	3	5	7	9	(%)
粒幅指数 1												
3	17	17	17			51	33	33				66
5		17	33			50		33				33
7												
9												
計(%)	17	34	50			101	33	66				99
	上唐原了清Ｂ　３粒						羅家角２層　33粒					
粒幅指数 1												
3			33			33		19	26	7		52
5			67			67		7	19	16	3	45
7									3			3
9												
計(%)			100			100		26	48	23	3	101
	草鞋山　39粒						崧沢　22粒					
粒幅指数 1	3					3						
3	3	36	33			72		9	18	9		36
5		13	13			26		32	14	5		51
7								5	5	5		15
9												
計(%)	6	49	46			101		46	37	19		102
	銭山漾　84粒						大嘴子　62粒					
粒幅指数 1												
3		10	10	1		21	2	38	12			52
5		27	48	4		79	3	22	23			48
7			1			1						
9												
計(%)		37	59	5		101	5	60	35			100
	松菊里　122粒						菜畑弥生　38粒					
粒幅指数 1	3					3						
3	14	6				20	13	3				16
5	6	60	13			79	18	53	11			82
7								3				3
9												
計(%)	23	66	13			102	31	59	11			101
	板付　120粒						立岩　99粒					
粒幅指数 1												
3								1				1
5	5	58	15			78		34	62			96
7		13	8			21		1	1			2
9												
計(%)	5	71	23			99		36	63			99

本遺跡の所在地の築上郡大平村が当時、直接外国と交易をして得た米ということではなく、例えば博多津に陶磁器などと一緒に集荷されたものが旧官道を経て当地に持ち込まれたものである。

縮尺１目盛：１ミリ

第85図　上唐原了清遺跡の炭化米

要　約

１、福岡県築上郡大平村大字上唐原字了清所在の上唐原了清遺跡（12世紀から14世紀代）出土の炭化米の粒特性を、既報の北部九州、韓国及び中国の新石器時代（B.C.4.000～1.000）の遺跡のものと比較し、本遺跡の古代稲の粒特性と稲作起源についての考察を行った。

２、本遺跡の炭化米の全資料は狭幅の短粒系のイネ品種になるが、粒長変異によって、短粒系の上唐原了清Ａ及び長粒系の上唐原了清Ｂの２品種の混種であるとした。

３、本遺跡の狭・長粒系の稲品種の起源・系譜については、13世紀という時代的背景も考慮して、中国の江南地方が最有力地になるであろうとした。

４、炭化米粒の粒厚がやや薄粒であったこと、及び混種であったと考えられることから、当地の古代稲作は必ずしも習熟したものではなかったようである。

５、本遺跡の稲作伝播ルートは、中国及び東南アジアから陶磁器などと一緒に博多津に持ち込まれたものが、旧官道を経て伝播し、従前の九州北岸由来の古代イネと混種されて当地で栽培されたと考えられる。

参 考 文 献

１、和佐野喜久生　1993．九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝的研究．育種学雑誌　43：586-602

２、和佐野喜久生　1995．稲作の江南起源説．講座・文明と環境　第３巻　農耕と文明．朝倉書店，東京：143-167

３、和佐野喜久生　1995．東アジアの古代稲と稲作起源，東アジアの稲作起源と古代稲作文化．文部省科学研究費による交際学術研究、報告・論文集、和佐野喜久生・研究代表・編集：1-52、331pp

４、福岡県教育委員会報告書　（秦　憲二による記述部）

５、亀井明徳　1997．東シナ海をめぐる交易の構図．考古学による日本歴史　10　対外交渉　：77-88

2．繊維の材質分析

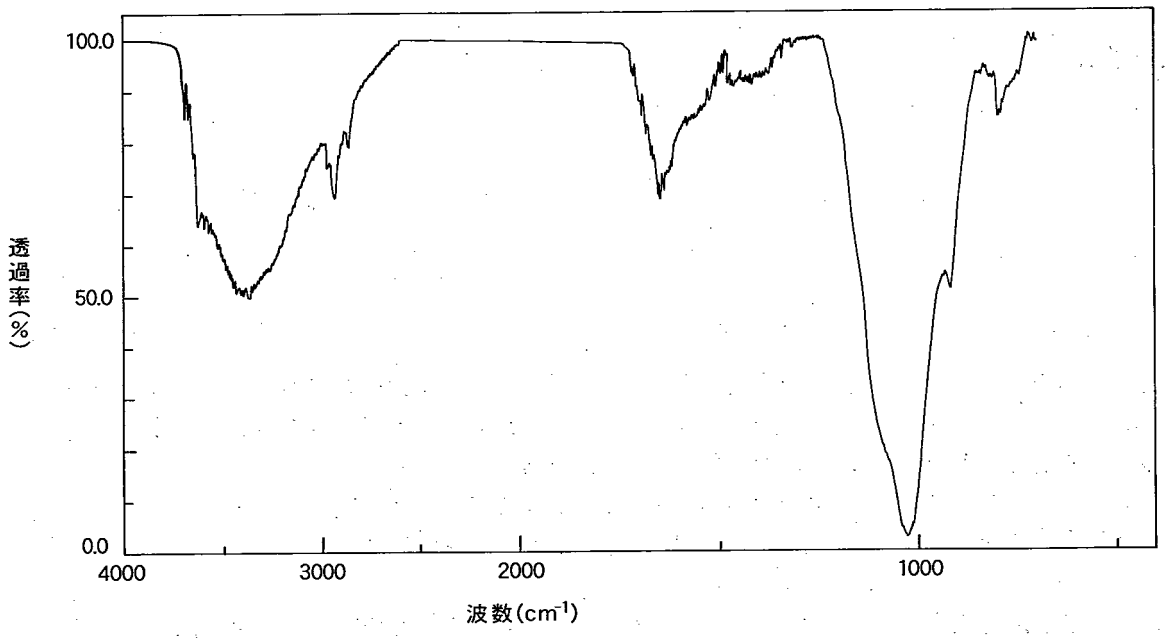
約１㎎以下の微少量試料を採取し、平坦な金属台上で薄層とし、顕微赤外分析法により透過スペクトルを測定した。(装置は堀場製作所　ＦＴ520型)

図１に示すように、現代の家蚕から得た絹繊維の赤外スペクトルとは大変異なっている。しかし出土遺物で劣化が著しく進行した場合、このようなスペクトルが得られることは他の事例から既に知られており (1) 材質が絹であることは間違いない。一般に金属製品と接して出土した絹の場合、劣化が著しく進行して絹の有機成分が全く失われ、表面が土や、金属酸化物で掩われて、外見上だけ織物のように見えることもある。本試料では3000～2800cm^{-1}付近にCH_2、CH_3などに由来する吸収が明瞭に残っていることから有機成分も一部残存していることが確認できる。

麻類などの植物繊維が劣化した場合の赤外スペクトルの変化は、絹繊維の劣化した場合とは明らかに異なっており、本試料は植物繊維ではない。

文献

(１) Masanori SATO,"Scientific Studies on Ancient Silk Fibers Used for Textiles Excavated at Archaeological Sites in Japan, Using Microscopic Fourier TransForm Infrared Spectroscopy":保存科学会誌（韓国文化財保存科学会)、５、45-50（1996）



第86図　出土繊維の赤外吸収スペクトル

3．福岡県築上郡上唐原了清遺跡出土の中世人骨

中橋孝博
九州大学大学院比較社会文化研究科

はじめに

福岡県東部、築上郡上唐原の山国川西岸に位置する了清遺跡において、1994年度の福岡県教育委員会による発掘調査によって中世期の埋蔵人骨が出土した。残念ながら歯のみの遺存例であるが、その人類学的な検討結果を以下に報告する。

遺跡・資料

了清遺跡は、福岡県築上郡大平村大字上唐原字了清に所在し、当地を流れる山国川西岸の自然堤防上に見出された遺跡である。1994年に実施された発掘調査によって、縄文時代晩期から中世に至る時期の遺物、遺構が確認された。中世期の墓壙が6基検出されたが、この内、人骨は3号土壙墓のみから出土した。墓壙は、126×84cmの長方形で、出土状況から本来は木棺墓であったと推測され、また墓壙内には鏡、青磁の合子、瓦器碗などが副葬されていることから、この地域の有力者の埋葬事例と見なされている。

人骨は歯のみで、頭蓋や体部骨は遺存していない。所属時代は、副葬品などに関する考古学的検証から、12世紀後半のものと考えられている。

人骨所見

遺存歯の歯式を以下に示す。

／ ／ ／ P^2 ／ C ／ ／	／ I^2 C ／ P^2 ／ M^2 M^3
／ ／ ／ P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3

（／：欠損）

他に歯の小片がかなり存在するが、破損が著しく、歯種の同定は困難である。

一応、第三大臼歯が咬合面まで萌出していることから、成人のものと見なされる。また、咬耗の程度がごく弱く、おそらくまだ20代の若い成年人骨であろう。

歯のサイズが全体的にやや小さめであるが、計測できる歯が少数に限られ、また、得られた計測値にもばらつきがあるため、性別についてはどちらとも判定が困難である。

以上、了清遺跡出土の、中世人骨については、保存状態不良のため、その形質に関する人類学的な検討はできなかった。ただ、残存歯の観察所見から、性別は不明であるが、かなり若い20代の成年期人骨と判断された。

第５章　おわりに

本遺跡の今回報告した地区からは、掘立柱建物跡５棟、土坑15基、廃棄土坑２基、墓６基、集石遺構４基、竪穴状遺構１基、井戸１基、門状遺構１基、柵跡３基、桶状遺構４基、埋甕３基、道路状遺構２基、溝７条と多種多様な遺構が検出されており、遺物も縄文時代から近世のものまである。

これらを時期毎の変遷を見てみよう。

１．縄文時代

型式のわかる土器はわずかだが、小池原上層式・北久根山式・黒川式・夜臼式があり、時期幅がある。しかし、包含層出土遺物は晩期のものがほとんどであり、その他は後の時代の遺構に混入したものである。遺構は今回の調査区内では認められなかったが、平成７年度に調査した下段の調査区では確認されている。

２．弥生時代後期後半～古墳時代前期

弥生時代後期後半の遺構は、中央区の南半にのみ見られ、１・２号溝は程度に差はあるが、南側を囲むように湾曲している。しかしながら、その内側には当該時期の遺構がない。２号溝に土器が一括廃棄されていることから、集落が近くにあったことは間違いないだろうが、調査区外に存在するのであろう。遺物の時期は、後期後半のみで時期幅がほとんどない。郷ヶ原遺跡の溝はやはり多量の土器が一括廃棄されており、この地域一帯になんらかの事象が起こったのであろう。

古墳時代前期の遺物は、包含層からのものがほとんどで、唯一13号土坑がこの時期に属する可能性をもつ。ローリングを受けているものが多いが、遺物の時期幅が狭いことから、付近に集落があった可能性が高い。

３．中世

遺構のほとんどが中世のもので、北区と中央区の全域に見られる。中央区の平坦面は溝の残存状況から、大きく削平されていることが分かる。他の遺構が存在していた可能性はあるが、掘込みの深い遺構であれば残るはずなので、やはり東側に集中していたであろう。北区は、井戸や４号溝の石積みの上面が遺存していることから、比較的残りが良いと思われる。

北区は４号溝で区画された中に小型の掘立柱建物跡と柱を石で根締めした建物があり、井戸・竪穴状遺構・門状遺構・柵跡がある。時期が特定できるものは少ないが、いずれもほぼ同時期に存在していたものでセットをなす。

４号溝は東辺が約1.7mの深さをもつことから、濠としての性格をもっていたであろう。濠の東側は次年度報告される遺構だが、約40cm離れてほぼ同じ幅の溝があり、その検出面との比高差は75～80cmある。したがって溝の間は、地山を利用した土塁として機能していたのではないだろうか。南辺は浅くなる部分があり、そこが出入口であったのだろう。この位置はちょうど北辺の西端にあたる。北辺と東辺北半の石積み・石敷・階段は、湧水や浸食防止のためもあるが、全面にないことから見ると装飾的な意味合いもあったと思われる。

階段を上がって左手にある小型建物と柱を石で根締めした建物は同じ主軸で、後者は西に伸びているので、主屋は調査区外にあるのだろう。竪穴状遺構は小型建物に近接しているので関連する施設と考えられる。この建物の主軸ラインと柵の延長線との交点に門状遺構があり、この門より南には遺構が希薄でピットすらない空白地帯があることから、広場か馬場のような機能があるのではないだろうか。４号溝は現在の地割と等しく、この区画が当時の溝のラインを示しているとすれば、第87図のように推定される。この区画から見ると、４号溝の空白地帯をめぐる部分は大きく湾曲しており張り出し部のようであるので、やはり特殊な場所ではないだろうか。

４号溝は土層から、石積を備えた溝と掘り直した幅の狭い溝の２時期がある。柵跡は３回の建て

替え、門状遺構は３回以上の建て替えが見られ、遺構の断絶はほぼ同時に起こったと思われる。築造は12c前半で、４号溝が埋ったのは13c前半、掘り直した溝が廃絶したのは13c後半である。

区画内の遺構の種類・性格と区画の規模から考えて、国人クラスの村の有力者の居館と想定される。居館の推定範囲は、前述したとおりだが、多くの範囲が次回報告されるので、溝など遺構の時期が確認されていない。新たな資料をもとに、遺構の範囲・性格・変遷などを再考する必要があろう。

第87図　中世居館の範囲推定図（1/1.000）

中央区では主軸方向の等しい掘立柱建物跡が３棟ある。庇付建物を主屋とし、３棟でセットをなすと思われる。２号建物の南側に位置するピット64からは炭化した柱痕の痕跡が残る礎石の破片が出土しており、２号建物で使用された可能性がある。３号建物の推定範囲内には、北東方向に伸びる細長いピットがあるが、これは倒れた柱の痕跡かもしれない。

１号建物の斜面下には馬の歯が出土しており、この建物が東側桁行の柱がないことから、馬小屋であった可能性がある。

集石遺構や廃棄土坑が庇付建物の斜面下に位置するのは、それが日常生活に密着した施設であることを示している。

墓は、この建物の南と東に墓が群集していることから、この建物に居住する人々の屋敷墓と考えられる。１・２・５・６号墓は建物と同じ平坦部にあり、３・４号墓は斜面下に離れて位置している。両者の差は、墓の構造にも見られ、前者は石を用いて丁寧に作られているものが多いが、後者には石が見られず規模もやや小さいので、被葬者に格差をつけていたと思われる。斜面下の３号墓の被葬者は女性で、４号墓は規模が小さく刀子をもっていることから被葬者は男児ではないだろうか。したがって、性別によるものでなく、成人男子のみを居住域の側に葬ったか、あるいは斜面下の墓は血縁ではないのかもしれない。

主体部は多くのものが組み合わせ式か木釘を使用した箱形木棺である。

遺構の時期は居館とほぼ同じである。主屋下の廃棄土坑には青磁や白磁などの貿易陶磁や炭化米があり、3号墓からは絹に包んだ和鏡と青白磁の合子が出土しているので一般農民ではなく富裕層であるのは間違いない。しかしながら、副葬される器は貿易陶磁でなく瓦器椀であることから、階層的は決して高くはない。そのことは建物の貧弱さからも推察される。また、刀子が収められている墓が多いことから、主屋の住人は武人的な性格を持っていたと考えられる。このことから、これらの建物や墓をつくったのは隣接する居館に住む国人の家臣ではないだろうか。

4．文献から見た中世の唐原地区

狭隘な小地域でありながら、中世における唐原地区の歴史は、薬丸文書などの文書によって多くのことがわかっている。上唐原所在の六社神社明細帳によると、延喜元年（901）薬丸有頼が神社を再建したとある。また、同じく上唐原所在の天満宮の縁起によると、延喜二年（902）菅原道真が唐原地区（多布原村）の薬丸有頼の家を訪れたという伝説があり、その真偽は別として少なくともこの時期からすでに薬丸氏が上唐原の有力者であったといえるだろう。一方、下唐原には寿永二年（1183）に佐伯惟久が秋吉に屋敷を置いてから秋吉氏を名乗り、上唐原の薬丸氏とともに楽所検校の職務を行ったとある。

鎌倉時代になると豊前地域は、建久六年（1195）宇都宮信房が源頼朝の命で豊前国守護職に補任されて下向しており、宇都宮氏一族が土着して勢力を張った。しかし、宇佐宮荘園であった唐原地区（多布原村）は、宇佐宮関係の田部氏に鎌倉幕府から地頭職を安堵されており、宇佐宮の支配が存続している。（成恒文書）その後、薬丸氏は武士化し、唐原地区の支配を進め、元弘三年（1333）には鎌倉幕府の滅亡により樹立された新政権から、薬丸有世が所領を安堵されている。（薬丸文書）

南北朝の争乱が始まり、延元元年（建武三年＝1336）足利尊氏が天皇方に敗れて九州に下ると、尊氏側には大友・少弐・千葉・宇都宮などの有力武将が従ったが、この時、薬丸有世の名前も宇佐宮社務職方の武士団の中に見える。翌、延元二年（建武四年＝1337）天皇方の新田禅師・大友式部大輔らが宇佐郡から来襲した際、薬丸有世は新吉富村桑野原で戦いこれをやぶっている。さらに、筑前の嘉麻城の戦にも加わって軍功を上げている。（薬丸文書）また、延元三年（1338）には、豊前守護少弐頼尚が天皇方の北畠顕家を討つため薬丸有世に軍忠を求める施行状（薬丸文書）を出していることから、有力な国人に成長していたと思われる。

現在、上唐原地区の自然堤防上の集落から離れた所に薬丸という字名が残っており、薬丸氏に由来するものと思われる。また、上唐原の壇ノ城跡は薬丸氏の居城とされているが、これは未調査であるので時期が一致するかわからない。

居館が築造されたのは12c前後であるので、薬丸氏に関連する可能性が高い。溝が一度廃絶する12c後半は、宇都宮氏が補任される時期なので、廃絶したのはこのときになんらかの変革があったためかもしれない。階段状集積からなんらかの骨が出土しているが、これが人骨であるとすれば、武力衝突に原因が求められるかもしれない。13cに掘り直された溝は、規模が小さくなっており、装飾的な石積みもない。薬丸氏の勢力自体は伸長しているので、性格が変わった可能性がある。つまり、居館を山城など別の拠点に移し、別の目的で使用したのかも知れない。

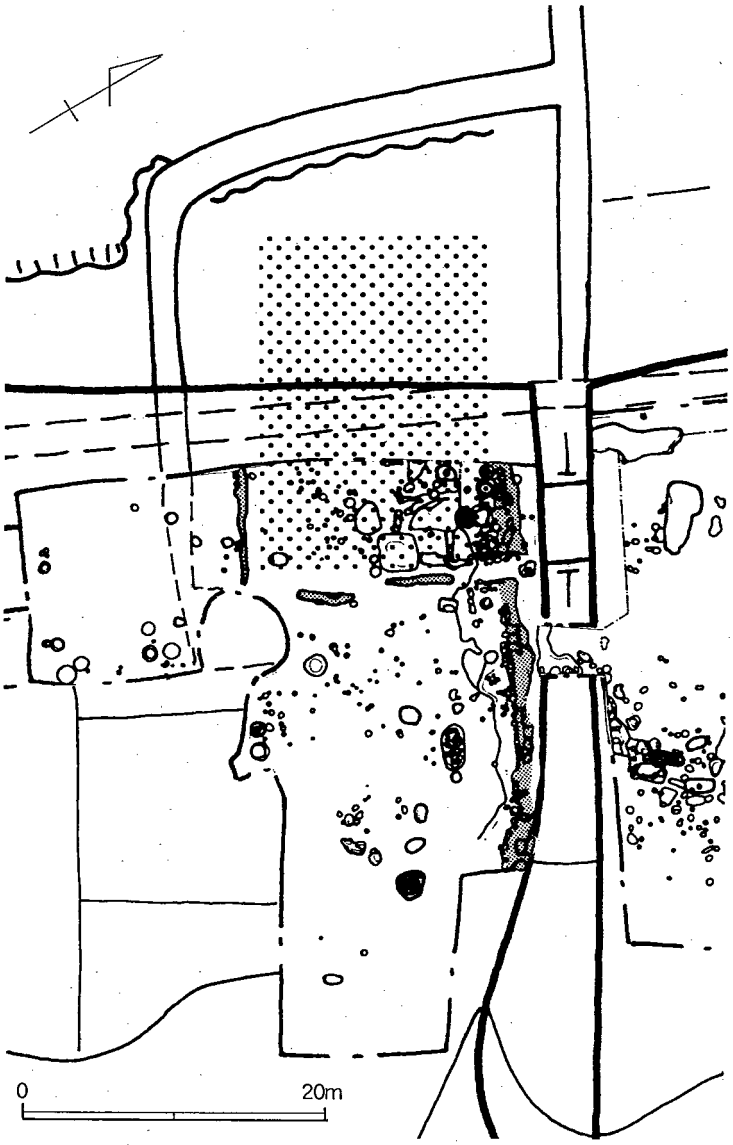
5．近世

近世の遺構は、南区に集中している。1号石列はちょうど南区と中央区の間の農道に沿っており、この道は当時から使用されていたものかもしれない。（第88図）この推測から、現在の地割が当時の区画を継承しているとすると、現在の322-1番地にあたる区画は通路に3方を囲まれているので、屋敷地と考えて差し支えないだろう。さらに、南側の通路は東端が敷地内に入り込み、幅が広くなっているので、これが正面入口であったのだろう。また、この位置は、1号石列の通路状遺構と対

になっている。通路状遺構は幅が狭く、その横に便所と思われる4号桶状遺構があることから、裏門と考えられる。7号溝は正門と裏門を結ぶ位置にあり、これと垂直に走る9号溝もある。柱穴からは建物を復元することができないが、おそらく7・9号溝によって区画された空間に、1号石列を建物基礎の化粧とした石場立建物が存在していたであろう。また、その東側の隅にも桶や甕を埋めて便所を設けているので、1号石列を北壁基壇の化粧とする建物がもう1棟存在していた可能性もある。

建物は、1号石列内に多量の陶磁器とともに多くの瓦が含まれていたことから、瓦葺の建物であったことはまちがいない。また、軒丸瓦の割合が多いことから、屋根の東端の棟の部分が落ちたものと思われる。

ピットの密度は、8号溝から南は非常に薄く、7号溝から東は区画内のみ多い。このことからみても区画外は居住地ではない。したがって、この屋敷地は南北約25m、東西約47mの、1800m²の敷地に7号溝から西に瓦葺建物が存在していたと考えられる。敷地面積の広さ、瓦葺建物と陶磁器をはじめとする遺物の豊富さから見て、庄屋か村役人など村の有力農民の屋敷と思われる。



第88図　近世屋敷の範囲推定図（1/500）

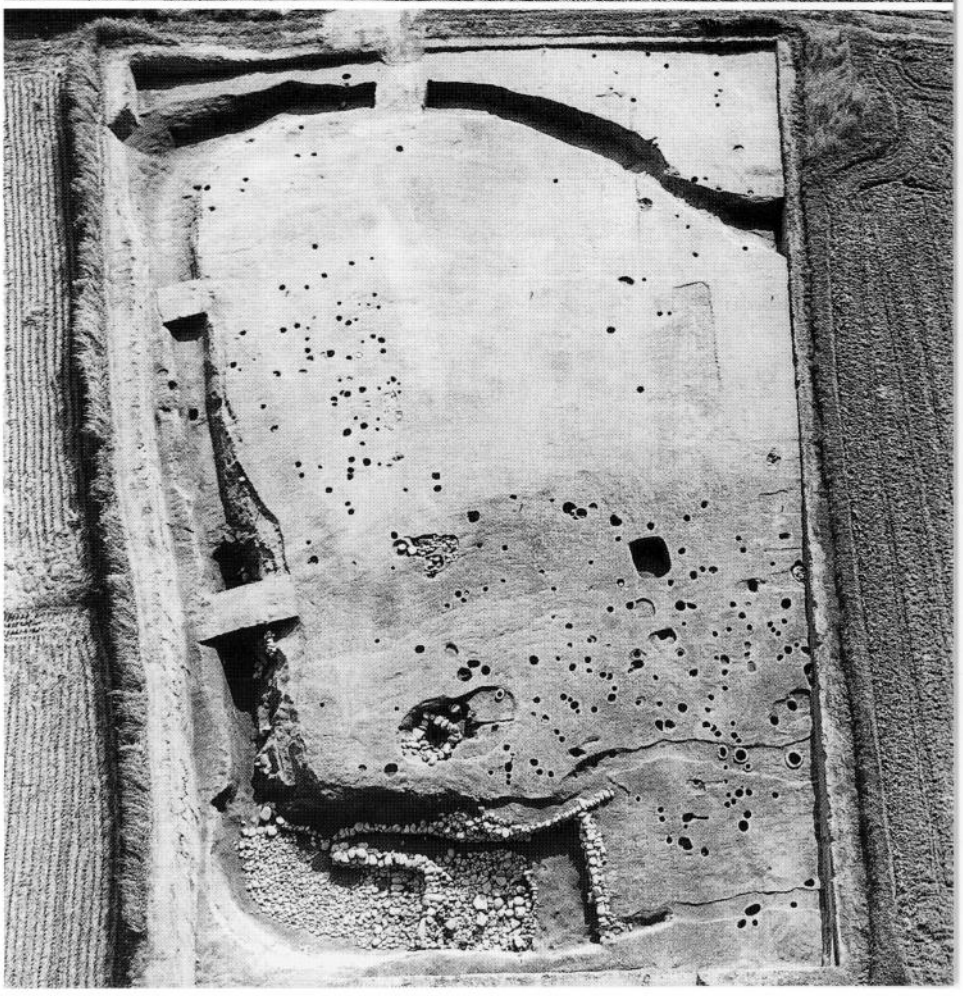
1号埋甕は1号石列を切っており、2号桶状遺構が通路状遺構の入口部分にあることから、若干の時期差があるが、時期はほぼ18c～19c代に限定される。

遺物が火を受けていないことから、火事による廃絶ではないようだ。地震・洪水など自然災害の可能性もあるが、時期的に見て打ち壊しを受けた可能性もある。

主な参考文献
大平村誌編集委員会　『大平村誌』　1986

図　　版

1．上唐原了清遺跡北・中央区全景
（西北上空から）

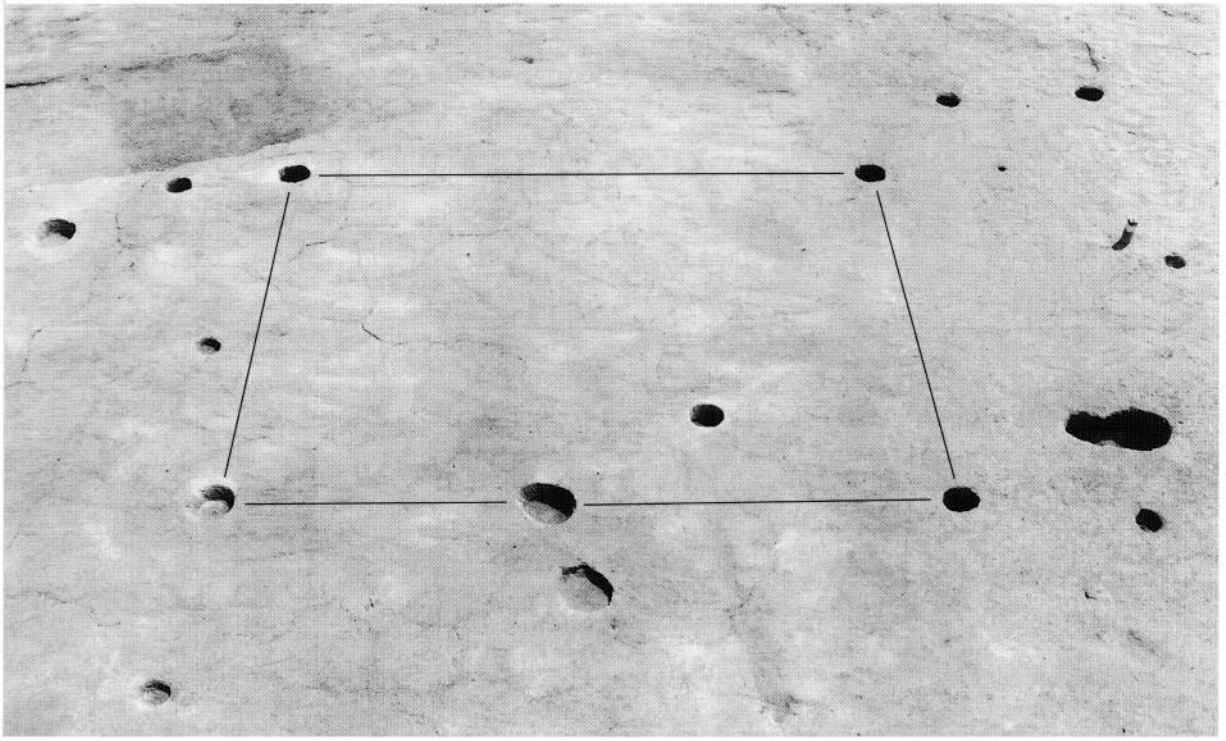


2．同　北区全景（西北上空から）

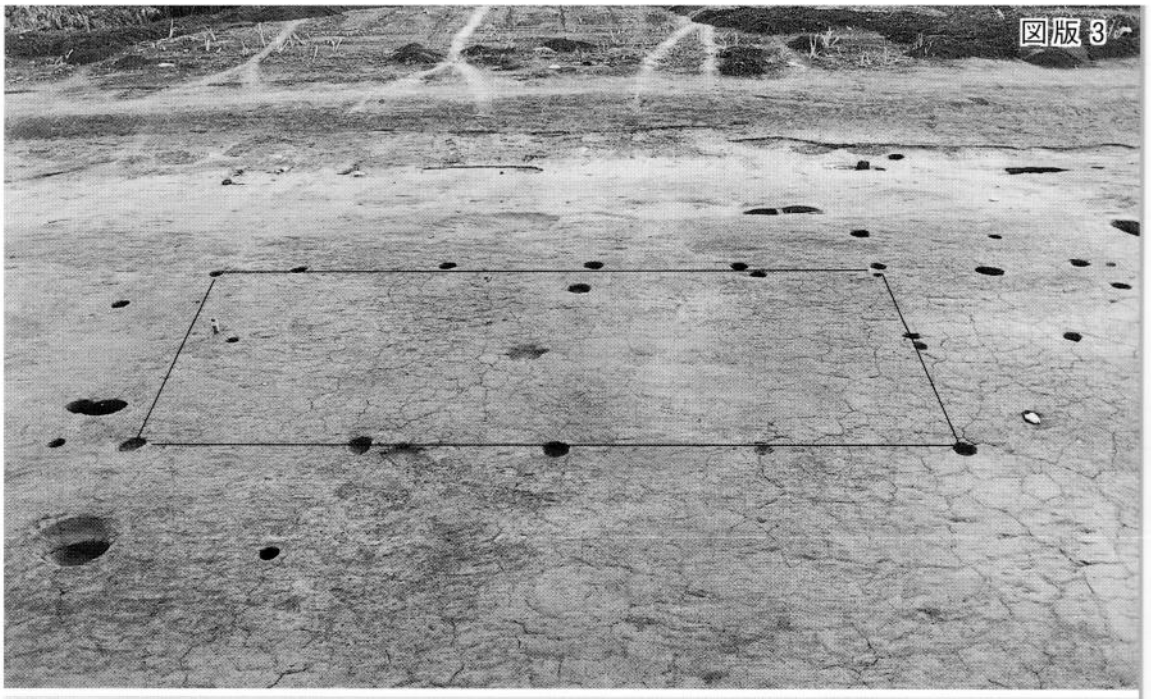
図版 2

1．上唐原了清遺跡
中央区全景
（上空から）

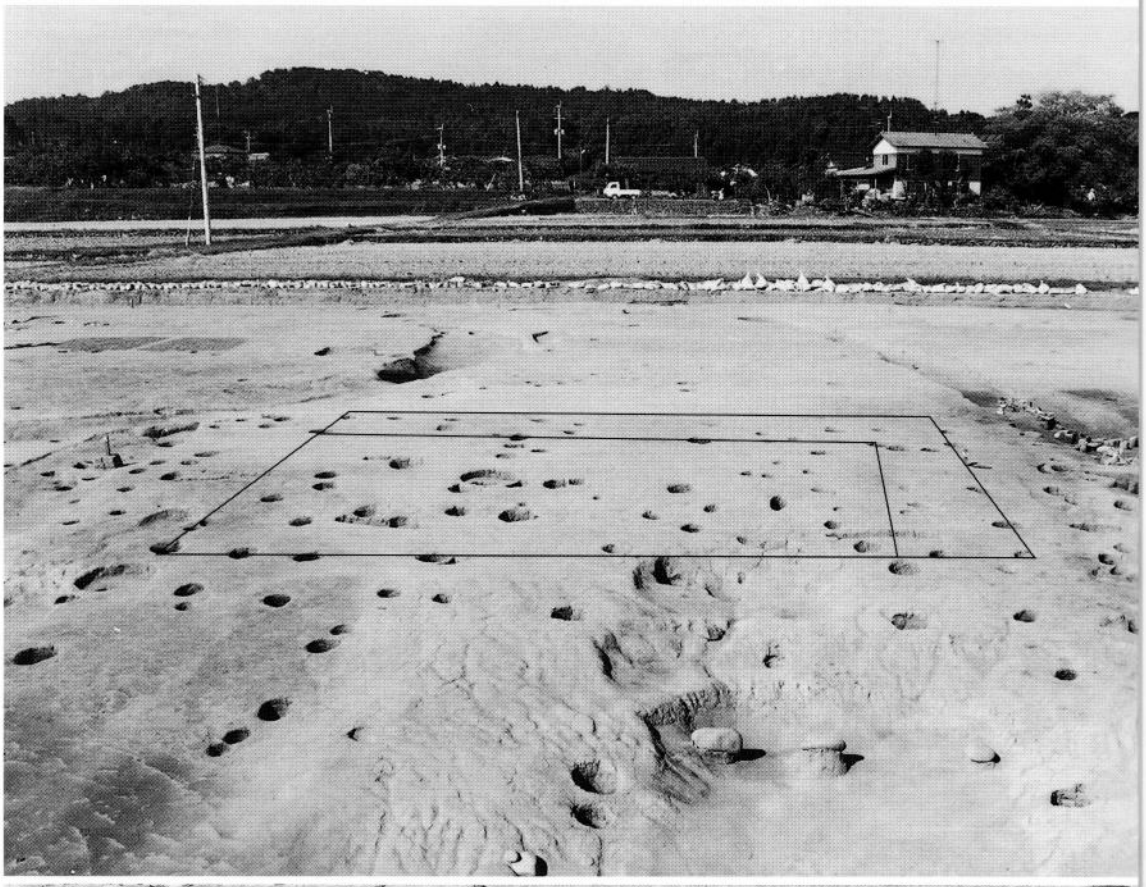
2．同　南区全景
（南東から）



3．1号掘立柱建物跡
（北西から）



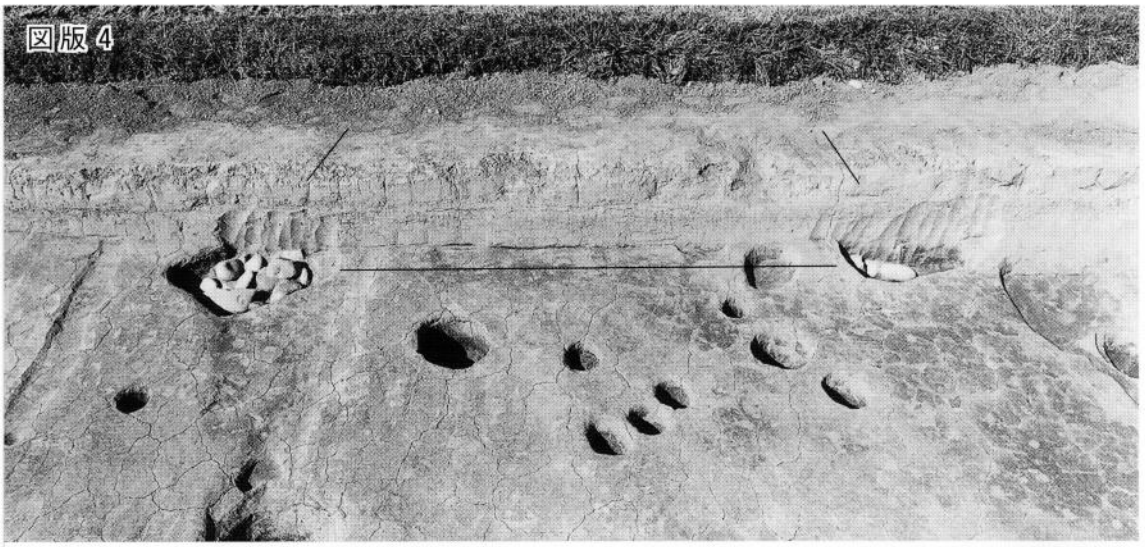
1．2号掘立柱建物跡
（北西から）



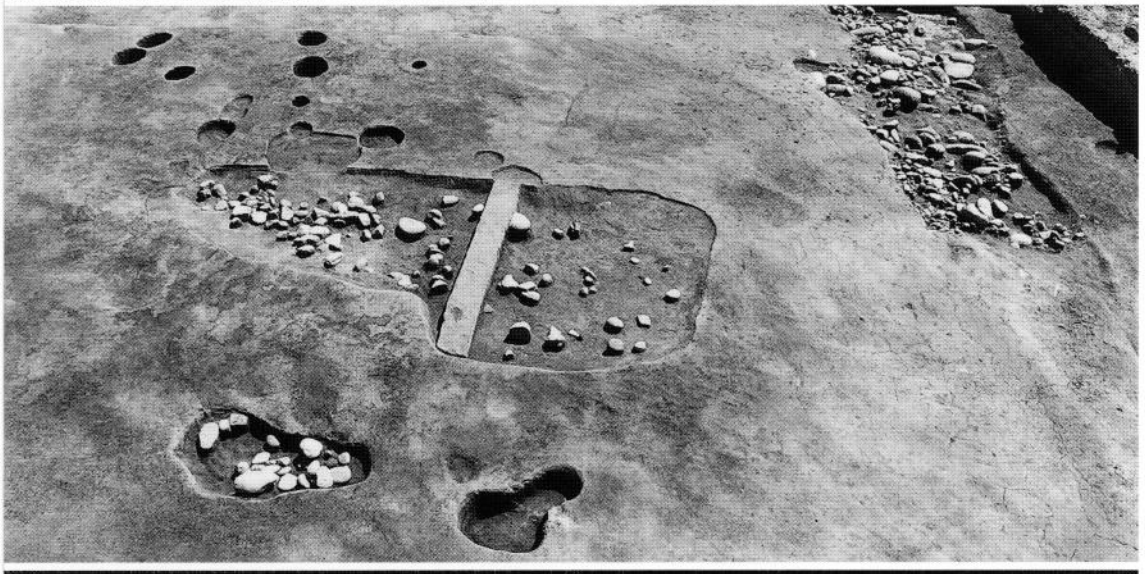
2．3号掘立柱建物跡
（南東から）

3．4号掘立柱建物跡
（南西から）

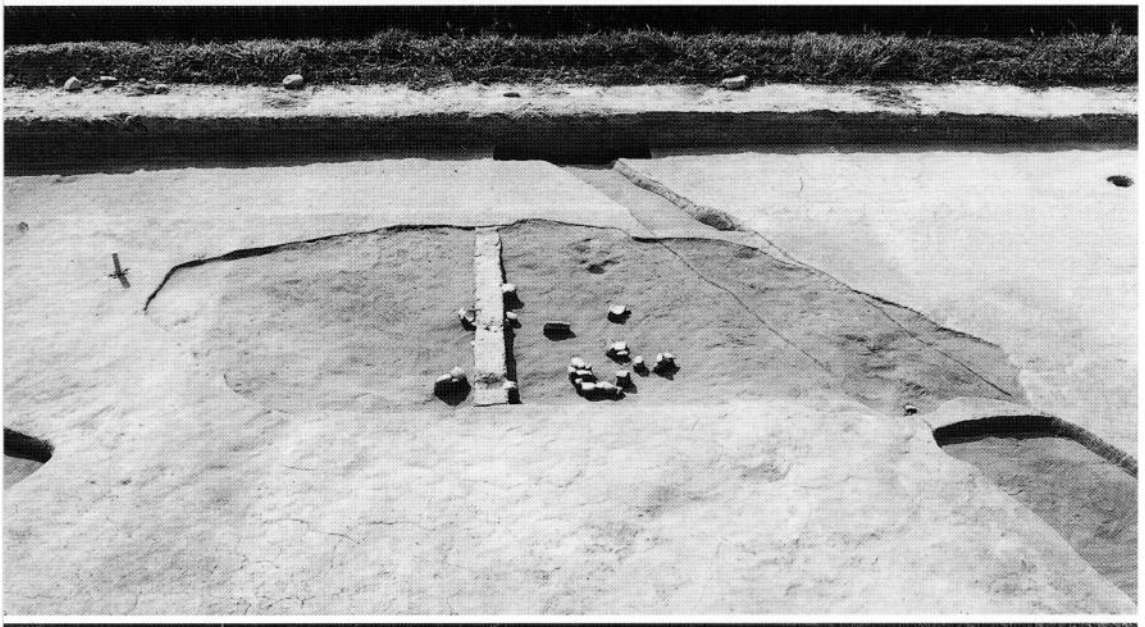
図版4



1．19号掘立柱建物跡
（東から）

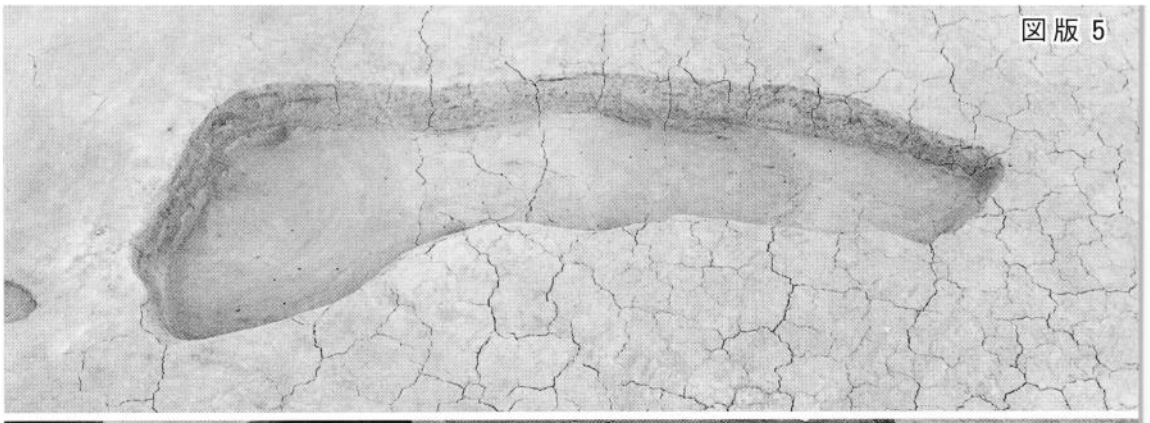


2．2・3号土坑
（北から）



3．4号土坑
（南東から）

4．同　土層断面
（北から）



1．5号土坑（南から）

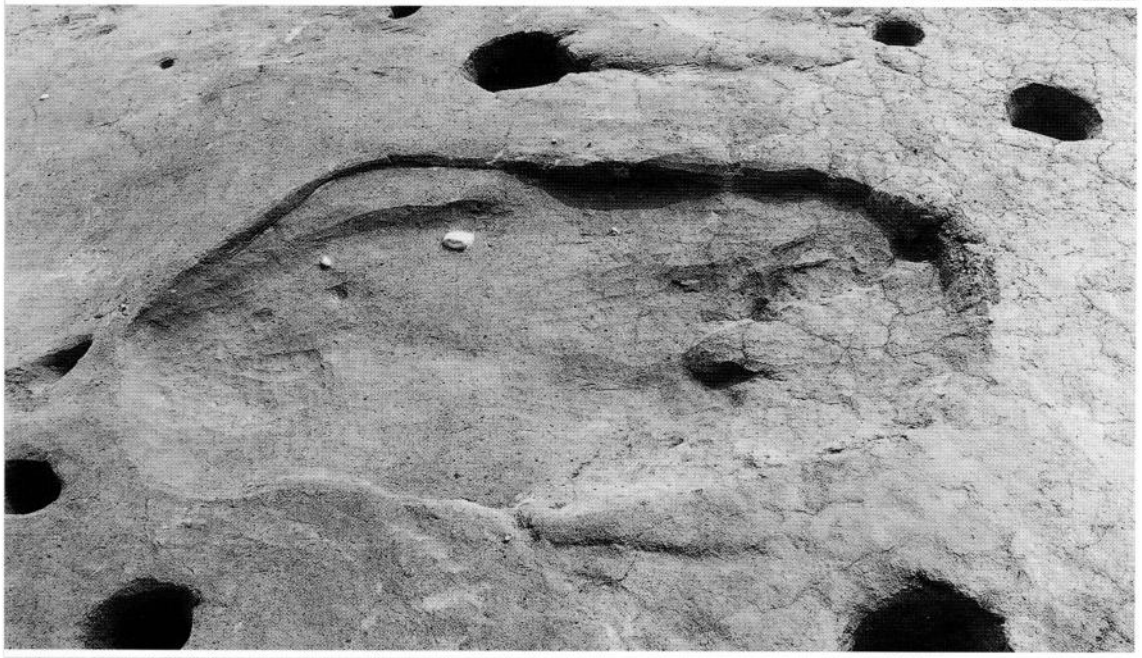
2．6号土坑（北西から）

3．7号土坑（北から）

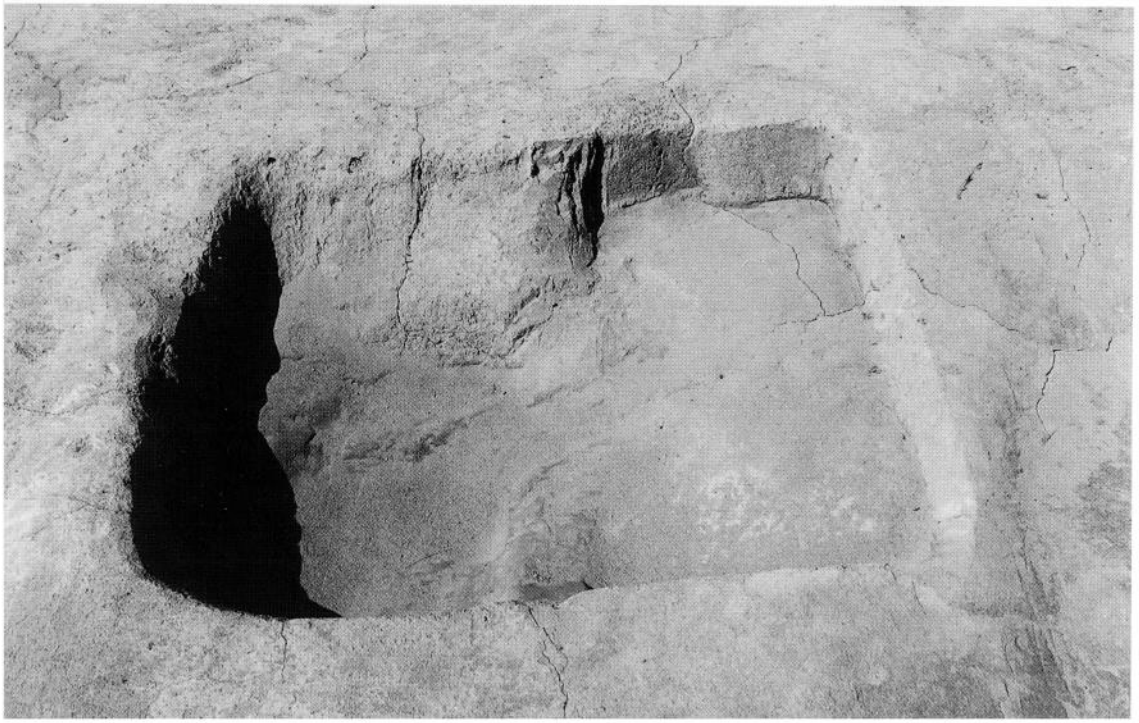
4．8号土坑（北西から）

図版 6

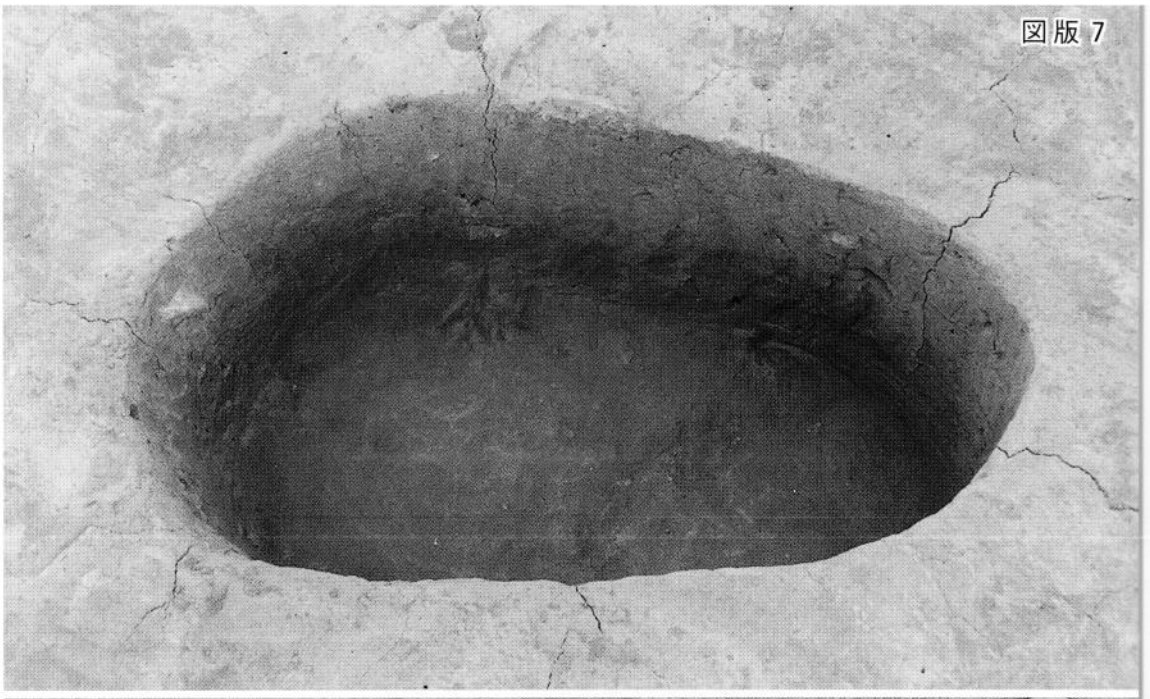
1．9号土坑
（北西から）



2．10号土坑（北東から）

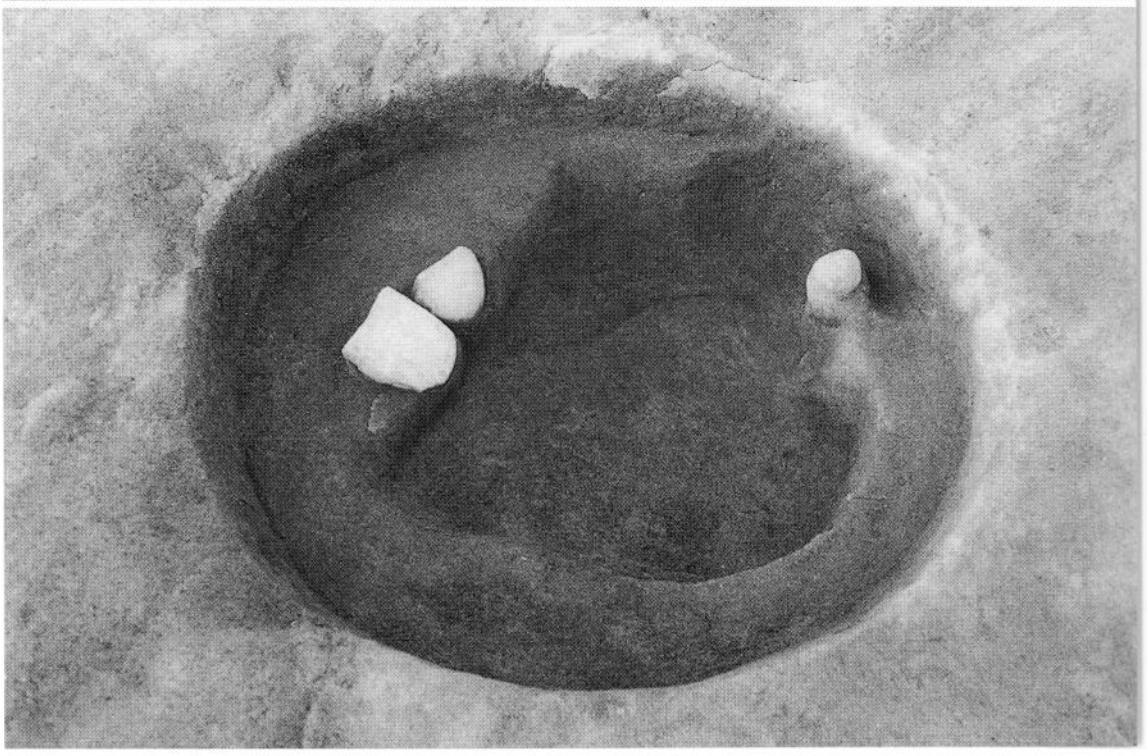


3．13号土坑
（西から）



1．16号土坑（東から）

2．17号土坑（東から）

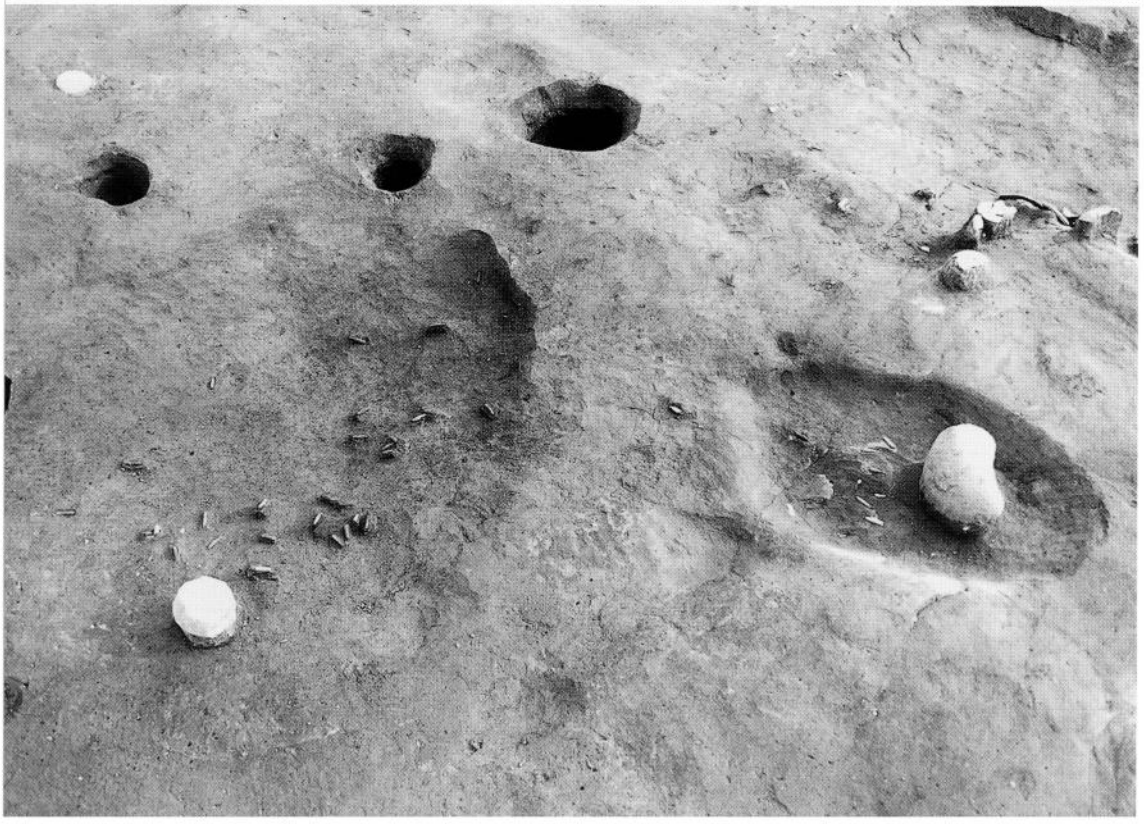


3．18号土坑（南東から）

図版 8

1．1号廃棄土坑
（北西から）

2．同　土坑遺物
出土状態
（東から）



3．2号廃棄土坑
（南西から）

1．1・2・5・6号墓
（西から）

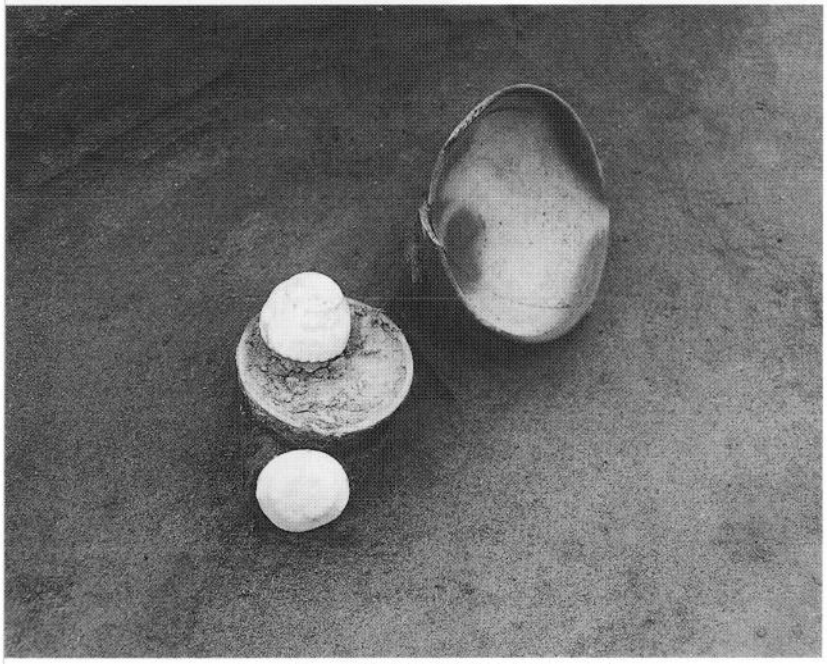
2．1号墓（北西から）

3．同　墓坑（北から）

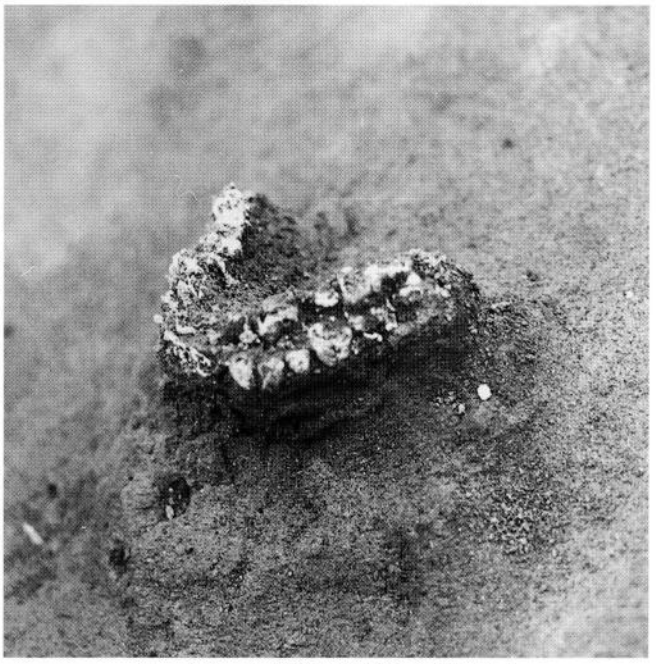
図版10

1．2号墓（西から）

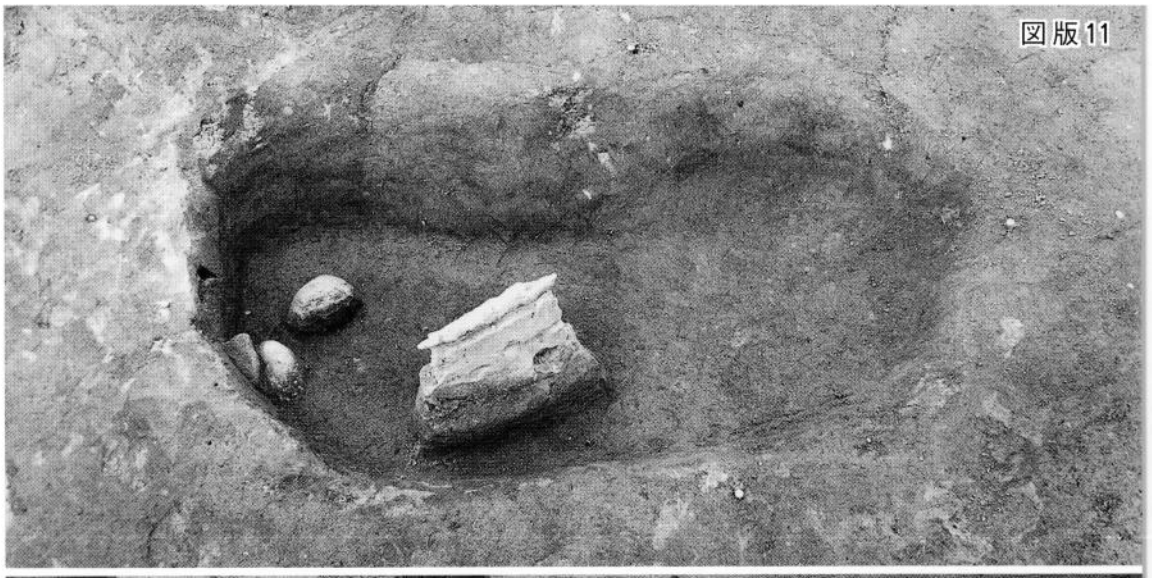
2．3号墓（東から）



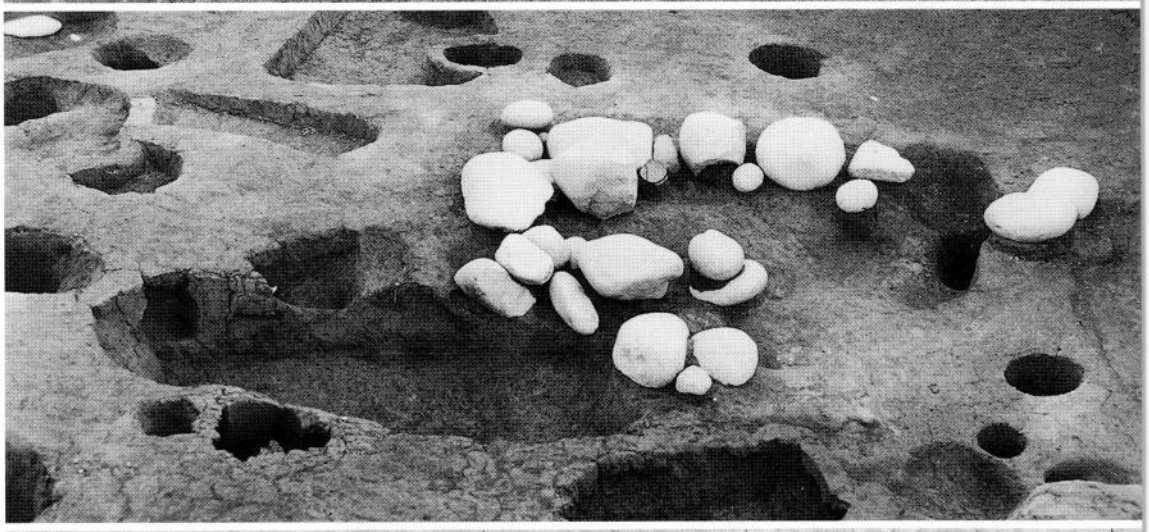
3．同　遺物出土状態（東から）



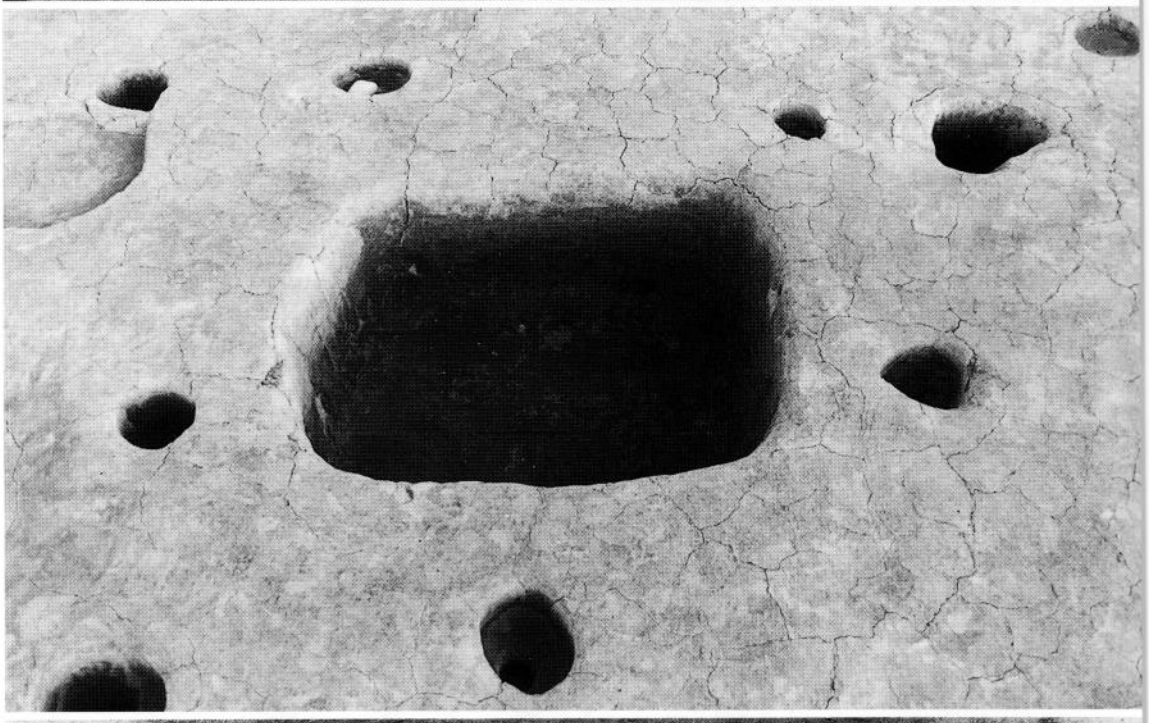
4．同　人骨出土状態（東から）



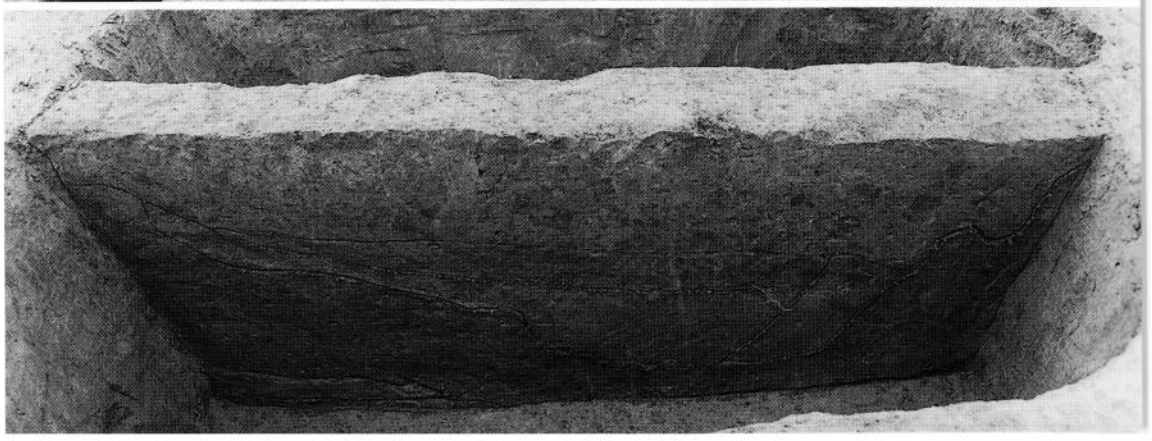
1．4号墓（南東から）



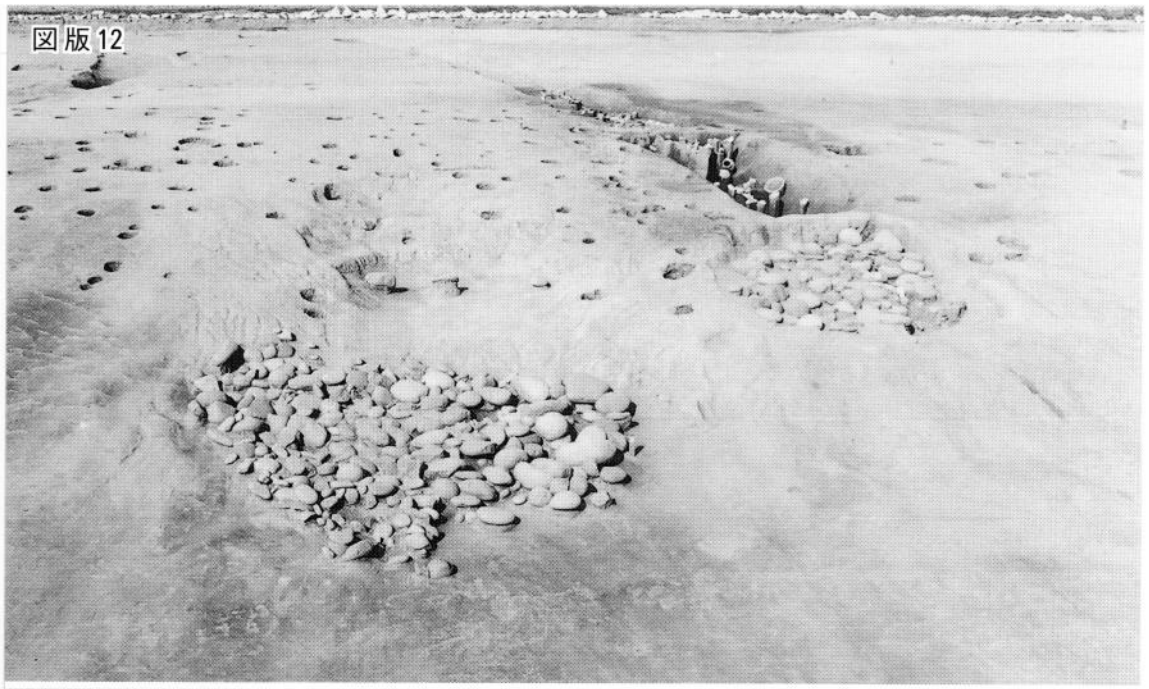
2．5・6号墓
（北西から）



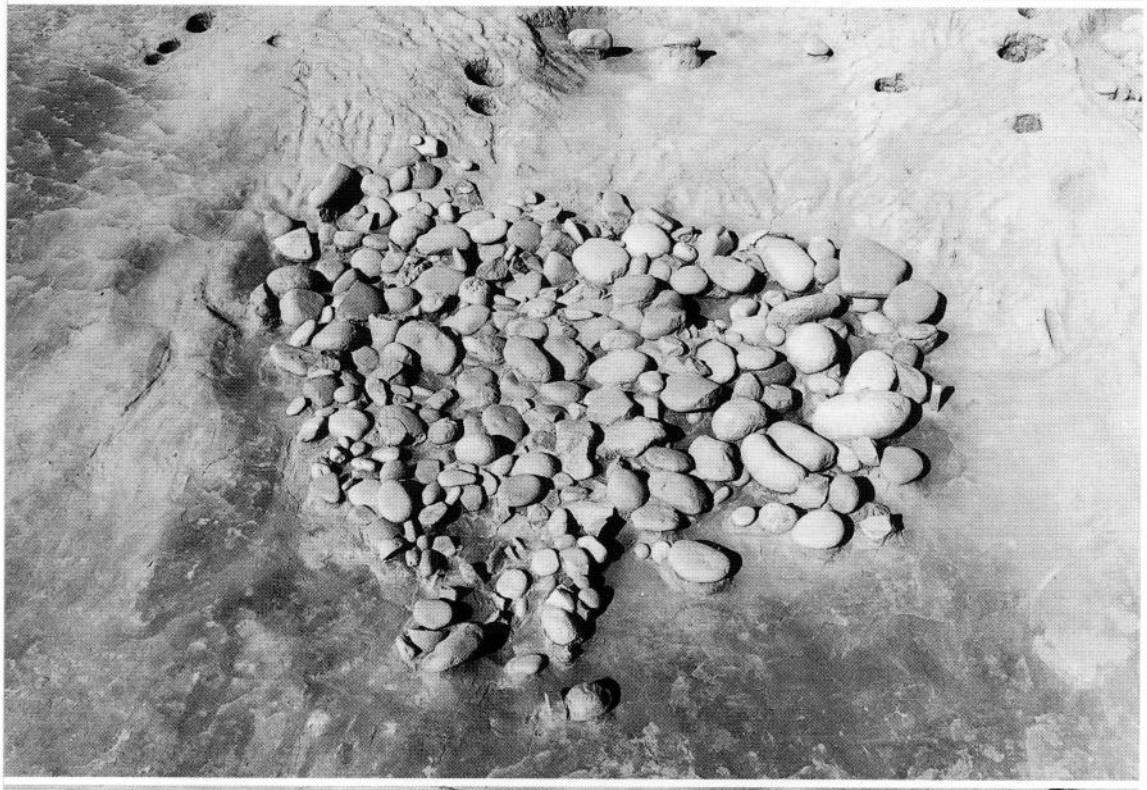
3．1号竪穴状遺構
（西から）



4．同　土層断面
（東から）



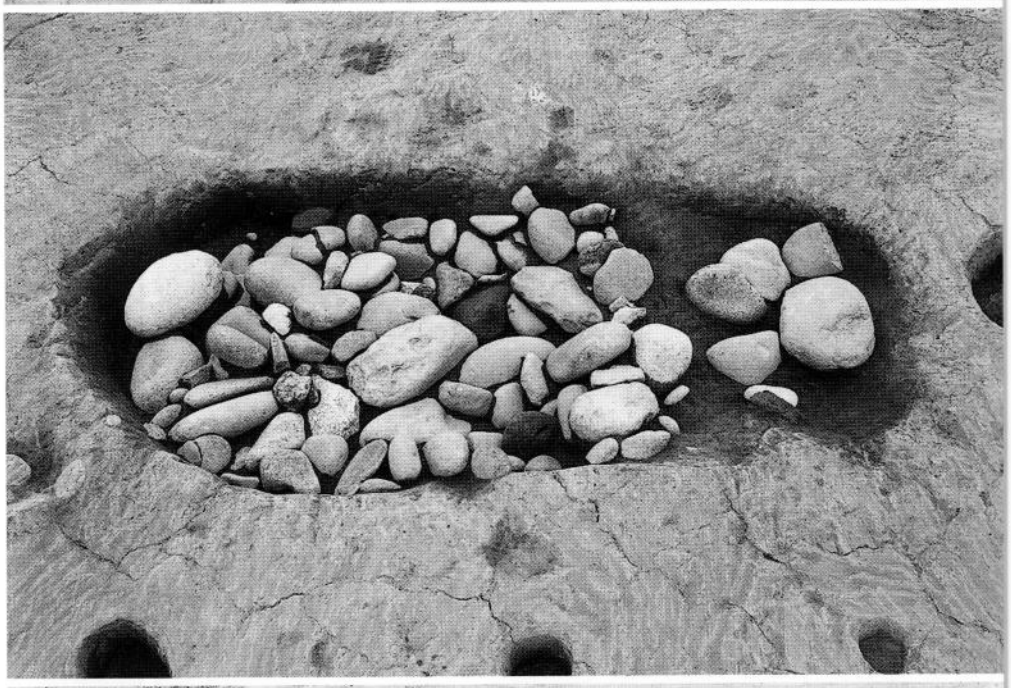
1．1・2号集石遺構
（東から）



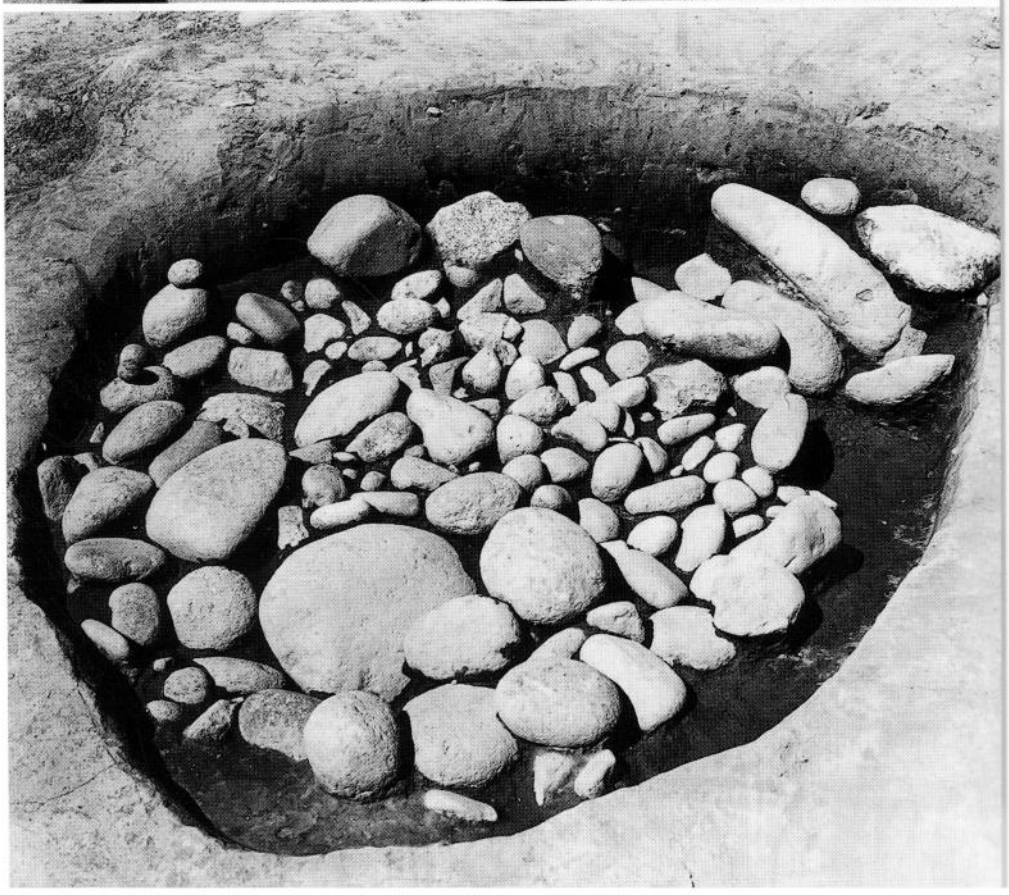
2．1号集石遺構
（南東から）

3．同　（北東から）

1．2号集石遺構（南東から）



2．6号集石遺構（南西から）

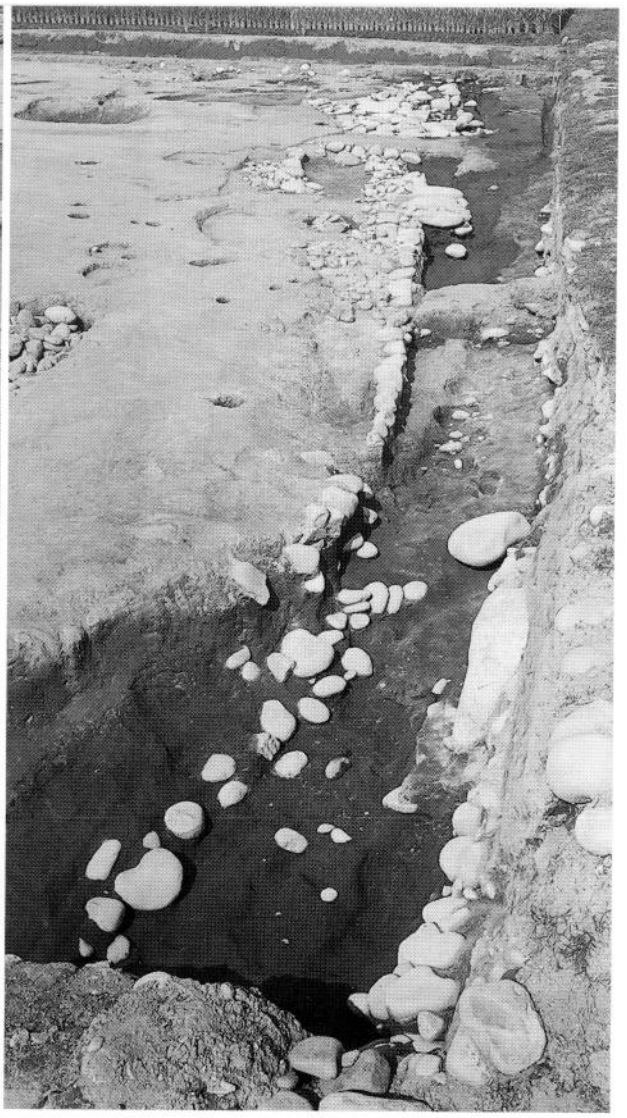


3．7号集石遺構（南東から）

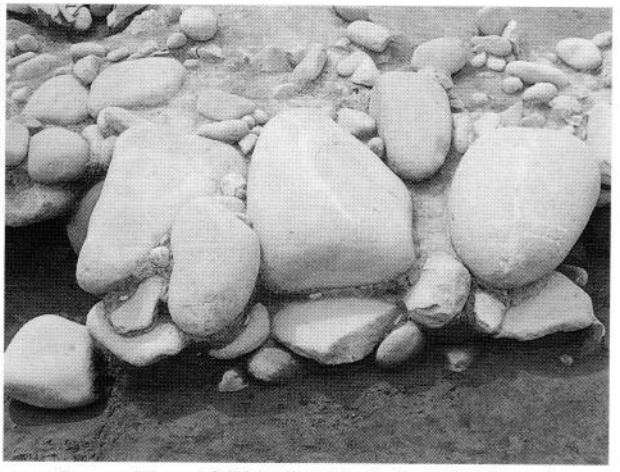
1．1号石列北半部（東から）

2．　同　全景（北から）

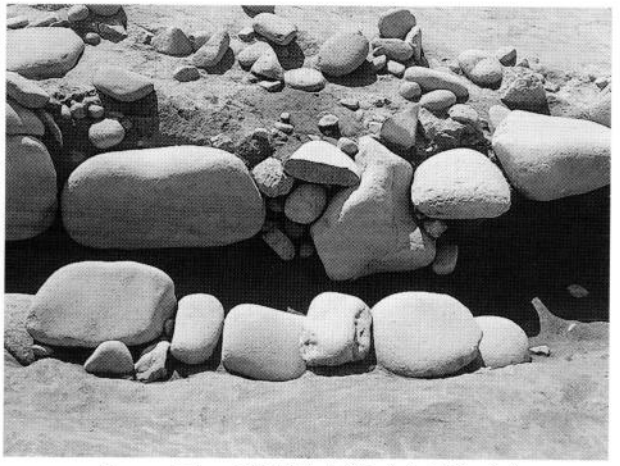
3．　同　中央部（北東から）



4．　同　全景（南東から）



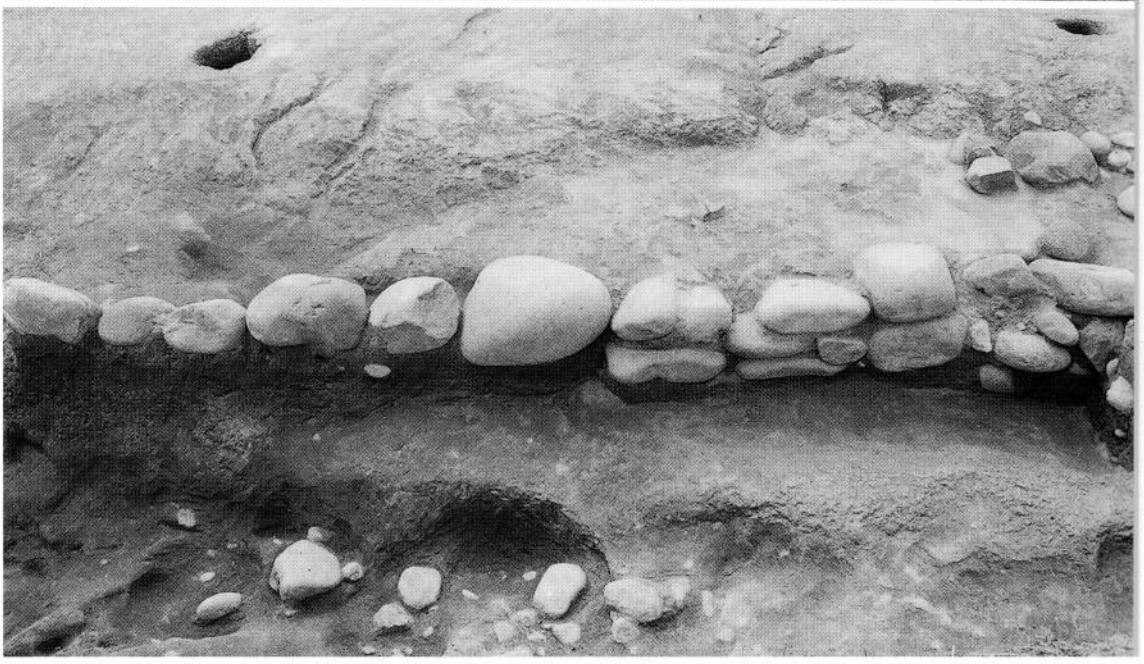
5．　同　暗渠部蓋石除去前（北西から）



6．　同　蓋石除去後（北西から）

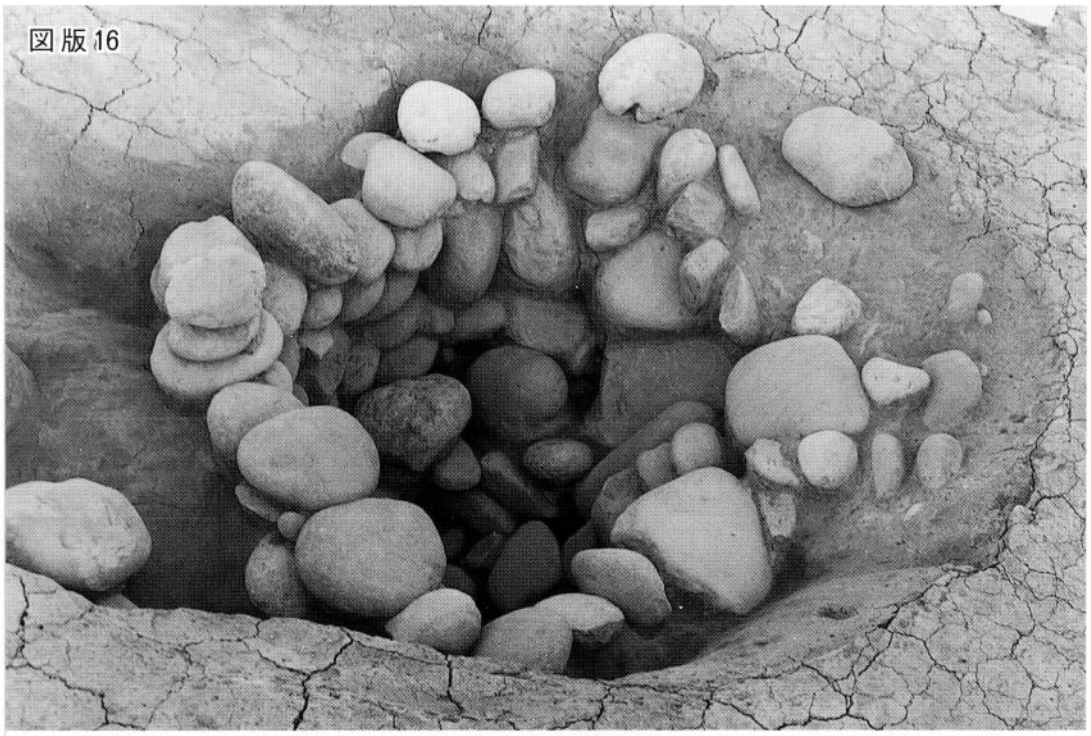
1．1号石列通路状遺構（北東から）

2．同　北端部石積み状況（北東から）



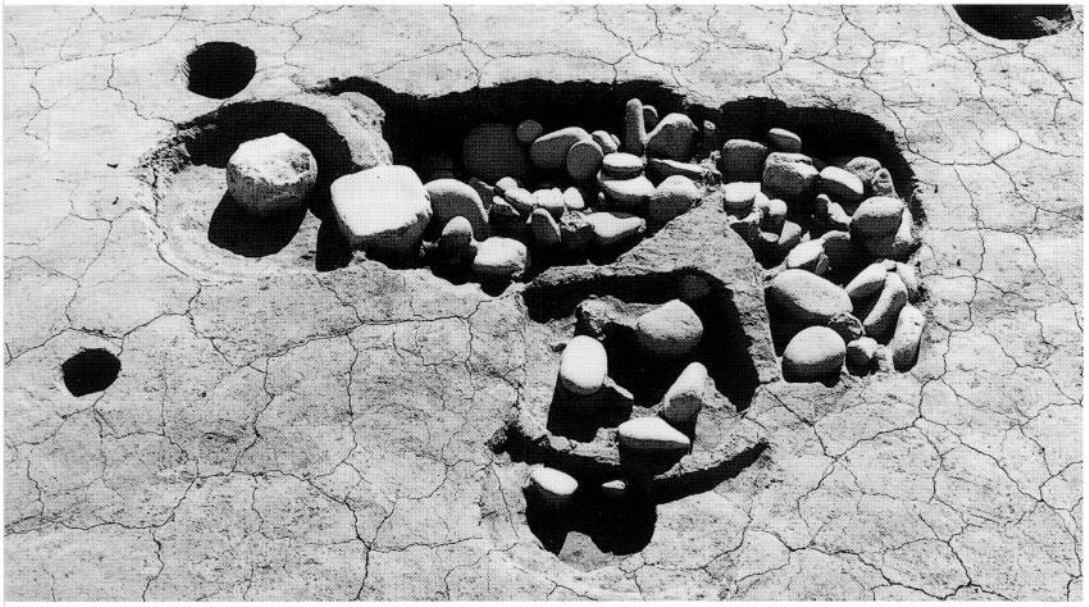
3．同　中央部石積み状況（北東から）

図版16

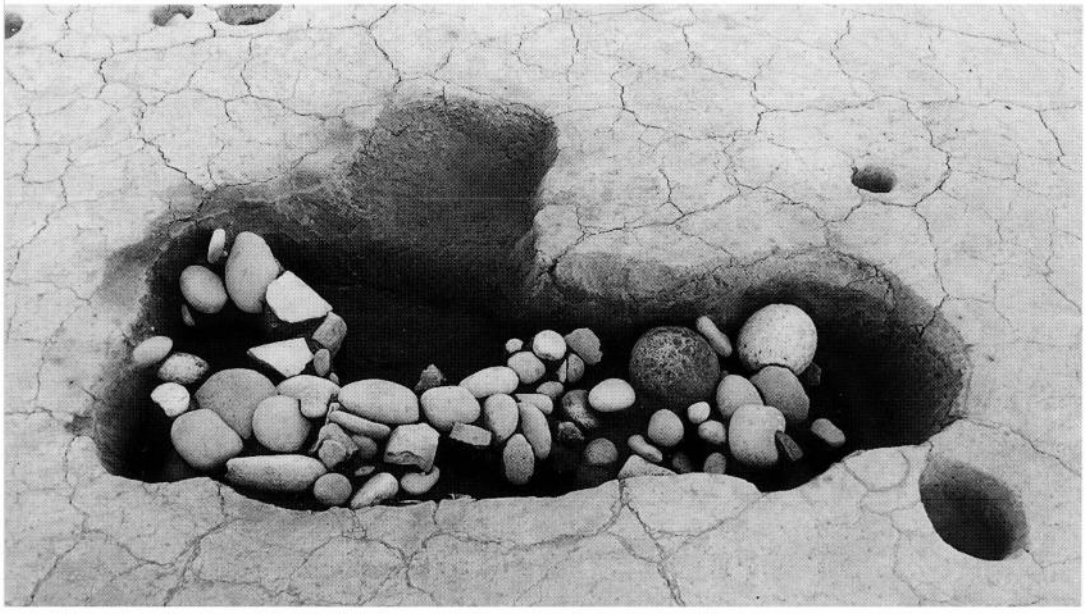


1．1号井戸
（北東から）

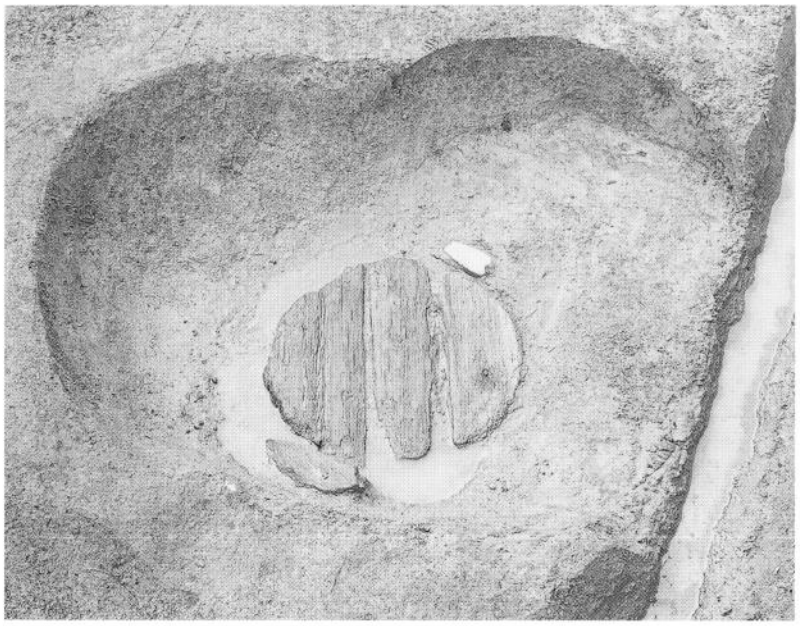
2．同　土層断面
（南から）



3．門状遺構集石上層部
（北から）

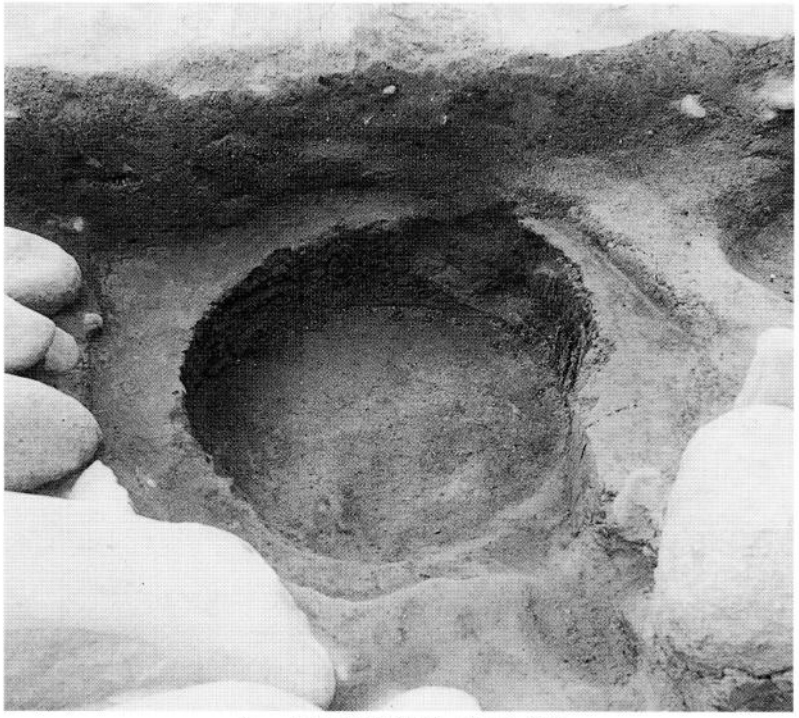


4．同　集石下層部
（南から）

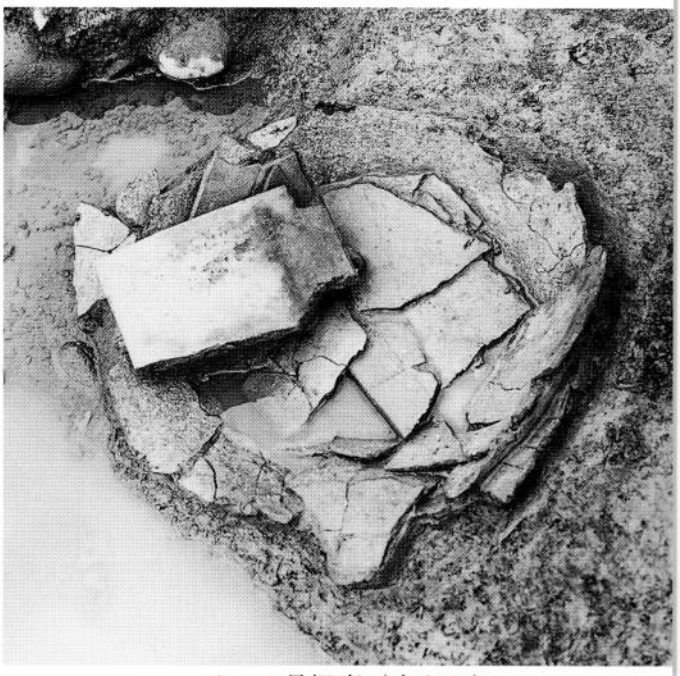


1．2号桶状遺構（東から）

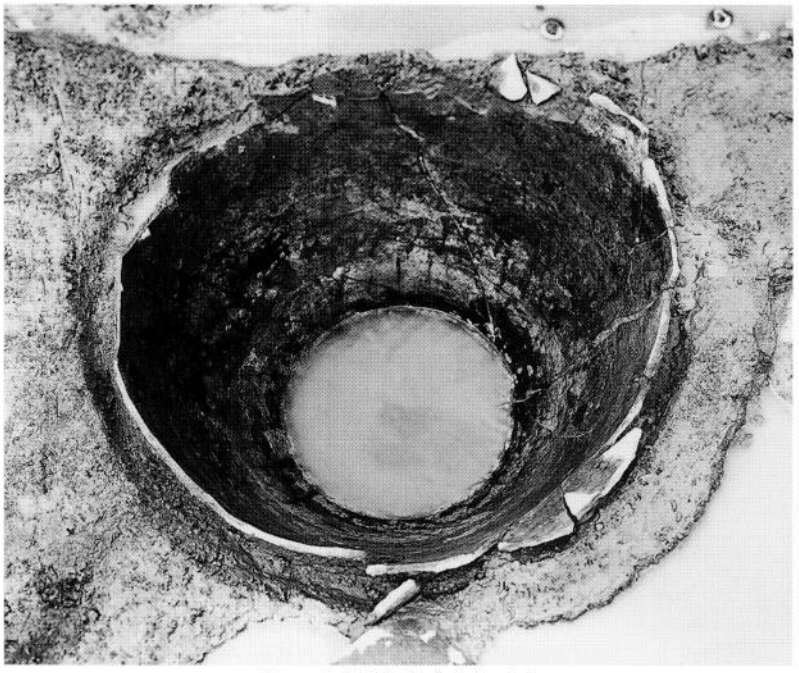
2．同　蓋石除去後（北から）



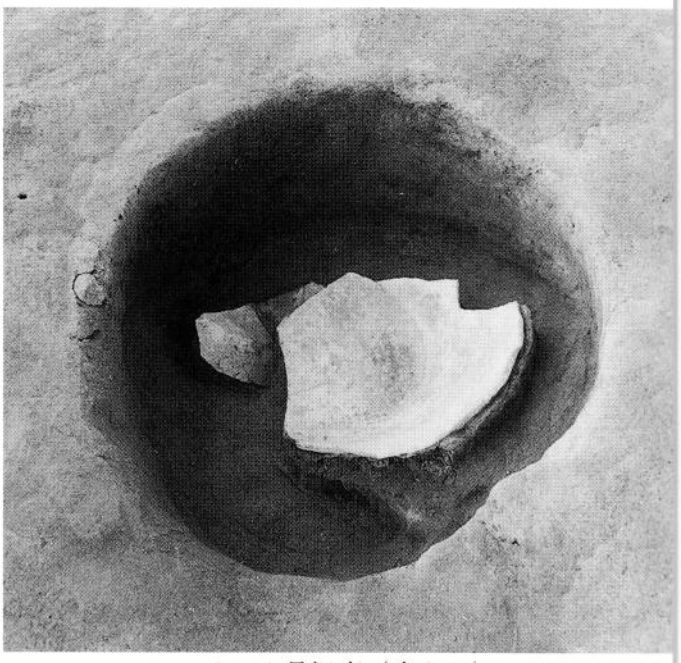
3．4号桶状遺構（南から）



4．1号埋甕（東から）

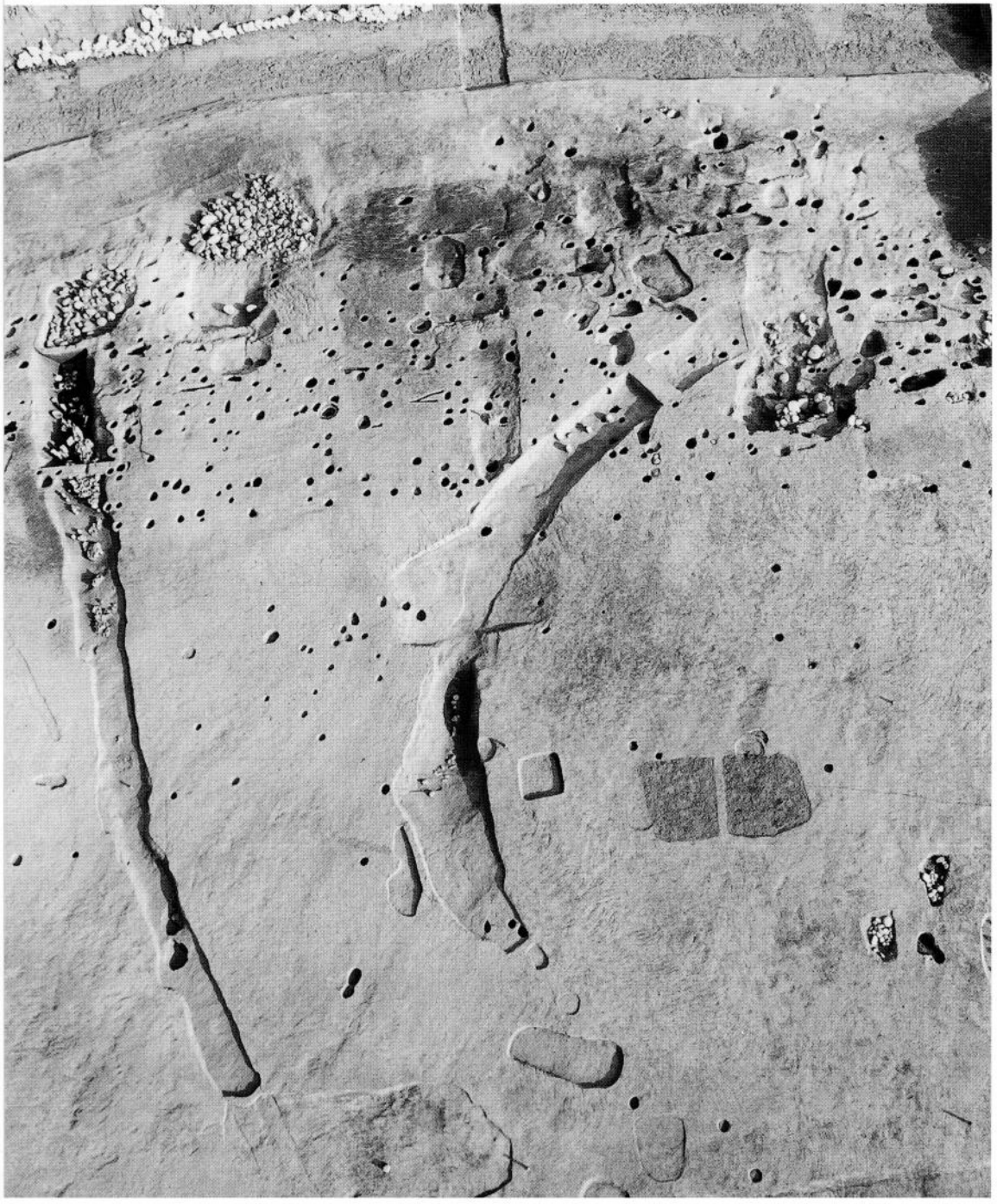


5．2号埋甕（南から）

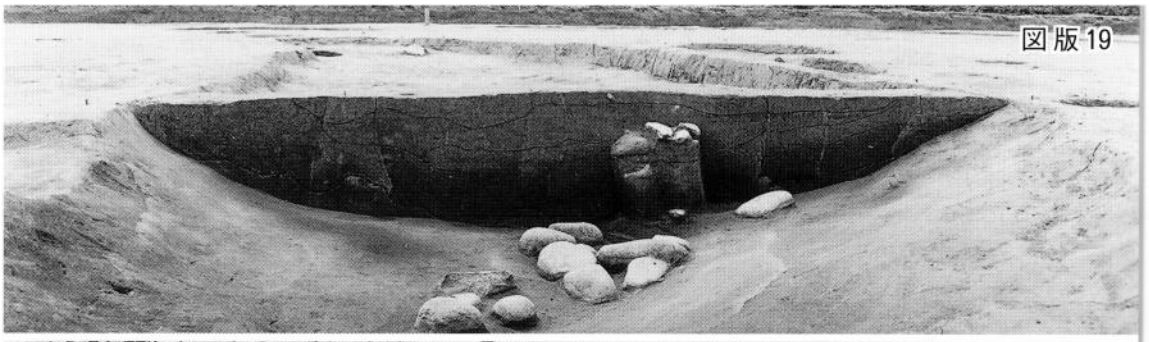


6．3号埋甕（東から）

1．1～3号柵跡
（西から）

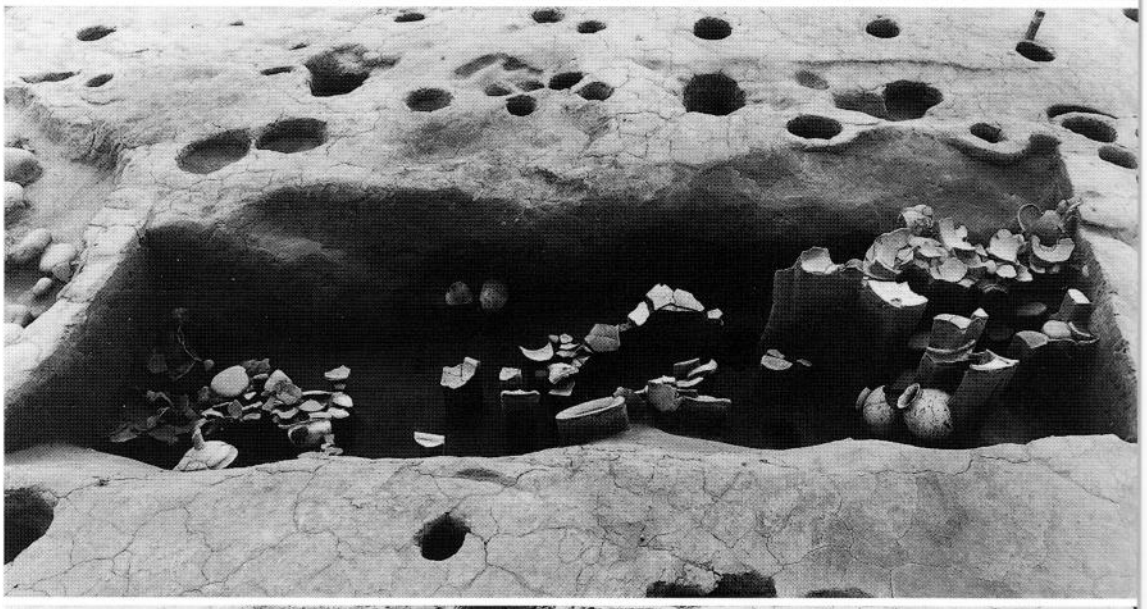


2．1～3号溝
（上空から）



1．1号溝土層断面
（南東から）

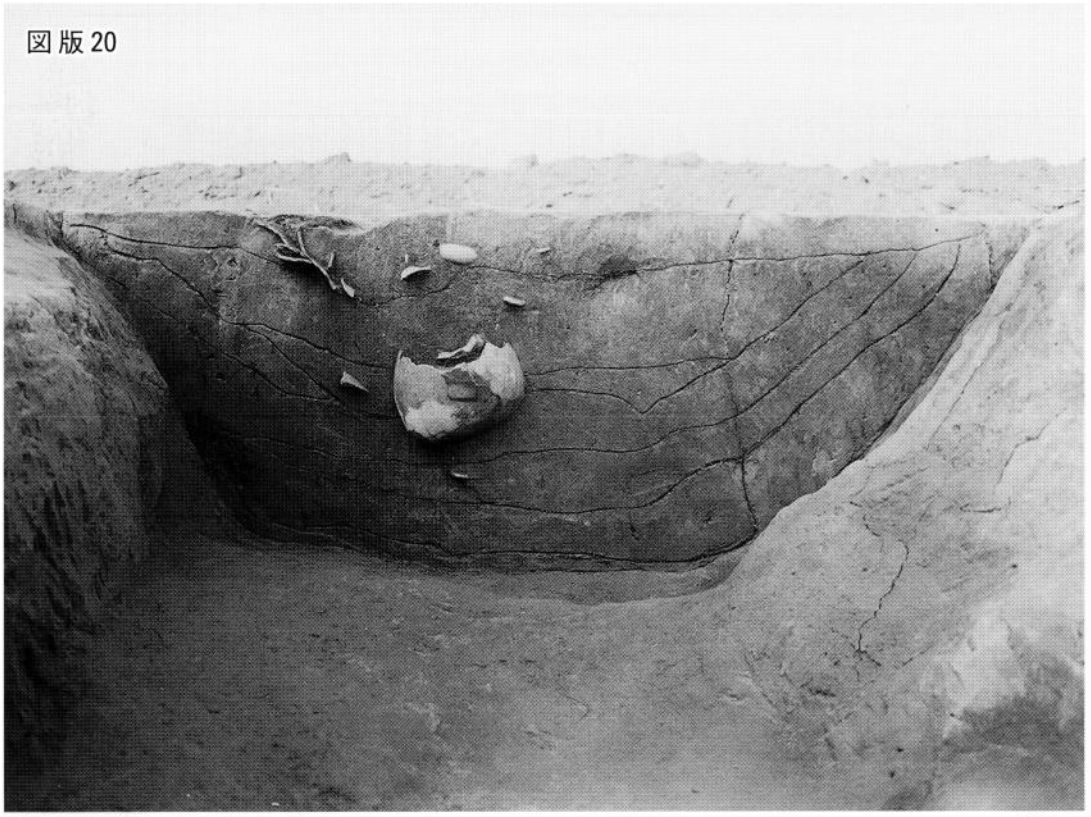
2．2号溝遺物出土状態
（北から）



3．同　（北から）

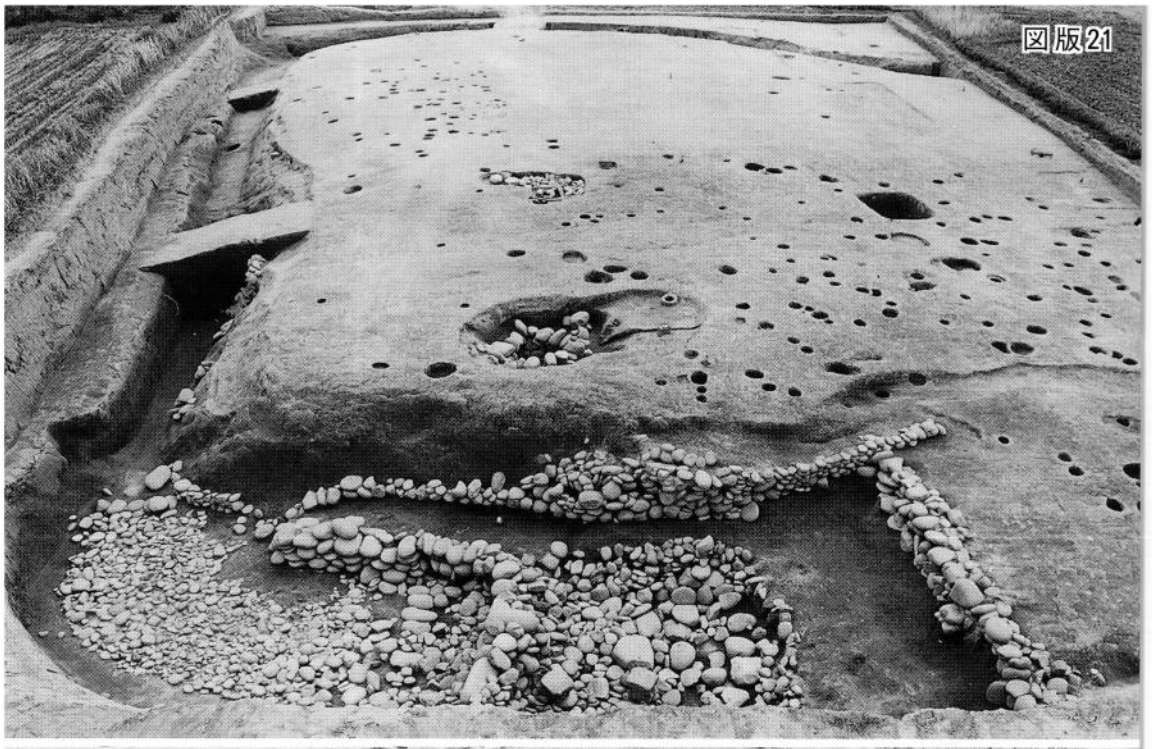
4．同　2号集積遺構下
の遺物出土状態
（北から）

図版20

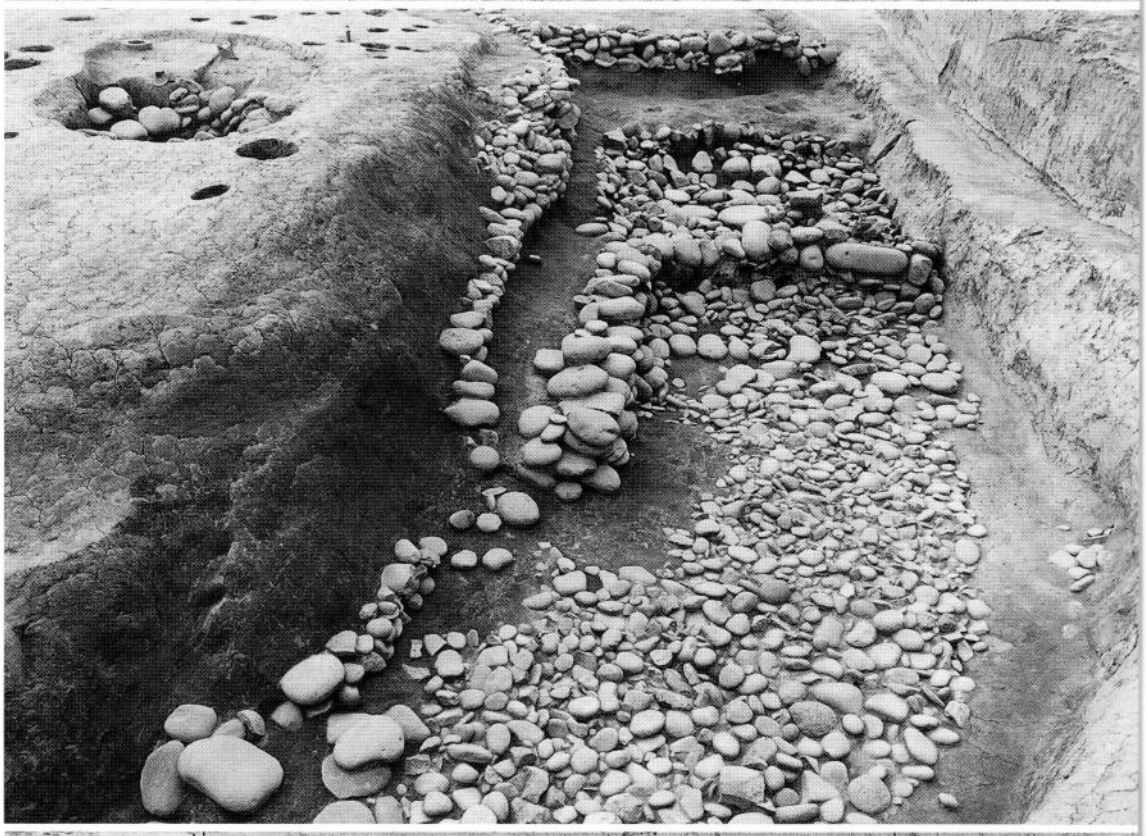


1．2号溝土層断面
（北西から）

2．4号溝階段状集石（上空から）



1．4号溝
（北から）



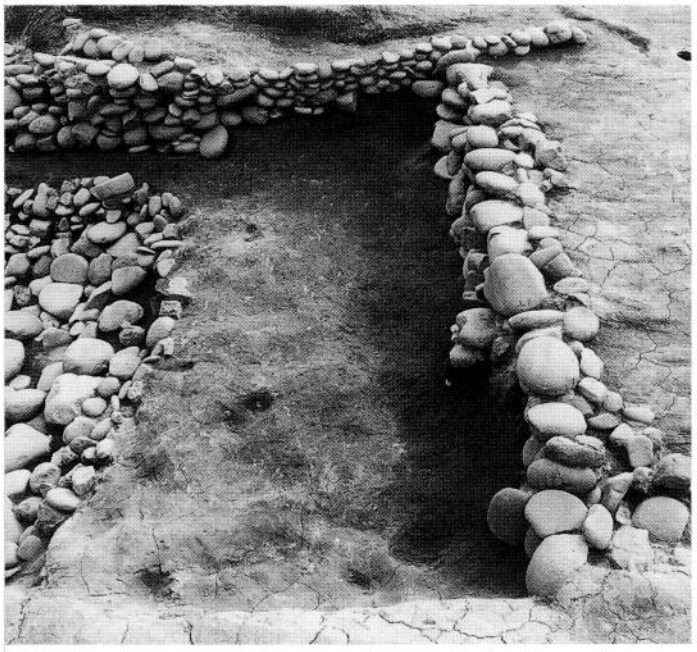
2．同　階段状集石
（南東から）

3．同　階段状集石
（西から）

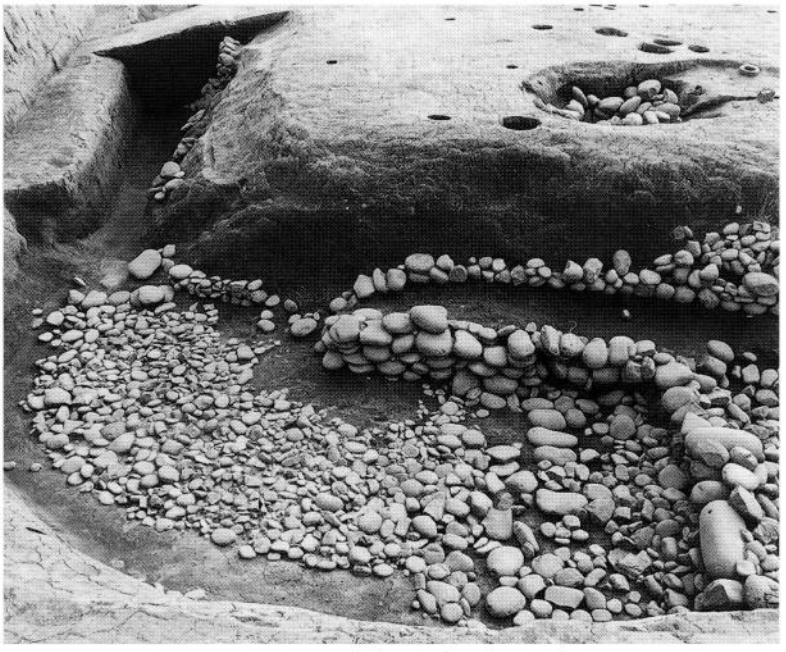
図版22

1．4号溝階段状集石　整地面下の集石検出状況（北東から）

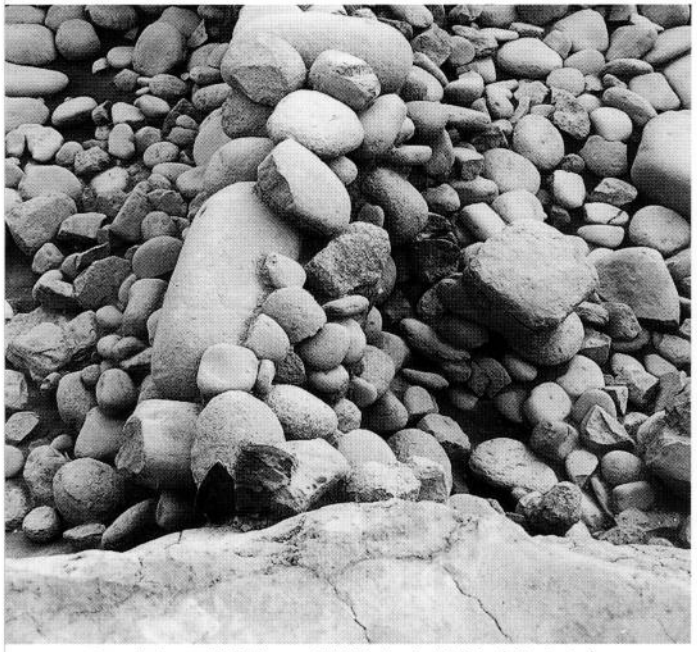
4．同　石臼出土状態（東から）



2．同　テラス部分と石積み状況（北東から）

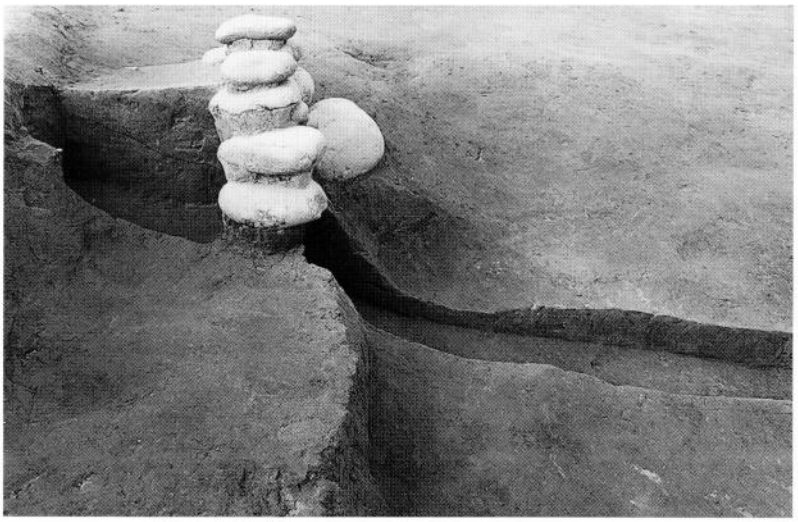


5．同　石敷部分（北東から）

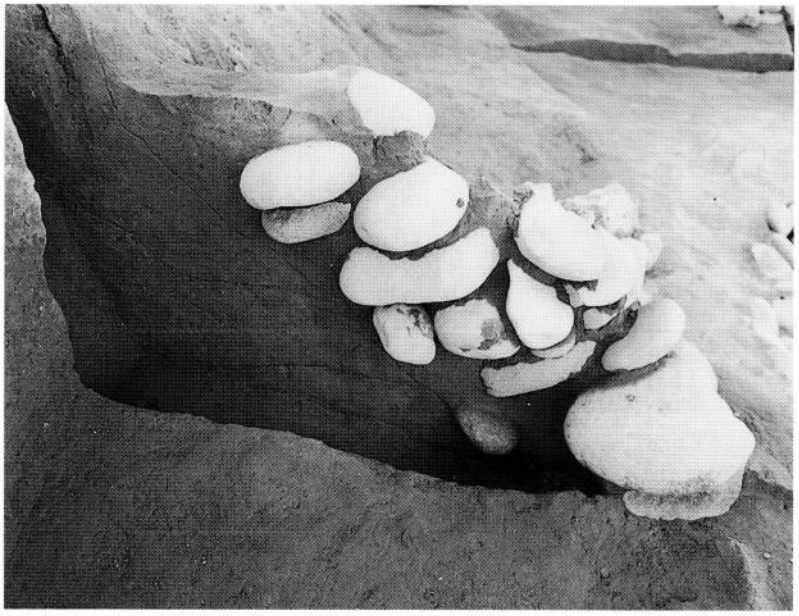


3．同　瓦器椀・石製品出土状態（北から）

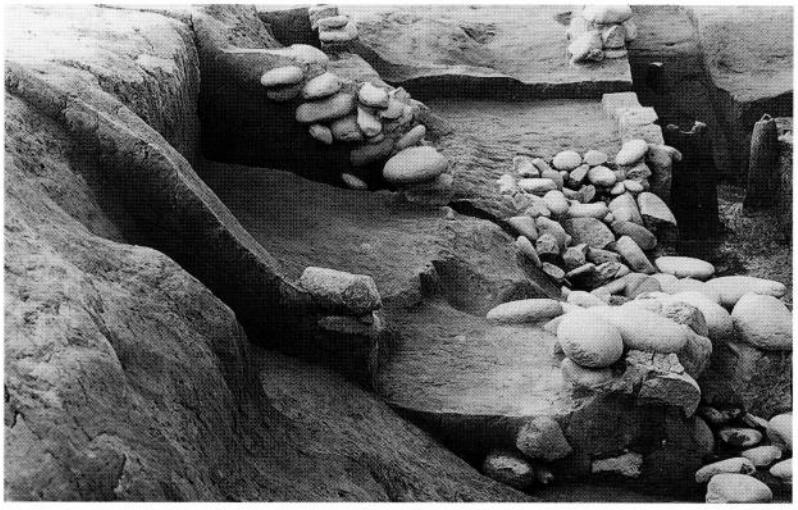
6．同　テラスの石積み状況（南東から）



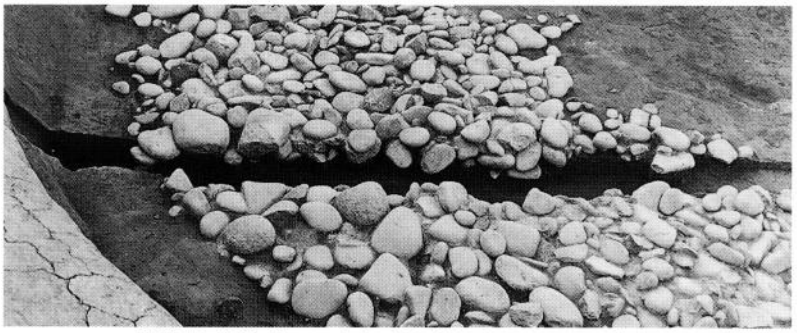
1．4号溝階段状集石 立ち割り横断面土層1（南東から）



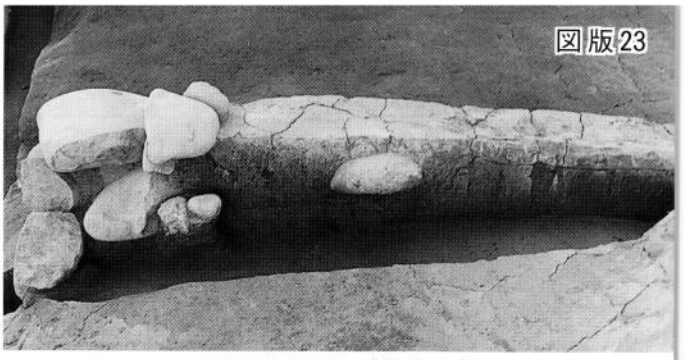
2．同　2（東から）



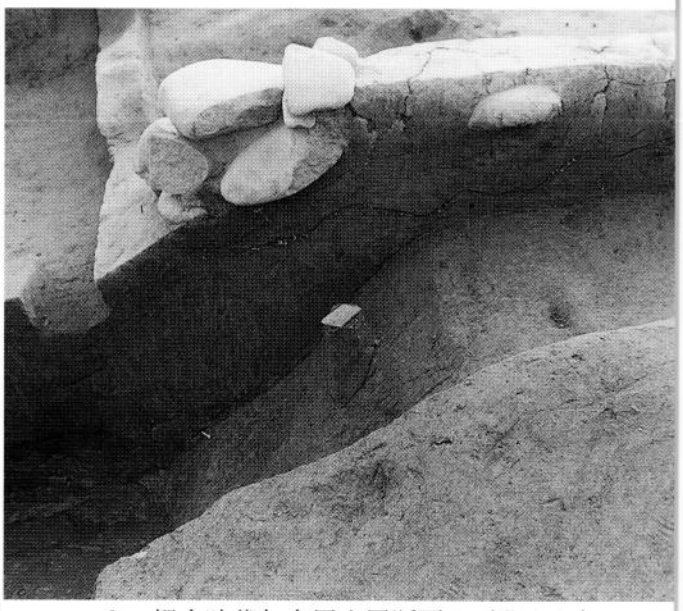
3．同　3（南東から）



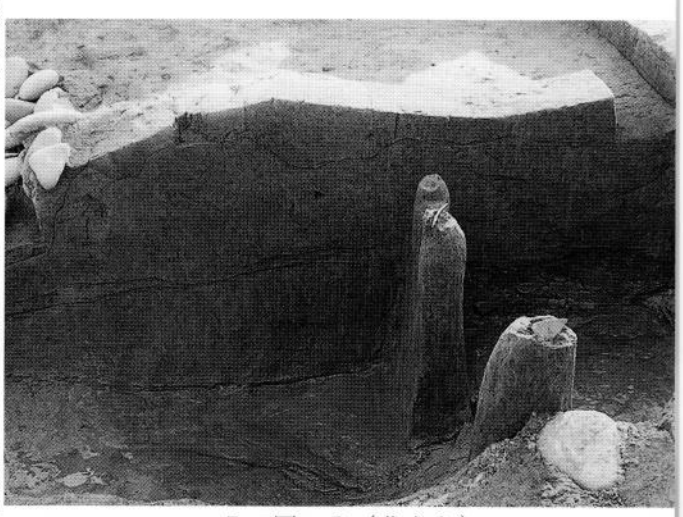
4．4号溝階段状集石 立ち割り縦断面土層1（北西から）



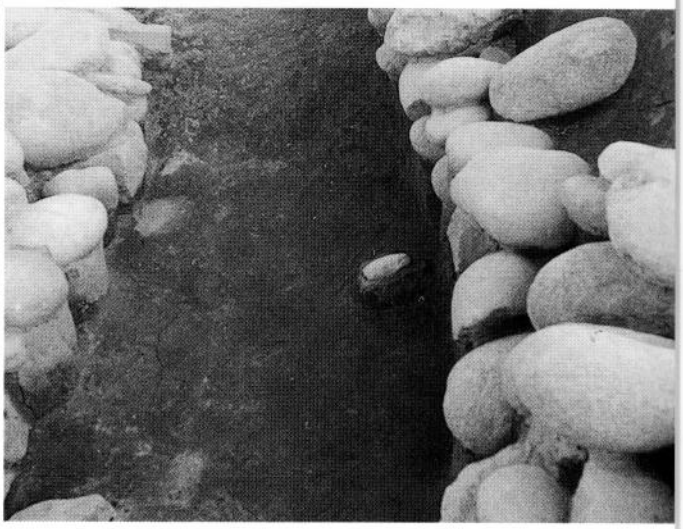
5．同　2（北から）



6．縄文時代包含層土層断面1（北から）

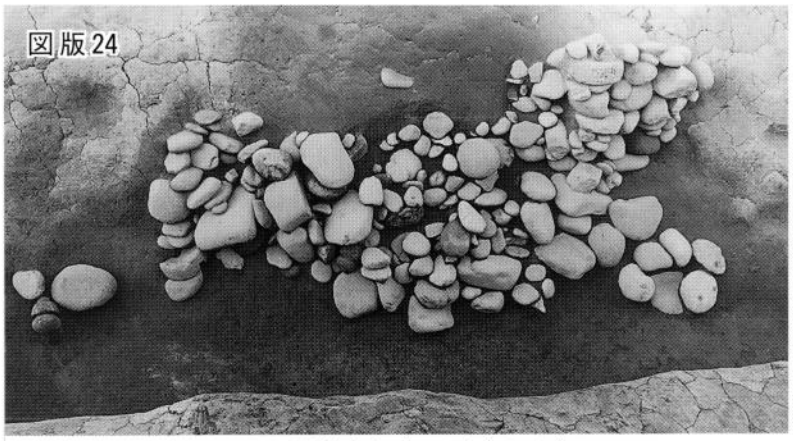


7．同　2（北から）

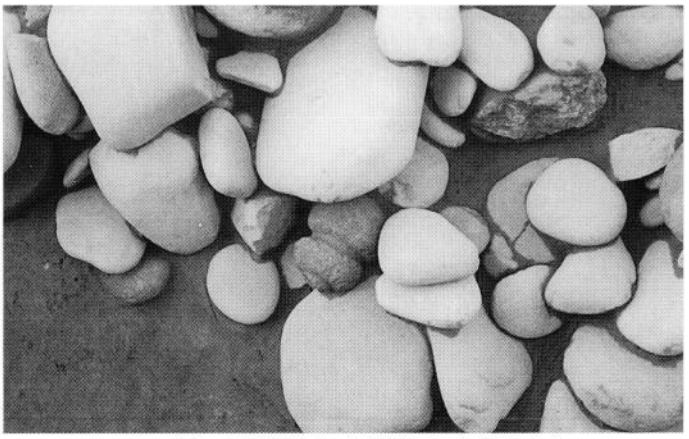


8．集石裏込内石斧出土状態（西から）

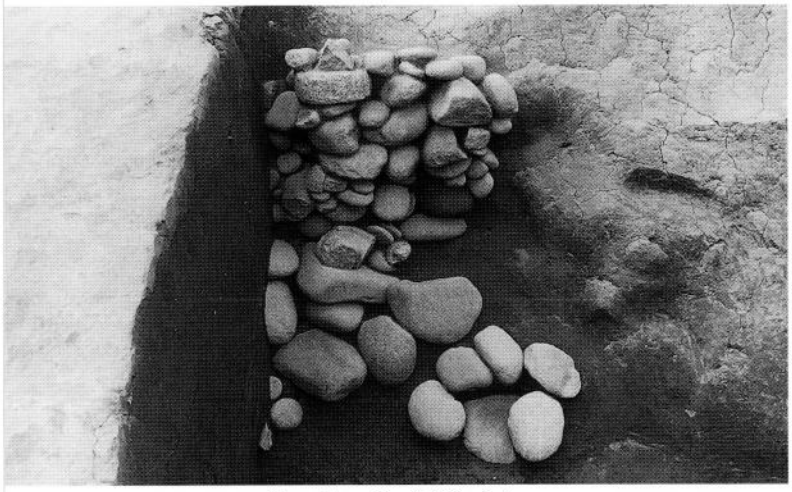
図版24



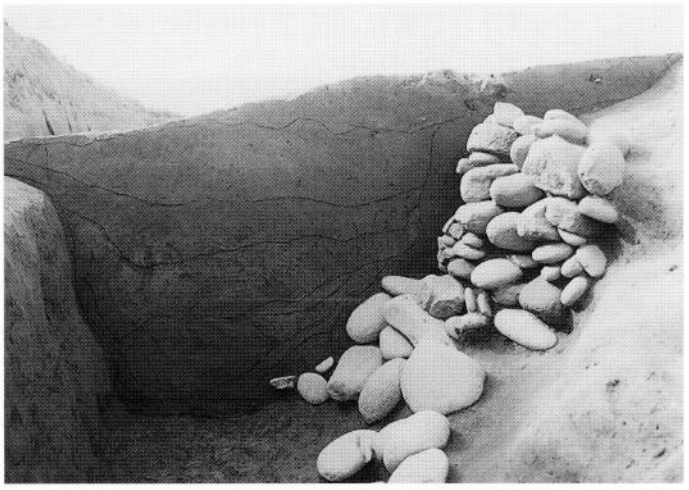
1．4号溝東部集石（東から）



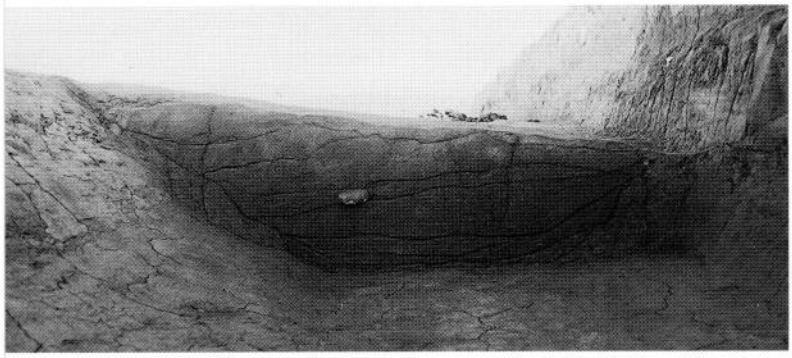
2．同　石製品出土状態1（東から）



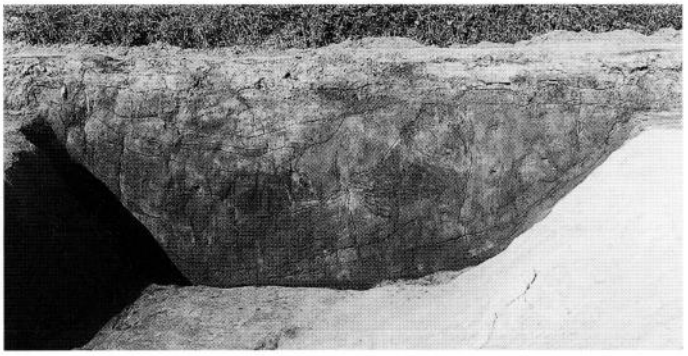
3．同　2（東から）



4．4号溝土層断面1（北東から）

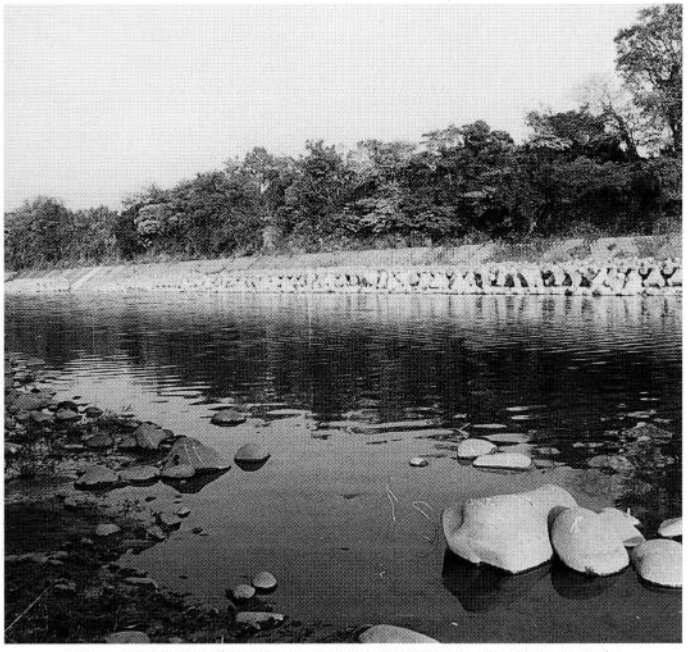


5．同　土層断面2（南から）

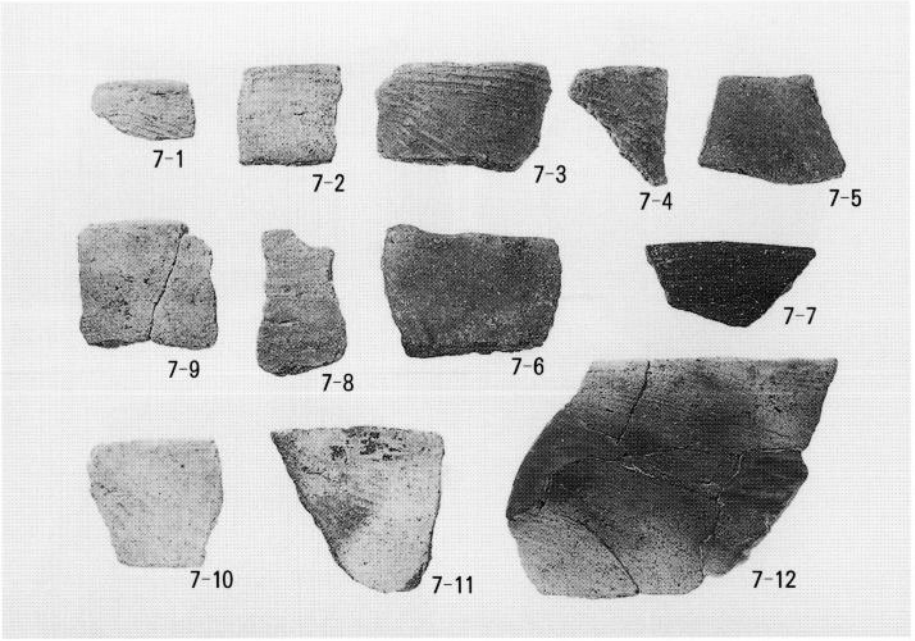


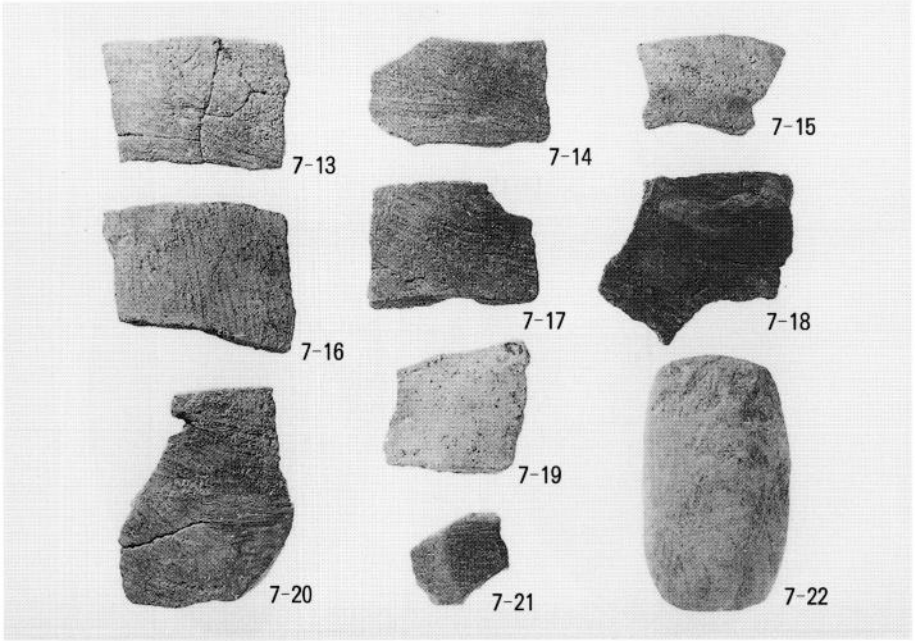
6．同　土層断面3（南東から）

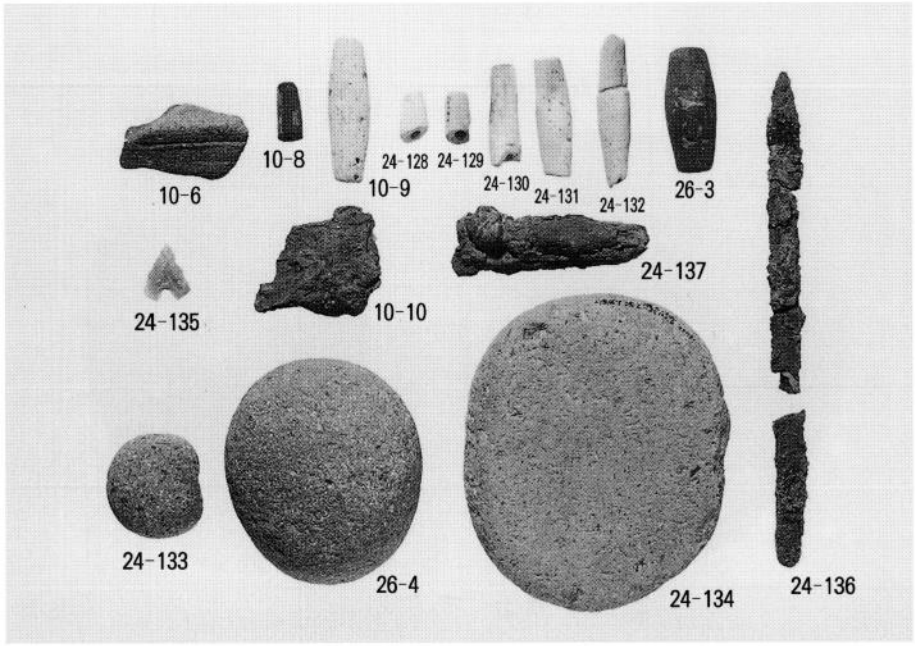
7．南区作業風景（南東から）

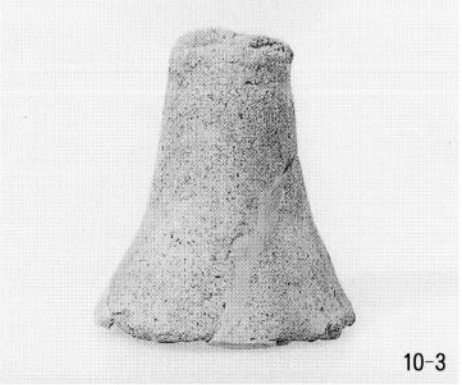


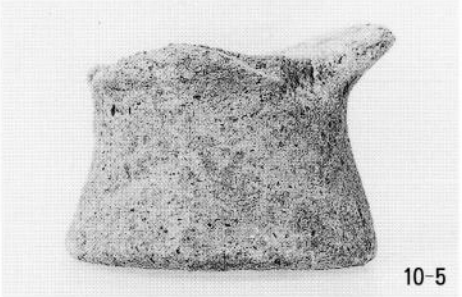
8．遺跡の東の山国川と対岸風景（南西から）

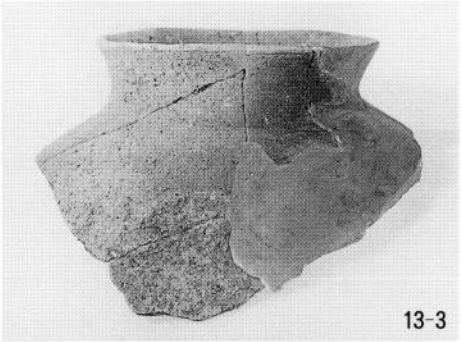


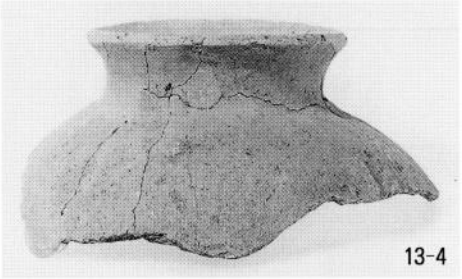






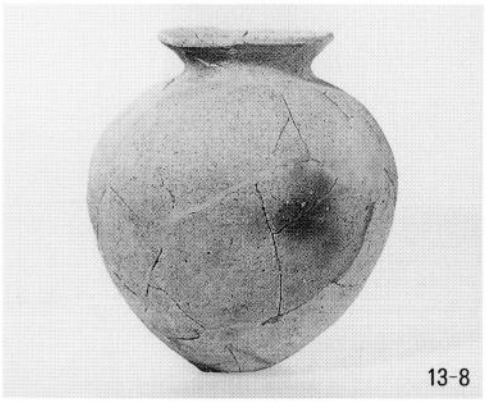


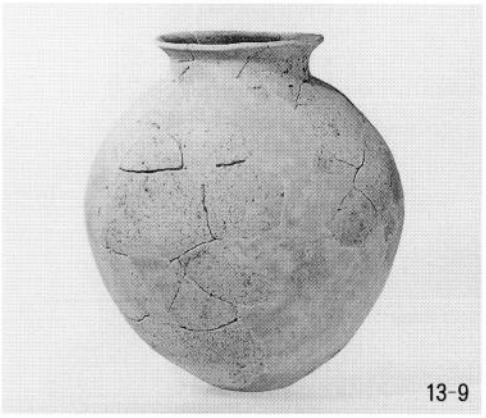


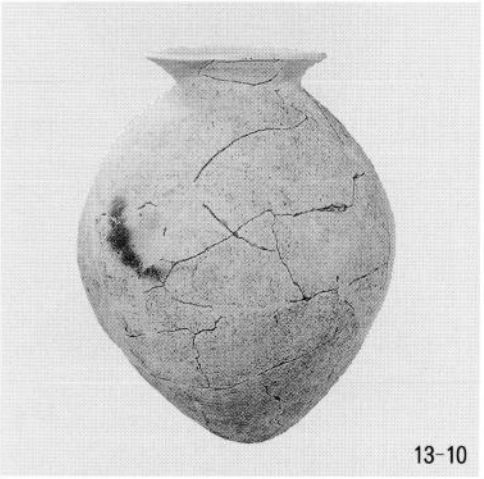


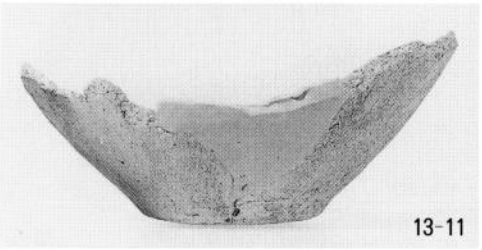
1．縄文包含層出土土器・石器　2．13号土坑出土土器　3．1～3号溝出土遺物

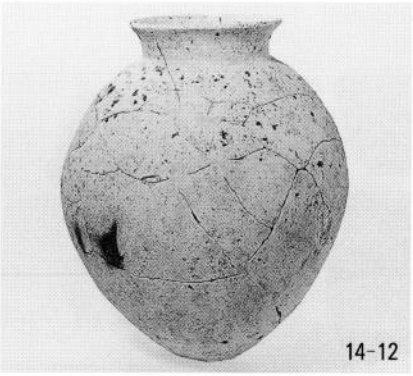
13-7

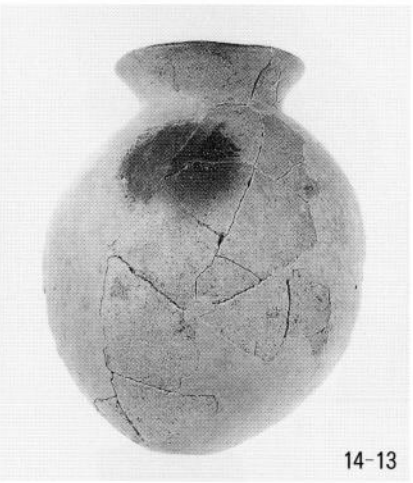

13-8

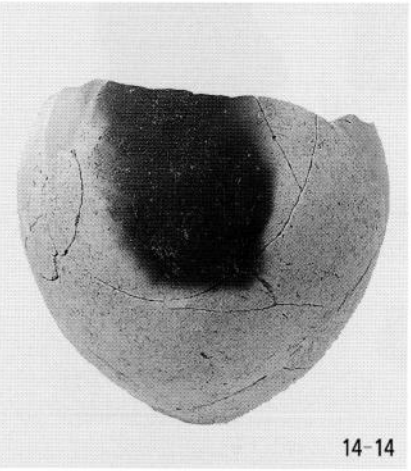

13-9

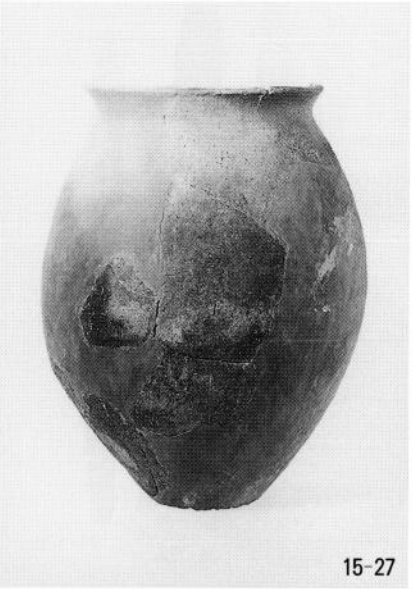

13-10


13-11

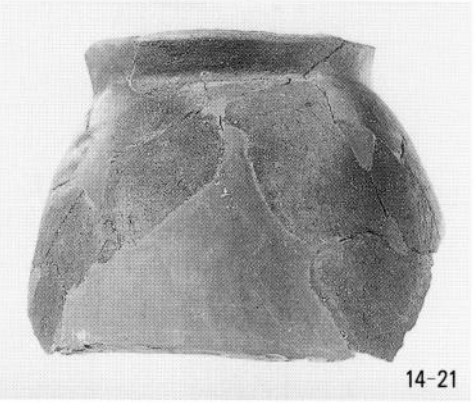

14-12


14-13


14-14


15-27

14-20


14-21

15-26

15-28

2号溝出土土器1

15-29

16-33

17-38

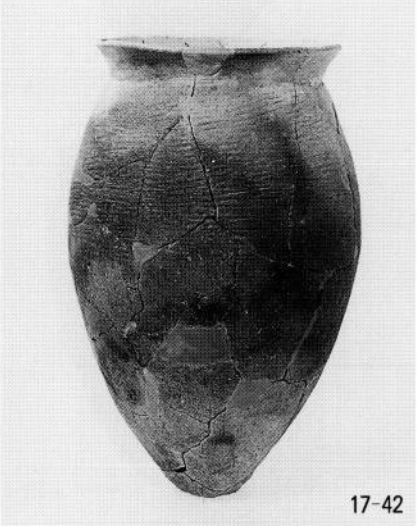
16-31

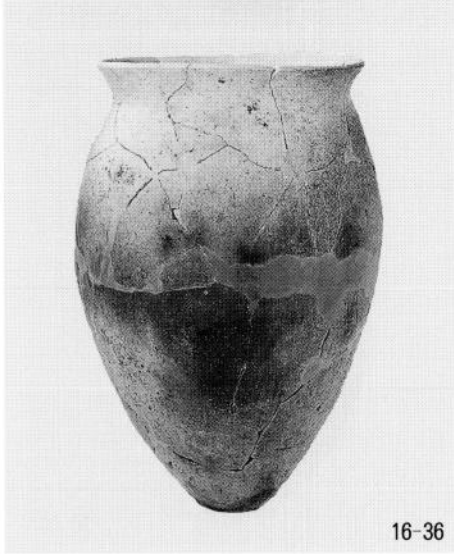
16-34

17-41

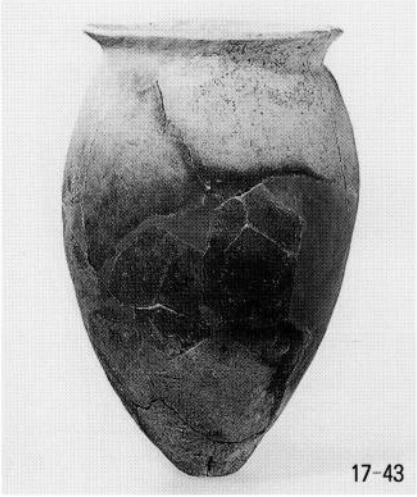
16-32

16-35


17-42

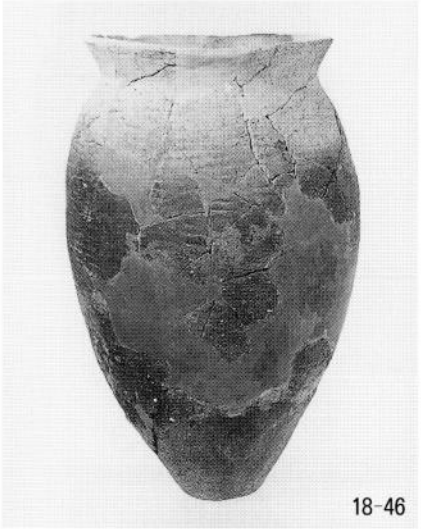

16-36

17-40


17-43

2号溝出土土器2

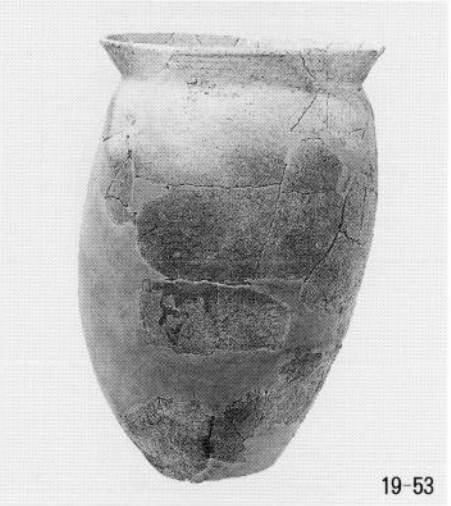
18-45


18-46

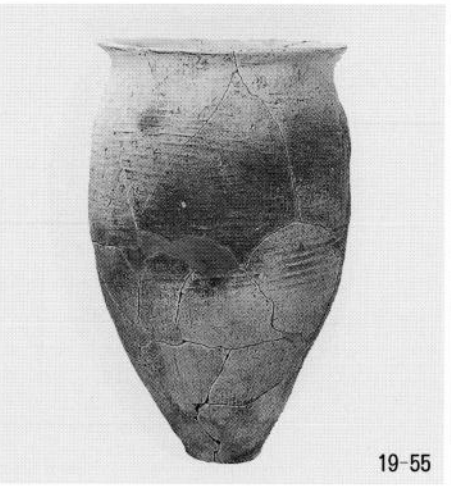
18-47

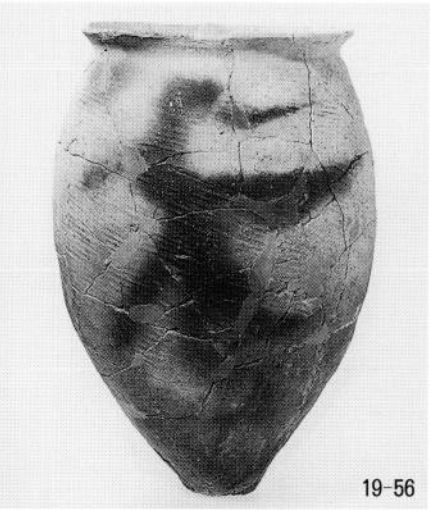
18-49

18-50

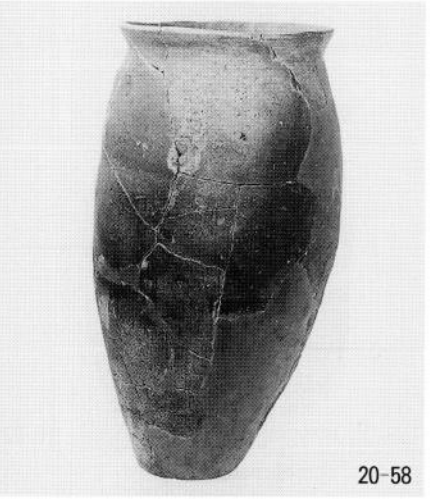

19-53

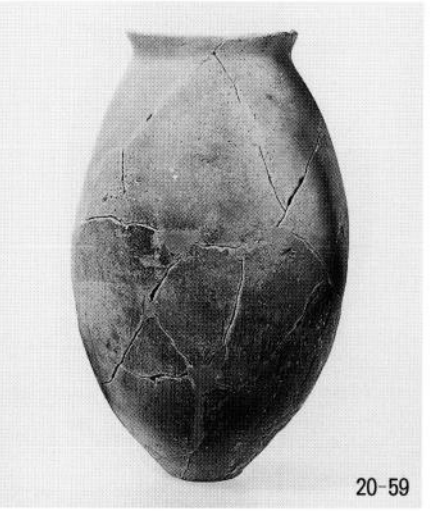
19-54


19-55


19-56

20-57

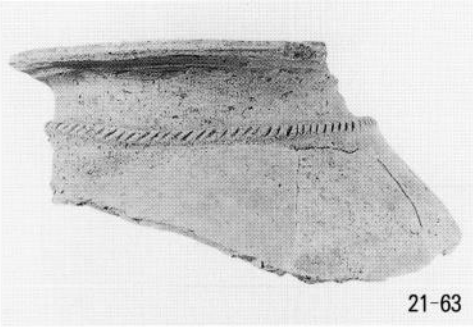

20-58

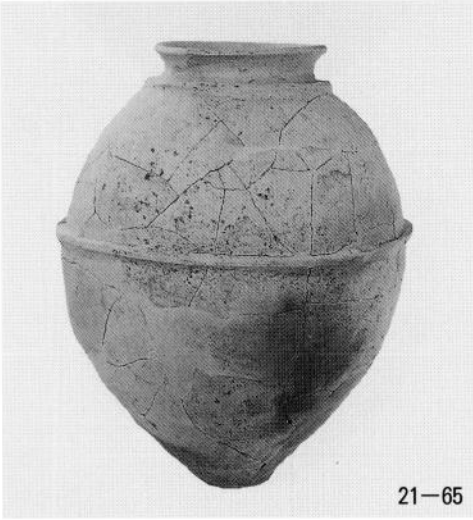

20-59

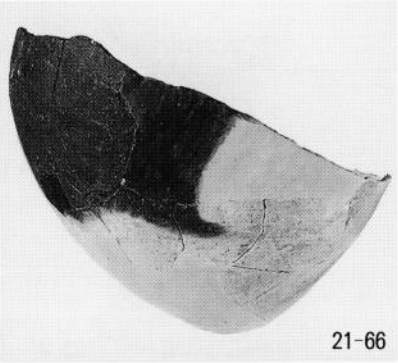
2号溝出土土器3

20-60

20-61


21-63


21—65


21-66

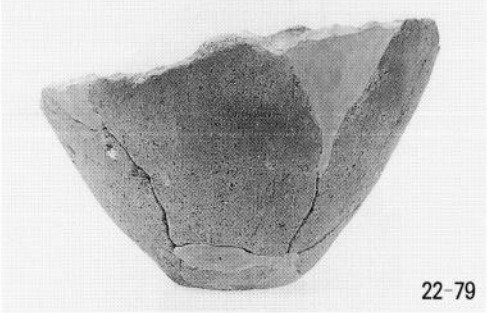
22-71

22-72

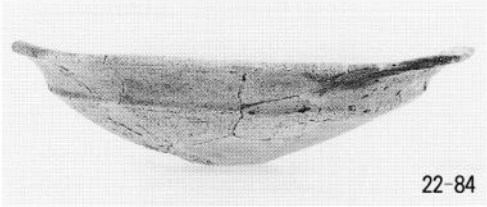
22-73

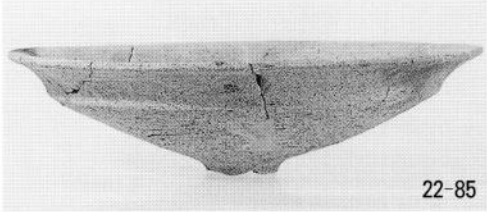
22-74

22-77

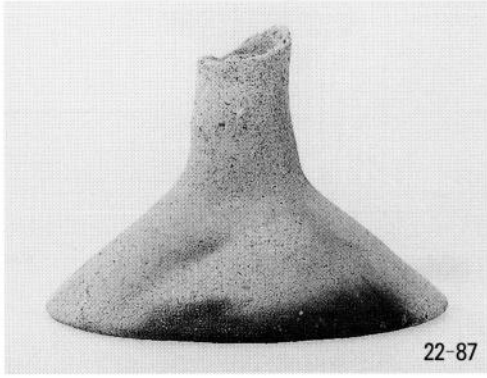

22-79

22-80

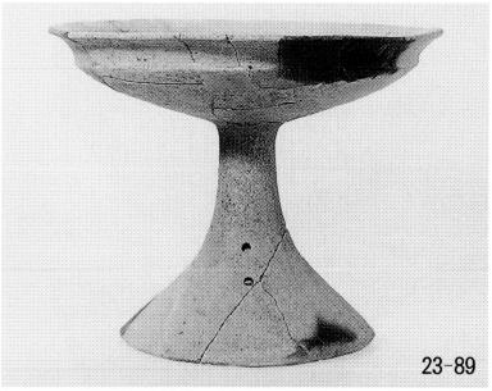

22-84

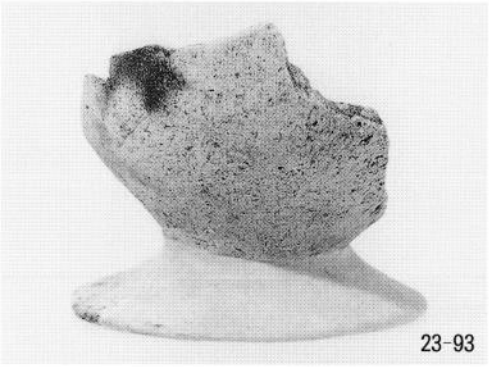

22-85

22-86

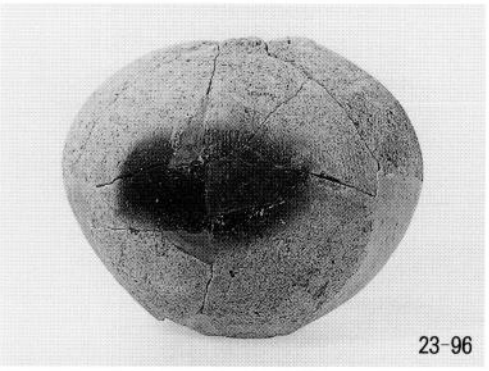

22-87

2号溝出土土器4


23-89


23-93

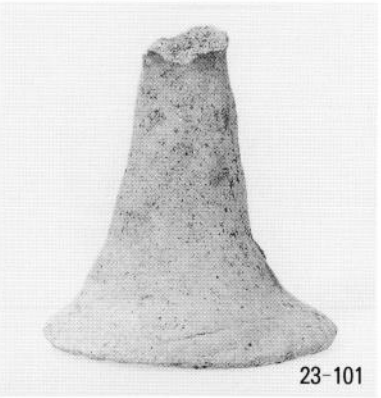
23-94


23-96

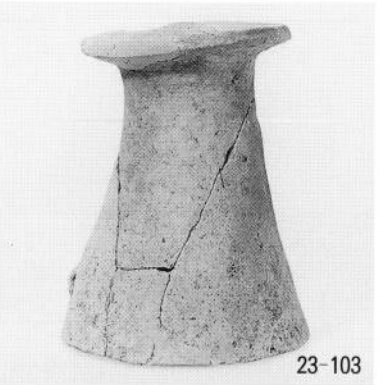
23-97

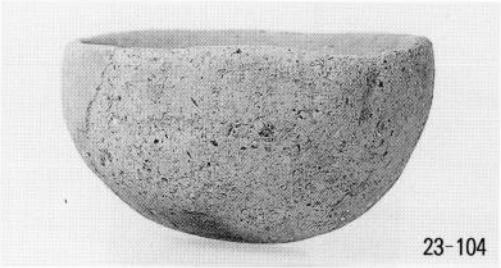
23-98

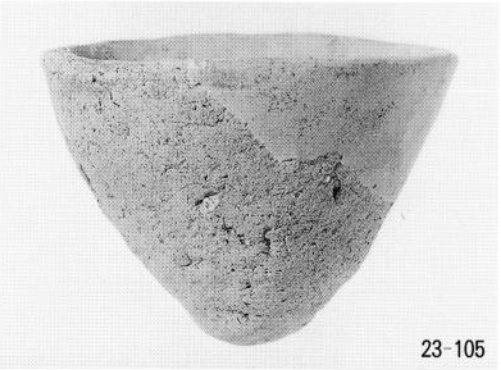
23-99


23-101

23-102


23-103


23-104


23-105

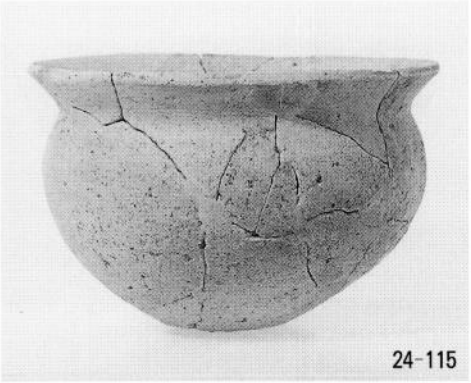
23-107

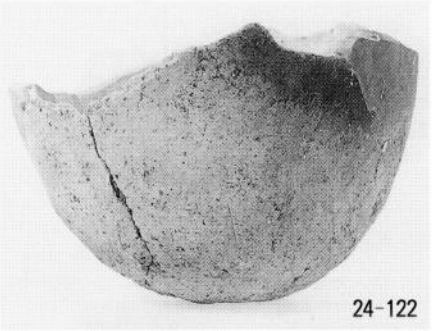
23-108

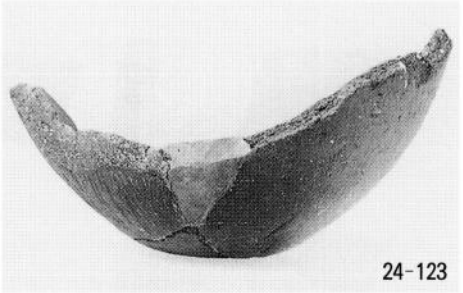
23-109

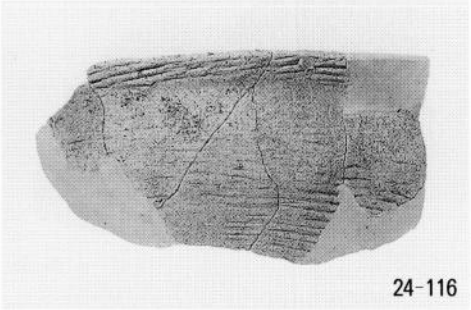
24-114

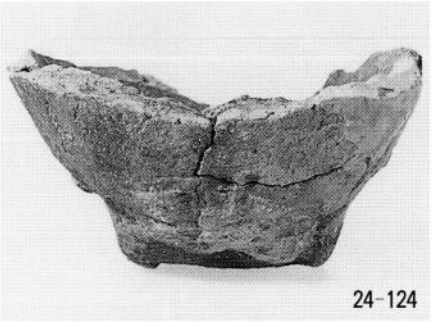
2号溝出土土器5

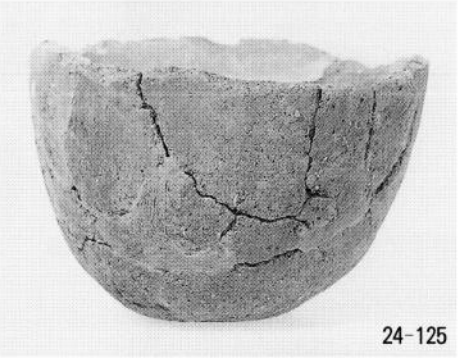


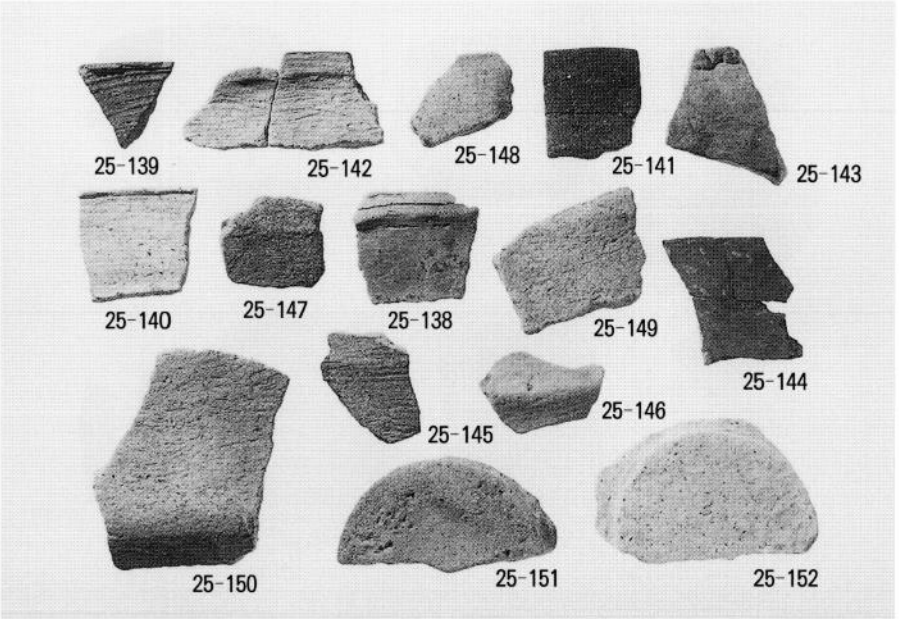


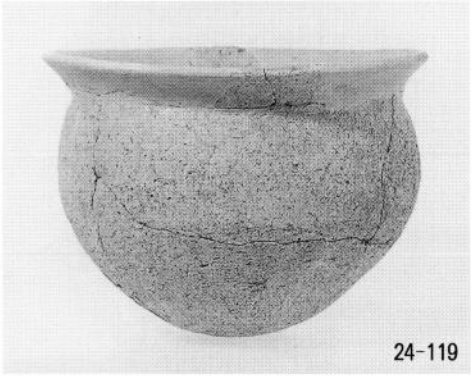


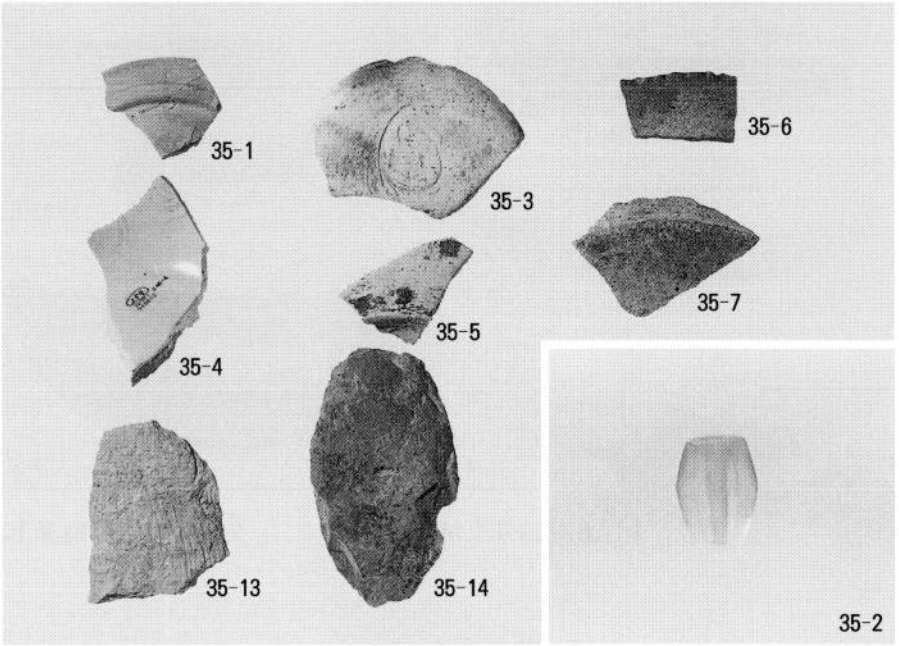




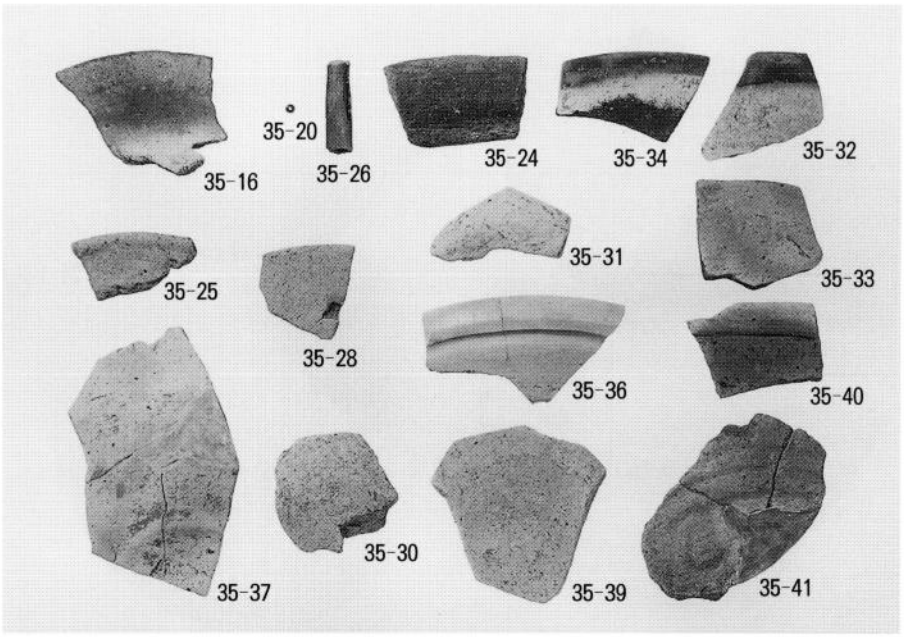


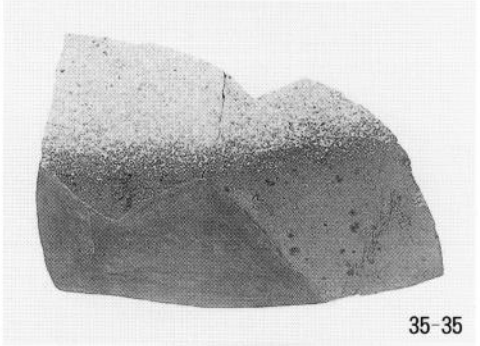


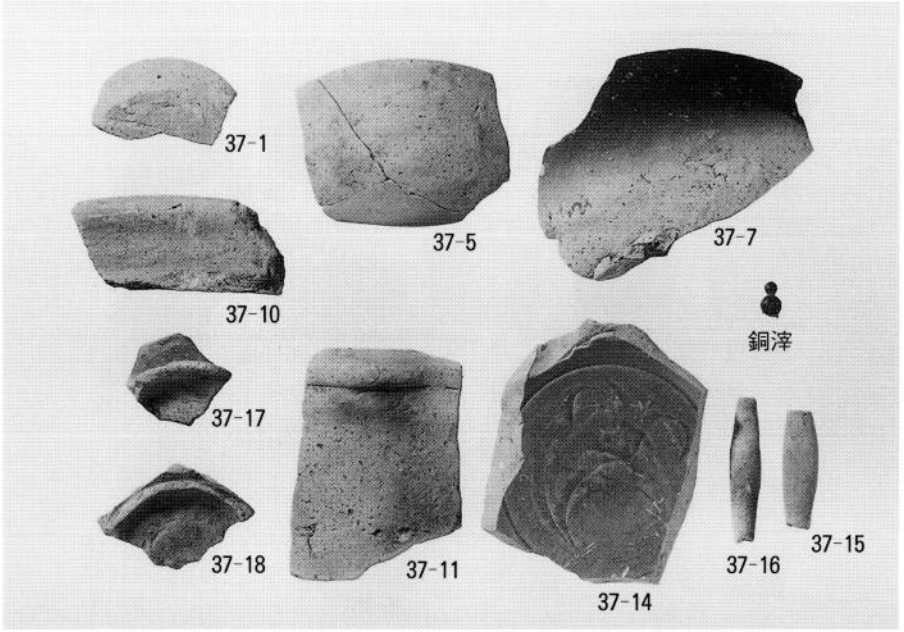


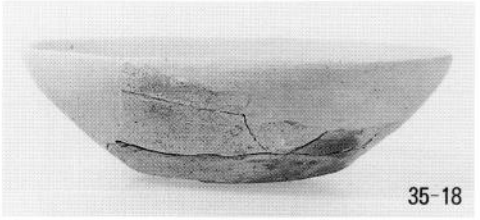


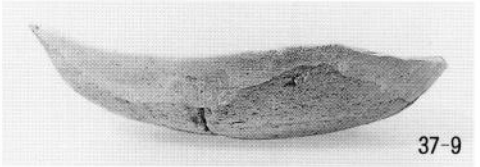
1．2号溝出土土器　　2．1・4号土坑出土遺物

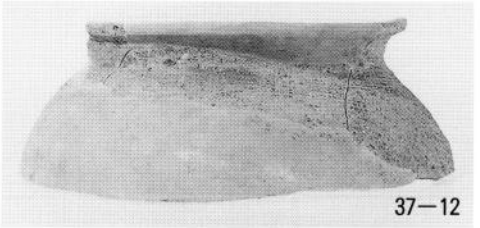


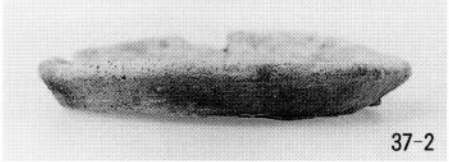


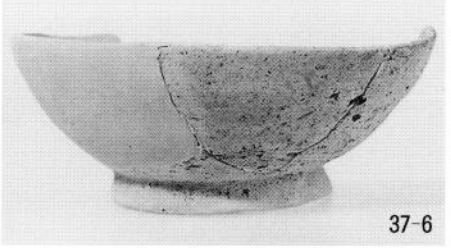


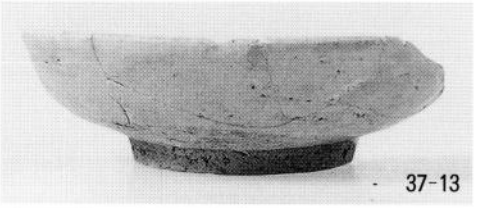


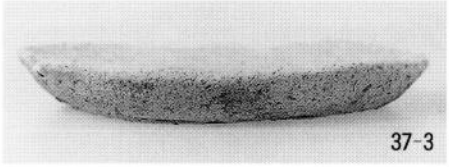




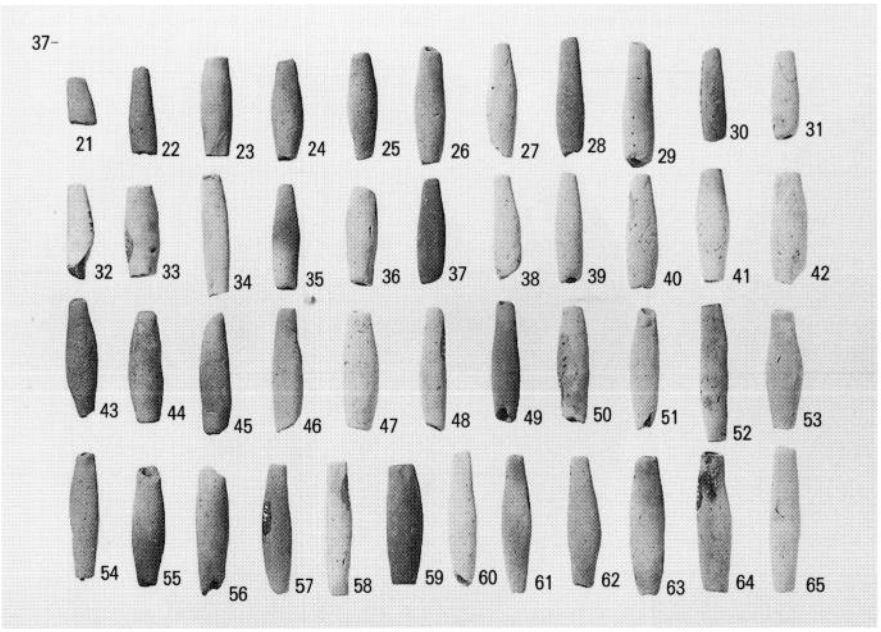


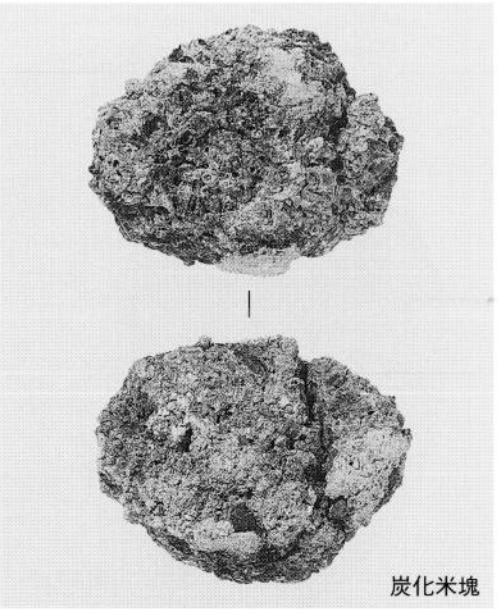


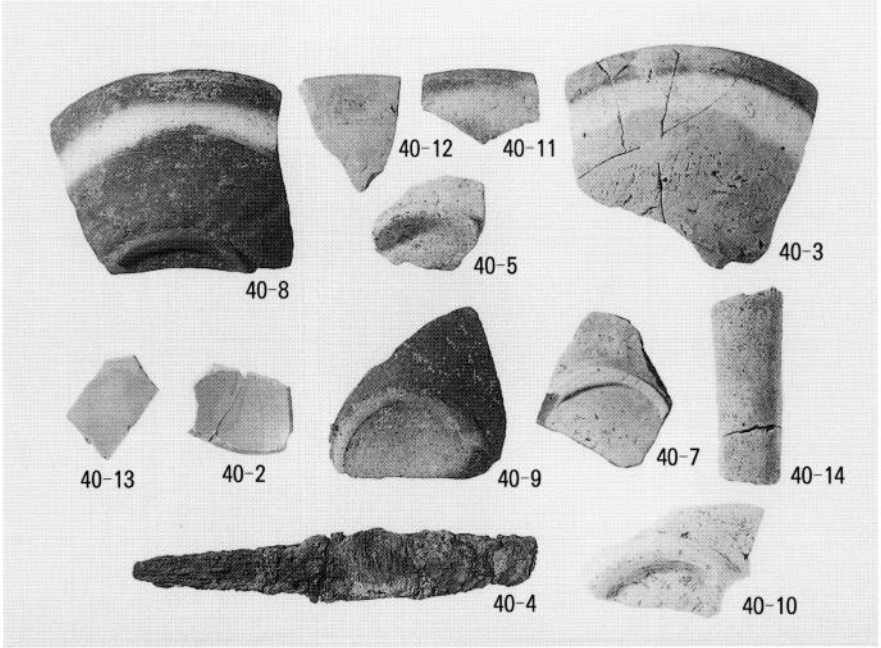


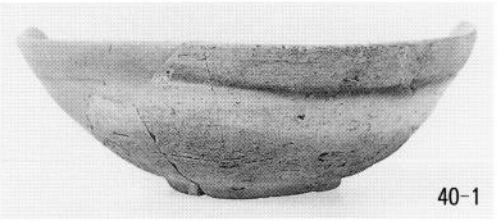


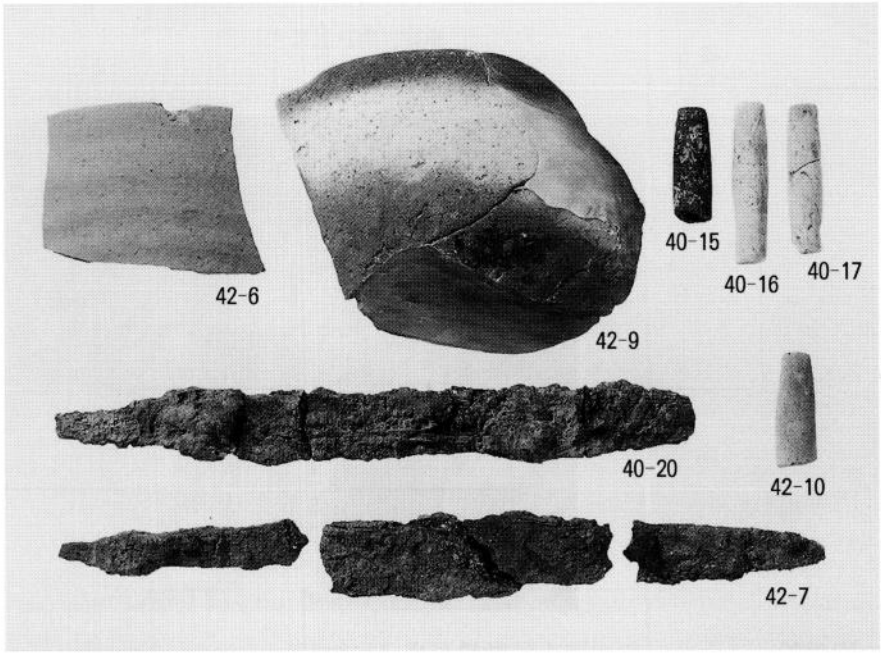
1．6～12号土坑出土遺物　　2．1・2号廃棄土坑出土土器・陶磁器

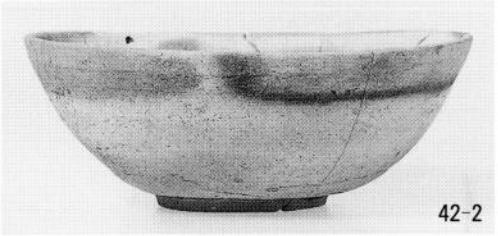


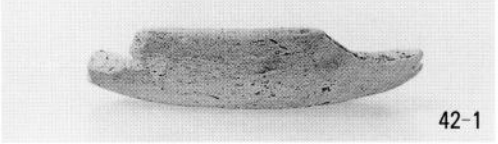


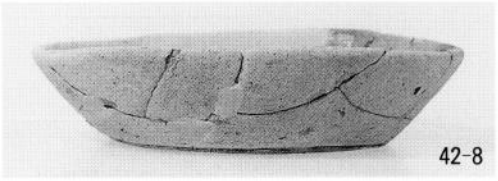












1．2号廃棄土坑出土土錘　　2．1～4・6号墓出土遺物

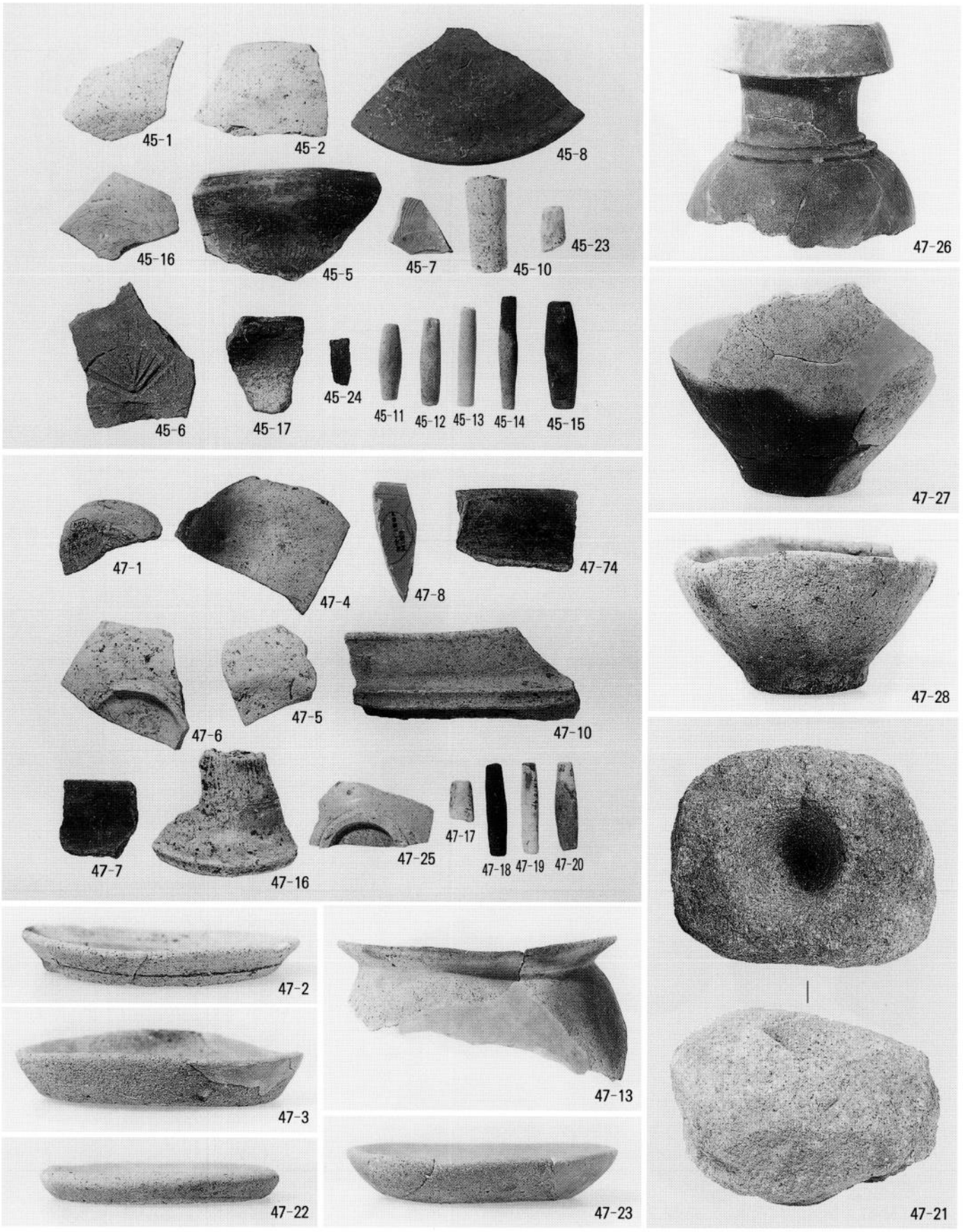
木質付着状況

木質除去後
42-5

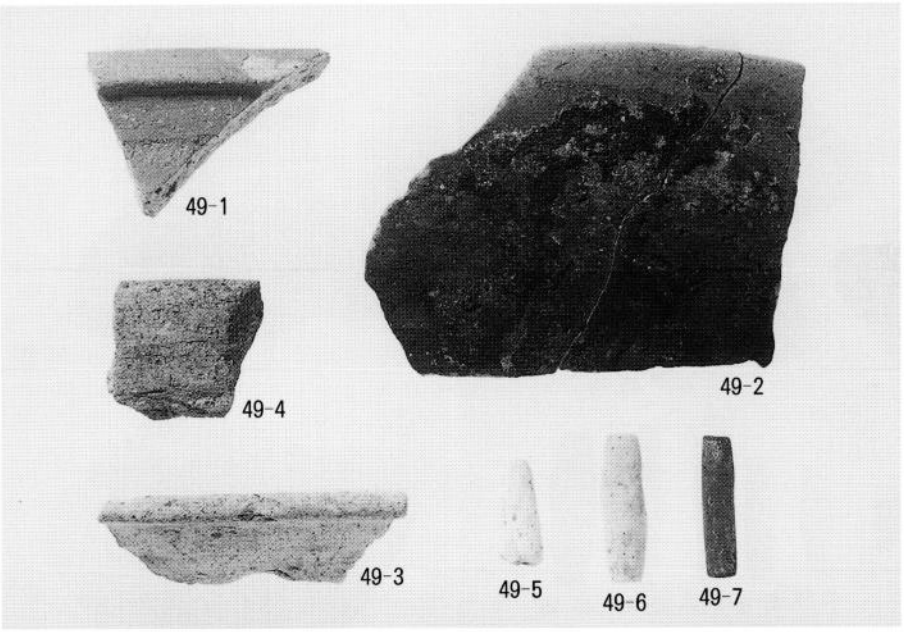
繊維付着状況拡大

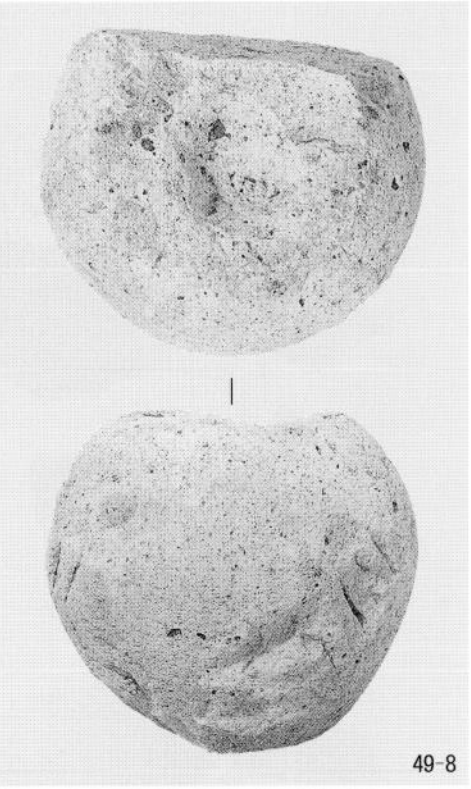
42-4

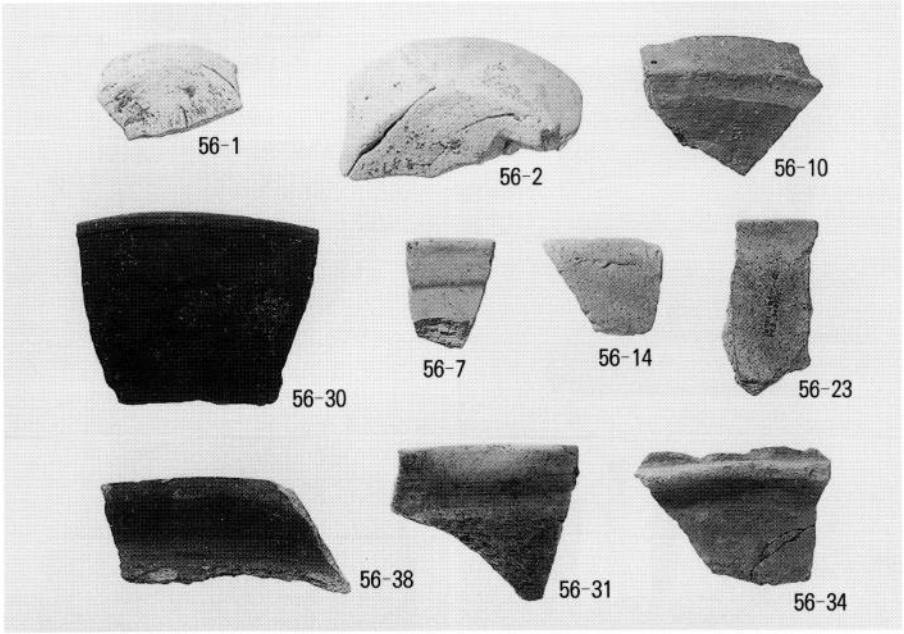
1．3号墓出土鏡・陶磁器　　2．鏡面繊維顕微鏡写真（×約26）

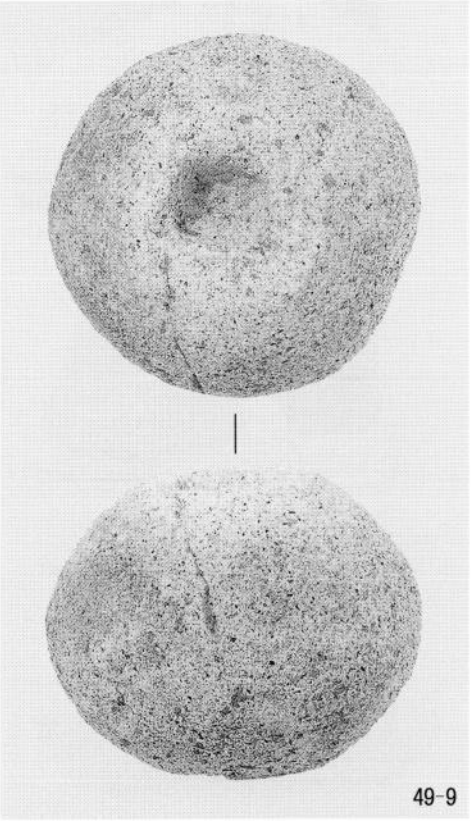


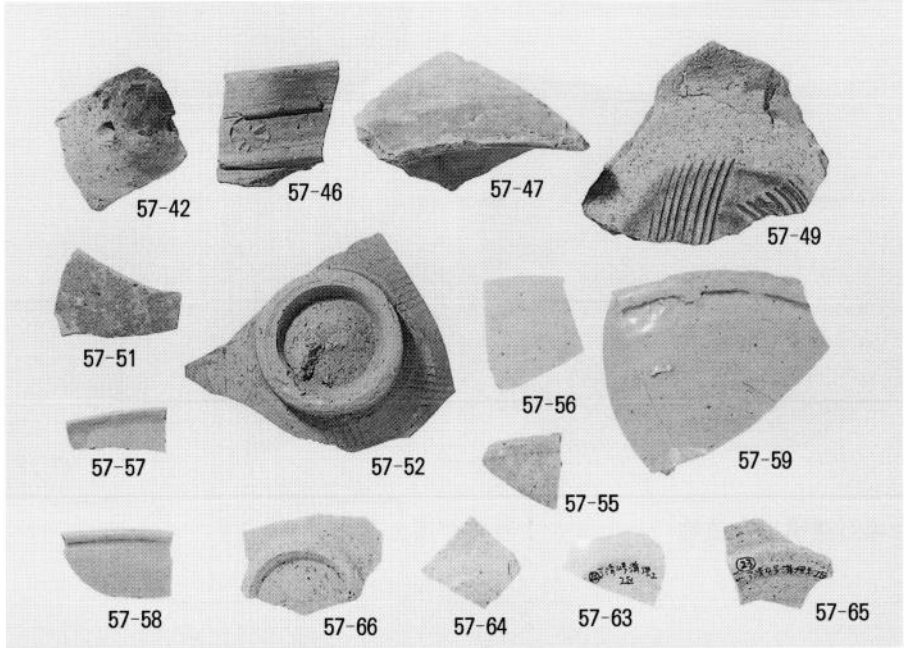
1．1・2号集石遺構出土遺物　　2．1号井戸出土遺物

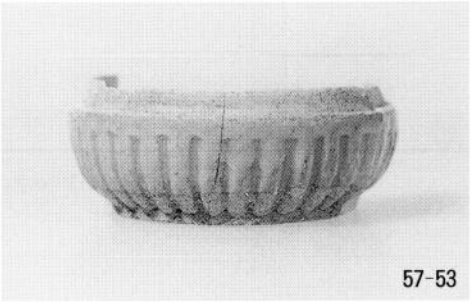




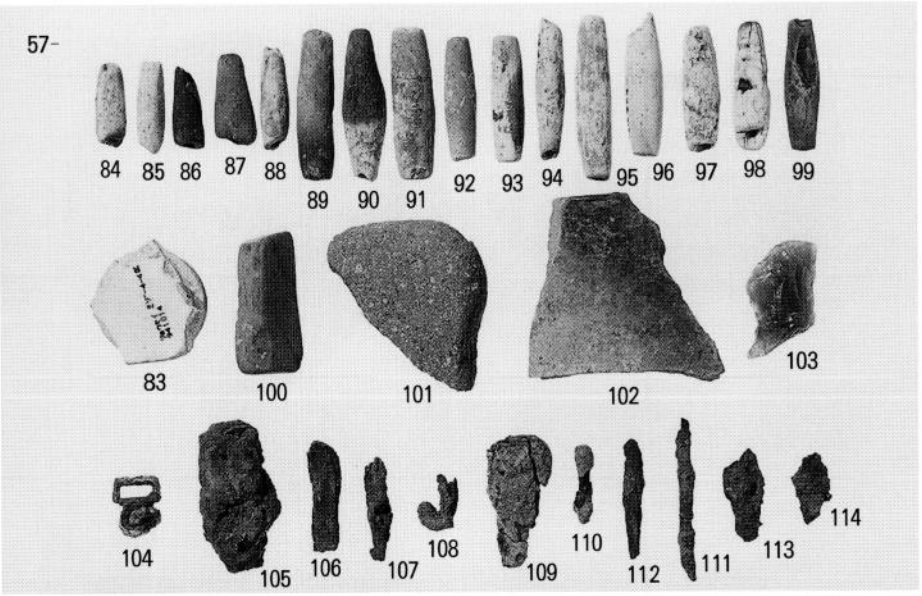


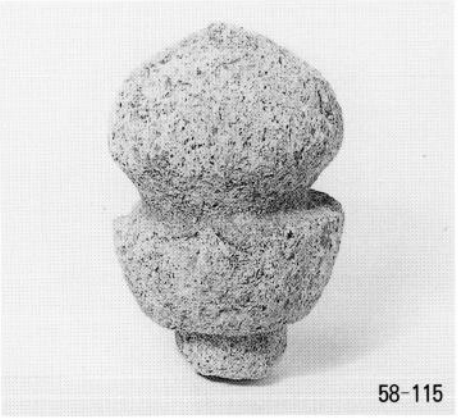


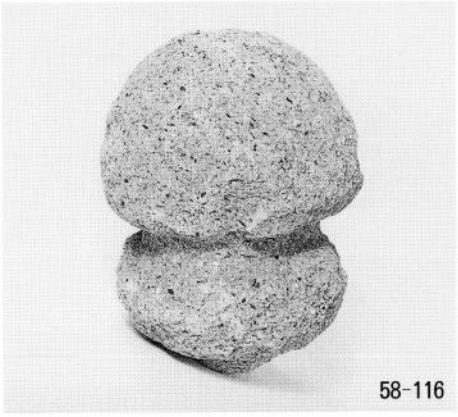


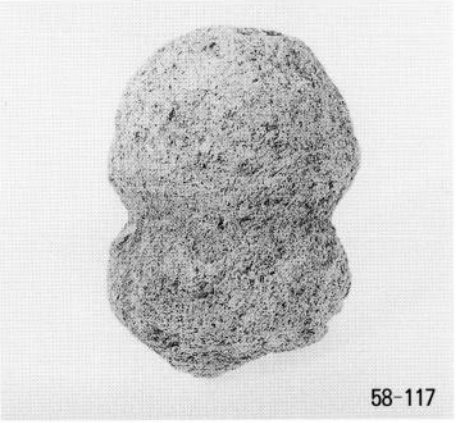


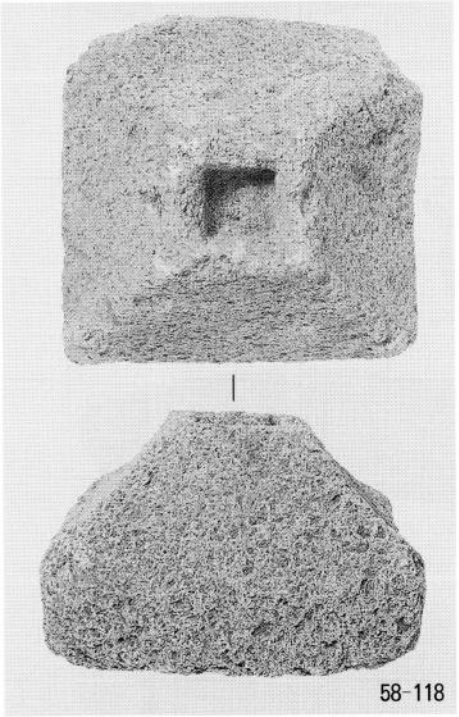
1．1号門状集石遺構出土遺物　　2．4号溝埋土出土土器・陶磁器

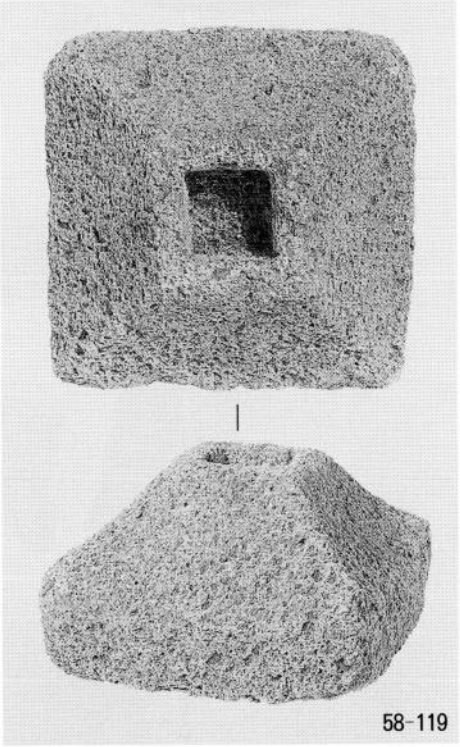


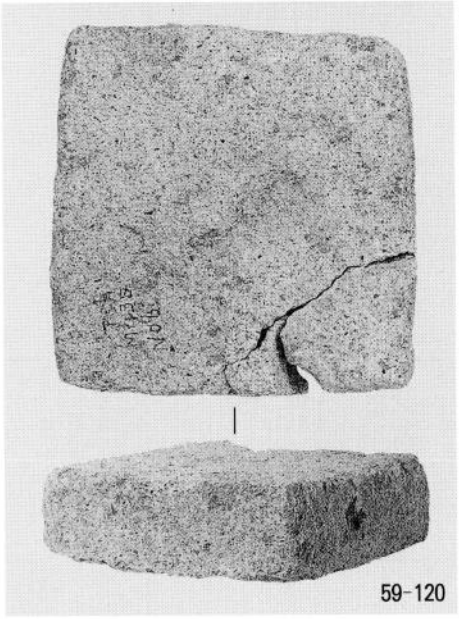


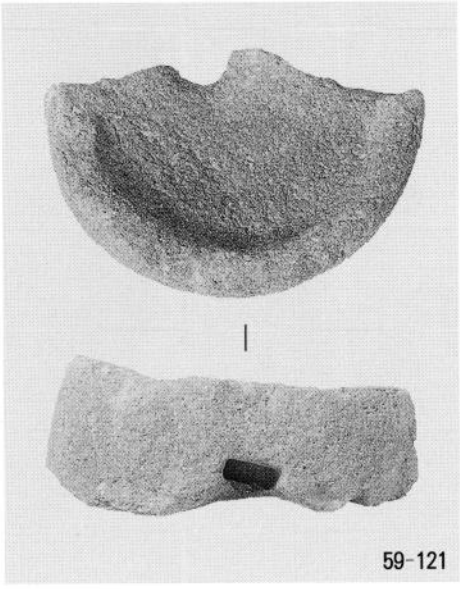


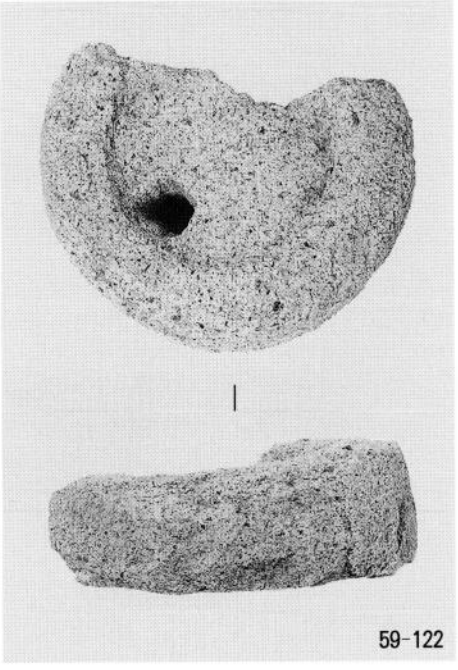




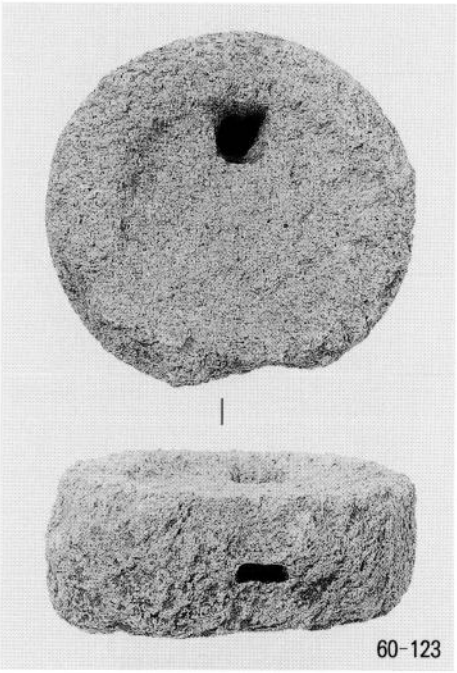


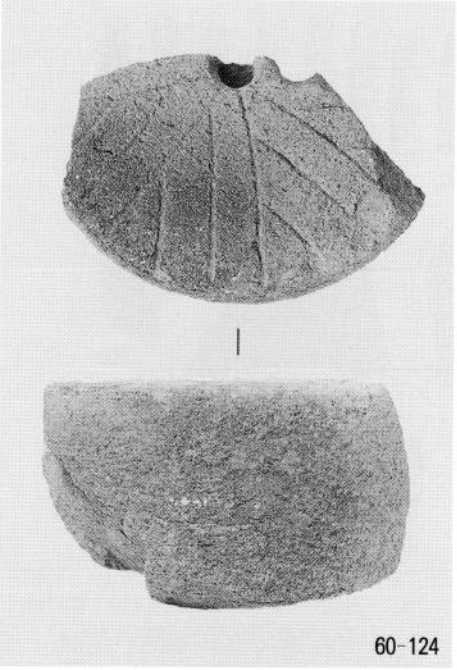


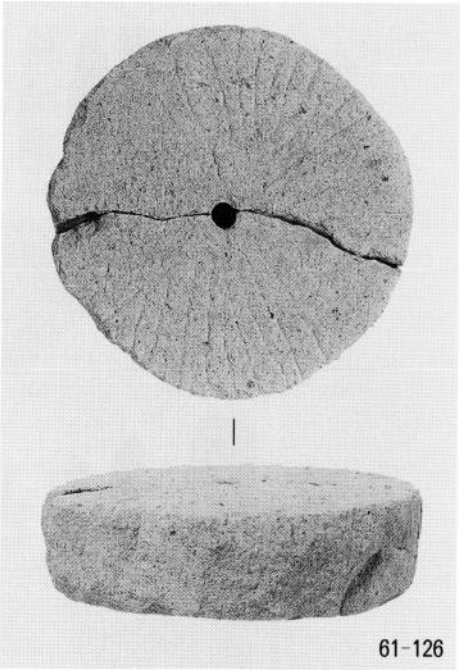


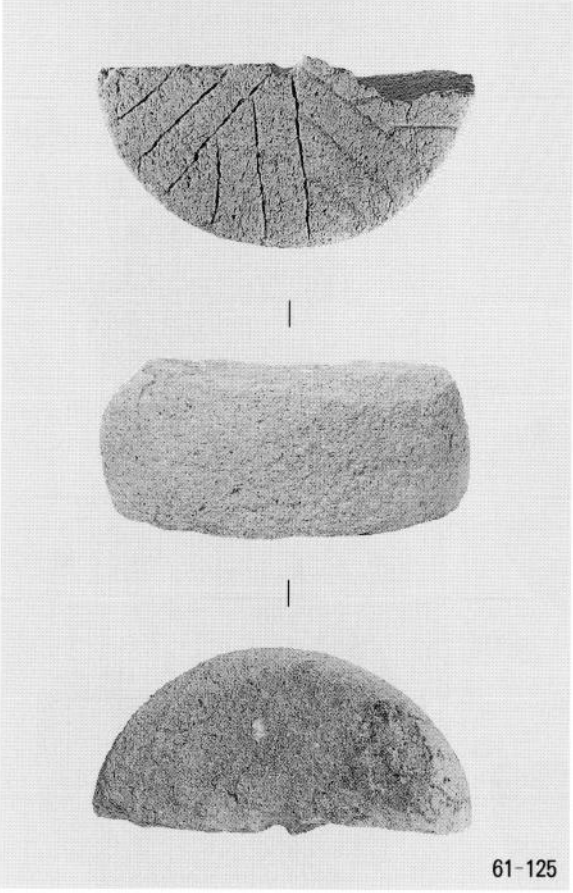


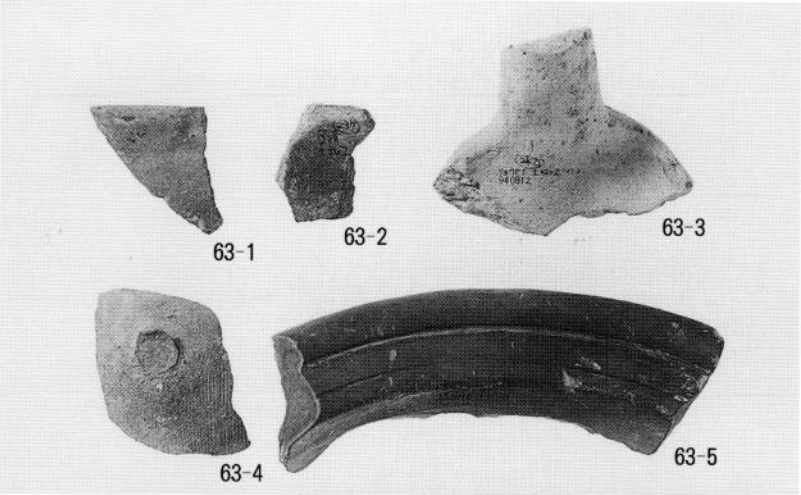
1．4号溝埋土出土遺物　　2．同　集石出土石製品

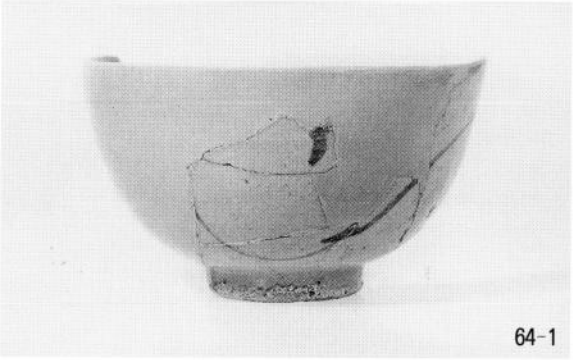


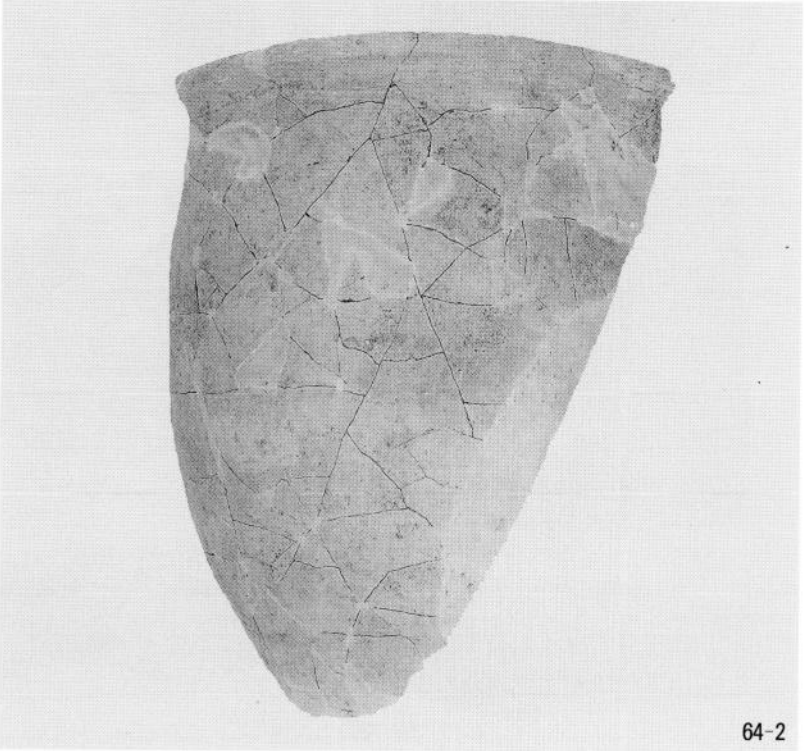












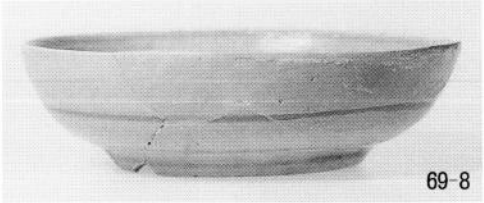
1．4号溝集石出土石製品　　2．2・17号土坑出土土器・陶磁器

69-1

69-7

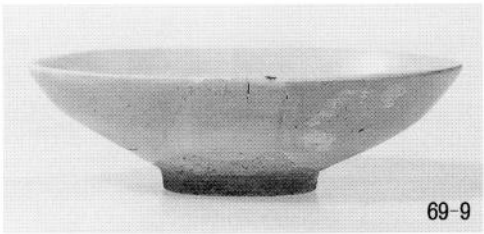
69-11

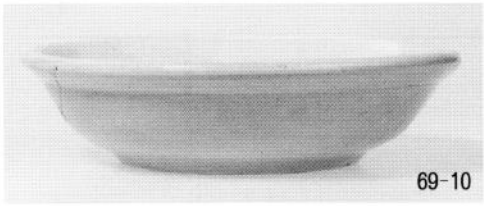
69-2


69-8

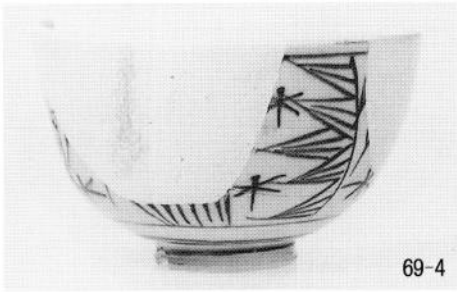
69-12

69-3

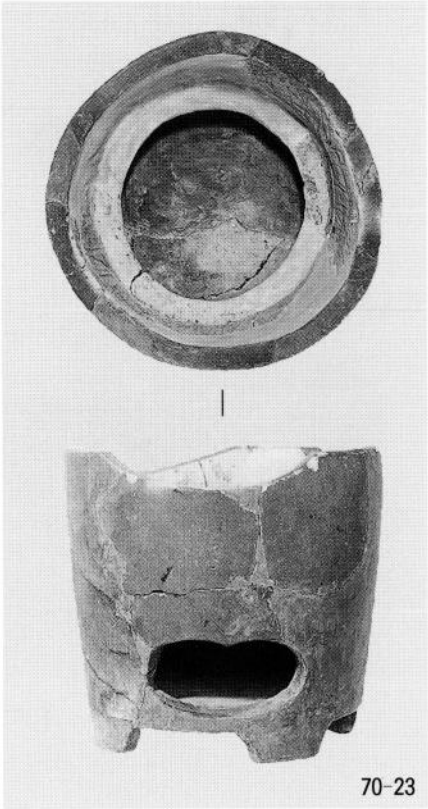

69-9

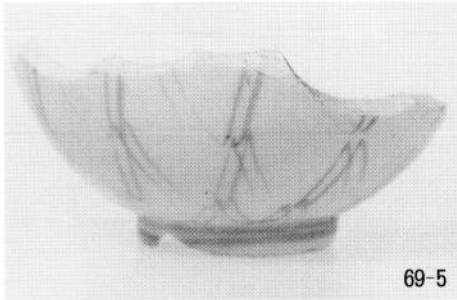

69-10

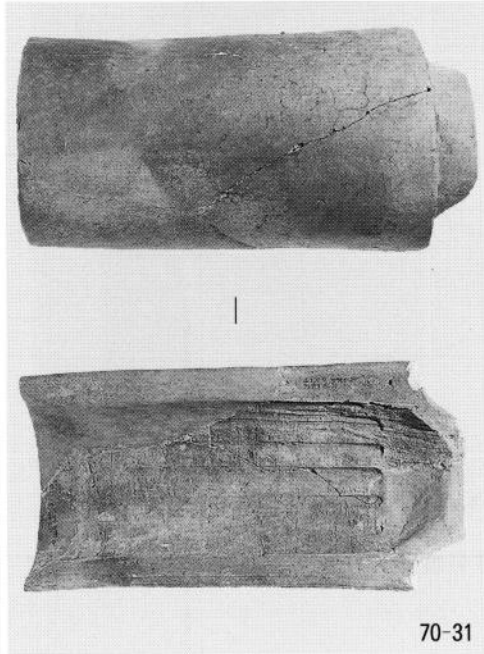
69-20

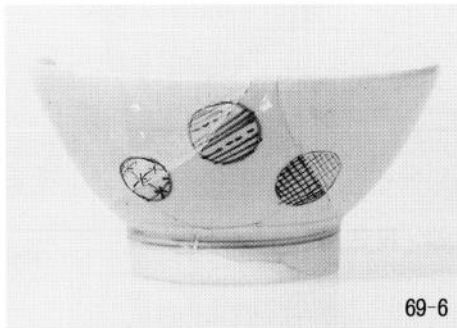

69-4

69-18

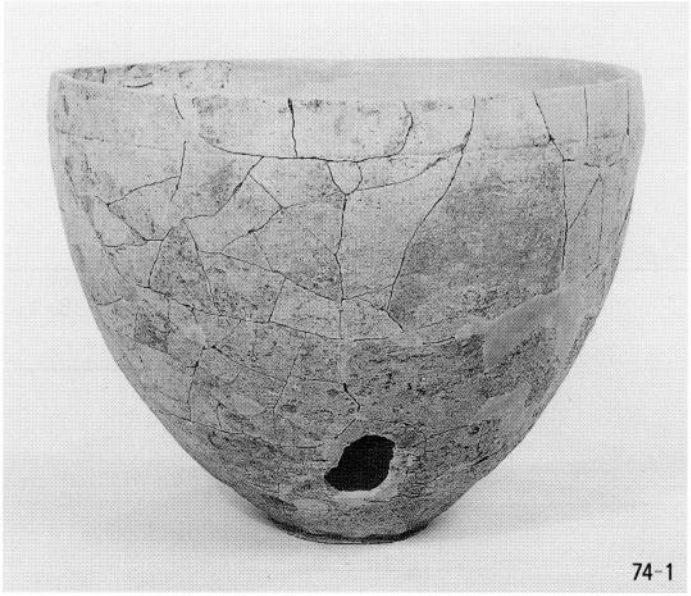

70-23

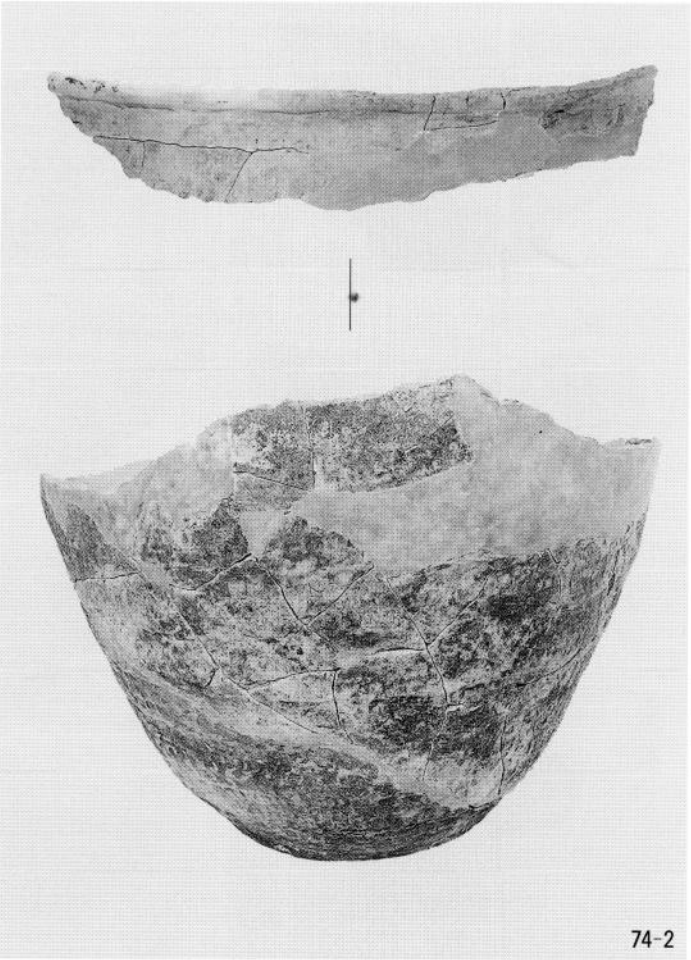

69-5

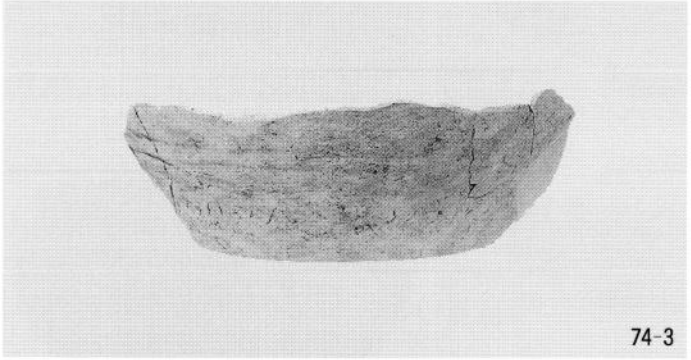

70-31

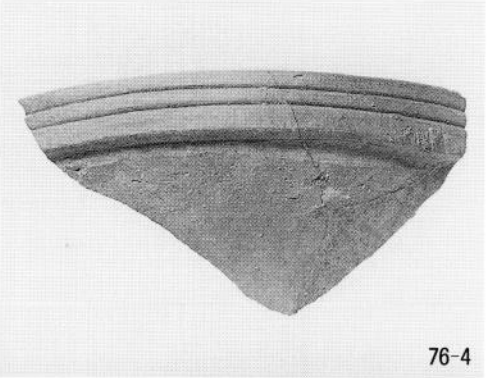

69-6

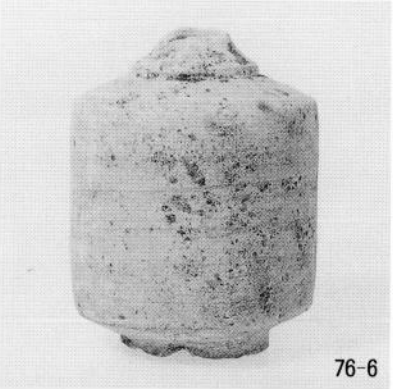
1号石列出土遺物



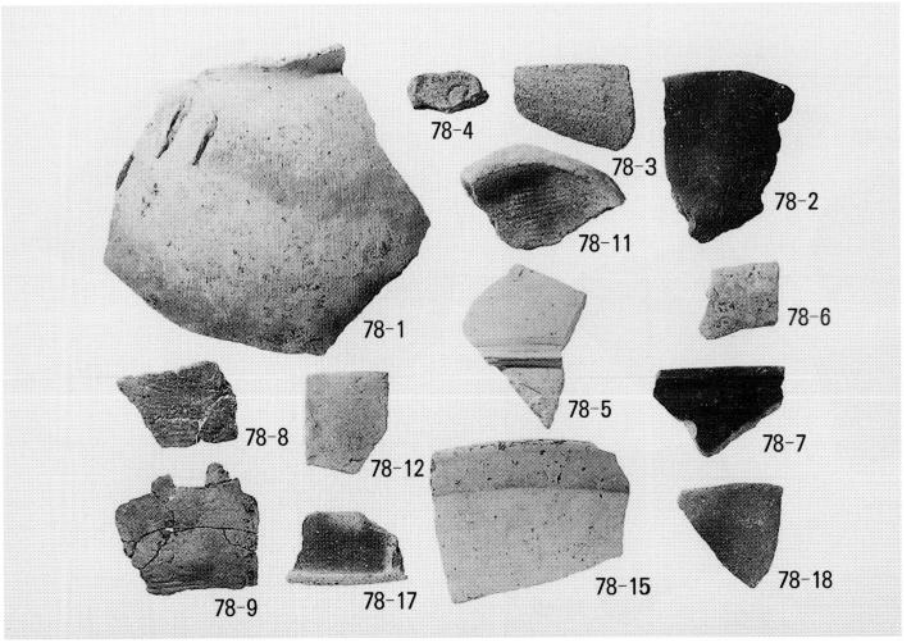


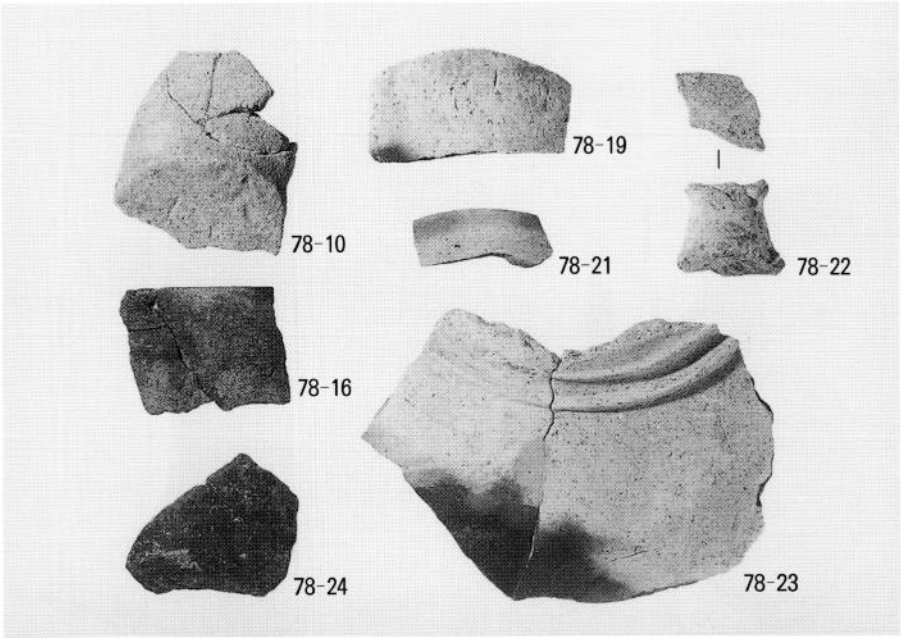


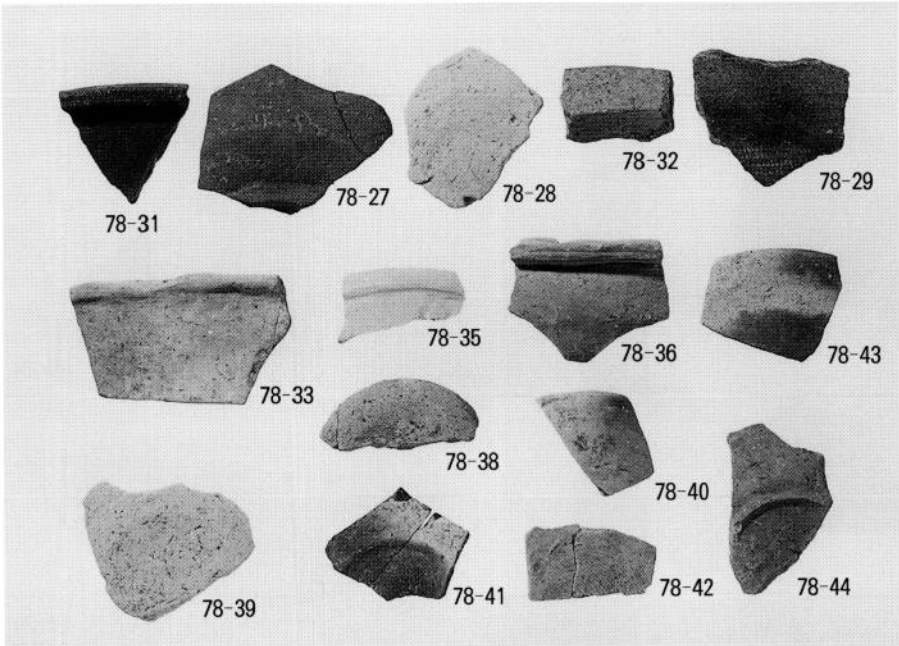


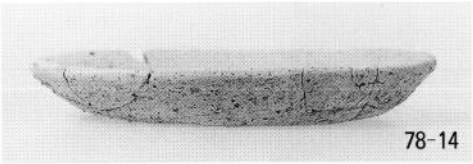


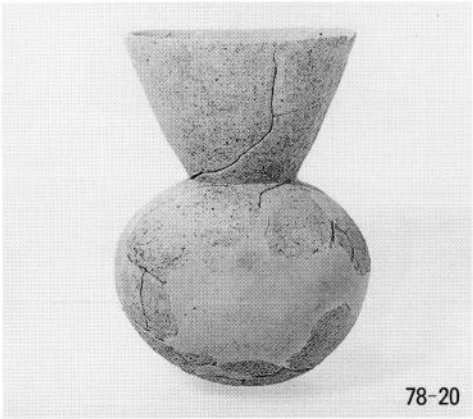
1．1～3号埋甕出土土器　　2．8号溝出土土器・陶磁器

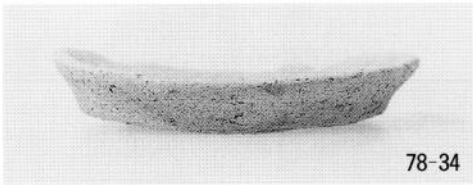


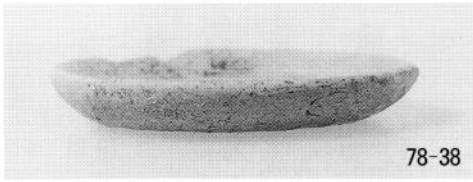


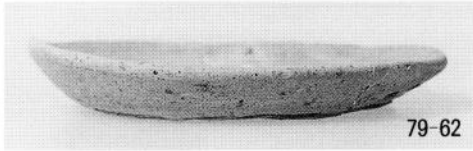


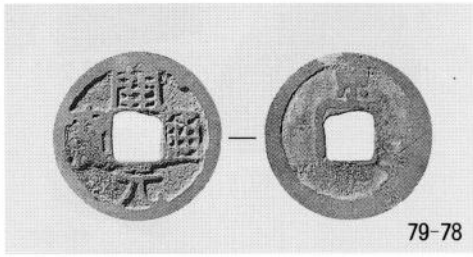


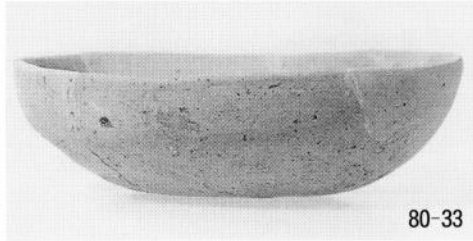




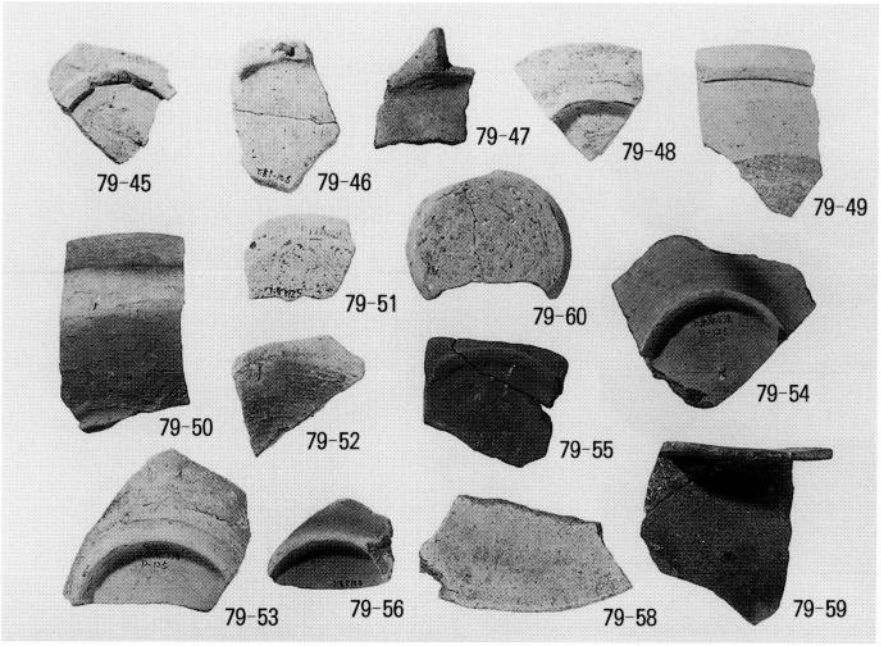


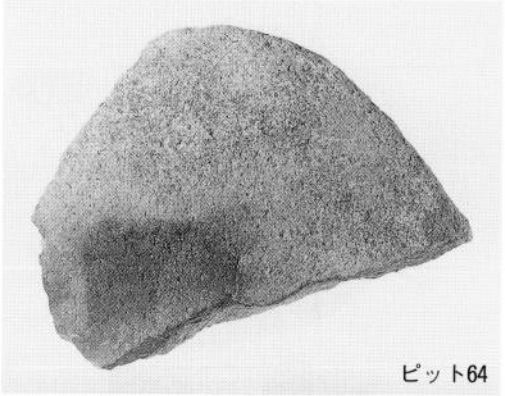


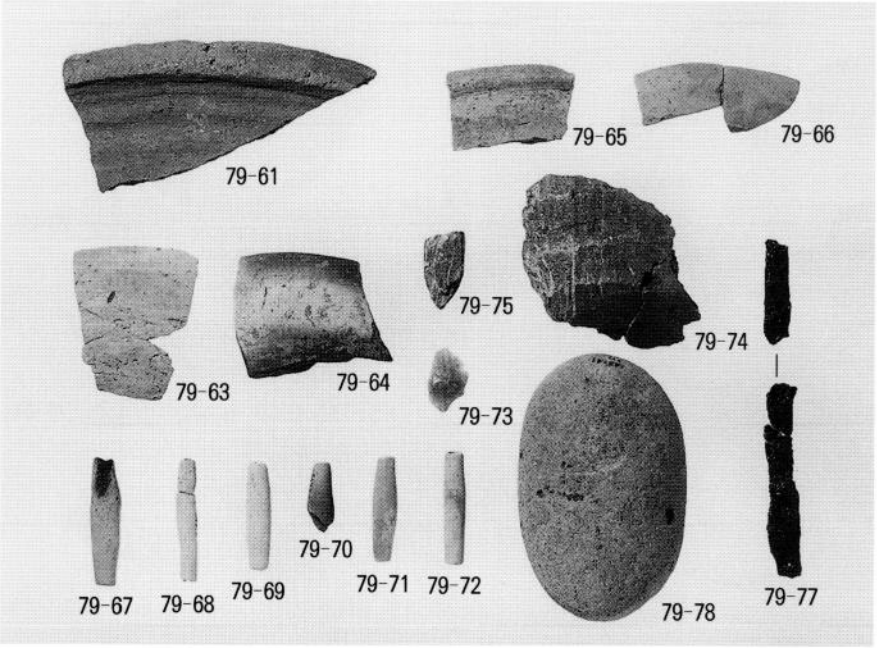


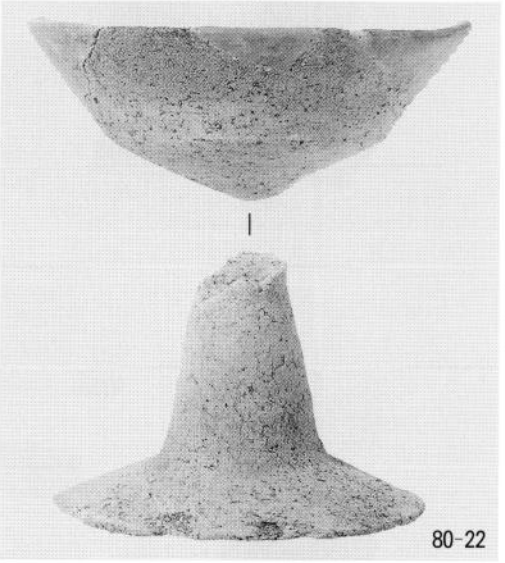


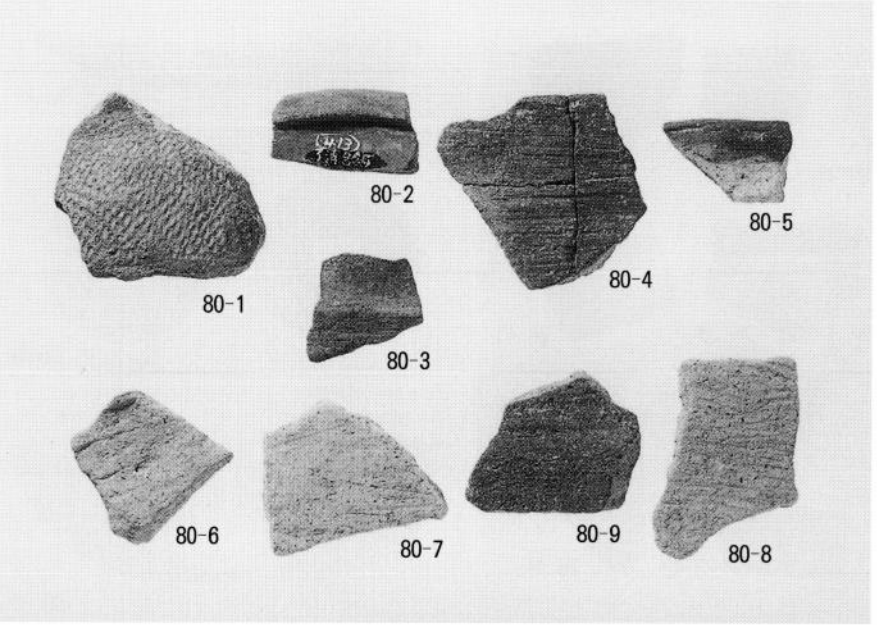
1．ピット出土遺物１　　2．包含層出土土器１

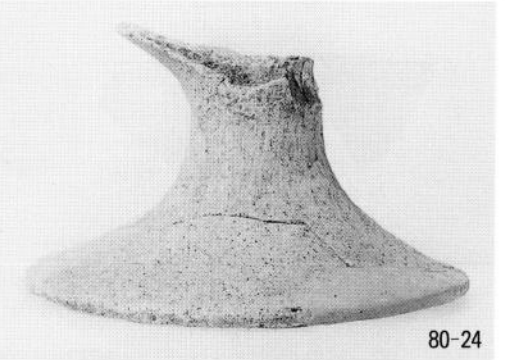


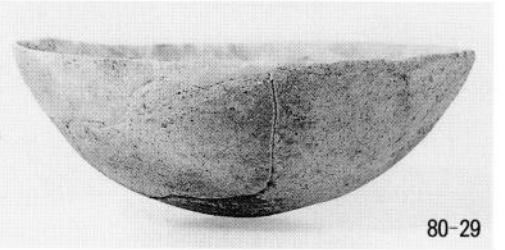




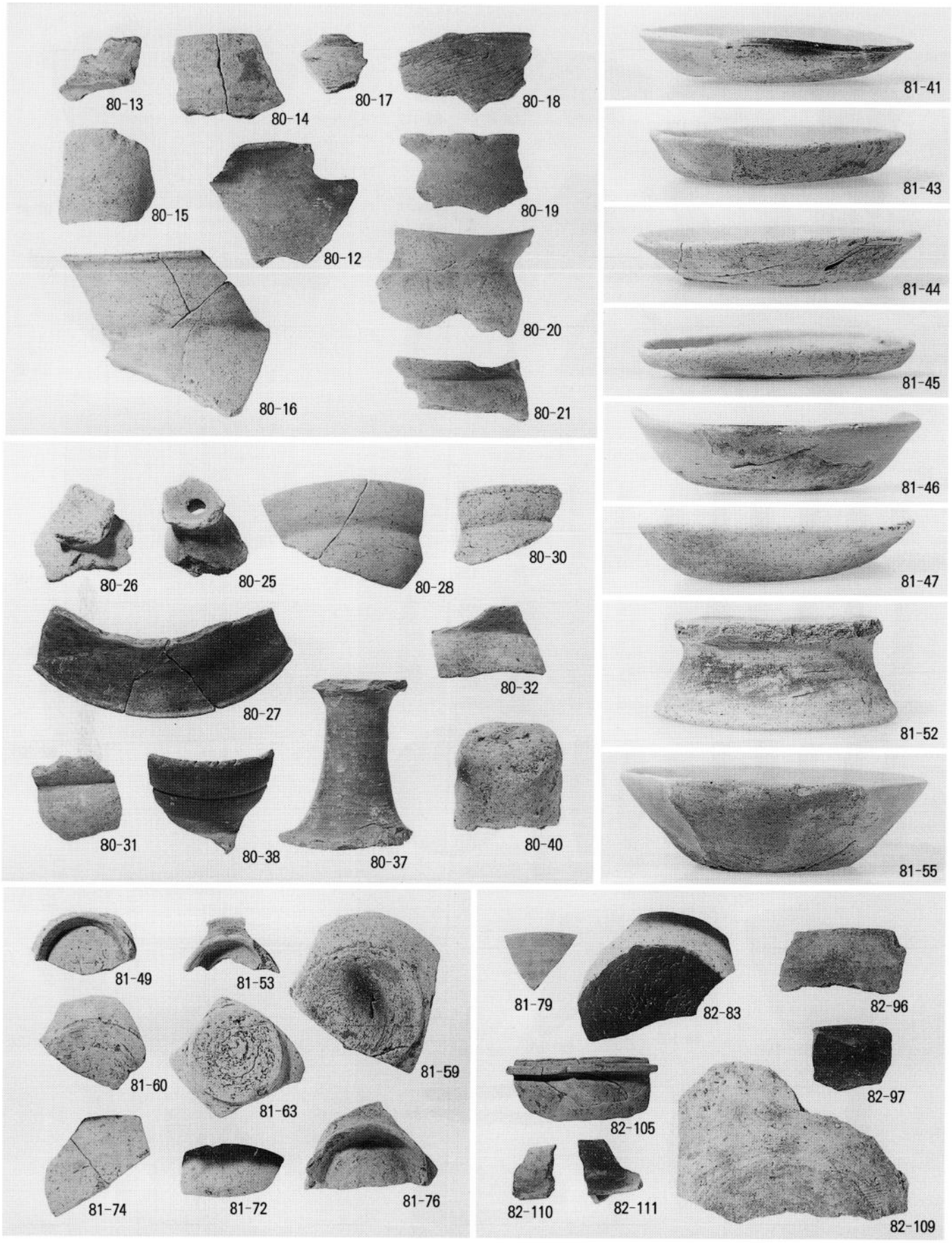




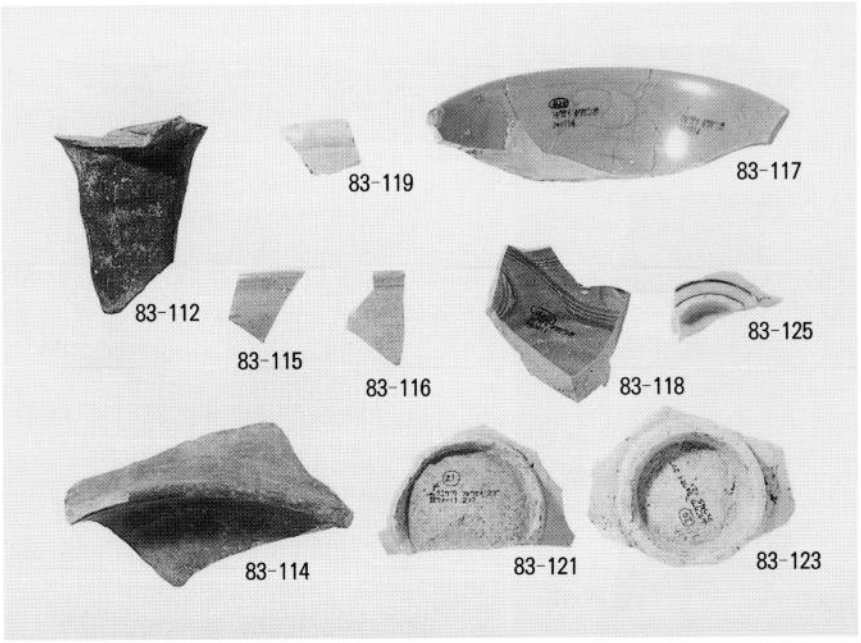


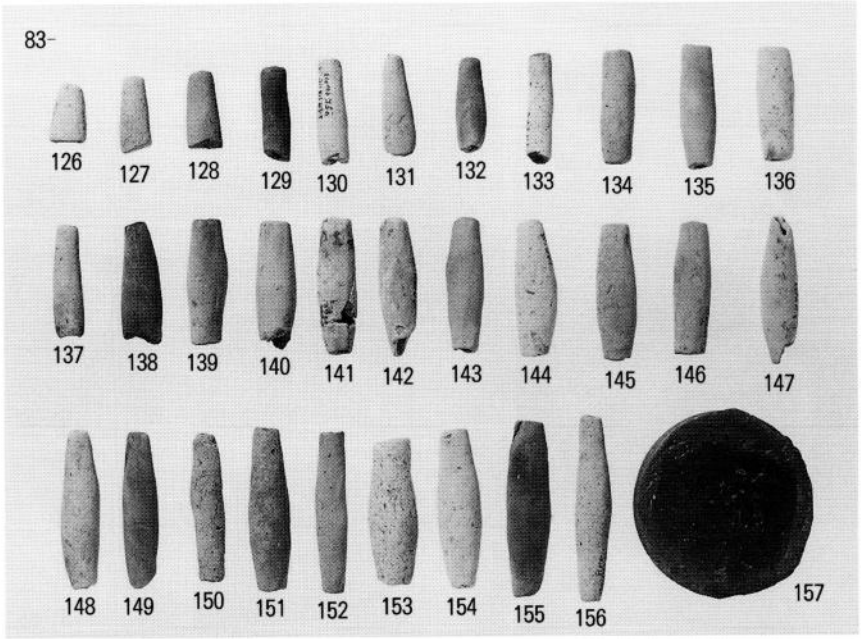


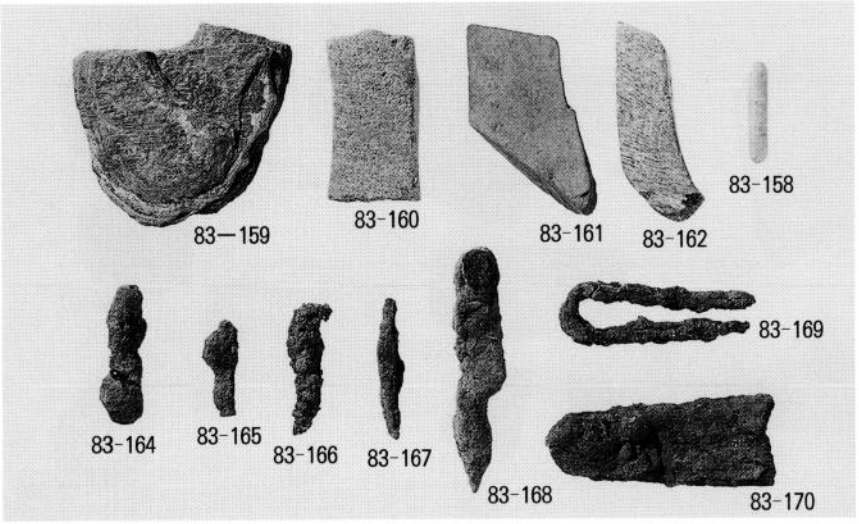
1．ピット出土遺物２　　２．包含層出土土器２

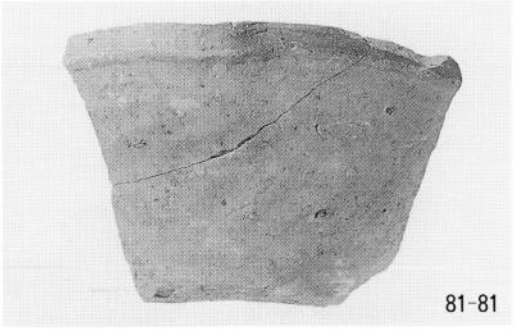

80-13
80-14
80-17
80-18
80-15
80-12
80-19
80-20
80-16
80-21
81-41
81-43
81-44
81-45
81-46
81-47
81-52
81-55
80-26
80-25
80-28
80-30
80-27
80-32
80-31
80-38
80-37
80-40
81-49
81-53
81-59
81-60
81-63
81-74
81-72
81-76
81-79
82-83
82-96
82-97
82-105
82-110
82-111
82-109

包含層出土土器3

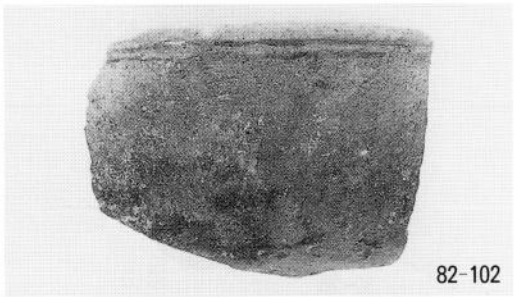

83-112
83-119
83-117
83-115
83-116
83-118
83-125
83-114
83-121
83-123


83-
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157


83—159
83-160
83-161
83-162
83-158
83-164
83-165
83-166
83-167
83-168
83-169
83-170


81-81

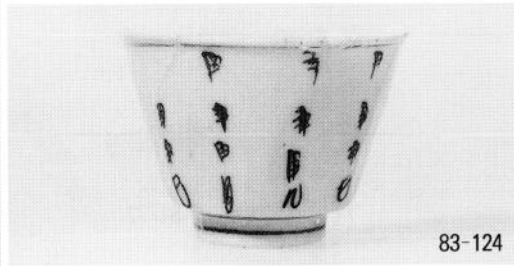
82-85


82-102

82-108

83-120

83-122


83-124

包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみとうばるりょうせい　いせき
書名	上唐原了清遺跡Ⅰ
副書名	
巻次	
シリーズ名	一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	4
編著者名	吉村靖徳　　秦　憲二
編集機関	福岡教育委員会
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7－7
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
上唐原了清 (かみとうばるりょうせい)	福岡県築上郡 (ふくおかけんちくじょうぐん) 大平村大字上唐原 (たいへいむらおおあざかみとうばる) 字了清 (あざりょうせい)	40645	960194	33° 32′ 42″	131° 11′ 24″	19940718 ～ 19941111 19950823 ～ 19951221	1,400m²	山国川堤防 改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上唐原了清		縄文時代		縄文後・晩期土器、石器	
		弥生時代	土坑、溝	弥生後期土器、石器	
		古墳時代		土師器、須恵器	
		中世	建物跡、土坑、墓、竪穴、集石遺構、井戸、柵、溝	陶磁器、土師器、瓦質土器、石製品	
		近世	土坑、桶、埋甕、通路、集石遺構、石列、溝	陶磁器、土師器、瓦質土器	

Kamitoubaru-Ryôsei Site

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 10	登録番号 18

一級河川山国川築堤改修関係埋蔵文化財調査報告

第 4 集

上唐原了清遺跡

平成11年３月31日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園７番７号

印 刷 マツオ印刷株式会社
福岡県山田市大字上山田1338-9

上唐原了清遺跡Ⅰ

付　図

上唐原了清遺跡遺構配置図（縮尺1／200）

付図1　上唐原了清遺跡遺構配置図（1/200）